

德富健次郎著

前

小説
富士

第一卷

神
塚
藏
書



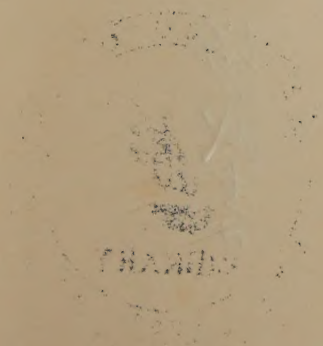
說小

富士

第一卷

德富健次郎
德富愛





小説 富士

徳富健次郎 著
徳富愛

第一卷

第一章 五月五日

一

編輯局の時計が午後四時少し廻ると、正面社長のデスクからやをら立上つた兄の寅一は、背後の隅の窓際にひとりぼっちの席を構へた熊次のテエブルにつつか歩み寄つて、低聲に「おつ、晩くなる。」

PL 817.04
F83
1925
v.1

世の罪を負ふ
神の小羊を見よ

神
抄
書

うで、顔を曇らしながら片跛な眉をして社に戻つた。然し社を出る時は、もう眉の事など忘れて居た。

土橋を渡つて、新櫻田町を濠に沿ふて虎の門の方へ歩いた。寫眞師の丸木へ曲らうとする角の下宿屋は、つい五六日前まで熊次が居た家であつた。今年三月九日に日本開闢以來始めての皇室の銀婚御式があつて、天皇皇后大婚満二十五年のめでたい御祝に、銀婚式の典故を調べて熊次が新聞原稿を書いたも、此家の表二階東の隅の六疊であつた。大抵父兄の家に居たが、病人などで彼の二階が徵發せらるる場合、また時には氣まぐれから熊次は下宿した。今年も一月末から此下宿に居たが、結婚も近づくし、結婚後夫婦は當分隱宅の二階に住む事になつて居たので、月初に氷川町に熊次は歸り、而して熊次が下宿の明巢には先月珍らしく郷里から上京した岩城いはきの叔父が入れかはりに來て居た。肥後家の嫡子の父には弟妹七人もあつたが、追々に亡くなり、今は六十一歳の岩城叔父と、郷里の眞宗寺に嫁入り今は夫にも子にも後れて獨り者の五十九歳のお繁叔母だけになつて居た。祖母の實家を嗣いで、氣立てのやさしい和歌などよく詠む十二も年下の岩城叔父を父は愛して、叔父の先妻の子二人は長い間肥後家に引取られ、熊次

と注意した。熊次はジャパンメエルの緩込とろこみを新聞掛に掛け、鼠色になつたツツクの雜囊を取り上げると、編輯局の一同に顔を見られぬやうにして足早に室を出で、階段を下り、下駄箱から禿ちびた薩摩下駄を出して麻裏はと穿はき更へ、新聞社を出た。

今日は明治二十七年の五月五日、熊次が結婚すべき日であつた。

此結婚について、熊次は一切父兄任せ、否、兄任せであつた。足かけ三年の縁談に、熊次は相手の寫眞すら見なかつた。一通の手紙もとり交はさなかつた。話の成り行きについては、稀に二言三言聞かされるだけであつた。「あなた方の感謝狀でも貰はなければ」と、ある夜兄が父母に言ふのを傍聞かたべきして、そんなに面倒だつたか喃なな、と熊次は思つた。「熊がつとしちやそりで澤山ですもん」と兄が言ふのを聞いて、金十圓の結納が自分の名で贈られた事を知つた。結婚が五月五日氷川町の自宅で行はるる事も、つい十日前に聞かされた。今朝も、愈今夕だから髻むすでも剃つて、と兄に云はれたので、熊次は午食休ひるやすみに竹川町の床屋に往つて顔を剃らせた。彼は毛深い質たちであつた。剃つてもらつて鏡を見ると、左の眉が少し剃り過ぎてあるかのやう。熊次は勃わ然として苦情を言ひかけたが、剃つてしまったものを如何する事も出来ない。何だか不吉なや

は父や母や叔父の話聲がして居る。中庭を隔てて向ふに見下ろす兄の書齋では、兄と宇土君の低い話聲が時折聞こえ、兄が何か讀んで居る。日本も維新以來二十七年、獨立國の面よごしの條約の改正は一向捗々しくもなく、去年の秋は英國商船に沈められた軍艦千島の訴訟に英國法廷で阿容阿容^{おもおも}日本の敗訴になり、此三月には十年來日本で底^{かくま}ふた朝鮮の金玉均を上海におびき出して殺された上散々清國に馬鹿にされた。これではならぬと奮ひ起つた對外硬の有志者が、兎角弱腰の伊藤内閣を鞭撻す可く大會を開く其期日も近くに迫つて居た。兄が讀んで居るのも、其關係のものであらう、と熊次は思ふた。

熊次は筆を走らして數行の文字を日記に書いた。而して筆持つた手に頬を支へて、うち案じた。肥後熊次は結婚する。人皆の何時か生涯に一度はする其結婚の夕に熊次も來て了ふた。遠い事のやうに思ひ、待遠しいやうにも或時は思ふた其結婚が、もう今夕だ。今までは一人であつた。今夕からはもう一人でない、二人である。まだ一人で居る内に、結婚しない内に、自分の爲^{ため}ねばならぬ事がある。否、澤山の仕残しがある。あると思ふが、何一つ突とめて此と云ふものも思ひ當らぬ。すべてを奇麗にして、すっかり整理して、全く新になつて、と思ふが、思ふばか

簞笥が一棹。鏡板を寄木細工にした眞四角な大型の文卓ぶんかく、鏡臺、硝子戸の白木の本箱、此から彼と熊次の眼は走つた。留守の間に、花嫁の荷物がもう持ち込まれた。俄に賑やかに狭くもなつた六疊を熊次は更に見廻はした。障子際の置床に、芍薬が活けてある。半開の白、満開の紅、薔が三輪。根じめに生けた嫁菜の花めいた薄紫の草花を、熊次は殊に美しいと思ふた。龍田といふ花、とは後で知つた。母は古流の生花を東京に來てから習つて、紫水園如玉女といふ名をもらつて居た。然し芍薬は師匠の手際であつた。

熊次は手拭を持つて錢湯に出かけた。宅にも時々風呂が立つたが、錢湯も遠くはなかつた。それは氷川神社下の窪地にあつた。五月節句で吉例の芳しい菖蒲湯かんばにすんぷり浸つかつて、清々すがすがしい氣もちになつて熊次は歸つた。而して下着だけ買ひ立ての白金巾のシャツに着換へた。

西向きの二階は未だ明るい。南の隅に据ゑた黒羅紗を張つた古物のテエブルに向つて、熊次は日記を書いた。折々の感想は先から書いて居たが、日記を熊次はつけなかつた。今年から新生涯に入るつもりで、薄葉十行の青罨紙に正月元旦から精細に日記をつけはじめて居た。熊次は筆を執つて、頬杖ついて、向ふの壁側にもう處得貌に入り込んで居る簞笥や文卓を眺めた。下で

母の二番目妹の津森勝子が校長をして居る麴町のミツシヨンスクウルに一人の女生が居た。去年まで其學校の和漢文を受持つて居た樋口の叔父が、其女生の出來のよいのをほめて居た。叔父が亡くなつた年の櫻のさかりに、紀念の小さなあつまりが氷川町の宅に開かれた。津森叔母が連れて來た女生達の中の水色の半襟をそれと聞かされて、熊次はぼうツとなつた。縁談は叔母の手から進められたが、ある日先方の親戚と名のる男が新聞社に來て肥後家の財産をただしたので、兄が腹を立て、一喝の下に縁談を打切つた。熊次は水色に未練があつて、ある女學生雜誌に出た其人の文章に感心したりしたが、感心の對象は却て熊次の同志社での同窓、其頃明治女學校の教師で、女學雜誌に自傳小説を書いて居た片貝と云ふ男に松葉入りの手紙を寄せたりして居た事を聞いて、うんざりした。然し當分は水色が眼さきにちらついて忘れかねた。

次に擇ばれたのが、相州のある代議士の女であつた。熊次が見せられた寫眞は、平べつたいやや沈んだ顔をして居た。同じ進歩黨代議士仲間の先輩株、父の親友、兄には忘年の知己であつた岡田翁を介して縁談は申込まれた。岡田翁は熊次の人物を兄に問ふた。「新聞社では、先づ二十圓がとまり」といふ兄の折紙に、岡田翁も氣ぬけして、縁談は直ぐ不調になつた。それは

熊次が二十二で熊本から東京に上つて來ると程なく、父母は熊次の身を固める事を心配し出した。兄は二十三で結婚した。二十歳で已に散々身を持崩し、東京に歸つて來ても熊本時代の知り合ひの女學生などが訪ねて來る熊次は、一人で置けぬ代物しろものであつた。熊次の妻として最初に擇ばれたのが、祖先墳墓の地での豪家の一つで、今も地所の管理など頼んで居る遠縁の簀田みのたといふ家の次女であつた。熊次も十六七の昔、小作取立見習に熊本からやられた時、見上ぐるばかりの丈高い一輪菊の眞盛りの庭を往たり來たりする十二三の小娘の赤襟を覺えて居た。簀田の返事は「否」であつた。父は案外で不快に見えたが、熊次は驚かなかつた。二十歳の暮、京都を逃げ出し鹿兒島に馬鹿を盡した時、金に困つて父が地所管理を托して居る簀田さんに金の融通を手紙で頼んだ。東京から御命令があつたら、と云ふ當然の返事に熊次は腹を立て、散手紙で毒づいた。すべてはもう其時に定まつて居たのである。

母の留守におみきさんが泊つた。耳の遠い父の前で、おみきさんは女學校長の書いた「我黨の女子教育」の話を熊次にした。熊次は明治女學校隨一の美人梅原嬢つばはらの消息を問ふた。學課の出来は？「ちつともお出来なさらん」とおみきさんがけなしつけた。父が厠かはやに立つた。忽おみきさんの燃ゆる眼がひたと熊次を見つめた。熊次はたちたちとなつた。父が厠から出て來て、間もなく熊次は二階に上つたが、體中がぼてつて其夜は一夜眠れなかつた。

其の内おみきさんの足が少し遠くなり、初心の歌など母に書いてよこした。おみきさんは和歌の修業を始めたのであつた。明治女學校では體操に薙刀なぎなたを課した。小柄のおみきさんは薙刀が上手で、牛若丸の譚名あだなをとつた。薙刀の師は若い男であつた。和歌の師も若い男であつた。文武の師がおみきさんを争ふと云ふ事を風のたよりに聞く頃は、おみきさんはとくに熊次の圈外けんぐわいに去つて居た。

熊次が最初の戀の相手は、二十歳はたちを越して其頃まだ京都に生きて居た。明治二十年の十二月の一夜、碓氷先生の客室で、先生夫妻の間に横向きに椅子にかけた榮さかえさんに憎惡いらいの一瞥いちべつを投げたを最後に、熊次はもう二度と顔を合はせなかつた。それ切りの縁であつた。京都を飛び出し

熊次に軽い失望を與へた。

水色縁談の進行中、ある日、本郷の沼山叔母——母の直ぐの妹、父の師沼山先生の未亡人——が遊びに來た。叔母は一人の娘を連れて居た。小柄な垂髪おんげの女學生を熊次が怪訝けげんな顔で見えて居ると、叔母が「従妹いとこよ、おみきさんよ。」と曰ふた。母には二番目の姉、今は谷中の墓になつてもう十年になる比志島伯母の孫で、大藏省の書記官、佛蘭西は里昂の領事、富山や千葉の縣知事として親類中では一番官途に出世して居る直義さんの一粒種おみきさんの評判は熊次も聞いて居た。カルタ取りして、落ちた札を取る時、わアしの手をグラスプした、と伊倉の地平さんが熊本で熊次に話した事がある。父は一徹の堅人で、家内の内證事を知らぬ、と伯母叔母達ははが齒痒がゆがつて居る事も熊次は知つて居た。

何時とはなしにおみきさんの足が氷川町に近くなつた。おみきさんは明治女學校に通つて居たが、漢學の力をつける爲に熊次の父に孟子を習つた。父は聖人之道を教へるといふて大氣乗りして居た。然し熊次が二階から下りて來る足音に、孟子を讀んで居るおみきさんの聲が躓つまずき震へるを熊次は聞きのがさなかつた。おみきさんは時々來ては泊つて行くやうになつた。ある夜、

熊次は窃そつと其雜誌を自宅に持ち歸つた。熊次は其頃二たび京都の Episode を書きはじめて居た。新聞社に出る前、歸つてから、十行青罫の薄葉に思ひ出し思ひ出し書いた。それが半程書かれた時、熊次は小さな病院の二階で、看護婦になつて居る昔の京都の知邊しるべから思ひがけなく榮さんの消息を聞いた。丸鬚に結つたりして、榮さんは町内の天主教に凝つて居る、といふのであつた。それは熊本で風のたよりに熊次が聞いた、榮さんの卒業の文章朗讀を聞いて盲目の阿父おとうさんが泣いた、といふしらせと共に、熊次が榮さんについて受取つた唯二の消息であつた。熊次は日課のやうにして、京都の思出を書いた。回想記はすべての縁談を裏づけてつづけられた。出來上つたのは、水色がもう可なり熊次の頭から遠のいた頃であつた。薄葉罫紙三百枚程の一冊を手づから木綿糸で綴ち、表紙の厚紙に「春夢の記」と題した。而してそれに斯様な意味の序文を書いた。

婁騷ルッソウも懺悔せり。トルストイも懺悔せり。懺悔また懺悔、懺悔終に何の要ぞ。何爲なんすれぞわれは『春夢の記』を書ける？ 寧ろ如かんや、破つて之を棄てんには。然れども書きたるものは破る可し、記憶は破り棄て難し。記憶の重荷を取り去らんとして、われは此冊を書ける

熊本に落ちつくやがて、英學校の助教をする暇々に、熊次は過ぐる一年半の顛末を書いて見た。「誤に始まり、誤に成り、誤に破る」と自序に書いた。悉皆書き上げたものをまたまた悉皆破いてしまつて、白紙になつたつもりの熊次は、二十二の春東京に歸參した。京都の失敗故に小さくなるを餘儀なくされた熊次は、夢にも京都を見るを憚つた。然し上京して程なく、京橋は瀧山町の佐賀ボーロの二階に宇土君と同居させてもらつて居た時分、夏の夕一人二階の黄昏たふがれに居て、不圖一道の鬼氣おそに魘はれ、追かけらるるかのやうにぐるぐる二階を走せ廻はり、疲れ果ててドツカと卓に腰下ろして居る所に歸つて來た宇土君に怪まれた事がある。その明けの正月に碓氷先生が大磯で死ぬ。二月に兄の新聞が出る。翻譯係を命ぜられた熊次は、其夏初めて文藝欄に「石美人」を書いた。それは偶然眼に觸れたある米國繪入雜誌の短篇小説の自由譯に過ぎなかつたが、彼は三年前其處で榮さんの寫眞を受取つた房州の保田にわざわざ往つて、其處で稿を終へた。翻譯係の眼には色々の外國雜誌がふれた。ある日倫敦グラフィックを翻ひらへして居た熊次は驚きよつとした。夢にすら見ぬ人の面影を、突然眼の前に見る心地がしたのであつた。撫肩にシヨオルをかけた若い西洋婦人姿、鰐つば濶の帽の下から睨む二つの眼が、榮さん其ままであつた。

町に留守をした。ある夕、門内に取りつけた郵便函の背蓋うしろふたを上げると、はがきが一枚入つて居た。熊次は取り上げて薄明に透かし見た。兄の名宛の裏をかへすと、それは死亡通知であつた。それは全く思ひがけない京都の榮さんの死亡のしらせであつた。「永々病氣之處養生不相叶」葬儀は天主公會堂で營み、洛東若王子山に葬る、とある。熊次はぼんやりとしばらく門内の黄昏に立つて居た。明くる日、「春夢の記」を出して、餘白に「此等の事の終は是なり」と書いて、下に死亡通知の文言を寫した。兎に角、春夢の記は書かれ、其對象は死に、京都の一條は永久に過ぎ去り、熊次の前にはさながら無礙むげの空白ブラングが残つた。

父母が赤坂榎坂の宅から谷一重向ふの氷川町の兄の宅に一緒になつて以來、夏は老人子供の爲海邊に避暑する例になつた。明治二十四年の夏は、大磯の民家を借りた。明治二十五年の夏は、逗子の養神亭の小さななれを借りた。兄も大抵土曜の夕から往つて、月曜の朝歸つた。留守は熊次が承はり、社の事務員で料理など器用にする山村と云ふのが勝手を賄ふた。兄が時折同行を促したが、熊次は行かなかつた。海は好いが、人少な山の手の夏もわるくない。熊次は蟬の音を聞き聞き「夏の夜がたり」を書いた。數度の日曜を氷川に留守し、もう今度行かねばと

なり。

ある時は、わが書いたものを讀んで見て、熊次はすっかり厭いとになつた。

「醜！ 醜！ 醜！ 好事の者に寄語す、糞壺を覗くをやめよ。」

斯く赤インクで卷頭に書いた。熊次はしばしば焼いて了はうと思ふた。然しまた躊躇した。彼は何度破つても必書かずに居れぬ事を知つて居た。

「春夢の記」を書いてしまつた其夏、熊次は「夏の夜がたり」といふ短篇小説を新聞に書いた。先年義姉の實兄本莊さんから聞いた實話を假つて、男の一人心中に哀切の情を抒のべたものであつた。ある時期の報知新聞に、林田悟軒門下三羽鳥の一人と歌はれ、後年狂死した多良一抱が短評を寄せ、「石美人以後の名什と見るは僻目ひがめか。」と謂ふた。「石美人」と「夏の夜がたり」の間に通ふ一脈を見出した多良の目は、僻目でなかつた。熊次はわれ知らず前者でそれかと思ふ影の空しく消えた哀を訴へ、後者で最後の呼び出しを宇宙の何處に在るとも知らぬわが片われにかけたのであつた。

一年経つた。それは昨明治二十六年の夏であつた。肥後一家は相州逗子に避暑し、熊次は氷川

であつた。熊次は其娘が居なくなつてから逗子に往つたのである。

「來れば好い、と思ふた。」

と母が言ふた。

候補者の推薦は異口同音であつた。父が第一參つて居るらしかつた。宇土の母者が、頭痛がすると冷水汲んで來て冷やしてくれる、と喜んだ話を母がすれば、「金錢の計算なんかもちちんとして」と義姉も口を出した。兄は下にも置かず數々賞め立てて後、「氣の毒だけれども」と言ふた。

其頃兄は口癖のやうに云ふて居た。「結婚は相應でなければならぬ。自分以上の妻をもつと、屹度不幸だ。」

熊次は兄の其持論を持出した。

「其様な立派な女ひとなら、私には不向きです。」

兄が苦笑した。「そぎやん事ことば言ふたてちア。」

「親兄弟の見立てば、任せんなら、あんたは馬鹿。」

たつての勧めに熊次が兄と逗子に往つた時は、秋風立つた逗子の濱に人影も追々疎らな頃であつた。

一家歸京して後、ある夜熊次は隱宅で一同列座の席に呼ばれた。此夏逗子に来て、養神亭に明間がない爲、しばらく此方の宿に同居させた菊池の妹、名は駒と云ひ、十九歳、お茶の水女子高等師範の三年生、好い人柄の娘と思ふが、此方に任すか、異存はないか、と兄が突然に言ふのであつた。

菊池と言ふのは、熊次も識つて居る。高等商業の學生で、同郷國の好^よみから新聞社によく遊びに來た。眼で笑つて、少し鼻にかかる聲で、熊次が擔當するロイテル電報の誤譯を指摘したり、社説記者の新潟君が筆癖の「帝國議會は開かれたり、三百の議員は整列せり」などいふ一口淨瑠璃は感心せぬのと、遠慮なく口を利いた。淨瑠璃と云へば、ある夏父母が妙義に避暑した時、同縣の學生數輩も其處に居て、中の一人菊池といふのが、朝顔日記を持つて來て父に翻譯を勧めた事を熊次も耳にして居た。話はしないが、顔は識つて居た。其菊池の妹が宇土君の宅に居ると、細君が妬^やく、と兄の噂を聞いた事も覺えて居る。然し此夏逗子の宿に來て居た事は初耳

無關心の態度をとつたのであつた。

一周して來た夏も過ぎた。京都の榮さんの亡くなつた其夏である。其夏も過ぎたある日、熊次は兄の書齋に呼ばれた。而して縁談について聞かされた。菊池の兄は最初から乗地になり、本人の妹にも異存はないが、國許が面倒であつた。兄妹の母は承知したが、父が中々手放さうとはしなかつた。彼女は父の手の中の玉であつた。そこで宇土君を煩はし、歸國して骨折つてもらう筈。斯様な話をして、兄は獨語でもするやうに熊次に言ふた。

「宇土も馬鹿さ、あんなものを貰はずにさ。」

宇土君は先年東北のある豪家の女を娶り、其披露には芝の三縁亭で新聞社主催の盛大な祝宴があつた。其後芳しくない評判があつて離縁になり、編輯局の狀挿じやうさしには宇土君宛の女筆の厚封が毎日のやうに挿されて居たが、復縁かなはず實家で亡くなつて、宇土君はまた獨身になつて居た。師範學校出の熊本時代から兄に見込まれ、雜誌發行、つづいて新聞の發行、東京に出て一切の兄が公的事業に女房役をして來た年長の宇土君は、最初から熊次が嫉妬の上に居た。熊次を前に据ゑて空氣にも言ふ如く心のままを言ふ兄を、熊次はさして不思議とも思はなかつた。

と母がぶつきら棒に言ひ放つた。

熊次はいよいよ勃然とした。一言にして母をはじめ一同を凹ます言を云つてやりたいが、中々急に見つからぬ。黙つて居れば、するするについ仰せの通りなつて了ふた。

其二三日前であつた。兄が熊次に噂の如く云ふた。菊池の妹だが、禮狀をよこしたが、字なんか立派なもの。父を除いて、肥後一家は惡筆揃ひであつた。申聞けの翌日、熊次は其禮狀を見せられた。若々しい奇麗な手跡で、謹んで書いてある。姪のお實を「實子様」、兄を「先生」と書いてあるのも慥つたいものであつた。

申聞けが濟んだ後の熊次は、縁邊の事にかけて、全くの門外漢であつた。唯一度、ある夜姪の實子が病床看護の枕頭で、熊次は實子の母に問ふた。

「那樣な人です。」

「左様、背丈は私位。」

と義姉が答へた。熊次は其餘を問はなかつた。

熊次は縁談に何の疑問も注文も出さなかつた。一には度々の縁談の不首尾に懲りて、成るべく

熊次は宇土君の返答を聞かなかつた。其後の成行を知らなかつた。然し宇土君は何時の間に九州に下つたと見え、ある日「成立ちた、安心せ」と云ふ電報が父の名宛で届いた。

高等商業で矢野校長排斥のストライキ組に加はり退學となつた菊池君は、其頃もう報知新聞記者であつた。熊次の父母は菊池君を呼んで馳走し、一席の話に少しも愚かしい所がない、と父は菊池をほめた。稀に來る妹も鄭重に待たれた。晝をよく描^かく、と熊次は母から聞かされた。

兄にも妹にも熊次は一度も宅では會はなかつた。ぶちこはしをやりかねまじい處から、わざと隔てられるのでないかとさへ思はれた。今日琴平前でお駒さんに會ふた、少し眼が悪くて清人^{きよと}さんの下宿に養生に來て居るさうな、と云ふ兄の噂なども遠方の事の様に聞かされた。清人は菊池君の名である。其妹の寫眞すら熊次は見なかつた。

さまざま縁談の中にも、熊次の眼は異性に注がれた。彼の近くにも彼の眼にとまる姿はあつた。向隣の森といふ陸軍佐官の娘のお喜代さんは、姪の實子とは八歳も姉で、遊び仲間にはならなかつたが、それでも稀には遊びに來た。實子が祖母の弾く一弦琴を誇り^が貌に見せたりした。「もつと大きいお琴をお弾きなさるだらう。」と實子の祖母が言ふた。熊次が父兄の家に居る程は、時

全くだ。何故宇土君はそんな女を貰はぬだらう？ 當然宇土君のものを、柄にもない自分が横取りしては濟まないやうな不安が、熊次の心を曇らした。然し一切を受身の熊次は、何とも口に出しては言はなかつた。

其少し前、ある日熊次は自分の二階から中庭越しに兄の書齋の話聲を聞いた。兄も聲高だつたが、平生ぼんやりして居る熊次の耳目も、ある場合には鋭く働いた。話相手は宇土君らしかつた。

兄の聲が言ふた。

「餘程伶俐にしようと思ふて、手を盡したけつどん、如何しても聽かん。」

それは熊次自身の事であらねばならなかつた。熊本から上つて來て以來の熊次が、兄の期待に背いて、少しも成長せず、シテを助くるワキの役は愚か、一人前の平社員ですらあり得ない事が、兄の失望、延いては肥後一家の失望である事を熊次はよく知つて居た

兄は懇懇宇土君に依頼するらしかつた。父母の安心の爲、と云ふ語がくりかへし出て來るやうであつた。

今年の正月、父がつくつてくれた肉色セルの長羽織で珍らしく凛として熊次が門を出ると、小さな妹を連れて向ふから歸るお喜代さんは、銀杏返に縮緬の盛装して、もう立派な一人前の娘であつた。大人びたお喜代さんを熊次が眼をとめて見ると、平生にかはる熊次を彼女は見上げ見下ろし目禮して往つた。遠からず結婚しやうといふ熊次に、彼女を如何しやう氣はもとより無かつた。然し眼の前で蓄から追々花になる乙女に、眼は自然に止つたのであつた。自分の十九、二十歳を打込んだ榮さんの十六で會ひ十七で別れた熊次は、もう三十近くなつても其年頃の處女が一番眼についた。

其正月のある日曜に、新聞社の遠足會が飛鳥山に催された。歸途熊次は丸の内を通つて居た。居るにも、歩くも、獨が好きの熊次は、今日も兄等の組を遙後にして、唯一人風を切つてさつさと歩いた。からりと霽れた正月日和の午後四時過ぎ、宮城下の廣場に斜日の光溢れて、小松の影長々と曳いて居た。二重橋前の白茶色に霜枯れた芝生の小路を廣場の砂利に出やうとする處で、熊次は若い女の二人連れに行き會ふた。行き違ひさまに、眼鏡をかけぬ近眼の熊次も此方側の一人を外山のお秀さんと見て、ふりかへり目禮した。お秀さんも答禮した。其昔兄の家

折お喜代さんを見かけた。年と共に彼女は大きくなり、熊次を見てはお辭儀をするやうになつた。一昨年までは剪り下げた前髪を、去年あたりからもう上げて居た。去年の秋、ある日目黒の不動に熊次は一人遊びに往つた。芝生が賑やかなのを見れば、小學校の遠足で、大勢の女生が遊戲の環をつくつて居る。銀杏返の少女が、薄紅のハンカチを出して、隣の少女と其端を握り合つた。唯見れば、それはお喜代さんであつた。其夕、歸宅夕食を濟して門外をぶらついて居ると、黄昏の淋しい巷路を、向から草履ばたばた走つて來る人影がある。熊次にぶつかりさうになつて危く踏みとまり、突とそれて森の門に入つた。遠足歸りのお喜代さんであつた。熊次の眼の前に追々成長する彼女は、頭の中でも成長した。熊次は何時となく憎からず彼女を思ふた。彼女の弟は時々肥後の杉籬内に石を投げ込むわんぱくで、熊次は叱つた事もあるが、小さな姉故に此子も憎からずなり、社の新入小使が其子に肖て居るので其小使も憎からず思ふやうになつた。熊次は「柳の家」と云ふ小品を書いた。熊次の冷澹を喜ばぬ社の友山君は、然し毎熊次の文をほめる人であつた。眼をあいて文を読む彼は、「柳の家」には生體しやうたいが居る、と圖星を指した。それに氣がさした上に、書く事も無くなつて、熊次は小品の筆を途中で打切つた。

業し、日本橋區内のある學校に奉職した話を熊次も耳にする。四月末には、熊次も岩城叔父と入れ代りに下宿から父母の二階に歸る。五月になる。五月も五日の今日になり、今日も此夕になつた。初から一切兄任せの熊次は、人形同様、言はるるまま、させらるるままに動いて、羽織袴の新郎姿で、今隱宅の階段下に出端を待つて居るのであつた。

塾で牛耳をとつた外山君そつくりの大きな目を妹のお秀さんもして居る。お秀さんに會釋しながら、熊次の眼は連れの一人に走つた。白い横頬と大きな縞の黒つほい着物を熊次は見た。

其夜熊次は日記に書いた。

「今日、飛鳥山の歸途、丸の内にて、外山秀子に會ひぬ。今一人の色白の淑女は、誰なりしや、知らず。」

二三日後、母が不圖熊次に云ふた。

「會ふたらう。兄さんがさう言ふて居た。」

ああ、さうか。彼がさうか。熊次は心に領いた。うなづ而して日記にまた斯く書いた。

「秋胡知らずして採桑の妻に戯る。余は知らずして妻に會へり。『誰なりしや知らず』と書きし『色白の淑女』が、わが妻となるべき人ならむとは。」

月の末に熊次は櫻田町に下宿した。紀元節が来る。追々梅が咲く。三月九日には、天皇皇后兩陛下大婚滿二十五年の祝典が花やかに行はれる。櫻が咲く。氷川町の方でも、岩城叔父が上京する。伊倉伯母が上つて来る。菊池の方でも、母者が上京する。「色白の淑女」はお茶の水を卒

熊次

お駒さん

と呼び出した。熊次が兄に面して立つと、客側から空色縮緬高嶋田の姿が出て来て、熊次と並んで立つた。熊次は足袋の裏こそばゆく、膝が震へさうになるを奈何^{どう}ともする事が出来なかつた。

兄が一言二言云ふと、ポケットから何か出して読みはじめた。それは結婚誓約書で、先刻兄の書齋の読み聲は此だつたのであらう。「偕老終天の約を全ふし」と云ふ一句が耳に残つた。読み終ると、兄はそれを疊むで封に入れ、更に一通を取り出し、一を新郎に、一を新婦に渡した。後で見ると、誓約書には立合人として兄、媒妁人として宇土君の記名調印があり、封紙には紅白の水引かけて、「鶴龜」と兄の手跡で書いてあつた。

兄も、新郎新婦も各々其席に復へつた。

突然父が起つて宇土君の前に座わり、手をついて鄭重に媒妁の勞を謝した。

父が座に復へると、宇土君が起つて先づ新婦側に一人一人「お目出度ござります」を言ひはじめ

三

座敷の障子が開いた。

「おゝ。」

兄の聲が熊次を呼んだ。

「は。」

熊次は縁側傳ひに奥の座敷に入つた。

十疊の中程にランプを置いて、主客十二三人□形に座わつて居る。床の間を背に父、母、岩城叔父、兄、義姉と障子に傍そばふて鍵の手に列び、脇床前から向ふの壁側にかけ、宇土君、菊池君、宇土君の母者、知らぬ男客、女客、が居流れて居る。花嫁も其中に居るであらう。熊次は一禮して主側の末席に着いた。

洋服姿の兄が一禮して立上ると、座敷の中央に床の間を背に突立ちながら、

と兄が代つて挨拶をした。

一わたり挨拶が済んで、芽出度いといふさざめきが床前や壁側から起つたが、あらたまつた席は饌が出るまでは中々打解けないのであつた。

近所の仕出屋にあつらへの膳部は中々來なかつた。兄が度々中座して、臺所へ見に往つた。而して歸つては白らけがちな一座を賑はすべく努めた。熊次が今日も新聞社に出た事を兄が云へば、新婦も一昨日まで學校に出勤しまして、と新婦の母が調子を合はした。兄はまたトルストイの小説アンナ、カレンナのレフィンがワイシャツをなくして婚禮の式におくるる心配の可笑味を高調子に語つて、一座を笑はせた。此兩三年、熊次はトルストイの小説に凝つて居た。露西亞語が出來ぬ彼は、英譯で讀んだ。アンナカレンナも去年わざわざ横濱まで往つて買つて來た。熊次が讀んだ後を兄も讀んだ。兄は忙しい中にもよくそんなものも讀んで居た。

「小山さんは小説なんかあまり御覽なはりますまいな？」

「ええ、其方はあまり。」

小山さんは軽く笑つた。

た。新婦の前に座わつて、

「お駒さん、お目出度ござります。」

と言ふ宇土君の聲が重苦しく熊次の耳に響いた。

宇土君の挨拶が済むと、客側から五十餘の瘠せた小紋の婦人が熊次の前に來て、しとやかに挨拶した。それは新婦の母であつた。熊次は譯の分からぬ言をぐどぐど唸^{つぶや}いて、頭を下げた。

色黒の八字髯の四十男が、袴の脇に手を入れ、やをら座つて熊次に挨拶する。菊池の縁者小山さんであつた。熊本洋學校で數學では常に首席で、工部大學のふるい卒業生、今は淺草藏前の高等工業學校教授小山さんの名は熊次も知つて居た。郷里で遊んで居た間にも、所有の水車に特殊の裝置をしたりして、里人の噂に上つた事も聞いて居た。兄は熊次の婚禮を内輪に内輪にと謂ふて、列席の數も限つたが、新婦の母者の懇願で小山さん夫婦だけは列席したのであつた。數學の劣等生は、工學博士の小山さんに目禮したきり言ふべき何ものも有^もたなかつた。間^まがぬけた。

「御挨拶も出來ません。」

をすすめて、匆々そこそこに退つた。

後は直ぐお開きになつて、二疊の狭い玄關が挨拶やら目禮やらで一しきり賑合ふた後、新婦の母も兄も、小山さん夫婦、次の間に居た小山さんの赤ン坊に子守、媒妁の宇土君母子も、主側の岩城叔父も、車をつらねて去つた。父は居間へ、餘は残された新婦も共に、もとの座敷に歸つた。

兄が崩るるやうに柱にもたれて洋服の足さしのべ、

「ああ、くたびれた。」

と生欠伸なまあくびした。弟が何か挨拶でもするかと心待ちする氣色であつたが、熊次が黙つて居るので、兄は立上つてスリツパアを引きすりながら書齋へ上つて往つた。

婚禮の二三日前であつた。兄は

「熊次さんの嫁御よめが来る、嫁御が来る。」

と座敷の縁をびよんぴよん跳ねて、女中のおか人を笑はした。

やつと料理が來た。一人前五十錢の饌部が主客の前に据ゑられた。本宅、隱宅の女中二人が給仕をした。

熊次は先程から少し焦^{いらいら}して居た。何事もされるままにして居る熊次も、席次の配置やすべてが氣に喰はなかつた。何處の世の中に、新郎を末席に座わらす婚禮があるものか。今配膳の時になつて、塗盆持つた大柄の女中が、よごれた足袋の裏を見せて、つい鼻先に尻向けに座わつて居るのが、癪に障つてならぬ。熊次は顔をしがめて、彼方へ、もつと彼方へ、と額越しに女中を睨んだ。

酒ぬきの饗^{きやうせん}饌は、造^{ぞうぞ}作もなく果てた。饌が引かれると、父が床前から客座の方を見やつて、

「お駒どん、一つ茶を入れて。」

と言ふた。新婦が次の四疊に下つて小紋に着更をすると、家の者らしく下座に直つて、顔を赧くしながら父を始め一同に茶をすすめた。

「熊次さんにも。」

と兄が口を出した。熊次はまた侮辱を感じて熱くなつた。新婦は羞らひながら熊次の前に茶碗

第二章 あけぼの

一

結婚式の翌日は日曜であつた。新聞社と小學校に日勤の新郎新婦は、蜜月の旅の餘裕は無かつた。然しせめて日曜の一日一夜は二人で居たかつた。池上鑛泉行の申出は、父母も勿論異存は無かつた。

「無理な所を歩かせたりしぢやならんぞ。」

と父が注意の聲を後に、兩人は門を出た。熊次は袴をとつて昨夜の装なま、駒子は卒業式に卒業生一同揃ひに作つた空色信州紬の紋付——丸に扇の地紙——に金茶縹子の帶をしめた。明日は直ぐ學校へ行くので、着更の一枚と教科書類を風呂敷包にして駒子は持つて居る。

妻と呼ぶる若い女と打連れての初出は、熊次に晴れがましい心地であつた。新夫婦は少し歩

明治二十七年の元旦に

昭憲皇后の詠ませ玉へる御歌

あらたまの 年の初日に 富士が嶺の

雪さへ匂ふ 朝ぼらけかな

熊次が肥後家の末子として肥後の南端の海村に生れ、三歳で熊本に移り、七歳になつた夏、同じ肥後の北端の山の町に菊池家の末女として駒子は生れた。熊次は加藤浪士の血を傳へ、駒子には菊池家臣の血が流れた。一人の異母姉は幼くして亡くなり、二人の異母兄、一人の實兄の後に季女^{おとむすめ}に生れた駒子は、十歳過ぎて長い足がぶらりとときまりわるく思ふまで、父が負つて歩いた。手の中の珠と愛でられた駒子は、父母を自分にかしづく爺^{ぢい}や姥^{ばあ}やのやうに思ふた。「お駒はな、桃太郎さんの如^{ごと}うつかんうつかん川を流れて來るとば、阿父^{おとうさん}が杓子ですくつたつば

501

とよく父が曰ふた。屋敷^{やしき}の背^{うしろ}の高い崖^{がけ}下^{した}を、清い水の迫間^{はさま}川^{がは}が流れて居る。夜は颯^{さあ}、颯^{さあ}と川瀬の音がいつも駒子の夢を誘^{さそ}ふた。其川かと駒子は思ふた。十一の春、小學初等科を終へると、駒子は父母や清人兄と熊本に移つた。其處には二番目の異母兄^{もうじ}勇次^{ゆうじ}が主として酒屋をやつて居

いて、辻車に乗り、新橋に走らせた。先に行く新婦の車は早く、熊次の車は遅く、他の車など間を隔てるので、熊次はぢれて蹴込を踏み鳴らし、年配の車夫に嘖いみられた。節句過ぎても、市中はまだ五月の空に鯉幟を泳がして居る。

大森で瀛車を下りると、母の注意があつたので、新夫婦は小戻りして車を宇土君の宅に寄せた。先夫人の離別以來、宇土君は廣尾の家をたたみ、大森の高臺に農家を借りて、住んで居た。街道に傍そばふた日あたりの好い大きな茅葺き、庭の庚申かうしん薔薇ばらが眞盛りに咲いて居る。新夫婦は立ちながら宇土君や母者に挨拶し、今から池上へと言ふて直ぐ暇を告げた。背の矮い、血色の好い宇土君が眼をぎらぎらさせながら、大きな口で笑つて縁から目送みおくつた。

池上鑛泉には、熊次も曾て父や親類の青年と來た事がある。本門寺を戴いたく丘の東面一帯を拓ひらいて、古木の梅數多植を散らし、大小の座敷を高低處々にしつらひ、長い長廊下で上り下るやうになつて居る。鑛泉は大したものではないが、湯上りを欄干に倚よる東京灣の景色は好かつた。

曙樓あけぼのろうの大玄關で車を下りた新夫婦は、女中の案内で長廊下を上り、幾曲りして、六疊二室の閑靜なはなれに導かれた。

かつた。姿は消えた。それは幻^{まぼろし}であつた。駒子は幻を見たのであつた。幻は現はれて消え、駒子は直ぐそれを忘れた。

其碧桃が三度目の春を迎へて蕾のそろそろ膨らむ十六の春、駒子は優等で高等小學を卒へ、其年の暮東京女子高等師範の入學試験を受けて通り、翌明治二十三年の春父に連れられ上京してお茶の水の生徒となつた。東京にはすでに兄の清人が高等商業の二年生で居た。定規の満十六に不足の月を足して入學した駒子は、二十五名の同級の最年少者であつた。學課の暇に、一人庭に出ては毬^{まり}をつき百二百とめぐりがつづくを楽しんだり、學課には出て體操を休む同級生をしつこく不審がつて、そんな事お尋ねなざるものぢやありませんよ、と言はれたりする程の子供であつた。其多くは女子師範を卒へたり高等女學校から來たりして居る年長の人々の中に、小學から直ぐ來た駒子は同學に骨が折れた。筆記の東京語を聽取るのがすでに骨であつた。他の筆記を借りて寫したりして、漸^{やう}と後を趁^おふた。無邪氣な彼女は然し師友に愛された。四年生の某女は、其級を代表して、ある日駒子を別室に呼び、有望だから勉強せよ、と懇切に勧めた。最初自修室で卓を並べた出雲の儒者の娘は、自今仲よくしませうと云ふ手紙を卓から卓へくれ

た。惣領の正太は本家を嗣いで菊池で酒造、新家は熊本で其酒を賣つた。駒子の父母は季二人を將て其新家にまだ獨身の勇次と一つになつたのであつた。駒子は其處から師範學校附屬小學校に通ふた。初等小學以來、一度に二級を飛んだりして、高等小學もずつと首席で通した。

それは駒子が高等小學の三年になつたばかりの十四の春であつた。ある日駒子は一人裏で遊んで居た。菊池の屋敷は、東表が下通町の往來に面つた千本格子の店で、店裏と二階が家族の住居になり、それからずつと小半丁も裏へ往つて、往き當りが黒板塀、塀の外は淋しい小路になつて居る。坂塀に傍ふて、西に酒倉、東に菊花壇、——菊作りに父は魂を打込んだ——の間を一條の小徑が南へ、やがて西へ裏門に通ひ、尙南へ隣裏へ入り込んだ一帶の空地は蔬菜の畑で隣裏の畑地との間は四ツ目籬で劃られた。其籬の此方に、父が自慢の大きな碧桃の木があつて、頃しも四月の初旬の花が雪のやうに咲いて居た。底にほの緑を匂はせた雪白の八重大輪、如何にも美しい氣品の高い花であつた。菊の芽の萌えそめた花壇の徑に立つて不圖眼を上げた時、駒子は碧桃の花の蔭に不思議なものを見た。それは若い男の後姿であつた。地上一尺ばかりはなれて空に浮いた其若い男の後姿を、唯一目、はつきりと駒子は見た。次の瞬間には、最早無

は満員で、兄は舊友の一人と同室したが、妹の居所がなかつた。肥後さんの心添で、駒子は其借別荘に置いてもらつた。兄妹は逗子に十日ばかり居た。駒子は老人夫婦に可愛がられ、家の子女になつかれ、子女の母と鎌倉に遊びに往つたりした。老夫人は頻に人待つ容子で、「來らつせば好いに」とくりかへし獨言するのが、異様に駒子の耳に響いた。次の土曜の夕に、肥後さんはまた一人で來た。而して月曜に肥後さんが歸る時、兄妹も同行で歸京した。

「好い妹をああたは持つとる。」

と肥後さんは駒子の前で、駒子の兄に、駒子をほめた。

歸京するとやがて、駒子は肥後夫人宛に禮狀を書いた。而して冬休に駒子は兄の下宿の娘に結ふてもらつた桃割れ髪で、實子へ手編みの肩掛と毬を持つて夏の禮に往つた。

それから間もなくの事であつた。ある日兄の下宿に遊びに往つた駒子は、兄から思ひがけない事を聞かされた。肥後家で駒子を欲しいと云ふさうな。相手は肥後さんの弟で、年は二十五、熊次と云ふて、今新聞社に出て居る。文章はこんなもの、と兄は一葉の古新聞を駒子に手渡した。駒子はそれを持つて歸つて、自修室で讀んで見た。それは一昨年物故した獨逸のモルトケ

て親身の姉の如く何角と世話を焼いた。學課はすべて面白かつた。習字や圖畫は直ぐ上手になつた。家政學で、家の設計なども、子供らしいに似合はぬ工夫を見せた。兄の清人が始終來ては力を添へた。土曜毎に一級一名宛講壇に上つては話す土曜會の演説なども、駒子は兄が作つてくれた草稿を力に震へ聲でお國名物不知火の話をした。難題の文章などは、兄が作つてくれる事もあつた。駒子が入學する前年に、附屬高等女學校の風儀に關する騒ぎがあつた。其爲面會、外出、門限など非常に嚴重になつて居たが、兄の顔はよく知られて、駒子は何時も面會に來る兄に走り寄つては抱きついたりして、兄妹の仲好は學校の評判であつた。斯くて一期の假入學も過ぎて本入學となり、一年或は二年の末に突然小學師範に移さるる憂目も見ず、洋服寢臺の寄宿生活も追々馴れて、駒子は眞面目な女學生であつた。

最初の夏は、兄と日光小倉山に避暑した。次の夏は兄や學友と熊本に歸省した。三年生の夏、駒子は兄に連れられ、逗子に行くべく横須賀行の瀛車に乗つた。車室には同じく逗子に行くK新聞社長の肥後さんが乗つて居た。兄は年來の知人、駒子も名は聞いて居た。肥後さんはビスケットの袋を出し、兄にすすめ、駒子にすすめた。逗子に着いた。兄妹が當にして來た養神亭

つ年下の娘が居た。宿はもと麴町の書店で、時たま書や雑誌を買ひに来る駒子の兄の學生ぶりを書店の主人はほめて居た。主人が亡くなつて、遺族は芝に移り、女ばかりで淋しいと謂ふて、駒子の兄に下宿してもらつたのであつた。主婦も娘も駒子の兄を主の如く大切にした。駒子はその娘から熊次の噂を聞いた。兄の友人の大矢野といふのが、同じ新聞社に出て居て、熊次の事はよく知つて居る。大矢野さんから娘が聞いた處では、熊次と云ふ人はあまり有望の人ではない。駒子が兄に言ふと、「大矢野の馬鹿、自分が欲しいんだ。」と兄は笑つた。宇土の母者は、熊本で駒子の母と懇意であつた。菊池の家と宇土家は相應に心やすかつた。ある時宇土さんが來て耶蘇教の話が出た時、「私耶蘇教は嫌ひ」と小娘の駒子はころりころんで見せた記憶もあつた。宇土一家が東京に越すと、駒子の足も自然近くなつた。縁談が出て後の事、ある日熊本之母から、黒木綿糸を届ける事を頼まれて、駒子は親しい友の平田吟子と宇土家に往つた。宇土さんにお稻さんと云ふ年頃の妹が居た。お稻さんは駒子に向ひ、實は肥後さんからわたしをといふ事だつたけれども、と云ふた。駒子はいやな氣もちがした。歸る途々、駒子は同行の友に不快を漏らした。友の吟子が慰めて、氣にかけないやうにと勧めた。駒子は永く不快を宿し得ぬ人

將軍の事を書いたものであつた。讀み終ると、凜と胸に響いた。駒子はすべてを兄に任した。駒子は十九の今日まで全くの戀知らずに過ぎた。東京に來ると、熊本以來の兄の友達も大勢居たが、一人も駒子の心に留まる者はなかつた。父母や兄の愛に空氣の如く浸つて居る駒子は、少しも異性の愛を要せず感じもせぬのであつた。兄の突然の話と一篇の文章で駒子の心の扉は開け、男といふものを駒子は懷ひ初めた。駒子は何時となく化學の筆記の餘白に「肥後熊次、肥後熊次」と幾箇も樂書して居る自分を見出した。兄の話に、先方では當人同志文通なども十分さす意向、と聞いたので、駒子は今や其人の手紙が來るかと待つた。が、手紙は終に來なかつた。小學師範に落された一つ上級の境松子は、京都生れの子供時代に舞など習はされた娘で、養父母が九段でやつて居る高等下宿に兄の友人藤原といふのが居る關係から、駒子の緣談も逸早く知つて居て、熊次さんが面會に來なすつた、などと駒子を擔いだ。それを眞にする程駒子は初心であつた。駒子は肥後さんに會つたが、肥後さんの弟には一度も會はなかつた。寫眞も見なかつた。京都から來て居る同窓奥田てつ子の姉者が同志社女學校出で熊次を識つて居ると聞いて、駒子は熊次の事を問ふたが、獲物は無かつた。駒子の兄の素人下宿には、駒子より一

小聲に叫んだ。其聲が消ゆるか、消えぬに、若い男はすつと行き違ひざま秀子に目禮して往つた。

「あの方よ、熊次さん。」

と秀子が言ふた。駒子がふりかへつた時は、帽子も冠らぬ蒼つほい羽織の後姿は、後をも見ずさつさと櫻田門の方へ歩いて往つた。

二月には母が上京して、兄が新に借りた麴町平河町の小さな家に入つた。三月末には、駒子もいよいよ四年の學程を卒へて、卒業證書と高等女學校、女子師範學校教員の免狀をもらつた。末尾から二番と云ふ卒業順は、郷里の小學を首席で出て、十六で女高師の入學試験に通り、郷黨の望を負ふて上京した駒子に消えも入りたい恥辱であつた。卒業式には母も兄も、また肥後の母者も孫の實子連れて列席したが、駒子は慙ぢて顔を出さなかつた。卒業寫眞にも、小さくなつて顔を出した。駒子は自分を懇望する肥後家に對しても濟まぬと思ふた。妹最負の兄は、「もつと出来る筈なのに」とこぼした。勉強半途の縁談が女に何を意味するか、を年若の兄は知らなかつたのである。然し妹の成績は兎も角も、郷國くくにから母を、學校から妹を迎へて、水

であつた。直ぐもとの快活に復へつた。

然し縁談が起つてからの駒子は、もう以前の學業一途の駒子ではなかつた。こんな事では、と氣を勵まして見ても、少しも目前の學課に氣が入らなかつた。彼もしたい、此も學ばねば、と思ひながら、心は其方に專になれなかつた。「出てから」後で」とすべての勉強をひたもの後日ごじちに繰り延べた。出てから讀むつもりで、和漢洋書の目錄など夥しく書き列つらねた。それ程足下は留守になつた。それでも兎に角一度の警告も學課の上には受ける事なしに、明治二十六年の夏は學友と歸省し、秋からもう教生であつた。

今年の正月、駒子は年始に肥後家に往つた。當たうの熊次の姿は見なかつたが、老人達が下へも置かぬ待遇して、歸りは時間が切迫したので、丁度來て居た親類といふ比志嶋の奥さん——おみきさんの母人——の車で學校まで送られた。月の中旬、日曜の午後、駒子は芝明舟町の兄の下宿から本郷へ歸るとして、同縣人で職業學校生徒の外山秀子と二人丸の内を通つて居た。二重橋前の芝生にかからうとする處で、不圖眼を上げた駒子は、翠翠あをあをしたばらばら小松の芝生を此方へ來る若い男の姿を見つけた。白い顔に大きな眼、はツと駒子は思ふた。秀子が「あッ」と

人人の大勢出て見る中を急いで車に乗り、幌ぼろに隠れる。婚禮の席に新郎も新婦の自分も末座は變であつたが、障子を開いて入つて來る新郎の白シャツが清清すがすがしかつた。母や兄に置き去られた刹那は流石に悲しかつた。然し駒子はもう妻であつた。然さうだ。數へ年二十一の駒子は、つい先々月學校を卒へて、同級十八名の中で、一番年下で一番早く妻となつたのであつた。それは昨夜、今日は結婚の其家もはなれて、此處池上の「あけぼの」に、夫と名づくる若い男と駒子は今差向ひに居るのであつた。

入らずの家をしばらくでももつ兄は嬉しさうであつた。駒子の同級の少數は東京に、多數は地方に、それぞれ奉職した中に、結婚する駒子の爲、兄は骨折つて東京に就職口を探した。日本橋區内の水天宮様に近い小學校に、やつと口が見つかった。四月初から駒子は月俸十二圓の女教員であつた。

卒業、奉職、通勤、眼まぐるしい忙しさの中に、ばたばたと結婚が近づいた。肥後さんが打合はせに来て、駒子が顔を出す日もあつたが、すべては母兄任せであつた。晴着は母が小山の奥さんと相談して、空色縮緬に櫻の花のあつさりした裾模様を作つた。簞笥は七圓の前桐を、文卓^{ぶんたく}は眞四角な大きいのを、兄が買つてくれた。兄の月俸二十圓、一切は母の持參で辨ぜられた。熊次から金拾圓の結納が來たので、それに半分足して駒子は學校歸りに人形町の呉服屋で黒地緋珍の帶地を買つた。三圓五十錢の鏡臺も買つた。五月になる。四日は一日學校を休んだ。五日の夜が明ける。生れて初めての島田に結ふ。髪が多過ぎて、髪結が困つた。湯に行く。何年ぶりかで白粉をつけてもらう。先方もお白粉が嫌といふ事であつたが、今日だけはと母がつけてくれた。母が手傳ふて着附をする。寫眞を撮らせに行く。何角とする内夕近くなり、近所の

た火のやうな祖師日蓮を偲ぶでもなく、近い未來に保護建造物に指定される仁王門の見事な建築を賞するでもなく、唯ぶらぶらと歩いた。

仁王門、祖師堂、輪藏と廻つて、丘の西の端に來た。松の木の間から六郷田甫が一面見渡される。向ふは鶴見臺一帶の丘陵、其上に五月の富士がさながら空に浮いて居る。午後の日蒸して薄ら霞み、すべては眼に見えながら茫として、何時の昔にか見た夢のやう。恍惚した二人は、また歩を返へして冷やりした松蔭に入つた。じい、じい、じいッ——じい、じいッ——靜まり返つた一山の空氣を震はして、何處の梢でか春蟬が鳴いて居る。じい、じい、じいッ。一聲は粗く春を餞り、二聲は夏を喚ばう其音は、靈魂の一對を前生の夢から今生の現に喚びさます聲である。二人はじいと聽き入つた。

はなれの座敷に歸ると、二人はまた手持無沙汰になつた。熊次は背手組んで細縁を往つたり來たりしながら、話の口を探がした。父母の二階に假住居でも、新家庭の持ちはじめだ。家庭の主として、何か主婦に言はねばならぬ。

つい五六日前、熊次は父に呼ばれて一冊の資産分與書附を渡された。分與資産の目錄は、表紙

三

日曜といふに、「あけぼの」には客といふ客もなく、何處の座敷も森閑として居た。男女を分つた鑛泉に入つて歸ると、晩い午餐の饌に向ふた。新夫婦を祝ふかのやうに、鎌倉海老の鬼がら焼などが饌を飾つた。

午餐が果てると、二人は庭下駄をはいて、裏つづきの本門寺に出かけた。五月の初ながら、もう夏を思はす日ざしに汗ばむやうな日向から、松陰深い寺の境内に入ると、冷やりとして心地が好かつた。日影斑らな境内を、二人は歩いた。子供が四五人輪をつくつて居る。何かと見れば、蛇である。大きな青大將が、石だたみの間を子供に取り巻かれて動きもやらず長々と這つて居る。眼を背けて、二人は其處を通り過ぎた。

境内は靜であつた。稀に僧衣の影を見るのみで、題目の太鼓も鳴らず、參詣の人もなかつた。話の無い二人は、黙つて歩いた。六百十二年前の秋、人家の柿の實が朱になる頃、此處で消え

座敷から瀛車の煙の時々往來する田甫を見越して、海の景色が好かつた。熊次は品川の臺場や低い總州の陸影を指して、知る限りを駒子に教へた。

「好い景色ですね。」

「本當に好い景色。」

熊次は自然が好きであつた。駒子も然であるらしかつた。然し調子を合はして居るのかも知れなかつた。熊次の駒子について聞かされたところでは、此女は何でもよく出来る、人馴れた、伶俐な女であらねばならなかつた。年齢に似合はぬ自分の未熟さを痛切に知る熊次は、年齢こそ自分に六つ下の二十一と云へ、官立學校出の才媛で、高嶋田の美人、指には金の指環のきらきらと光つて居る——其指環は、駒子の同級生一同が、甲州出の女生の世話で求めた、一個二十五錢の電氣鍍金の水晶の指環である事を、熊次は當分知らなかつた——妻と呼ぶ若い女の前に、言ひ甲斐もなく硬くなつた。

はなれが立つ丘腹の小さな臺地は、狭い綠芝で縁とられて居る。熊次は窮屈な座敷からやを下りて、嫩らかな綠の芝に寝ころびながら小さな書を開いた。それは英譯のハイネの詩集であ

は父、内は岩城叔父の筆で、兄の名が譲主、父と叔父とが立會として記名調印してあつた。目錄の面は、田畑一町歩、此年收金三十圓、三池紡績株が壹千圓、これは四年後に株券を渡す事として、それ迄は月額十圓宛兄から支給する、といふのであつた。「俺おれがやるのではない、寅一が譲るのだから」と父が口を添へた。熊次はちよつと異な氣がした。然し黙つて居た。父も嫡子で、今は隱居の身の上だ。熊次は平生父が十六盤の相手をしたりした覺から、今度分たるる資産が家傳の約七分一位に當る事を知つて居た。祖先以來の財産は、父の時代に公益の爲やら學費やらに追々に使ひ減らされて、残つた地所の收入は父母の生活費、兄の一家は且働き且食ふ勤儉な生活ぶりを知つて居るので、分與さるる資産を自分にとつては多過ぎるとも少ないとは思はなかつた。今朝出がけに、父は地所收入の半額十五圓と、本宅からの月額十圓を熊次に手渡した。そこで熊次の懷は今迄にない暖かであつた。俄大盡になつた氣もちの熊次は、細縁の端まで往つてふりかへる拍子に、駒子に言ふた。(彼は未だ駒子の名を言へなかつた。)

「これから經濟の事はですね、經濟の事は、すべて貴女あなたにやつてもらふから、そのつもりで。」言つてしまうと、もう二の句はなかつた。駒子も謹んで承はつたきり、何問ふでもなかつた。

わがあこがれを、切なさ。

全くそれは輝やかしい五月の月である。蕾といふ蕾は發^{ひら}き、鳥といふ鳥は囀^{ささ}り交はす五月である。永劫の中から切りはなされた輝やかしい此刹那に、熊次は天から彼の生涯に落つこちて來たやうな駒子と唯二人此處に居る。夫と呼び、妻とゆるされた二人は、何を話さうと儘である。然し熊次はつい此正月丸の内一度横目に、二度目に昨夜花嫁姿を見たばかり、今生の親味薄^{したしみ}い駒子に語る何ものもたなかつた。

芝生の茵^{しとね}羨ましく「何をお讀みなさるの？」と問ひたげにして居た駒子は、所在^{しよざい}なさうに縁の柱にもたれながら、小さな手帳に鉛筆で見渡す景をスケツチしはじめた。何様^{どん}な畫を描くのか。一寸お見せと云ふには、熊次にまだあまり遠慮があつた。やがて描くのをやめて、手帳を帯にはさむと、駒子は窓際に往つた。唯見れば、楓の若枝を窃と引寄せて、何か見て居る。透き徹る緑の嫩葉の間に、丁字の形をした紅い可愛い楓の花を珍らしげに見入つて居るのであつた。

つた。彼はハイネが好きではなかつた。唯袖珍の可愛い書故に、同じ叢書のセルリーやコレリツヂやキイツなどの詩集と共につい此正月ハイネを求めた。而して短いホニムウンの今日、其一冊を持つて來たのがたまたまハイネであつたのである。熊次は芝生に頬杖ついて、讀むとはなしに頁を繰つた。

それは五月の輝^{さつき}かしの月^{かげ}

蕾^{ひら}てふ蕾^{ひら}の發^{ひら}き發^{ひら}くる時なりき、

わが心に——あな美^{うま}し——

戀^{こひ}ぞ芽^めぐみぬ。

それは五月の輝^{さつき}かしの月

鳥^{とり}てふ鳥^{とり}の囀^{さえず}づりかはす時なりき、

もゆる言葉^{ことば}に　われはしも　彼女^{かのぢよ}に　心明^{こころあ}かしけり、

少し待つて見て、到頭ぶらぶら歸りかけた。處々にランプのついた長廊下を、熊次はゆつくりゆつくり草履の音を立てて上つた。時々立止まつて耳を立てたが、駒子の草履の音も聞こえぬ。到頭獨りはなれに歸つてしまつた。

障子をあけると、緋牡丹の花が室一ぱいに散つたかとはかり、赤い色がばつと眼を射た。燃え出るやうな夜のものが二つ奥の六疊にのべてある。

駒子の中々上つて來なかつた。

軽い不安を熊次は覚えはじめた。待つて居ればよかつた、と思ふた。往つて見やうか、とすでに起ちかけた其時、足音が靜に近づいた。熊次の胸が拍ち出した。障子がすうと開いて、「遅くなりました。」

熊次の眼の前に現はれたそれは、高嶋田に紅、白粉、縮緬の裾曳いた昨夕の何處やらませた駒子でなく、唯つた今咲いた櫻の花かとはかり初々しい駒子であつた。

裏の本門寺に烏が啼いて、靜かな五月の夕はヨリ靜かな五月の夜になつた。戸が繰られると、六疊二室のはなれは全くの別世界である。ランプの光で夕饌を終へると、駒子は女中に手傳つてもらつて嶋田を解いた。

「まあ、何てお見事な。」

と女中が感にたへて駒子の髪をほめる。嶋田を解くのも惜しさう。然し駒子はさつさと解いてしまうと、手早く束髪に結ひかへた。駒子の髪が嶋田から束髪になるのを見つつ、熊次の氣分はややくつろいで往つた。熊次は日本髪でも嶋田をあまり好かぬ。昨夜氷川町の二階で、高嶋田の新婦にかけ蒲團の裾をたいたりされたりした時、御殿女中にかしづかるる俄殿様の窮屈さを感じた。今日も一日折角差向ひで居ながら、嶋田がやはり二人を隔てた。嶋田を解いて、束髪の女學生姿になつた駒子は、二十一と云ふより十六七の若さである。熊次に駒子が近くなつた。駒子自身も、假り物を返へしたやうに頭を掉つて見て、にこにこして居る。

明朝早立の事など女中に頼むで置いて、二人は長廊下を下つて、本館の鑛泉に往つた。

早湯の熊次は直ぐ上つた。隣の浴室に駒子はぼちやぼちややつて居る。上つてしまつた熊次は、

第三章 父母

一

父の肥後誠一は、熊次と同じ二十七歳で、二十歳の津森千代子を妻に迎へた。最初に四女、次に三男が生れ、生れて七日目に消えた次男の外は、皆それぞれに生長した。父の父も、母の父も、細川藩の郡代の下に屬して一郷いちがうを支配する總庄屋であつた。任地が隣合つた關係から、男の子がちの肥後の家と、女の子澤山の津森の家は懇意であつた。父の父は津森の七人女むさめの真中どころで津森家一番のお轉婆娘の母に目をつけ、行く行くは自家うちの媳よめに欲しいと戯談じやうたんのやうに云ふて居た。それは母がまだ十歳左右の事だつたが、其後父に親類内から來た妻が不縁になつて歸つた後で、十年前に祖父が擇んだ母が父の後妻として來たのであつた。「母さんだから卿おまへ達たちが出來たのだ。」と、ある時父が熊次に言ふた。父の先妻は子なくして去り、本家肥後に縁づ

徳富久子

うち向ふ

人もかくこそ

久方の

雲井の富士は

山としもなき

舞ふたり、大酒をひつけて酔へば得意の「阿古屋琴責」を唸る祖父に、正直小心な父はあまり氣に入らなかつた。祖父は父よりも二番目息子の熊太叔を愛した。他はそれぞれ養子にやつたが、愛子の熊太には肥後を名のらせ、十三間に七間の大きな家を建ててやり、行く行くかかり子にする筈であつた。素直で、繪畫など上手に描いた熊太叔は、父との兄弟仲も好く、師にも愛され、師の上方漫遊にも伴をした。二十八歳で疫痢で妻諸共亡くなつた時、祖父の落膽は非常であつた。熊太叔夫妻は去年生れの一女を残して死んだ。それは熊次の父母の養女にされ、母の乳房は養女と當歳の長女とを同時にはぐくむだ。養女は長女にされて大びらに養母の乳房を吸ひ、長女は蔭で隠れたやうにしてやつと母の乳房にありついた。祖父の熊太叔に對する愛は、斯く其子の死後までも強かつた。父母に四人までつづいて女の子ばかり生れたので、一時は熊太叔の忘れ形見に養子して肥後家を嗣がす筈になつて居た。五人目に寅一が生れたので、養女は出でて嫁す事になつたのである。父は身體も弱かつた。祖母が蔭になり日向になり、長子の位置を父に保たせた。父は其母に孝行であつた。祖母の足痛平癒の爲、生涯蟹を斷つて八幡様に願をかけ、願ほどきに鏡を背負ふて禮參りをしたのは、九歳の年であつた。祖父は中々

いた。本家ではあつたが、先代と祖父の異母妹の間に出来た子女十一人は、生ると死に、生ると死にして、他姓から養子をし、父の先妻が其養子の妻となつたので、肥後の血は本家に絶えて新家に傳はつたのであつた。物の役に立ちさうもないから、先妻は離縁した、と云ひながら、濃情の父はやはり去つた最初の妻に一縷の心残りがあるらしかつた。

肥後新家の惣領に生れて、父は四弟四妹の兄であつた。才子肌の諸弟の中に、父は獨不器用且小心で、三番目息子の樋口叔などは、「あなたは凡」と面と向つて父に慮外を言ふた。兄弟四人で沼山先生を師とし熊本に遊學したが、自身弟に生れて天才肌の沼山先生は、父よりも寧ろ弟達を取つた。家に居ても、父は持てなかつた。長子相續の邦では、長子は公子で、餘は私子である。取つて代はる公子は、相續者で、同時に父の敵でもある。父の愛は自然に私子に流れる。六人同胞の中の唯一男子として男の節句の五月五日に生れ、十一父を喪ふて肥後家中興の祖であつた賢明な祖父と腹のしつかりした繼母に育てられ、二十三で惣領の父が生れた年に惣庄屋になり、偉おほきい體格で柔術が強く、一揆が近くに迫つても襦じゆ袍一貫、帶一つせず爐側ろばたに胡座あぐらかき、好い時分に巨魁十數人を縛しばつて牢屋らうに繋つなぎ、正月になつたので餅をついて其囚人等にも振

苦しい立場の父に連れ添ふ母も苦しかった。母の母津森鶴子は時代に稀な賢い婦人の一人で、七人女の中にも母は氣に入りであつたが、あまり勝氣なのが心配であつた。「おまへはあまり勝氣で母は心配する、母は觀音様におまへの爲願ねがひをかけて置いた、其願をおまへに譲る。」と臨終に母に遺言したものだ。勝氣の母は、複雑な大家族の惣領の妻になつて、さんざ鍛はれた。其處には媳を鍛ふべく夫の母が待ち受けて居た。津奈木きつての素封家ものもちの長女に生れ、十七八で鰥舟いわしよねの上乗りして荒し男共を使ひまくつた程氣の強い、それで居て熱心な觀音様の信者であつた姑は、容赦なく媳を打ちたたいた。行き届いた生みの母に女一通りの事は落おちなく仕込まれた母も、桶かづを擔いで水汲みなどまでさせられ、心身の苦勞ですつかり眼を悪くしてしまふた。休養に生家きやに往つて程經て歸れば、留守にはちゃんと女が居たりした。妾と同居させられる事もあつた。生るる子供も子供も女の子ばかりで、すでに離縁になりかけた事もある。長男寅一が

父に家督を譲らなかつた。父の舊記の中に、熊次は父の八幡詣の述懐を見た事がある。八幡様は應神天皇、御母神功皇后の頑張りで、六十歳になつてやつと天皇とし御即位なつた御方である。祖母が亡くなり、其翌年熊次が生れた明治元年に、父は四十七歳で初めて肥後家の家督を譲られた。それ等の懊惱で、父の立場は苦しく、克己我慢の果は、大酒になり、烈しい癩癩になり、女を愛して爵を漏らしたりした。

た。女を難する輿論の中に、ある新聞のみ女に同情した。矯風會が其新聞に感謝狀を贈つた。それは妹の發意で、事後に知つた姉は妹の態度を難じた。夫を殺す妻の肩を、母は持てなかつたのであつた。熊次の母は然し争ふべきに争ふ事を若い女性に鼓吹するを忘れなかつた。父と母とがある縁から公郷華族の夫妻に神田の百尺で馳走になつた。のつぺりした子爵の御前を、奥方其方のけに藝者共が取り卷いてちやほやする。母が子爵の顔を見い見い、奥方の膝をつついて「おやきなさいよ、おやきなさいよ。」と嗾しかけたものだ。母は單の潔癖ではなかつた。眼が悪いので、よく古今の小説なども讀ませて聞いたが、如何はしい部分を父は避け、母は決して殘さず讀ませた。それだけ母は人間に眼が開いて居て、二人の男の子にも大抵は寢て居ながら氣をつけた。兄の寅一を母は信じたが、然し決して油斷はしなかつた。札附の熊次については「直ぐ慾に負ける」といつも熊次の弱いを啣つた。面白くないと、「酒でも飲むかな。」と熊次は母を嚇した。「そればつかりの取柄ぢやないか。」と母が嘆いた。

父は母を愛し、母の才氣に一目置いて居たが、時々は頭が高いと唄つて、主權を張つた。五六歳の熊次は時折棕櫚帶で母を打つ父を見た。母も父を愛し、父の清廉と仁愛を認めて居たが、

生れたので、母の位置がやつと定まり、祖母が中風になりやがて亡くなつて、母の時代がやつと來たのであつた。妾が居ると父の機嫌が悪かつたが、母の體が弱い爲やはり時々妾が居た。長い鬱屈の後、父が得意の時代になつて、熊次がもう人心つく頃も文金ぶんぎんが居た。妾と云ふ事が不思議でも何でもない時代である。母の二番目姉で男を男臭くも思はぬ比志嶋の伯母などが、妹の家に來て見て、妹の骨折を見るに見かね、「文金の一人居らんぢや」と云ふた。當たうの母がこのこ出かけて其文金を搜さがしに往つたものである。晩年になつて、父も恥ぢたが、母は思ひ出す毎虫唾たびむしづが走つた。何故あんな薄ぬくい事をしたらう？ 何故無理な辛抱をしたらう？ 然し時代が時代であつた。母は其様な體驗から逸早く一夫一婦の耶蘇教に傾倒した。女が強くならねばならぬと思ふた。其爲熊本に居る頃から女學校を起す計畫をした。其志は、母の直ぐの姉伊倉伯母が果して居る。東京に來てから母が基督教婦人矯風會に共鳴したのも其爲であつた。其會は母の二番目妹の津森勝子が主宰をして居たが、母が時々活を入れた。酒や女で男の吾儘に苦しみぬいた姉妹は、矯風の先達も一緒であつたが、忍び徹とほして來た姉と、途中で夫を捨てた妹の間には自づから異かつたものがあつた。餘り吾儘して苦しむる夫を妻が逆上して殺し

「寅一なればこそ俺も東京に出て來た。」と父が曾て熊次に曰ふた。父は早くから嗣子の力を見て居た。然し熊本時代にも「拔山之力包荒量」と云ふ詩をつくつて子に贈り、有り餘る力に度量を添へよ、と注意する父であつた。葦北の水俣から興つて肥後の熊本、日本の東京と追々に展びて行く肥後家傳來の生命を目に睹る父は幸福であつた。若盛りには兄を兄臭くも思はず、女の子ばかり生るる兄に對し男の子澤山の氣を負ふた弟の樋口は、末路蕭條として三年前に亡くなつた。同じ沼山門下で、昔は肥後の藩政改革に手を携へ、つい去年まで白髮頭の代議士で政界に馳驅して居た親しい友の岡田も亡くなつた。田越川を中にして、葉山の別莊へ行く舊藩侯が車上から微笑すれば、此方の貸別莊に舊藩臣は小腰を屈めて、二十年の昔熊本の維新に解放の仕事と共にした思出もなつかしい君侯も其葉山で亡くなつた。あたり淋しくなるままに、父はますます自愛して、古稀の頃まで樂むだ晩酌の一合も悉皆やめて了ふた。武藝で鍛へた體は、耳が遠いばかり、腰も曲らず、山阪を歩き馴れた早足で赤坂、麻布と日々運動を怠らなかつた。榎坂時代は頼まれて若い奥さん達に漢學を教へたが、氷川町ではやめた。交友の凋落も、自己と自己の近い周圍に爲す可く樂む可き多くをもつ父には、さして苦にならなかつた。讀みふる

氣魄きはくの不足に不満があつた。縣官として地方維新解放の局に父が當つて居た間も、「もう少し突込んでおやりなさればよいと思ふた」ことがしばしばあつた。熊次は父が晩年の末子で、一度も父に打たれた記憶がない。然し母は熊次に甘くはしなかつた。母が滿腔反抗の氣を負ふて生れた兄の寅一は、子供時代惡戯いたづらの罰に六尺桶に入れられても飛び出る程の氣象であつたが、弟の熊次は間歇的に吾儘で癩癩は起したが、自分の愛犬を年長の遊び仲間が嘯わしかけて他の大きな犬と噛み合はすを否と云ひ得ぬ程氣が弱かつた。父の氣弱を末子に見る母は焦いら々いらした。熊次が九歳の秋、神風連の爆發した其夜、ただならぬ物音に容子見るべく母は二階にかけ上りざま寢ぼけた熊次の手をとつて、「男でないか、來て見なはり」と曳き立てたものだ。夏の行水に母が熊次の背を流してくれる。痛い、と熊次が身を振もち。何の弱虫と嗔いづつて母が手荒にごしごしする。あまり熊次がもがくので、唯見ると、誰のしわざか手拭に針が縫とふてあつた。「繼母だつたら」と母が悚然そくぜんとした事もあつた。父が祖母に孝行であつたやうに、兄も母思ひであつた。十二歳から母と外出すれば、自身小走りに走せぬけて人力車と呼んで來ては母をのせたものだ。兄は母をいたはつた。熊次は母に甘えた。

沼山先生に嫁いで、さんざ周圍に揉まれた後、夫は非命の死を遂げ、嗣子の耶蘇信仰で一苦勞し、其嗣子が基督教界の名士となれば、媳に死なれて自身は中氣になり、二度目の媳は若く、沼山叔母は傍目にも慘^{みじめ}な境涯に居た。一つは其妹の氣ばらしにもと、母が主として老人花見會を起した。後で老人會と名をあらためたそれは、月に一度老婦人達打寄つて、牧師の話を聞いたり、隱藝を出し合つたり、打明け話をし合つたり、一日を長閑に暮らす趣向であつた。それは老人達にも其媳達にも歡ばれて、沼山の叔母が神戸に移つた後もつづいて居た。其老人會はもとより、日曜毎の會堂行、知邊の訪問、居ては花を活け、歌を詠み、一弦琴を弾いたり、女中を使つて三度の指圖をすれば、六十六の母も忙しい日々を送つた。

父も母も幸福であつた。唯一つ、末子の熊次が三十近い齡をして一人前にならず、生涯兄の厄介者に終りさうなのが、心痛の種子であつた。熊次故に父母の肩身は狭かつた。父は時々熊次の顔を見て笑止な顔をした。母は溜らず失望を口に出した。時には口汚く熊次を罵つた。熊次も負けてばかりは居なかつた。父兄にすべてを黙つて居る熊次も、母には時折烈しい逆襲をした。

した古書も尙読み、新刊の書も読み、眼のわるい母を聴手に新聞を読み雑誌を読み、日記をつけ、郷國（くに）の縁者や舊門下の音信の應酬、夜の團樂には悴の新しい世間咄に興じたり、孫を相手に嬉々したり、獨り居ては詩作に耽つたりすれば、七十三の父の一日は退屈する隙（ひま）がなかつた。十歳から劍術、柔術の師に入門させられた父は、孫を唯撫愛するばかりで満足はしなかつた。きちんと座わつた祖父の前に、今年八歳の實子は「お早うございます」と手をついたあとで、小さな指を折つて、「悪い事は、シヨノム（妒む）心、——」「忘れてならぬ事は、屹度良い人になる事——」などと教へられた修養簡條を朝々暗誦するのであつた。首尾よく暗誦すれば、祖父は悦び、祖母の顔には時に薄笑（うすわらひ）があつた。暗誦の後で祖父はいつも實子にお菓子をやつた。孫達は朝々祖父からお菓子をもらつた。

内好きの父に對し、母は外出が好きだつた。「常磐（とぎは）なる松も散りてぞめでらるる、こすゑに千代の色を残して」と母は曾て咏んだ。老人の頑張りに懲々した母は、若い者の邪魔になるまい心がけを常にもつて居た。同時に、老人は老人の世界がなければならぬ、としみじみ思ふた。今神戸に居る母の直ぐの妹沼山の叔母は、つい去年まで東京に居た。父と云ふてよい年齢違ひの

第四章 兄弟

一

父が四十七歳で初めて肥後家の家督をとつた明治元年の十月二十五日の夜半に、肥後内海の南端、葦北郡水俣みなまたの身分は郷士、主あるじの職掌は地方役人、家業としては煙草や麴かうじなど造る家の中隠宅で、肥後家の末子として熊次は生れた。母は四十であつた。四女三男をまうけた母の氣は勝つても體は弱く、思はしく乳が出ぬので、熊次は乳の足に甘酒をのまされた。祖母は前年亡くなつたが、祖父は六十九歳で元氣であつた。五年前に嗣子の嗣子寅一の誕生を悦び、村の諏訪の社に「大願成就」の繪馬を奉納して家運を祝ふた祖父は、今また男の孫を抱いて、「おお、これは奇麗な子、公郷衆くげしの子の様ぢや」と喜んだ。二十八で亡くなつた次男の熊太を忘れかねた祖父は、熊次の誕生で次男が生れ更はつて來たかのやうに喜んだ。熊次の初節句は明治二年五

富士

徳富愛子

君がむねの

奥の奥には

火ぞもゆる

いまは

静けき

すがた

なれども

來た。卒業前に同志社を飛び出して東京に行き、熊本に歸つて家塾を興し、自分の勉強をした
り、頭を使ふ事が多く、焦々して兄が來ると共に、直ぐ傍に居る、少しも魂の入らぬ、而して
腥氣なまぐさけのついて來た熊次が自然に安全瓣になつた。弟は兄の拳を時々味はうた。

氣の弱い父と意地強い兄の間には、凡ての父と嗣子の間にある自然の對抗があつた。父はぢり
ぢり子に従はされて往つた。總庄屋上りの肥後の家には、縁類の邪魔が多かつた。兄は家庭の
單純化からはじめた。先づ家に居た三人の姉をそれぞれ肝煎つて縁づけた。父も母も甥姪澤山
であつた。それ等の係累も多く、岩城叔の先妻の子達は伯父の家をわが家のやうにして育つた。
無差別に愛する父は、それを子の如く愛した。兄は父の心をそれ等から離す可く骨を折つた。
あまりに攻め立てられて、父は居たたまらず突と立つて座をはづす事があつた。見かねた熊次
が火鉢を持つて後を追ふて二階へ行くと、淋しい顔をして居る父が悦んだ。父はよく氣ばらし
の散策に熊次を連れた。父に對する兄の鬱憤も、弟の身一つに負はされた。兄は父を打つかは
りに弟を打つた。兄が熊次を打つても打つても足らず、父母の居間に曳きすつて往つて、父の
眼の前でつづけさまに打据ゆると、父はおろおろして、

月、丁度其正月に京都で父の師沼山先生が刺客の刃に斃れたりして、何角の取り紛れに熊次の節句も忘れやうとした。祖父が怒鳴つた。

「熊次は男だぞ。何故幟を立てぬ？ 熊次は俺の養子にする。」

祖父は五月五日の誕生であつた。五月幟を立つるのは、祖父にとつては身祝ひをさるるやうなものであつた。祖父は五歳違ひの孫二人を熟々見て、

「いまに喧嘩するぞ。」

と言ふた。

肥後家の總領として最初から大切にされた兄は、また早くから鍛はれた。十歳位から二十五里の山阪越えて獨り熊本へ旅をさせられたり、七歳位から父母をはなれて塾詰などさせられた。

「足が鐵のやうになつとんなはる。」と先生の奥さんが傷はつて自身の床で溫めてやつたりしたものだ。兄は外に居る事が多く、體の弱い末子の熊次はいつも内に居て、十歳までは熊次の獨天下の觀があつた。十一、兄に連れられ京都に上つて以來、熊次は兄の手に移つた。子供時代の熊次は、時に懦弱を叱らるる外、愛された記憶の外に何もものも有たない。十五六から異つて

七の兄は熱心な耶蘇信者で、祈る事や「波風のあらしき浮世を立去り」と云ふ讚美歌を熊次に教へたも其兄であつた。其後兄は基督教證據論に反感を起して耶蘇を捨て、今は猜疑の眼を以て耶蘇の徒を見て居た。其耶蘇に耶蘇の父なる神に母が熊次を導いた。母の誘導の下に、熊次は青春の情熱を信仰に注いだ。彼は熱中せずに居れぬ青年であつた。信仰は熊次を元氣にした。熊次の耶蘇信仰を嫉妬の眼を以て見る兄も、熊次が書く字が此頃元氣になつたと言ふた。碌に人中でものも言へぬ懦弱の熊次が、塾の猛者共が氣を吐く土曜會で堂々と信仰を述ぶるやうになつた。其演説に對し、人各々其立場があり道がある、耶蘇信仰が必しも唯一の道ではない、と兄が大勢の前で受太刀の辯疏をしなければならぬ程熊次は一途になつて居た。

兄が妻を迎へた。それは熊次が家を出づ可き時が來たのであつた。然し熊次は氣がつかかなかつた。父母も油斷した。兄が熊次を明白に邪魔にし出した。熊次が反抗もせず、逃げもせず、受難者の態度で兄の進撃に對する事がますます兄を怒らした。到頭父母も氣づいて、父には先師の嗣子、母には妹の子、沼山の又雄さんに熊次を托した。熊次は十八の春、又雄さんの傳道地伊豫の今治に往つた。

「兄が斯うする事は、兄の美德じやなかぞ。」

と熊次に言ふた。而して父が詮方なさに、

「さう魂が入らんやうぢや——腹切れ！」

と厲しく言ふのも、死ぬが父の眞意とは決して思はなかつた。兄に對しても、多くの場合反抗はしなかつた。元來喧嘩嫌ひの熊次に喧嘩は面倒であつた。喧嘩をせぬかはり、彼は自分一人の世界をつくつて早くも其中に閉ぢ籠つた。其世界の中で、彼は一人で感じ、一人で判斷した。其處は彼のみの世界で、父すらも入れなかつた。勿論兄は入れなかつた。彼は其世界に直ぐ逃げ籠つた。彼にとつて何時しか不可抗力になつた兄の顔に黒雲が湧けば、熊次の魂は直ぐ田螺の如く蓋をしめて、體は兄の打つに委せた。打つても打つても打ち甲斐なく、精神的不死身になつたやうな熊次を、兄は癖になつて打つた。熊次は段々神經衰弱になり、兄の聲さへ聞くと震へ上つた。

父兄の持て餘した熊次を、母が耶穌の父なる神に導いた。耶穌は熊次に赤の他人ではなかつた。十一の年熊次が兄に連れられて英語を學びに往つた京都の同志社は、耶穌が魂であつた。十六

二十二の春、東都歸參の許が下りて、熊本を立つ時、助教をして居た英學校の教師や生徒達が、熊次の爲に煎餅で送別會を開いてくれた。送別演説の中には、東都文壇に花を添ゆるやうにと臚^{はなむけ}の言葉もあつた。熊次は答辭を述べた。東都文壇に花を添ゆるなんか、若しあらば、それは數十年後の事である。但不才低能何一つ出來ぬ自分にも、拙いながら、一枝の筆がある。

例へば昔心機一轉後の使徒保羅が東奔西走、亞細亞に七教會を立て、希臘から、羅馬、西班牙まで身を粉^こにして福音を傳へた如く、何卒此筆を以て愛の事業に貢獻したい。大きな眼に一ばい涙を溜めて、斯く宣言して熊次は熊本を立つた。而して花^{はな}茨^{いばら}の薫^{くん}する九州路は車、瀬戸内海は瀛船、東海道は近江路だけを船、餘は新に開通した鐵道で東京に上つて來た。

五年過ぎた。二十二の熊次は二十七になつた。彼は如何に此五年の月日を過した乎？

熊次は一切を兄に委ねた。彼はもとより兄の嘆美者であつた。東京に來るとやがて、唯一度あ

熊次の信仰が一熱一冷、今治の氣まぐれな傳道志願青年から又雄さんの京都移住につれて同志社に歸り新參の三年生になるまで二年の間に、兄弟の喧嘩を預言した祖父は八十八で亡くなり、兄夫婦に子供が生れて死に、而して兄が年來の勉強の效あらはれて「未來之日本」の一篇に一躍して文壇の花形となり、家塾を鎖し、家を擧げ、門生を將て中央帝都に乗り出して來た。熊次も東京に行きたかつた。兄も異存はなかつた。然し父は熊次がうつり氣を誡め、卒業まで動くなと命じた。熊次は東京に行かなかつた。然し卒業もしなかつた。彼には學課の外に踏まねばならぬ課程があつた。それを踏んで彼は同志社を四年生の第一期の末に飛び出した。而して肥後の家には不面目、自身には心身に痛手を負ふやうな長幕を演じた後、熊本に落ちついた。肥後の家に大勢同胞きやうだいがあつても、一人だつて家門の恥辱になる事をした者はないに。」と熊本の田舎に嫁いで居る安永の姉がくやんだ。尋常なら同志社を無事卒業する其前月、熊次が歸參を許されて東京へ上つて來た時は、兄の家には熊次が同志社を飛び出す少し前に生れた女兒がもう三歳になり、まだ三十にもならぬ兄は東都隨一の成功した雜誌の論壇に據つて、押しも押されもせぬ位置を占めて居た。

山師と姻戚となり、議論を上下し云々と書いてあつた。父が欄外に「不敢當」と朱書して居るのを熊次は見た事がある。父は分を知つて、師の弟子に甘んじた。熊次は弟として兄に名を並ぶるに足らぬ自分を欺く事が出来なかつた。

熊次は無慚にあまり早く性の眼をさまされた。無暗に彼を可愛がつた乳母達の手に早くも彼の童貞は破られた。彼の周囲には、年長の不良少女も、また男色に耽る不良青年も一人ならず居た。性の遊びから自慰の悪習慣も何時とはなしにつけて了ふた。それが他に知れると、熊次は自然にいちけた。耶蘇の信仰に入ると共に、眞面目に闘ふて餘程自己を征服し、自尊を取り返へすと共に、外に對する元氣も出て來たのであつた。熊次は過去に眼を背け、現在を謹み、潮の如くさし來る誘惑を振り拂ひ振り拂ひしたが、知つてしまつた禁果の味が中々に彼の精進を礙さまたげた。十八の春、又雄さんについて伊豫に行く途、筑後路の宿に泊つた夜、對抗方法について又雄さんに問ふて見た。又雄さんは一般的な答の外に與ふる經驗の言葉をもたなかつた。翌日福岡の牧師の家に宿つた。牧師は又雄さんの従弟、熊本、京都の同窓であつた。主客皆出て唯一人残つたつれづれに、熊次は牧師が卓上の英書を披ひらいた。不圖こんな句が目についた。

る事で異議を申立てた時、「言ふ事を聴く約束で來たらう。」と屹度兄に言はれて以來、熊次は苟
にも諍ふ事をやめた。言はるるままに雜誌の六號雜錄欄の翻譯も受持つた。自分には縁遠い
英國マンチエスタ派の双生子政治家の傳記も書いた。新聞が出るやうになると、翻譯係を命
ぜられた。東京に來て二年目位から彼は追々に聖書を讀む事も、祈禱も、教會に行く事もやめ
た。と云ふて、社の仕事にも實が入らなかつた。皆が血眼になつて興ずる政争などにも、何の
興味もなかつた。彼は段々現實の中に孤立する自分を見出し、流動する周圍の中に獨取り殘さ
るる自分を見出した。職務の翻譯の外にも、趣味の文章を弄する機會は多く、色々の筆すさび
も書いて見たが、書くものは稀薄な空疎なものばかりで、一つも物にはならなかつた。紅葉、
露伴、美妙、などと年齢は相若きながら、彼は其等の後塵を拜しも得爲なかつた。彼の後から
同志社を出た年若い連中が新聞社に入つて來て、すすん彼を追ひ越した。兄が社長の新聞社
に、彼は平社員としてすら物の數には入らなかつた。彼は逸早く自分自身に失望した。熊次が
二十四歳の秋、父が七十の祝に父の詩集が出て、兄が序文を書き、兄弟の名を列記して熊次に
見せた時、熊次は自ら自分の名を削つた。其詩集には、氷川の海舟翁の序文があつて、父が沼

に小さな凹處^{リセス}があつた。碧梧の影さす東の窓側には米畫伯のテエブルが置かれてあつた。西の窓下に熊次はテエブルを据ゑた。左方に新聞掛を隔つれば、それは殆んど別室であつた。硝子窓から煤けた町裏の低い瓦屋根が見下ろされ、夏は西日が容赦なくさし込み、日中は時々むうとしたいきれが熊次の顔に吹かけて來た。捨身の熊次は、服裝なども構はなかつた。見すばらしい服裝^{なリ}で毎日出て來ては、此隅の卓に向ひ、横濱から着いたばかりの濕つぽいジャパンメエルやガゼットを披き、郵船毎に新着の英米雜誌の紙を截り、硯箱の毛筆で赤罨唐紙の原稿紙に其日其日の仕事をした。時には筆を握つて、頬杖ついて、何時來るとも知れぬ、中々來さうもない、或は來ずに了ふかも知れぬ「我運」を窓から見るともなしに眺めやつた。「天下取る話勝火の火鉢哉。」兄が駄句つたやうに、新聞社の暖爐會議は賑やかなものであつたが、熊次は滅多に其中には居なかつた。日曜などにも、社長中心に社員が揃ふて出かける時、熊次は滅多に同行しなかつた。あみだの仲間入りしても、彼は泥棒猫の如く一つ二つをさらつてわが席に逃げ戻つた。當直の夜は、號外を出すやうな事なかれかしと念じ、やつと無事に夜半を過ぎて、歸りには河岸の夜店で一個五厘の鹽飴の熱い熱い大福餅を嚙り嚙り、ぶらぶら下駄の音を立てて夜

「人は鳥の頭上を飛ぶを如何ともする能はず、然れども鳥のわが頭に巢くう事を制し得べし。」
ここだ、と熊次は思ふた。誘惑は自然だ、罪ではない。然し誘惑に負けるは自分が負けるので、罪である。頭に鳥の巢は作らすまい。而して熊次は悦んだ。然し悦喜は一旦で、戦闘は永かつた。其後も熊次はしばしば敗れて、罪を犯した。結局京都出發以後の大破綻となつて了ふた。東京に上つて當座は神妙に謹んだ。然し周圍につれて信仰が追々冷却し、祈禱も怠りがちになると共に、惡習慣がまた頭を擡げて來た。熊次は自信と自尊を悉皆なくした。それが何時しか他に知れると、彼の世界はますます狭くなつた。少年期に熊本で一度通つた經驗を、二十代で熊次はまた東京で繰り返へすのであつた。

衷には道德上の罪人である事を意識し、外には碌な仕事も得爲ぬ熊次は、周圍が評價する前に先づ自己輕蔑に陥つた。新聞社に出ても、彼は隅や猫であつた。小使すら彼を敬しなかつた。編輯局の正面に南面した社長のデスクに接して、新聞の編輯と雑誌の編輯とがટેエブルを相對して居た。二つの席には色々の人がかはるがはる腰かけた。熊次は自から見つけた隠居席から動かなかつた。社長の背後は壁つきが古新聞の押入戸棚になり、中央が書棚雑誌棚で、其東西

なかつたので、兄が熊次に探検を命じた。機敏な事は出来ぬ、と熊次が辭退した。「卿のやうな馬鹿で澤山」と兄が怒を含んで言ふた。二十歳になるならずで十二文豪の「ゲーテ」を書いた佐々木君が雑誌編輯のテエブルから駭いた顔を上げた。熊次は言はるるままに吾妻山に往つた。熊次が歸つて程なく、吾妻山が再度の噴火をして、丁度調査に往つて居た技師一名技手一名が落ち来る熔岩にうたれて非命の死を遂げた。技師は最初の探險に熊次も同行した人であつた。夜話に兄が父に曰ふた。「熊もあぶない事でしたい。」熊次は嬉しくなかつた。

母は常に云ふた。「わたしは馬鹿が一番嫌ひ。」而して時々は「何て馬鹿だらう。」と熊次を罵つた。母や兄に馬鹿ときめられた熊次は、自分自身の眼にもやはり馬鹿としか見えなかつた。大となく小となく周圍はすんすん成長し變化して行くに、何年も何年も翻譯係の卓にこびりついて、日々の仕事は穴だらけ、名一つ出ぬ自分が馬鹿でなくて何であらう？ 皆が興がる事が面白くなく、皆が爲る事が出来ぬ自分が馬鹿でなくて何であらう？ 言ふべき爲べきに黙つて爲ず、とんでもない時にとんでもないことを言ふたりしたりする自分が馬鹿でなくて何であらう？ 熊次は自分が兄の恥辱であり厄介者である事を知つて、兄が氣の毒であつたが、さりと

の京橋から芝を通つて赤坂へ歸つた。翻譯の仕事は興味なく、さりとて創作も出来なかつた。書かうにも第一書くものが無かつた。果ては大雜把おほざつぱに仕事を片づけて、階下の事務室裏の小使部屋の大藥罐をかけた角火鉢に獨勝火して、英文小説などに讀み耽つた。熊次は自己の世界に楯籠つて、周圍にはなるべく三猿主義を執つた。兄が曰ふた、他は知らぬ事まで知つた振ふりをする、熊次は知つた事も知らぬ振する。また熊次に曰ふた、卿みづのやうに苦虫嚙みつぶしたやうにして居ると、他が好かぬぞ。全く熊次は誰にも敬されも好かれもしなかつた。後から入社して直ぐ名物男になつた蒲地友山君かまちゆうざんは時々熊次の文をほめたが、「我輩は皆と一緒に笑ひもせず、怒りもせんやうな人間は嫌ひだ。」と明らかに熊次を當てこすつた。「兄は惻巧だが、弟は何處を風が吹くかと云ふ顔をしとる。」と二間とははなれぬ編輯のテエブルから才人の星野君が颯言すると、笑止な沈黙が編輯局内に滿ち渡つた。熊次は熱くなつて、然も黙つて居た。何年経ても、何としても、思ふやうには成長せぬ熊次に、兄も到頭七を授けた。「子供の時、寝小便をしたり、偉えらくなるかと思ふとつたら」と兄が苦笑した。時には社員の前に弟を庇かばつたが、時々は焦々して、昔なら打ちもかねまじい劍幕になつた。吾妻山が噴火した。折ふし編輯局に人が居

を撲つたりもした。吾儘さかりの姪を、下駄の齒に鐵を被せ十年下駄一つで通す堅忍な母方の伯父の本莊さんは時々ちいといつねり、一錢の貯金もまたぬ父方の叔父の熊次は拳固で撲つた。女に餓えた彼は、西廂記など讀むで鶯鶯を欲しがつた。彼はとくに女を知り、女を買ふすべも知つて居た。然し金も膽もない彼は、女を買ふかはりに自慰をした。而してますます自己侮蔑を募らせた。

要するに東京に來て滿五年、熊次は立派に自他の失望であつた。彼はいつも大きな眼を伏せて、まともに人の顔を見なかつた。兄に見られると、直ぐ眼を背けた。歩くには内鰐で——父が内鰐であつた——背をまるくし、前俛まこみになつて逃げるやうに歩いた。熊次に取柄があるなら、それは彼が兄の病氣を看護する時だけであつた。無理な勉強をする兄は、時々大病をした。其度に熊次は恐れも遠慮もうちやつて、身を入れて介抱した。社の山下君が熊次を兄の健康保管委員と誂名あだなした。兄もそれには感謝をもつて、病後の靜養先から楠の本箱を熊次を買つて來たりした。それは熊次にも喜であつたが、然し彼は看護夫としての外兄に要なき自分を羞ぢぬ譯には往かなかつた。

て奈何する事も出来なかつた。前途の事など熊次はてんで思はなかつた。兄が社長であらん限り自分は生涯編輯局の隅で翻譯係を勤める事と思ふた。月末になれば、會計主任の加世田君が持つて来てくれる鼠紙の封筒を頂戴し、其中から時々は牛肉を喰ひに往つたり丸善で英書を買つたりするし、萬一兄が預言の二十圓に到達したら、其時は大盡になるのだ。彼は月俸を皆使ふてしまふて、着物などは一枚もつくらなかつた。結婚の年の正月、父が見かねて肉色セルの長羽織を一枚作つてくれた。それを着て熊次が出る時、父が横むけた笑止な貌かほを忘るる事は出来ぬ。然し熊次には熊次の意地があつて、社に借金などはしなかつた。吾妻山探險の途中で、眼鏡の鞘さやに入れて落した旅費の二十圓を、十一圓の月俸の中から月賦でわれから返辨して、結婚前には皆済して居た。

熊次は無神経ではなかつた。周圍に同化しきれず、兄や父母を満足させ得ぬ自分に對し、陰に陽に自分をめぐる侮蔑に對し、鋭い刺戟を感じたが、然し所詮自己を更あらため得ぬ彼は唯隱忍の外に道がなかつた。社に出て猫のやうな彼は、然し父母の許では稀に肝癢を起して、茶碗を投げたり、氣障きざうな女中を撲たたつたりした。人形を買つてやつたり眞實可愛がつて居る幼ない姪の實子

第五章 兄夫婦

一

熊次の結婚が兄任せなら、寅一の結婚は全くの父任せであつた。

熊次は子供時代から人並はずれて好奇心強く、祕密を覗く癖があつた。見てはならぬものを見ずに、爲てならぬ事を爲ずに居れなかつた。それは彼が十五の春であつた、ある日兄の留守に兄の卓の拵斗ひきだしをあけて、色々見て居た。薄葉青野の小形の綴本がある。前半は觀世くわんぜ拵で耳を綴ちてある。拵をほごして熊次ははらはら頁を繰つた。右下りの字で、片假名まじりに日記が書かれて居る。兄がまだ同志社に居た十六七の頃の日記であつた。「今日モ〇〇大ニ起ル。」「何ノ日カ此賊ヲ平グルヲ得ンヤ。」なんか書いてある。「△△△氏ト——」書いて其處を墨黒に塗り消してある。△△△さんは兄の次級、熊次には二年上の美青年秀才で、後年詩情饒ゆたかな哲學者とし

熊次は絶對に兄を信じた。昔の不快な記憶は消え、其處にとどまる恨はなかつた。全く熊次は兄を親にした。而して親の世話を子は當然感謝なしに受くる如く、熊次はせらるるまま、言はるるまま、與へらるるまま無意識に唯受けて、謝す事を知らなかつた。

た丸髷に結ふて藝者のやうな容姿をして居た。ある時牧師の細君が兄の操行について熊次に問ふた。熊次は言下に兄の潔白を保證した。「あなたは誑たぶらかされてお出でる」と牧師の細君が曰ふた。而して兄の友人の一人の話を熊次に聞かした。それは熊本でも才子と名のある人で、狹斜きょうしやの遊なども心得て居る男であつた。其男の手引きで、兄も東京滯在中に童貞を破つてしまつたのであつた。それは兄が同志社を飛び出して東京に上り、而して熊本に歸る、半歳ばかりの間の出來事であつた。其頃もう國に歸つて居た十三の熊次は、江の島から送金を求むる兄の手紙を前に、父が胡散臭うさんくささうに「岩本樓」を云々しつつ母と心配の顔を寄するを見たが、其場面の意味が今初めてよめた。

熊次は其爲に少しも兄を輕蔑する氣にはなれなかつた。一旦の破綻があつたとしても、郷里に歸つて以後の兄は一貫した刻苦精進の人である。兄に比すればお話にならぬ程醜怪な幼年少年期をもつ熊次は、兄の一旦の罪を定むる事は出來ぬ。熊次はまた聞かねばよい事を聞いてしまつたと思ふた。

父が六十二、兄が二十一の年に、父は家督を兄に譲つた。其前から父母は兄の妻探しに苦心し

て名を成しつつも志業半途に蚤世^{そうせい}して惜まれた人である。美しいものにはたわいもなく参る十二の熊次も、年上の其秀才には内々惚れて居た。兄の日記を前にして、熊次は呆然とした。はてな——と思ふた。文字の意味はよく讀めたが、其文字の意味とあのむづかしい顔をして居る兄とを一つにする事は中々容易でなかつた。兄は別ものと思ふて居た。熊次は見てならぬものを見て了ふた、と思ふた。勿々に抽斗に返へして、逃ぐるやうに兄の書齋を出た。

二年程経つて、熊次はメソヂスト教會で洗禮を受けた。牧師の田塚さんは、鹿兒嶋でも傳道のかたはら金貨をして、轉任がきまつても貸金がとれぬので一室に籠つて創世記から讀みはじめ、^{ヨブ}約百記に「エホバ與へ、エホバ取り玉ふ、エホバの御名はほむべきかな」に到つてやつと貸金を棒にふるあきらめがつき、其まま鹿兒嶋から熊本に轉任して來た人であつた。講義所に入る熊次は、髯の無い少し薄瘰^{うすあはた}痕の小力士程に膂力^{ちから}のある牧師が、菊池米の俵を臺所に擔ぎ込んだりするのを見かけた。細君のおていさんは後妻の石女^{うますめ}で、東京は築地の女學校にも居たと云ふに、假名つきの聖書がろくに讀めなかつたが、裏の畑に肥柄杓とつて菜を肥やしたり、耶蘇嫌ひの青年等が講義所に石を投ぐると蹴足で追かけたりする元氣者で、平生水色の手柄をかけ

ばつかりさして。」熊次は赤面して、また仕事に身を入れた。おさちさんの長姉が嫁いで居る家の娘が、よく遊びに來た。その家は以前熊次の家の直ぐ近くにあつて、彼女の幼時は夫婦ごつこの遊び仲間であつた。彼女はもう十六になつて、熊次が來てから毎日のやうに遊びに來た。蠶室の二階の縁で、少年少女はよく頭打ちをして遊んだ。熊次はおさちさんの弟の頭を打ち、稀に隣の娘の頭を打つたが、おさちさんの中剃の痕あとの青い小さな銀杏返の頭に一度も手を觸れ得なかつた。秋蠶は直ぐ終り、種紙製造が始まつた。夜は蚊帳をつつて、其中で燭をともし、框内の種紙わくらこに何十と云ふ蛾の卵を生むを亂れ重ならぬやうに世話するのである。暑い夜は團扇で蛾を扇あふいでやる。熊次が居ると、おさちさんはもぢもぢして中々蚊帳に入らなかつた。母者が叱つて呼び入れた。入るには入つたが、おさちさんは過つて燭臺を倒し、蚊帳の内は眞暗になつた。母者が娘を叱る聲を聞き聞き熊次は息を屏ひそめて居た。間もなく眼を悪くして熊次は家に歸つた。おさちさんの面影が起つても居ても彼を離れなかつた。母が勘づいた。而して熊次をそれとなく耶蘇に引張つた。一つ年をとつた熊次が母と其あつまりの一つに行く途中、桑畑に傍そばふ徑こうみちを熊次が先きに立つて歩いて居ると、向ふから歩いて來るおさちさんにばつたり行き

た。故郷の親戚の女、意地者でしつかりした文章なども書く女が候補者としてしばらく家に呼ばれた。不幸にして其女が郷里の小學校教師に妻同然に愛されて居た事を聞き知つて居る熊次と一歳下の船津の甥の嘉一郎が、其女の顔さへ見れば突つき合つて笑つたりした。それかあらぬか、彼女は候補者を出て了ふた。

母の兄の津森伯父が總領媳の妹をほめた。年は十四だが、伶俐で、筆算なども確かにする。

それは肥後の家にも程近い養蠶家で、其父なる人を兄弟の父もよく他の長所を見る感心な男とほめて居た。縁談が申込まれた。返事は否であつた。それは父に案外らしかつた。其頃十六の熊次はあまり魂が入らぬので、學業に望無しとあつて養蠶修業を命ぜられ、秋蠶から處もあらうに去年縁談を斷わつた其増田といふ家にやられた。秋蠶は小規模で、家族の外は熊次ばかりであつた。義姉になりそこねた一つ年下の娘のおさちさんと、熊次は唯二人の場合もあつた。

蒼白い、眼鼻立の整つた、伶俐な人であつた。熊次は肥後先生の御次男と大切にされ、眞面目に働いた。少したつと、然し持前のするけ出し、養蠶は其方のけにして、十二になるおさちさんの弟と將棊ばかりさして居た。たねまゆ種繭を繰りながら、おさちさんが獨語した。「養蠶に來て將棋

と次の間で小聲に母者に氣づけられて居た事を覺えて居る。

四國から兄が歸つて來た。留守の間に呼び迎へてあつた妻に、兄は満足はしなかつた。色白でこそあれ、容姿は十人並、小學校を卒へたばかりで、兄が課する知識試験に、答が「知りまつせん」がちなのに兄はいささか驚いた。但板垣さんは知つて居た。板垣さんは其頃自由の木鐸ぼくたくとして名高いものだつた。それを知つて居るだけでも、と母が兄を宥なだめた。母の母の名が鶴、義姉の名が同じく鶴で、母も好感をもつたらしかつた。然し兄は、女は安靜であらねばならぬ、船津の姉さんの名をもらへ、と云つて直ぐ義姉の名の鶴を安と更めた。船津の姉は、實は父の直ぐの弟熊太叔の忘れ形見で、肥後家の養嫡女となり、船津に嫁して居た。兎に角兄は父母の擇んだ女を妻とする事を諾したので、兄が二十三、義姉が十九の正月から二人は夫婦であつた。式といふ式も披露もなく、唯母が「巢籠る鶴の千代の初聲」といふ歌を咏むで、新夫婦の千代を祝ふた。兄の「毒麥」を素破ぬいた牧師の細君が熊次に曰ふた。「あんな學者の方が、よくあの奥さんで辛抱してお出でる。」牧師の細君は容姿きりやう自慢であつた。

兄夫婦の結婚の三月目に、熊次は伊豫に往つた。伊豫に居る内に、兄に長女が生れ而して直ぐ

會ふた。いつもの銀杏返で、一つ年をとつたおさちゃんは、眞赤になつて熊次に辭儀をした。熊次も辭儀を返へした。やがて背後に彼女に會釋する母の聲を聞いた。熊次は其後再びおさちさんを見なかつた。其家は後で天草の嶋に引込み、而して熊次の兄が追々立身するにつれて、女の家ではあの時に縁談を斷つた事を後悔した、と云ふ話を熊次は風のたよりに聞いた。

父があせり出した。而して到頭社中の後輩本莊さんの女を捉へた。本莊さんは熊本の藩政改革に父の屬官として働いた人で、算數に長け、分かりのよい、無造作な人であつた。漁獵が上手で、よく網ごとにかつた小鳥を持つて來たり、一網にこれだけ入つたと投網ごと川魚を持つて來てくれたりした。懇意な中で、總領の力夫君りきをは現に兄の家塾に通ふて居た。御宅の娘にはとても、と本莊さんが辭退するを、父が達たつてもらう事にした。其夏兄は塾生を連れて土佐に遊びに往つた。熊次は葦北に祖父を見舞ひにやられた。熊次が歸つて來た時は、兄は未だ高知から歸らず、若い女の人が家の中に居た。それは悴せがれの留守に呼び迎へられた媳であつた。一歳年上の義姉を、熊次は兄より先きに識つて居た。ある時重詰物を持つて本莊家に使に往つた。うど闇い茶の間から、白い顔の娘が取り次ぎに出て來た。重詰のおうつりに入る附木が多過ぎる、

政争が烈しくなるにつれて、常に民本の主張に立つ新聞の立場が立場だけに、新聞も社長も御用壯士や何かに狙はるる事が多く、編輯局に萬一を慮つて拳大の石を積み棍棒を用意したりすれば、兄は三日も四日も居所を暗まし家に歸らぬ事があつた。そんな後で家に歸ると、幼稚園の實子が喜び迎ふるに、實子の母は直ぐ臺所の仕度に出て了ふ、と兄が母にこぼした。

兄が雑誌の社説に「非戀愛」を書いた。

「人は二人の主に事ふる能はず。戀愛の情を遂げんと欲せば、功名の志を抛たざる可からず。功名の志を達せんと欲せば、戀愛の情を擲たざる可からず。戀愛を人生より剔き去らんとする如きは、吾人の微力の及ぶ所にあらず。但人既に自由の意思を有するからには、人は克已すべき能力と、克已すべき責任とを有するを信ず。それ唯だ之を信ず、故に天下有望なる青年の克已力に訴へて、其の戀愛の奴隸となり、志氣を消磨するなからん事を痛言する也——ヂスレリイ云はずや、余は決して戀愛の爲に結婚するを好まず、と。此語矯激たるを免れずと雖ども、志望ある者往々此の如き事ある也。」

彼は早く女の魅力を知つた。幼少から母を大切に姉を愛した彼は、社會に出ても婦人に重き

消えた事を父の手紙で知つた。其女が兄の仲好で喧嘩相手の季の姉の名をとつてお元もととつけられた事も、水子が亡せた時若い父が泣いた事も、後で聞いた。熊次が伊豫から京都に往つた年の暮に、父兄は東京に引出た。而して明治も二十歳はたちになつた年の夏休に、熊次が京都から東京に往つた時は、義姉は大きな腹をかかへて、靴をはいて、氷川海舟翁の媳に當る米國婦人に英語の稽古に通ふて居た。若妻は小學校を卒へただけであつたので、それときまると父兄の手でみつちり勉強をつづけさせられて居た。

熊次が失戀、放蕩、悔悟と云ふ段取を経て、再び東京に上つて來た時、兄の雜誌發行の年に生れた姪の實子がもう數へ年の三歳になつて居た。翌年、新聞が發行された年に、嫡子の貞雄が生れ、中一年置いて祖父の少名を嗣いだ次男の熊彦が生れた。家もち子もちの義姉は、勉強どころでなくなつた。「人前に出す事はもう詮めました。」と兄が父母に述べた。「それはいかん、そんな事を言ふち、後で困るばい。」と母が抗議した。然し媳の力の限を母も見て居た。

兄の仕事の手がひろがり、内外の助を要する事多くなるにつれて、兄は次第に身邊に不満を見出した。唯一人の弟が一向兄の力にならぬやうに、妻の心入れも夫には不足した。議會が開け、

紳士だが耶蘇は若い、と兄が言ふ。Blasphemyだと新潟君が嘖ると、兄は「我輩はTruthを求めて居る」と言ふた。宗教上には眞理の探討者、戀愛は敬遠して、家庭には多きを求めず、只管公的に生くる——と云ふ態度を兄は執つた。自己を愛する彼は、自己に屬するすべてを愛し、勿論妻とし與へられた安子を愛した。男兄弟の中の一人女に生れて父に愛され、一切作り飾る事を知らぬ眞率な氣質を其まま肥後家に持ち越した義姉は、最初夫に對しても思ふまゝを云ひ感ずるまゝをふるまう人であつた。然し烈しい夫が彼女を無抵抗の妻にしてゐるに造作はなかつた。妻は夫の忠實な弟子たるべく努めた。ぎごちない弟子ではあつたが、誠意は夫に酌まれた。追々子女が生れ、一家は兎に角無事であつた。趣味の友、仕事の妻を求むる事を斷念すれば、安子は好い家妻であつた。

次男の熊彦が生れ、而して駒子が逗子に現はれた頃から兄の機嫌が目立つて惡くなつて來た。兄が歸つて來る。玄關に出迎ふ者はなくて、安子は赤ン坊に添乳しながらうたた寢をして居る。嘖つて蹴る。「ほんの一寸した間でござりましたから。」と詫ぶる。面白くない顔で兄が書齋へ往つて了ふ。其様な場面が時々起つた。病氣の時は、殊に機嫌が悪かつた。行き届く兄に、他の

を置いた。文學を好み、英文小説なども好んで讀む彼は、若い女に行き遭ふて洋服の襟を正す人であつた。女が一座に居なければ味もしやしやらないと言ふた。然し彼は女の魅力を知る故に戀愛を恐れた。彼は弟に戀愛の犠牲を見た。はたとまつた弟の成長を戀愛の結果と見た。彼は昔宗教の魅力を知つて宗教を脱けた。その如く彼は女の魅力から自己を自由にすべく、なべての青年を自由にすべく努めたのであつた。何よりも自主を破るものを彼は恐れた。ある時、隱宅で母と兄と熊次と話して居た。母が信仰の要を力説し、熊次がそれを賛けた。熊次は祈禱も教會に行く事もやめて居たが、其方にまださめきれぬほとほりをもつて居た。「強い者は鬼に角、弱い者は」と熊次が言ふた。兄が冷笑して、學生の分際で戀愛の何のと馬鹿騒ぎをしたくせに、と逆襲した。兄は後年社員の一の母が亡くなり會堂で葬式があつた時、「私は死生の間に迷ふて居る男であります」と正直に告白した事がある。沼山の叔母がわざわざ新聞社に押かけ寅一の信仰を糺した時、「確氷先生すら私の信仰について一言も云はれなかつたに」と兄は唄つた。後年選舉區が佛教地故に公然佛教を奉じて代議士に當選した新潟君は、其頃熱心な耶蘇教徒で兄の新聞に社説記者をして居た。ある日の暖爐會議は宗教が主題であつた。孔子は

第六章 新夫婦

一

氷川の隱居海舟翁が七十二歳でまだばつちり眼をあいて居た。徳川幕府の後始末で苦勞しぬいた智慧袋の名物翁を訪ふて警句まじりの古談今説に時の移るを忘るる老若の中に、肥後寅一は昵懇ちつこんの一人であつた。父の師沼山先生が海舟翁の友人であつた縁故から、肥後父子共に翁に識られて居た。父を「正直者」と片づけた翁は、子の寅一を異として特に眼をかけた。彼の爲には師であり別段の知己であつた碓氷先生——先生其人も青年時代に海舟門人であつた——が明治二十三年正月に大磯で亡くなり、翌月彼の新聞が發行され——編輯局に掲げらるる「經國之大業」「不朽之盛事」の對額は海舟翁の筆であつた——而して其年内に彼は榎坂から海舟邸内の借家に引移つた。氷川町の一區を占めて、園あり畑あり可なり潤い邸内には、翁の子女の家

不注意は端的に苦痛であつた。疲れた安子にうつかりした手落ちがあつたり、返答が少し胡亂になれば、赫^{かつ}となつて病人の手足が直ぐ飛んだ。看護夫の熊次がいつも宥め役をした。十六七の自分の位置に今居る義姉に、熊次は自然同情があつた。時々は息ぬきを求めて義姉の心もあらぬ方に飛んだ。カステーラを切りつつ「山下さんの來なはれば好い」とうつかり口を迂らした。社員のすべてが奥さんと呼ぶ義姉を、山下さんは「お安さん」と電話でも呼ぶ程心易かつた。時々夫の不機嫌に困じ果てた義姉が、「もう如何しても私にはやりきれまつせん」と泣いて夫の父母に訴へ出た。舅姑がかはるがはる媳を慰めた。兄もよく父母に妻の不足を訴へた。父母は子を宥め、媳を宥めた。母が寅一の前で烈しく媳を叱る事もあつた。傍^{はた}から先^{せん}かけて叱ると、當人が却て氣の毒になるもの、と母は経験からよく先手を打つた。父母は自分達が擇んだ安子が寅一に物足らぬを無理とは思はなかつた。然し無差別に愛する父は、微塵も惡氣の無い而して精一ばい努むる媳をいたはり、多くの吾儘な媳を見馴れた母は、「何の角の云ふても、好い子供をすんすんもつもん」と自ら宥^{なだ}めて媳^{かば}を庇つた。

西向きの六疊、細縁の欄干越しに、中庭を隔てて兄の書齋を向ふに見下ろした。北は壁。南は半間の壁につづいて一間の低い格子窓。東は三尺の入口につづいて、一間の押入がある。押入の前に、北向きに熊次の古テーブルと古椅子が据ゑられ、北の壁際に新婦の簞笥本箱鏡臺が据ゑられ、西向きの障子際に硯、筆立、小學教科書、銀時計など置いた三尺四方の駒子の文卓を据ゑると、其處にはやつと二人の夜のをのべる餘地があつた。朝朝階下の高窓で薄暗い二疊の小さな飾臺もようだいで父母諸共軟飯やわめしの朝食を終へると、駒子は直ぐ仕度して、辨當を持つて、――袴を其頃は穿はかなかつた――「往つて参ります」と挨拶して出て往つた。早出看護の番には、一人先づ朝食して出て往つた。赤坂から蟬鼓町は中々遠い。父母の注意で朝朝宿車呼び、往には必車で往つた。歸りにも車に乗つたりすると、十二圓の月俸は大半車代になつた。熊次が新聞社から歸る頃は、駒子は大抵歸つて居て、藤棚の蔭うつ隠宅の縁で熊次がきまり悪るげに反り身で渡す學生靴を受取つた。熊次の足が早いので、女中の知らせに幾室か隔つ玄關に出迎へても大抵は間に合はなかつた。小學教師も樂らくではなかつた。歸つても、明日の豫習らくをしたり、生徒の作文を直したり、校長に出す教授細目を書いたりすると、駒子は中々忙しかつた。受持は

家や、舊幕以來の家職の甲乙や、縁者の人々が住むで居た。邸の黒門は大きく南面し、肥後の借家は北向きにがたがたの小門が開いて居たが、背合はせの奥は近く、寅一の書齋は數株の棕櫚を隔てて海舟翁の居間に向ふて居た。鍵形の古家に、新に二階建の一棟が繼ぎ足され、父母が榎坂から悴の後を趁ふて引越したのは翌年の春であつた。上京して最初の一年を宇土君の京橋瀧山町佐賀ボーロの借二階に、次の小一年を榎坂の父母の二階に居た熊次は、其後下宿をしたり、隱宅の新二階に居たりした。二階は稀には兄の病室ともなり、父の書齋ともなり、父と熊次と共同の書齋ともなり、また熊次専用の居間ともなつた。此二階で、駒子が初めて運子に來た年の秋に、兄の勧めで熊次はグラツドストーン傳を書いた。ユーゴの「九十三」を英譯から重譯してしまつた處で、生硬の譯しぶりが氣に喰はず引裂いて了ふたのも此二階であつた。カアライル譯ゲエテの牛ルヘルム、マイステルを讀んで、ミニヨンのあはれに三晩眠れなかつたも此二階であつた。ある事から肝癢を起し、丸一日ふて寢をしたも此二階であつた。今年正月末から、熊次はしばらく下宿して居たが、新婚と共に二人分八圓の食料を隱宅に納れて、此二階に新夫婦は住む事になつたのである。

に語つた。熊次は駒子に愛の保證を求めた。妻として那樣な覺悟を持つて居るか？ 駒子は古歌を以て答へた。「山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心わがあらめやも。」

「君を措きてあだし心をわがもたば」

と熊次が誦する古歌の上の句に、

「末の松山波も越えなん」と駒子は下の句をついだ。四年生の初期に教場で耳にとめた歌がものを言ふた。

「私は初淡く、段々濃うなります。」

と駒子は言ふのであつた。

熊次は恐ろしく毛深い質である。人並でない肌膚が少青年期の熊次を何程哀ませたか知れぬ。

それは彼が持つて生れた多くの苦痛の一つであつた。顔は剃つても、手足は如何する事も出来なかつた。駒子も人の顔した夫の體が獸の如く毛深いに驚いて居るらしかつた。ある夜熊次は眼ざめて、わが脛の毛を窃と足で撫でて見る駒子を見出した。

熊次はまたある夜不圖變な氣がした。

尋常四年の女生が約四十名。自然に遠い市中の女生達への教材に、駒子は池上の歸りに花つき若葉楓を幾枝か折つて往つたものだ。教生としてすでに多少の経験はあつても、責任を持つての教員の仕事はやはり重荷で、就職當時は表を作つたり何かに手古摺つて男教員に手傳つてもらつたりした。此頃では少しは馴れて來たが、然し教師の仕事は駒子にうれしい仕事ではなかつた。熊次は尙更、生涯に初めて得た妻の大部分を奪ひ去る學校が憎かつた。

新夫婦の夫婦らしい語らひをするのは、寢物語の短い時間に限られた。「あけぼの」に隔がとれた夫婦は、互に相知るべく夜深くるまで話した。あつさりした打明け話が先づ夫婦の間に交はされた。熊次は二三縁談の話をした。竹の行李の底深く藏しまつてある「春夢の記」について何も語らなかつた。京都を飛び出して放浪の一條も語らなかつた。それは過ぎた事、死んだ人との交渉である。トルストイの小説に一切を結婚前に妻となる人に懺悔した男の事を熊次は讀んで居る。それが著者の實歴であらう事もほぼ推して居る。然しトルストイはトルストイ、肥後熊次は肥後熊次である。彼は過去を過去に委ねて、現在を現在に處するを少しも無理とは思はなかつた。熊次の軽い打明けに對して、駒子も郷里でもう初老の人が彼女を妻に欲しがつた事などを大東

夜一夜と新夫婦の親味は加はつた。日一日と夜明けが早くなる五月の朝を、熊次は起きづらかつた。然し學校に行かねばならぬ駒子は、逸早く起きて“Get up early!”とお茶の水仕込みの覺束ない英語で夫を促した。

熊次は日に日に新妻可愛ゆくなつた。全く彼女は愛らしい若妻であつた。然し熊次は教ゆる事を職業にする人によくあるあの説明口調を好かなかつた。ある日、駒子が手箱の中を整理して居た。熊次が覗くと、駒子は手早くそれをしまつた。而して

「誰にでも祕密がありましよう」

と言ふた。其教師口調が熊次の氣に障つた。「祕密?」——「祕密」の一語が殊に不快な疑を起させた。

熊次は早口であつた。「早口は品格に障る」と駒子が言ふた。大人ぶつた言ひ草が、熊次に氣障で

笑ひながら熊次はある不審をうった。駒子も笑ひながらそれに應へた。熊次はまた問ふた。新婚初夜の處女には、例として或一つの事がある。池上で駒子にそれがあつたか？

駒子は妙な事を問ふ夫の間に、答ふべく何の用意もなかつた。彼女は唯知らぬ、と答ふる外はなかつた。

全く駒子は何事も知らなかつた。二十一といふ齡をして性の知識を全然缺いた彼女は、ある女がある男に對し變な眼をするのを見て、何であんな眼をするのだらう？と唯訝つた程の初心であつた。月の病の中を謹まねば黒子の多い子女を生む、といふ口傳を嫁入り前に母から授かつた外、何の豫備知識もなく結婚生活に入つた駒子に、熊次の言はすべて驚駭であつた。駒子は初めて「處女」の意味を知つた。

大會は其翌日兩國橋畔の中村樓に開かれて、四千六百人も來會し、外に向つては強硬政策、内には責任内閣完成の決議をして、社の友山君が作つた

鞘をたたき破れ、鼓を鳴らせ、

大和魂 振り起せ

と云ふ「くりかへし」つきの歌を口口に歌ふた。熊次も見に往つた。姿は見なかつたが、宇土君が簀笠姿で出席し、怪まれて危く壯士に撲らるるところであつた事を後で聞いた。血の氣の多い宇土君にあるまじい事でもないが、熊次は苛^{いら}苛^{いら}した宇土君の捨鉢氣分をそんな事にも見せらるるやうで、名狀し難い不快と不安を感じた。

花形の駒子が來て、氷川町の家は何と云ふても賑やかになつた。父母の居間での夕食後の團樂^{まじあ}も、駒子が一枚加はつてから殊にはすんだ。縁側傳ひにやつて來る兄のスリツパアの音にも元氣があつた。

ある夜、義姉も子供も居合はせず、父母と兄弟きり居る事があつた。兄は例の如く父側に、熊次は母側に、相對^{むかひ}ふて座つて居た。障子をあけて入つて來た駒子は、するすると兄側の下手^{しもて}

あつた。其くせ彼女自身が、時に眼口の笑に言はせて、呂律の廻らぬ口をきいた。

彼女の明けつ放しも、時には嬉しくなかつた。お茶の水で卒業前に教生をした時分、幼稚園の子供がよくないて可愛かつた。お附の女中達が彼女に打込んで、ある女中は無理に寫真をくれたりした。そんな事を得々と語つて駒子は悦んだ。誰に好かれも持てもせず、小さくなつて淋しく生きて居る熊次に、それは面當のやうに響いた。少しも控へ目にする心得はなくて、平氣にわが耀きを自慢する、それを好い趣味とも熊次には思へなかつた。

妻をもつて、熊次の身邊急に多事になつた。内にも外にも頭を焦焦さすやうな事が續々起つた。池上から歸つた其夕、熊次夫婦は平河町の菊池家に初入に呼ばれた。兄や宇土君も同席で、駒子の母の手料理の鯛飯の馳走になつた。酒が出た。「盃の持ち様も知りませんから」と、熊次は辭退した。

江東中村樓の有志大會は翌日に迫つて居た。兄は其事について座上に宇土君と相談し、宇土君は手紙書くべく硯を求めた。駒子が家の者らしく硯箱を持つて來て、墨を磨つてそれを宇土君にすすめた。此方から見て居る熊次に、それは好い感を與へなかつた。

は黙つて居た。多くの不快を鵜呑にし馴れた彼である。

ふとり盛りの駒子は白くまるまると肥えて居た。歌を誦し終つた兄は、駒子をからかひはじめた。そんなに肥えて居ては、道を歩くに「米俵こめたばらのやうにころころ」しやうと笑つた。「そんな事を」と母が笑に紛まぎらして打止めた。熊次は黙つて居た。而して不快であつた。

二階生活の初に、熊次は駒子に曰ふた。

「兄は親と思ふて居る。さうあなたも思ふて下さい。」

然し兄の駒子に對する素振は、親らしいものと熊次に思はれなかつた。熊次の嫉妬が眼をさまし始めた。

駒子は學校の豫習で色色不審を熊次に問ふた。生得の大東で、精確な知識をもたぬ熊次には答へ得ぬ事が多かつた。ある朝、「品川砲臺の沿革」がよく分からねので、兄に問へと終に熊次は言ふ外はなかつた。駒子は下りて朝食をして居る兄に問ふらしかつた。「そんな事は熊次さんに。」といささか逃身になる兄の聲が聞こえた。然し熊次さんの知らぬ事は、知つて居る人に聴く外はない。必要の知識が諄々じゆんじゆんと授けらるるを二階から聞く熊次は、息苦しい思をした。

に座を占めた。夫に近く妻は座すものにきめて居る熊次は、驚いて駒子を見た。而していやな氣もちになつた。然し何とも云はなかつた。兄は調子づいて色色話した末、自身の詠歌を誦しはじめた。兄の得意は漢詩であつたが、時には三十一文字もひねり、また新聞に篠田竹風を選者として俳句欄を設けてから俳句も慰みにやつた。兄の誦する歌は、熊次にも父母にも初耳でなかつた。それは母の方へ向いて誦されたが、明らかに駒子の耳へであつた。兄が歌を誦すると、駒子は池上以來の手帳を出して、鉛筆で書きとめはじめた。兄はゆるゆると一首を唱へ、駒子が書き終るを待つて次へ移つた。

「色も香も深きうばらの花見れば

折りて贈らん人ぞ戀しき」

歌人に見せたら、「折りて贈らん」では義理がくだらぬと云はれた、と兄が曾て笑つた歌である。然し歌意は明白、歌情も自然——戀人欲しい人の歌だ。それが今駒子の爲に誦さるるも、駒子が忠實に筆記して居るのも、熊次にうれしい事ではなかつた。弟の前で弟の妻に戀歌を誦する兄と、夫を差措いて夫の兄の傍近く座を擇む妻に對し、熊次の胸には不快が渦まいた。然し彼

と熊次は答へた。其實熊次は背廣一着持たなかつた。

駒子が時計を合はせやうとしたら、

「時計は無い。」

と熊次は顔を曇らした。

時計どころか、ナイフも持たなかつた。ランプも無くて唯手燭があつた。眼が悪くなり易いので、しばらく夜の讀書を廢して居たのであつた。

ある時、熊次の留守に、押入の中の簞笥を駒子は開けて見た。黒塗りの總桐でこそあれ虫喰ひのがたがた簞笥の中には、ふるい晒木綿を綱つなの如ごとにつたのや、それが汚れた下帶の果はとは知らなかつた。古シャツ、古足袋、木綿着物少々、セルの長羽織が一枚、絹物としては婚禮の薄うすべらな羽二重の羽織に、萎えくたれた銘仙の縞の羽織が唯一枚あるばかりであつた。銘仙の羽織、それは六年前熊次が熊本に居た時、大江の姉が肝煎つて四圓出してつくつた羽織で、東京に来て五年間、それが一張羅の晴着で、吾妻山の探險にも着て往つて、火山の噴き出した硫黄泥の沼を涉わたつて散散に塗れたのを、宿屋で一夜に丸洗ひしてくれたもの、とは駒子も知らなかつた。

駒子は熊次を學者と信じた。あんな文章を書く人は、拔群の學者であらねばならぬ。嫁して間もなく、彼女は熊次が英字書を引くのを見て駭いた。學者に字書の必要があると云ふ事は、驚天動地の不思議である。駒子の驚は次から次へと出て來た。小學讀本の質問にすら十分には答へ得ぬ熊次であつた。自分が知つて居るくを、熊次は無極大の符號と知らなかつた。 “Ich

mus gehen.” とは何かと問ふて見ても、熊次は獨逸語を知らなかつた。尤も試験官の獨逸語の知識も、右の一句きりであつた。兎に角駒子の期待は裏切られた。彼女は夫を學者、知らぬと云ふ事はない、字書の必要など永久に無い學者と思ふて來た。然るに熊次の知識は思ひの外に貧弱であつた。

熊次の頭の貧弱に驚いた駒子は、熊次のもち物の貧しさにも驚かされた。婚禮の翌朝、池上に行く時、

「洋服でいらつしやいますか？」

と駒子は問ふた。

「否、昨夜の装なまで」

三

内輪の婚禮はあらためて披露などもなかつた。海舟家には、義姉が駒子を連れて、内玄関で挨拶を済した。母が自慢の若媳を連れて、ある日は麻布に樋口叔の亡い跡の家を訪れた。ある日は神田の裏猿樂町に比志島家を訪ふた。正月、自用車で學校まで駒子を送つてくれた比志島の奥さんが、蕎麥の馳走をした。媳の手前、母は羞かしい思をした。然し困苦の中に人となつた比志島さんは、千葉の縣知事となつて東京に出るにも、市川の渡船が知事様の御出と舟を清めて赤い毛氈を敷き、椅子を据ゑなどさまざまに心盡しても、五錢以上の渡賃は決して置かぬ人であつた。

唯二人駒子と居たい熊次は、機會さへあれば二人で外出をした。

最初の日曜が池上。次の日曜は丸木に往つて、駒子の嶋田が束髪になつただけ餘は婚禮ウツの装なり其ままで手札形の寫眞を撮つた。次の日曜は平河町から江東の薔薇見に往つた。次の日曜には本

其羽織を着て、熊次はある日曜に駒子を連れ、江東の長春園に薔薇の盛を見て、向嶋の葉櫻の蔭を百花園に往つた。出しなに平河町に寄つたら、駒子の母が熊次の羽織を見て、「外には無いかい？」と後で窺と駒子に訊いた。

肥後先生の令弟、新聞社員、あんな文章を書く駒子の夫熊次は、びつくりする程の貧書生であつた。

ほてつて、小山さんが二番目にはさんでくれた菓子的一個が、馬糞でも喰はさるるやうに咽につまつた。然し平生小さくなつて侮辱は受け贅あいて居る熊次は、これも自分の不束故ふつと憤を呑む外はなかつた。

ある一日は、父に連れられ、夫妻は麻布の更科さらしなに蕎麥を食ひに往つた。父は昔から早足で、自己本位にさつさと歩くので、父母同伴の外出には、母は往々置いてきぼりを喰つて打腹立、中途から一人歸つて了ふ事があつた。今日も父は尻からげして先に立つた。ふとつた駒子は足が遅かつた。父と妻との間に、熊次は途方にくれた。父と先に往つて了ふもうれしくない。妻とおくれてしまふも氣がひける。先に段々遠くなる父の後姿を見、ふりかへつて顔を赤くして急ぎ来る妻を見、當惑し切つて熊次は何方どちつかずの中間を歩いた。

二人はやはり二人きりが好く、二人きりは散歩が好かつた。少しの間を偷ぬすんでも、二人は夕方の散歩をした。手をつないでよく溜池の柳の蔭を歩いた。洋服の若い紳士が向ふから來ると、駒子はつないだ手をはなした。熊次が東京に上つて來た頃は、見る程の若い女は顔を赧かくしたが、東京に來て五年が程に、年は一年とそぐはぬ周圍に心身慊つかれ、瘠せせぎすの神経質な二十七

郷駒込の小山さんへ挨拶に往つた。小山さんも在宅して、夫妻は座敷に延かれた。途中で買つて來た手土産の巻紙を奥さんが披露した。平野國臣の姪に當るといふ小山の奥さんは、後妻でまだ若かつた。平岡と云ふ裁判官の女で、熊本で結婚の時は緋の袴をつけたのが評判になつた。夫妻の間に生れた女の子は、熊次夫婦の結婚式にも次の間に子守に抱かれて、中座して含めに來る阿母おあさんの乳房を待つたのであつた。話の少ない熊次は、小山さんの黒い學者らしい顔を眺めて、唯黙つて居た。むつつりした小山さんは、駒子が去年の夏の歸省に道寄りして郷里の父母を心配した事など熊次の知らぬ話をして、「お駒さんは漫遊家だから」と、低くはたと笑つた。小山さんの妹が、駒子の異母兄正太兄の妻であつた。其縁で、駒子もお茶の水に居る間は、時折小山さん宅に出入した。茶菓が出た。小山さんが餅菓子の一つをはさむだ。唯見ると、小山さんの手はすうと斜に伸びて駒子に往つた。菓子は先づ駒子へすすめられた。熊次は赧おどくなつた。小山さんの奇怪な仕打の意味を熊次は解しかねた。それは西洋風かも知れなかつた。然し此處は日本である。それは官學の教授が、無名の一記者に對する侮蔑であらねばならぬ。それでなければ、親戚と云ひ、女の駒子を先にする法は無い。熊次はしたたか侮辱を感じた。體が

熊次は駒子の留守に、置き忘れた駒子の豆手帳を偷み見た。卒業以來の時々の覚えが鉛筆で書いてある。「今日も教授案の整理が出来ず、谷恒太郎爲したまはりぬ、ああ。」と書いてあるのは、就職當座の述懐であつた。「式の終りに、父君の命にて茶を入れ、家の人となりぬ。」と五月五日の夜の短かい記入がある。「あけぼの」の眺望のスケッチがある。兄の歌の筆記がある。それから「内にユク」と内證が書いてある。母や兄の居る平河町が彼女にはまだ「内」であつた。熊次が駒子の日記を見れば、駒子も熊次のテーブルの抽斗を開けて色々覗いた。池上の日記の中には、自然が好きらしい、それとも惻巧で調子を合はせるのかしら、など書いてあつた。「幼稚なれども、教ふれば好家妻とならん。」とも書いてあつた。隨感錄の表紙の厚紙には、反吐を吐いて居る男の下手な畫などかいて、「滿腔の壘塊を吐くと云へば豪傑らしく、反吐を吐くと云へばコレラに似たり、世の中は——」など書いてあつたりした。大眼玉の男が拳を握り額に皺寄せ仁王立ちした畫に、「肝癰は直りてあともなければ破れし茶碗の惜しくもあるかな」など書いたのもあつた。面白い人と、駒子は思ふた。「むづかしやだけれども、時々可笑しい事を言ふたりして、面白い男」と熊次の兄が熊次の事を言ふたのを又聞きした事など思ひ出すのであ

男に臺が立つて居た。二十一の駒子は、齡より若く快活に、初花の美があつた。花は唯輝やく事と笑ふ事を知つて居た。ある夕、葵橋を渡りながら駒子は曰ふた。

「面白くない程なら、生きてる甲斐はありません。」

熊次は一も二もなく駒子に同すべく過去にあまり多くの悔恨と、現在にあまり多くの不快をもつて居た。駒子の颯言に對し、熊次は唯黙つて居た。兩人の通つて來た徑路の相違を、熊次はしみじみ感じない譯には往かなかつた。

日一日と然し熊次は駒子に牽かれた。駒子が歸つて居て迎ふる時は、熊次は満足した。駒子の歸りがおけると、熊次は不安に驅られた。今日は歸りに丸の内で下駄が切れて困つて居ると、洋服の方がハンカチを裂いて下さいました、親切な方、など駒子が言ふと、熊次は顔を曇らした。若い美しい女に、男は誰も親切だ、と云ひたいところを、成る可く車に乗つてお歸り、と云ふが落ちであつた。二度ばかり駒子の歸りが夜に入つた。「平河町だらう。」と義姉が言ふた。果して寄つて來たのであつた。あくる朝、駒子は紙に書いたものを熊次に渡して出て往つた。黙つて平河町に寄つて濟みません、と詫言が書いてあつた。

『鶯や鳴かずば籠の苦を受けじ』てち言ひまして、^{なま}喃、熊次さん。」

と母者がぢろり熊次の顔を見るのも、うれしくなかつた。駒子を出したくないは事實だ。駒子は鶯であらう。然し何處の世の中に、母親が婿に向つて娘自慢をするものがある乎？ 不束な女と謙るが當然だ。あなたには過ぎもの、と云はぬばかりの母者が失敬を、熊次は心に嘔^いつた。「お兄さんはさばけたお方だから」と母者が云ふのも、いよいよ癪に障つた。駒子の結婚以來何時となく其巢に入り込んで居る外山の秀子が居合はして、「時々はお出でるが阿母^{おつか}さんに孝行ですよ。」と駒子に云ふのも、腹が立つた。熊次は心でいよいよ平河町と縁切つて、斷じてもう駒子をやるまいと心に誓つた。

駒子を専有したい熊次に、邪魔は多かつた。熊次には友がなかつたが、駒子には多かつた。東京に奉職して居る同級の一人西村鶴子が駒子に電話をかけた。其夕熊次が社より歸ると、何時も出迎ふ駒子が出ない。駒子には來客があつた。電話をかけた其人であつた。熊次が歸つたと知つて顔を出した駒子を見れば、洗髪のままを散らして、そはそはして居る。熊次は機嫌を悪くした。同級の年少で眞先に結婚した駒子の新妻ふりを見に來た鶴子さんは、駒子の夫の顔を

つた。

熊次の母は八人同胞で、男一人女七人のしたたか者揃ひであつた。熊本時代は母の縁者の往來繁く、母の兄の津森伯父などは息子三人、馬の一頭も引連れて無遠慮に長逗留して、辛抱強い父すらも怒り出した。外戚の跋扈に懲々した兄は、外戚は疎遠に限る主義を最初から執つた。

熊次も此點は全くの同意であつた。熊次は駒子が平河町へ行く事を喜ばなかつた。然し新妻を喜ばす爲に、稀たまには共に平河町を訪ねた。ある夜は故意と座をはづして麴町を一時間もぶらぶらし、駒子に水入らずで母兄と語る時間を與へた。其心入れを母者ははぢやも喜んだ。然し平河町行きは何かしら不快を熊次に與へずには置かなかつた。ある日の訪問に、昨夜駒子の兄が友人の大矢野と徹夜して花牌をひいた、と母者が駒子に語るを熊次は苦々しく聞いた。眼鏡をかけて、口髭を生やして、ねばねばした口をきく大矢野を、社員の中でも熊次は好かなかつた。駒子の兄とは熊本の中學校以來の友で、従つて駒子をも早くから識つて居るのも、熊次にはうれしくなかつた。其大矢野の事などを何で母者が噂さするのだらう？　まだそれ所ではなかつた。駒子が平河町に足を遠くして居る事について、母者は熊次にいやみを言ふた。

店があつて、其處には西洋人向きの英文日本昔譚^{むかしばなし}、四十七浪士譚、英文小説——熊次は其店で

長いこと狙つてトルストイの英譯「戦争と平和」の三冊物を買つた——も賣れば、カリフォルニ

アの葡萄酒も賣つた。母が滋養に用ゆるところから買ひ馴れた一瓶三十錢のジンファンデルを

熊次は買つて歸つて、夫妻夜深に窃と出て櫻の葉越しにきらめく月をたよりに井の水を汲み、

二階に歸つて格子窓の月影に、駒子が昔の弟子達のみやげの栗饅頭を肴にして、砂糖澤山水澤

山の葡萄酒を一つコップから交互^{かはるがはる}飲む時、生^よはやはり楽しかつた。苺^{へた}の薔^{へた}をとり揃へたりする

時清潔好きで念者の駒子は長い事かかつて氣短な熊次を苛^{いら}々させたが、枇杷の時節に駒子が夫

と先を爭ふやうにして枇杷に手を出すと、熊次は且驚き、且は自分と同じ果物好きを妻にもつ

事を喜んだ。駒子は姪の實子がもらうお八^{やち}つの菓子を羨ましく思ふ程子供であつた。平河町に

居た頃は、駒子が學校がひけて來る頃をはかつて、母者がちやんとお八つの待設けをして居た

ものであつた。「此兒^{これ}はお魚^{さかな}が好きで」と母者が熊次に注意した。生れた山の町で小學校に通ふ

た頃、魚の煮ごりをお辨當にいれてもらつたら、あたたかい飯にすつかりとけて居た昔もあ

つた。然し魚より肉好きの熊次は、母者の注意を聞き流してしまつた。

見る事なしに歸された。一人の友もたぬ自分の妻に友があるのを熊次は嫌つた。

駒子がお茶水教生時代受持つた高等女學校の生徒が二人、手土産持つて以前の菊池先生を訪ねに來た。妻となつた先生は、一杯のお茶と莞爾々々の外にもてなすものもなかつた。二人のお客も、駒子の顔を見て唯莞爾々々して居るだけであつた。熊次はそんな來客が駒子にある事すらも嫌つた。駒子は早々に二人を歸へすべく促された。

引手數多の駒子を妻にして、熊次は一刻も安い心はなかつた。二階の六疊に二人で籠る時、二人で外に居る時、熊次はやつと少し落ちついた。日曜日に、格子窓にもたれ、ソヨ吹く南風にうとうとしながら、熊次は駒子に髻を剃つてもらつた。駒子の母は、十歳にもならぬ頃、母さんごつこをすると云ふて、友達の前をあとと云ふ間に奇麗に剃り落した程手が利いて居た。駒子も母に肖て手が利いた。剃刀を初めて持つ彼女は、男の髻を剃る事も勿論初めてであつた。

それでも、我流ながらに、一つの剃り込みもなく、奇麗に熊次の髻を剃つた。一つの椅子に二人腰かけて熊次の日記を見る日もあつた。「御氣削の時」お茶でもいれて、と謂ふて伊倉の伯母が祝ふてくれた茶道具で、大人しく茶を入れる夕もあつた。日吉町の角に米國直輸入品を賣る

四

岩城の叔父は、熊次の結婚間もなく歸國した。歸途には熊本に寄り、父に代つて駒子の父に挨拶をすると云ふ話になつて居た。一月前伊倉伯母を送つた新橋停車場に、熊次は叔父を送つた。伯母も叔父も赤切符であつた。叔父は汽車に乗り、熊次は步廊フオムに立つて居ると、おくれて來た父が網手提あみてさげから大きな夏蜜柑を一つ取り出して、汽車の窓越しに叔父に贈つた。叔父が悦んで、押しただいて納め、懷から紙に書いたものを出して父に手渡した。父の眼も叔父の眼も潤うるんで居た。父は七十三、叔父は六十一、西と東に遠く別れては、これが最後かも知れぬ。叔父が父に手渡した紙片には、歌が書いてあつた。不如歸ふじよきと心無こころなの杜鵑ほととぎすは鳴く、私は歸りたくないのに歸らねばなりません、と述懐してあつた。老齡おいの別離は、父に打撃であつた。熊次が結婚の安心疲れも伴ふて、叔父が歸つた後、父はしばらく病床の人であつた。

若葉の五月が段々ふ老けて、夜短に晝眠い頃になつた。父が起き出る頃、熊次は眼が悪くなつた。

二人居を好む二人は、日曜でも二階に話し込んで、中々下りなかつた。母の機嫌がよくなかつた。

「熊次さんな、家に居る時でも、腹案ば立てたり仕事があるけん、邪魔せんごつせにやならん。日曜どま、お駒どんも、下りて手傳ひばせにやならぬ。」

と父が獅子鼻をハンカチで邪慳に摩りながら、眞顔で言ふた。

それで日曜はなるべく用事を作つて、二人で外出する事にした。若妻と出て行く熊次の後姿を目送つて、

「女房持つと位がつく。」

と兄が曰ふた。

事をそれぞれ駒子に説き聞かせて、寫眞の裏書を駒子にさせた。駒子は學校仕入れの和文調で「何々の君にたてまつる」と書かねば承知しなかつた。全く彼女は裏も表もない生一本の初心であつた。氣に食はぬ大矢野君の言だが、駒子の事を「天真爛漫」とある人に語るを傍聴したそれと思ひ合はされた。確に天真爛漫である。然し其天真爛漫は、遠慮會釋もなく時々熊次を悩ました。其腹癒に、熊次はさまざま駒子をおもちやにした。駒子は平民的な家庭に育つて、形式の頓着はなかつた。ある時の外出に、遠くから夫に聲をかけねばならぬ事があつて、何と叫ぼうかと思案の末、到頭

「熊次さアん」

と呼んだ。熊次の機嫌が斜であつた。以後は名を云はず、「あなた」と云ふのです、と云ふた。玄關の出迎がやかましかつた。駒子が出おけると、熊次の機嫌が悪かつた。駒子はほぼ其時刻に玄關に出て待つやうになつた。時には義姉が「お歸りですよ」と、大きな聲で駒子に知らせる事もあつた。

ある夕、玄關に出迎へた駒子は、がらり門を入つて直ぐ西へ廻はる熊次を見た。西は杉籬で、

眼科醫院に行くと、若い醫員が診てくすくすと笑つた。眼が悪くなると、氣分もいよいよ焦々して來た。卒業前からさんざ氣を使つた新婦は、追々神經衰弱になり、車の上にふらふらして、教授案を取落したりした。休養の隙ない二人は、疲勞を唯募らした。疲るる程熊次は性急に、駒子は遅くなつた。二人きりの生活でない事が、色々に熊次を焦立たせた。

母が熊次を諭した。萬葉の歌にもある。「吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山蔭にして」性急ではいけぬ。もつと寛大にして。母は斯く熊次を誡めた。それでも熊次の焦々は中々やまなかつた。母が肝癰を起し、

「自分の事は棚に上げて、他には第一等を求める。」

と熊次を罵つた。

母の言葉の正しさを感じる程、熊次は尙悶れて腹を立てた。

主觀的な熊次にも、駒子の初心を知るに造作はなかつた。官立學校卒業の鐔々、惻發なしまつた女、交際家、と出來上つた女のやうに聞かされ思はされて居た駒子は、案外なまだ無邪氣な子供だつた。丸木の寫眞が出來て來て、親類縁者に配つた。熊次は自分の姉達、伯母叔母達の

ある夜、熊次は不圖氣まぐれに家をあけて、一人芝濱の海水浴に泊つた。家では駒子が大騒ぎした。大騒ぎさせやうとての無斷外泊であつた。然し熊次はやはり電話を駒子にかけて、所在を知らさずには居れなかつた。そんな事だらうと思ふた、と兄が笑つた。

今年の春の下宿中、夜のつれづれに熊次はよく寄席^{よせ}に往つた。多く義太夫の席に往つた。男のにも、女のにも往つた。ある夜佐久間町の寄席に往つた。時刻が早過ぎ、いの一^いの一番の札を握つた彼は、廣い二階に唯一人の客であつた。高座には、肩衣つけた小娘が、三味線抱へて最中^{さいちゆう}何か語つて居た。見目うつくしい十四五の小娘。語り終ると、ほつと息をついて、湯呑の湯を呑んで退つた。次々に色々の女が出て色々語つたが、簾^{みすち}内の口上は彼小娘の聲であつた。熊次は幾夜を其寄席に通ふた。其一座には花形の娘も、相撲取りの體格をして茶利のうまい女も、また曲引の三弦の妙を見せる老女も居たが、熊次は數に入らぬ其小娘に牽かれた。遠からず結婚する吾を忘るるとはなしに、可愛い幻^{まぼろし}を趁^おふて、一座のうつるままに此區から彼區に往つた。ある席で、熊次は昔熊本で自分初歩の英語を教へ今は早稻田に在學する青年に會ふた。彼は袂から一座の花形の名を染めぬいた手拭を窃と取り出して見せた。中入りに馴染らしく彼が樂屋

行どまりになつて居る。今立戻るかと待つて居た駒子は、待てども待てども熊次が出て來ないので、隠宅の方へ行くと、熊次は何時の間に隠宅の縁に居た。

「何方からいらつして？」

「いつもの通りさ、井戸の方から。」

駒子は呆氣にとられた。それでは確に西へ廻はる姿を見た熊次は、何の熊次だらう？

駒子の言は、熊次に變に受取れた。西へ行く影を駒子は見た。自分は東へ廻はつた。門内の黄昏、丁度一年前の同じ黄昏に、自分はあの門内で京都の榮さんの死のしらせを受取つた。一年後に、駒子は影の熊次を見た。何の意味であらう？

「人間が二人に見ゆれば、其人は死ぬ、と云ふ事だ。俺が死ぬのかも知れぬ。」

眞面目ともなく、からかうともなく、熊次は斯く云ふた。

駒子が潜々と泣き出した。

熊次は由ない事を言ふてのけた自分を悔いた。然し駒子の涙はしみじみ彼を慰めた。駒子はどう彼女の夫を愛して居る。

ら英學なども修めて、耶蘇の信仰を持ちつづけた、小さい體格に大きな眼、潔癖で氣の勝つた此姉を、熊次は子供の時から恐れもし愛しもした。姉は三人の姉の後に生れて、また女か、と失望の中に迎へられたが、母が始終庇つて母の愛の蔭に姉は人となつた。三つ違ひの弟の寅一は競争者で、「と、とさんのほんほんうつてはつてかう。」と赤ン坊の腹をたいて逃げたものだが、八つ下の弟の熊次は母の腹に居る内から愛して、赤ン坊の頭がむき出しになつて居ると、「熊さんの頭ばむき出しにしといてよかどうか？」と氣にしたものであつた。熊次が十一の夏兄に連れられ京都に上ると、姉も東京から來て居て、熊次に行水をさせたり一反の浴衣地で二枚の着物を仕立ててくれたりした。十三の夏熊本に歸ると、姉は先に下つて居て、英文の衛生生理書を熊次に講讀してくれたり、熊次が「夫婦養生論」を窃と見て居ると、「子供の見るものではない」と叱つたりしたものだ。姉は猫好きで、ダン、チョン、オカ、ビイと四疋の猫を飼つて居た。熊次が甥の嘉一郎と猫を非道い目に遭はすと、姉が怒つて二人を浴室いすづに禁錮した。チョンが熊次の作文帳に尿をした。熊次が悶もれ切つて居ると、姉はニウトンの飼犬ダイヤモンドが蠟燭を倒してニウトン苦心の Principia の原稿を臺無しにした時ニウトンが怒らなかつた話をし

に入つて行くも、羨ましい氣がした。ある夜、千兩轎のある箇所、彼小娘が手拭かぶつて、縞の羽織に股引、呼び出し奴姿で客席から稻川に土俵入りの催促をした。それは喝采であつたが、熊次は反感をもつて歸つた。狐が彼から落ちかけた。それでも彼はなほ思ひ切れなかつた。二三日たつとまた出かけた。いつも實の入舟と共に入つて来る彼が、注意を牽かずに置かなかつた。ある夜棧敷の後の方で、樂屋者らしい女が二三人、熊次を指目して彼小娘の藝名を囁く聲を聞いた。熊次ははつとした。それから足を遠くした。

芝濱館に泊つて後幾程もなく、ある夕熊次は不圖彼小娘の出る客席に往つて見たくなつた。彼は一人で往つた。小娘は相變らぬ銀杏返の可愛い町娘であつたが、わざわざ赤坂から日本橋まで見に来るのも、われながら氣が知れなかつた。彼は急いで歸つた。何處へ往つたとも語らなかつた。唯婚禮の席できたない足袋の裏を見せて臀向けに座わつて熊次を恚^{いら}れた隠宅女中のおちかのみは、「寄席に往つて來たのだよ」と朋輩のおかんに囁やいた。眼のぎよろりした大柄のおちかは、若旦那も若奥様も物の數にはしなかつた。

京都から深水のお元^{もと}姉が、當歳のおとめを連れて所用で出て來た。姉達の中では唯一人早くか

第七章 梔子の花の家

一

熊次夫婦の二階住居が二ヶ月近くなつた頃、海舟家の家従で差配の江戸さんが、邸内の借家が一軒明いた事を兄の許^{もと}まで知らせに來た。熊次夫婦は直ぐ見に往つた。隠宅から東へ邸内の小路を小一丁往つて、邸の裏門際に其家はあつた。八疊、五疊半、三疊、二疊、臺所。縁がちの小さな庭には、柳葉梔子^{やなぎはくちなし}の一叢^{むら}が五六輪の白い花をつけて、甘い香が人待ち貌に漂ふて居る。家賃は四圓五十錢。夫婦は飛び立つ思をした。父母も見に來て氣に入つてしまひ、新夫婦を隠宅に置いて自身其方へ移らうと言ひ出した。「子のは親のものですけん。」と兄がにやにや晒^{わら}ふて居た。大概の事は眼を瞑^{つむ}つて黙つて済ます熊次も、憤然^{けしき}氣色ばむで不服を申立て、到頭老夫婦は隠宅に、新夫婦別居と云ふ事になつた。掃除が済むと、夫婦は早速引移つた。夏は避

て熊次を諭した。二十歳の熊次の京都での戀一條が東京でばれた時、父母は處置を此姉と兄とに任せた。「京都の女なぞ好くないさ」と姉が熊次を諭した。それから七年、姉は弟の結婚を悦んで、何か奇麗なものでも買つて來る筈だつたが、と祝に二圓くれた。鼻に汗かく赤ン坊を、さつさと新夫婦の二階に晝寢をさせた。立ちながら駒子にもの言ふ女中の失禮を叱つた。駒子が熊次に告げた。「今日姉様が女中をお叱りなさいました。『若奥さんでも奥さんは奥さん、主人は主人。』」

駒子は京都の義姉からドウナツツやカスタアブツデングなどの拵へ方を習つた。鉛筆持つて話を聞き聞き熱心に筆記する義妹に、姉は感心して了ふた。好い妻をもつた事を、姉は弟の爲に喜んだ。姉は熊次の苛々いらいらと駒子のどぎまぎを見た。深水の後妻になつて十年の經驗を積んだ姉は、やがて京都に歸る前に、義妹への置土産に熊次の對策を授けた。

「お駒さん、うつちやつて置きなさい。機嫌をとると、切きりがない。一々氣にしないで、相手にならぬやうにしてお出。」

駒子は義姉の言を傾聽した。然し氣にしないではやはり居れなかつた。

は東向きの五疊半の格子窓の下に卓を据ゑ、鏡臺を置いた。五疊半の東側は格子窓になつて居て、其處からは緩勾配の大路おほじが見下ろされた。大路を隔てた向ふ隣、多行の松の築地、黒堀黒門の大邸は九條邸。其處には輝ひかかしい未來を知らず貌がはに十一歳の姫が住むで、日毎華族女學校に通ふて居た。九條邸から少し下つて北隣は、此春銀婚式をお祝ひになつた皇后陛下の御生家一條邸。一條家と九條家、二代の皇后の御生家が臨む此處の大路を、「皇后阪」とは恰好の名であらねばならぬ。

初めて二人きりの我家に住むで、夫婦は新婚の楽しさを新にした。三食には隠宅に通ひ、一週には六日新聞社と小學校に日々通ふ忙しさはあつても、我家の落ちつきは又別であつた。時には朝を寢過して、女中に来て呼びさまされ、きまりわるい思をして隠宅に行く朝もあつた。夕食から歸つて後の夜は殊に靜に、二人は昨今逢つたやうに色々の話をした。

新婚の夕、障子を開けて座敷に入つて來る新郎の姿を一目見た時、「此人」と駒子は感じた。初めて會つた感はしなかつた。丸の内で無論一度會つたが、駒子の感はもつと遠い昔に通ふらしかつた。

暑の留守を夫婦で承^{うけたま}はる事になつて居たので、本當の別居は九月からとして、二階の道具は其まま、三食もこれまで通り隱宅に通ふ事にして、卓、座蒲團、ランプ、火鉢、鏡臺、茶道具、寢具、それだけを新居に運んだ。

二人で兎に角家を持つた新夫婦は、あらためて天下晴ての夫婦であつた。小さな家に行水する程の風呂場はなく、井は大分はなれて加^{しかも}之木造ポンプの夥^{おびただ}しく重く汲みにくいのであつたが、隱宅の二階六疊一室の後には、すべてが勿體ない程であつた。氷川の丘の北になだれた裾近く、東に開いた黒塗りの海舟邸の裏門、それにくつつけて築き立てた石垣の上に出格子の家はのつかつて、門を入ると直ぐ左手に三段ばかり石階を上つて格子戸になり、半間の土間が二疊の玄関につづき、水口へは門内の鋪石道^{いしだんみち}をすうと上つて西へ廻はるやうになつて居た。東は煉瓦の塀、西は建仁寺籬に仕切られた小庭の向ふ半分は、李や梧桐、檜^ひ葉^はなどこんもりした斜面になり、其向ふは建仁寺籬を隔てゝ中田さんと呼はるる海舟翁^{むすめ}の女の一人が住むで居た。座敷の沓^{くつ}脱^{めだ}から飛石が六七枚つづいて、枝折戸から出入が出来た。鋪石道の向ふの小さな家には、老實な門番夫婦が住んで居た。熊次は金剛纂^{やつで}の蔭さす南向きの八疊の床の間近く卓を据ゑた。駒子

るるべくあまり多くのもやもやがあつた。熊次はまた駒子の話が夫を悦ばす爲自然に作られたロオマンスではないかと疑つた。兎に角彼は幻の話については何も云はなかつた。直ぐ忘れられた。駒子は本意なく思ふた。然し夫が何と云はうとも、彼幻は確に熊次であつた事を駒子は疑ふ事が出来なかつた。顔は見ずとも、後頭部から肩のあたり、決して熊次の他の人ではなかつた。

ある日、駒子は一の相談を熊次にかけた。駒子にはお茶の水時代姉と云つたやうな親友があつた。出雲の儒者の女で、四年間何角と駒子の世話を焼いた平田吟子がそれである。新婚の駒子に手紙を奉職先の仙臺から寄せて、學校の方も忙しからうが、「御良人様に對し、嬌色婉容を忘れたまうな」と注意したのを熊次も見て、成程漢學者の娘らしいと思ひもし、感謝もした。駒子は卒業前記念に何か同じ物の一對を此親友と兩人で有ちたいと思ふた。兄の菊池が中學の同窓で、江田島の海軍兵學校を卒業し、遠洋航海に出かけるといふ西村候補生に兄の下宿で會つたので、これ幸ひと駒子は頼むだ。西村は桑港から化粧匣の一對を買つて來た。駒子は其一を吟子に贈り、一つを自ら藏めた。偕何程代金を拂はうとしても、西村が金を取らない。「如何し

新居やがて駒子は礎いしと思ひ當つた。深く深く沈むで居たものが、ほつかりと浮き上つて、はつきりして來た。形と影が一つになつた。駒子は昔見た幻まぼろしを思ひ出したのであつた。

「私、あなたにお會ひした事がありますよ。」

ある夜、駒子は卒然と熊次の顔を見た。

「俺わもある、丸の内丸の内で、此正月。」

「否いいえ、丸の内丸の内じゃありません。もつと早く、子供の時。」

「子供の時？」

「ええ、子供の時。」

「何時？ 何處で？」

「熊本で。」

而して駒子は十四の春、碧桃の花の蔭に見た後姿の幻の話をした。

「然さうかね？」

熊次は氣のない返辭をした。而して深くも問はなかつた。彼の頭には駒子の話を素直に受け納

の卓の上に置いた特種^{とくたね}を、菊池が来て見て報知に書いてしまったので、山下さんは怒つて復讐に新聞社から電話で好い種があると菊池を呼び置き、反故^{はご}同然の通信種^{じやうしゅ}を狀挿に残してさつさと出て行くのを、熊次は自席から見て、今にぬくぬく壺にはまりに來るもう義兄となる日も遠からぬ菊池に知らせでは濟まぬ心地に氣を揉んだ事もあつた。宇土君が兄の腹心なら、年配閑歴社長の兄とは友人關係に居る山下君と栃原君は股肱であつた。自分は眞、山下行^{ぎやう}に、栃原草と後で兄が曰ふて居た程、山下さんはきりつとして然も碎けても居た。桐野利秋式の爽^{さく}い山下さんは、女に持てた。山下さん最負の義姉などは、山下さんの肩を持ち過ぎて、「さう辯護^{べんご}せんとちやよかたい」と彼女の夫にじわり抑へられたものだ。熊次も山下さんは好きだつた。「満」と書いた手紙を前にして、熊次は暫く考へ込んだ。

大矢野君の手紙は、駒子の兄が急病で順天堂病院に入院した其病狀を、直ぐ隣の女高師に居る駒子に報じたものであつた。大矢野君は駒子の兄とは親しい仲で、大矢野君が菊池菊池と駒子の兄に近づけば、「尻の重い奴^{やつ}で」と言ひながら菊池も彼を別懇にした。兄妹の母が上京すると、大矢野君は遠慮なく仕立物なども持込む、と云ふ噂を熊次も耳にして居た。大矢野君の手紙は

ましやう？」と謂ふのであつた。熊次は眉を蹙めた。化粧匣を出させて見ると、細長い海老茶天鵝絨の匣は緋の裏がついて、鏡や櫛、一通りのものが入つて居る。熊次は西村の事を根ほり葉ほり訊いた。兄の友人と云ふ外、駒子は何も知らなかつた。但其人の手紙があると云ふ。出さして見た。それは海軍少尉の淡泊ななぐり書きで、「炬燵にあたりながら手紙を書く」と、こんな亂雑なものに相成候」と書いて居た。熊次は顔を曇らして、頼み事は氣をつけねばならぬ、其人には機會があつたら品物の返禮でもしやう、と云ふ外はなかつた。

西村の手紙から、熊次は駒子に持つて居る程の男の手紙を見せよと促した。駒子は無造作に二三通出して來た。一通は社の山下君の手紙であつた。此次は國十郎の勸進帳があるからと觀劇の誘を、熊次も見馴れた大束な筆跡で書いて、「満」と名を書いてある。勸進帳を見たか、と熊次は駒子に問ふた。勸進帳は見なかつたが、其前清人兄と歌舞伎座を見に往つた時、山下さんも同道した。芝居半に茶屋に出火があつて大騒ぎになつた。山下さんが草履を搜して下すつたので、足も汚さず立退いた。駒子は斯く答ふるのであつた。同郷の好から、駒子の兄は山下さんと懇意であつた。山下さんは此方の社員で、駒子の兄は報知の記者である。山下さんが下宿

て分けた、でつぷりした一番年長の人であつた。寫眞の裏に「呈愛兄」と書いてあるのを、駒子
は不思議なものに見て居た。官立學校に學んだ駒子は、ミツシヨンスクウルで常套な「愛兄」の
語を知らなかつた。寫眞の三女生が居た女學校は、即ち伊倉の伯母が舍監をして居る女學校で、
駒子自身も高等小學を卒へて上京するまでの間に暫く英語を習ひに通つた事もあつて、——そ
れは熊次が上京して間もなくの事である。——三木と云ふ年長の女生の顔は駒子も覺えて居た。
二十歳以後の熊次は、想ふ女なしには一刻も生きて行けぬ人であつた。京都を飛び出し、捨て
鉢の放浪の後、熊本に足をとどむる一年有半の間も、相手を物色するを彼は忘れなかつた。二
十歳を越したばかりの熊次の眼の前には、色々の若い娘が居た。わが受持ちの女學校の組にす
ら、束髪の中に唯一人銀杏返に結つて通學にも絹物で来る上品な官吏の娘も居た。體格は小さ
いが學課のよく出来る娘も居た。お俠好きの熊次には持つて來いの眼の窪いお俠も居た。熊次
が素人下宿の十三娘も、二十日鼠の如く可愛い小娘であつた。然し熊次の撰擇は、それ等を外
にして、一番年長の落ちついた日向の女生に落ちた。色の淺黒い、すんぐりした、而して濃情
な細い眼をした三木のお松さんには、熊次もただならぬ縁がありげに思はれた。二十一の夏、

尋常な手紙であつたが、何事もない文句の上に、熊次は色々のものを讀むだ。

駒子を持つて居る男の手紙は、もう其外になかつた。然し熊本にまだ駒子が居る時分、女學雜誌を毎號東京から送つてよこした男の事や——其雜誌を駒子は讀まなかつた——、歸省の途中たまたま口きいた男が面會を求めて來たので、學校の應接間で兄立會の上面會した事など、思ひ出し思ひ出し駒子は語るのであつた。

熊次はうんざりした。過去はうるさい。面倒だ。

駒子を持つ男の手紙を見た熊次は、わがもつ女の手紙を駒子が見たがるを無理とは思はなかつた。人好きの駒子に引易へ、自己に閉ぢ籠つて孤獨を友とする熊次に友と云ふ友はなく、況して女の友はなかつた。然し熊本でしばらく教へた女學生の手紙が少しあつた。一つは義理の姪の手紙、一つは姪と仲好しの手紙で、彼女はとくに上京して居た。今一つは日向に歸省中の女生の手紙で、駒子は「歸省在宅中にお寫眞をいただきたく」と書いた文句を見た。熊次は寫眞を送らなかつた。然し此三人の一同に撮つた寫眞が手紙と共にあつた。駒子は田舎田舎した三人の女學生を見た。一人は芍藥の花を持つて居た。「寫眞を下さい」の手紙の主は、前髪を剪つ

に向ふた。癖の早つ走りで、生涯の苦樂を共にするは此女だらう、と熊次は思ふた。あの人は屹度貞節を全くする、といふ男教師間の評判も、熊次の撰擇を裏書きした。二十二の五月、勘當ゆりて上京する時、熊次は打明けるつもりで彼女を下宿に呼んだ。彼女は來て、伏目がちにはなれの縁にかけた。お上りと未だ熊次が言はぬ内に、突如として男の來客が緣先に現はれた。男はすんすん上つて來、女生は何も聞かざる事なしに去らねばならなかつた。熊次は明くる朝熊本を立つた。其前、上京の事がきまると、受持ちの英文典の組の女生達が告別の遊びに來た。日向の女生は、黒い眼で熊次をぢいと見て、ゆるゆるした口調で曰ふた。

「東京にお出になりましたら、此方らの事はすつかり忘れておしまひでせう。」

熊次は笑つた。

「ええ、然でしやう、忘れるでしやう、覺えてなんか居るものですか。」

戲言は實であつた。熊次が東京に上ると、熊本は遠くなつた。日向の女生が求むる寫眞も、彼は送らなかつた。而して六年の後、新婚の妻に熊次はお松さんの手紙を見せて居るのであつた。熊次は何も彼女について語らなかつた。それは過ぎ去つた事である——篋底深くしまつてある

熊次が海水浴から熊本に中歸りをする、世話になつてた柳川さん夫妻は避暑に往つて、鎮雄坊と保姆のおひろさんが留守して居た。熊次の居間の物置がはりの二階には、色の淺黒い娘が居た。女ばかりの家に熊次も長居を遠慮したが、居た二三日の間に熊次は其女生と會堂歸りに連れ立つたり、鎮雄坊が眠りおひろさんが買物に出た間を、ランプのついたテエブルを中に、女生は書を読み、熊次は黙つて唯二人居る場面もあつた。熊次が残の夏を伊倉の家に過す内、ある日曜の會堂歸りに、從弟の地平さんの妹が熊次宛の日向の女生の手紙を持つて來た。學校の事につき伺ひたい事があつて何日に參上するとあつた。伊倉の伯母や一同の手前、熊次は迷惑の眉を顰めた。女生が來ると云ふ日に、熊次は地平さんを誘ふて遊びに出て了ふた。然し自分の卓上には、「錄古歌」として、「山の端に契りて出でん夜半の月めぐり逢ふべき時を知らねど」と半紙に書き、又他の一枚には、「錄八犬傳中之歌」と題して「めぐり逢ふ甲斐ありとても信濃路にまた別れ行く山川の水」と書置をしたのであつた。歸つて見れば、それは確に見られてあつた。それから小半歳たつて、熊次は女學校最上級の英文典を受持たされた。受持の組の中に、日向の女生も居た。落ちついた彼女は、熊次に夏以來の心易さがあつた。熊次の心は段々彼女

熊次駒子が結婚の前々月、永らく日本に亡命して居た朝鮮の金玉均が上海におびき出され、韓廷の刺客洪鐘宇にピストルで殺された。それは日本の面に冷水をぶつかけたやうなものである。韓廷が其刺客を重賞したり、清國執權の李鴻章が韓廷に祝電をうつたりした事は、日本の怒火を燃え立たさずには措^おかなかつた。民間主戦派のちやきちやきが、伊藤内閣を手ぬるしとして、陸軍の脉を取りに行くと、參謀本部の水本^{みなもと}中將が、消防の用意は何時でも出來て居る、放火でも火事になつたら、と笑つた。忽ち火の子が朝鮮に飛んで、五月末には東學黨が暴れはじめた。十年前の外交角力に難なく日本を投げ出して以來京城に大胡踞^{おほごゝり}をかいて居る清國公使曲^{くせもの}者の袁世凱の建策で、保安を名として清國は出兵をはじめた。日本では伊藤内閣對在野諸黨の内輪喧嘩で、議會は解散又解散、所詮外に手を出す餘裕はないといふ東京駐劄清國公使の報告で、李鴻章を中心の清國政府は此どさくさ紛れにしつかり朝鮮を攫^{つか}むつもりで居た。然し、

「春夢の記」が過ぎ去つた人と事との記録であるやうに。過去はうるさい。面倒だ。自己の過去を^{そつ}窃として置きたい熊次は、駒子が追窮せぬを幸ひ、熊本の一條なども立ち入つては話さなかつた。

熊次は第一に當^{たう}の駒子を妬んだ。彼は事毎に駒子の優越を感じ、自分の鄙劣を感じた。單に打見たところでも、幸福の中から歩み出て來たやうな身心美しい二十一歳の駒子は、汚點だらけの過去と多くの望もない現在の所有主として肉體も臺の立つた二十七歳の自分熊次と比べ^{くら}べものにならなかつた。小學校の卒業證書一枚持たぬ熊次は、正則の學歷をもつた官立學校出の駒子に勝目はなかつた。駒子が知つて居る科學の初步すら、熊次は知らなかつた。駒子に男女のしるべが多かつたが、熊次は一人ぼちであつた。月給すら、駒子が一圓上である。文章と英語の外、何一つ熊次が駒子にまさるものはなかつた。駒子が幸福であつた爲、善良な爲、聰明な爲、美しい爲、熊次はわが妻を妬んだ。駒子が身軽く、快活に、自由な爲、束縛と拘泥と而してさまざまの重荷を負ふ熊次は、駒子を妬んだ。彼は駒子と競争をはじめた。駒子が始終車で通勤するので、從來徒歩一點張りの熊次も、車で出社する事をはじめた。忙しさに車で出社して、而して一日碌な仕事もせずほかんとして居て、またほかんと歸る馬鹿らしさを感じながら、熊次は車に乗る事だけでも駒子に對抗した。熊次が晩く出社し、駒子が早く歸宅する時は、途中でよく會つた。行き違ふ車の上に、身を斜にして下から覗き上げるやうに會釋する妻を、

「一方に靡きそろひて花すすき、風吹く時ぞ亂れざりける」、いざとなれば喧嘩そちのけ、一齊に外に向ふ日本氣質を支那は知らなかつた。年來、年は一年と昂たかまつて來た日本國民の自主的氣勢が文弱と罵らるる政府の腰を強めて居る事を知らなかつた。日本陸海軍の消防隊が手ぐすねひいて火事待ちかねの靜まりかへりを見得なかつた。天津條約の文面で、清國から出兵の行文知照があつたと同時に、日本から混成旅團の渡韓が始まつた。大本營が開設される。東京で國民的大同盟の對韓意見發表があつて、滿都の人心騒立つ頃は、陸にも海にもとくに警戒の電氣がかかつて、砲兵工廠の煙はいや黒く、遠洋航海に往つて居る軍艦まで白波蹴立てて歸りつゝあつた。神功皇后の三韓征伐以來千七百年、豐太閤の朝鮮征伐以來三百年、朝鮮が眞劍に日本の愛を、支那が日本の力を試す時が來たのである。

朝鮮を中に、日清戰爭の足どりがぎりぎり寄つて來つつある間に、熊次もすでに自分の戦を戦ふて居た。五月五日、男の子の節句の結婚は無意味ではなかつた。それは戦闘開始の象徴であつた。妻として駒子の出現は、熊次を無爲にしては措おかなかつた。熊次は八方に敵を見出した。嫉妬が彼を苦しめ出した。

合を頭に描いた。知る男の顔が、色々にあらはれた。

ある時、京橋から日本橋への鐵道馬車の中で、熊次は指を吸ふ——と思ふた——駒子を見出した。熊次が眼を上げた時、車掌臺に立つ若い洋服男を見た。熊次は駒子が彼に Kiss を送つて居るのでないかと疑ふた。後で彼女の勤むる小學校の寫眞に、洋服姿で背の高い教員の一人が何時ぞや鐵道馬車の中で見た男に肖て居ると思ふた。駒子に問ふと、其男は理科擔當の教師であつた。

「此人は、いつか鐵道馬車で見かけた事があるやうですね。」
熊次は鎌をかけた。駒子は少しも其意を得なかつた。熊次は孔のあく程駒子の怪訝な顔を見てもう其上に何と言ひやうもなかつた。

信すれば何でもなく、疑へば際限がなかつた。熊次は必しも駒子を疑ふでもなかつた。自分の頭の中のもやもやが、大部分邪推猜疑の産物であるべき事も、氣はついて居た。然し彼は自身の覚えから、男といふものの如何に危険な動物であるかを知りぬいて居る。また過去の經驗から、ある女が如何に思ひ切つた事をするか、如何に白々しい嘘を吐くかをしじみ知つ

熊次は美しいと思つた。而して此妻を、女中一人居ぬ家に夕方まで唯一人置く事の不安が、熊次を悩ました。少し早めに歸れば、疲れ切つた駒子が玄關の戸をしめて、居間にぐつすり寢込んで居る事もあつた。無理はないと思ひながらも、熊次はまたそれに不快な不安を感じ、何とはなしに焦こら々した。

駒子が若く、美しく、愛嬌に富むで、よく人を牽く事を熊次は知つて居た。男も女も老も子供も彼女には牽かれる。牽くとはなしに牽かれる。牽くに心が無いとしても、牽かる者はさまざまである。男が女に牽かるる時、男の情が燃ゆる時、如何様な焰が彼の頭に身の内に燃ゆるか、如何に不良の發作発作を敢あてするかを、熊次は自分の體驗から知つて居る。込み合ふ鐵道馬車の中で、若い女に窃と足を絡からむたり、下宿の女中の腕を呀あつと云ふ間に引張つたりした忌はしい記憶をもつ彼は、他の男が駒子に對し何を思ひ何を爲るかを思ふにも堪へなかつた。駒子が見せた男達の無邪氣な手紙も、奥には無限の可能があつた。熊次よりも早く駒子を見、言ものいひ、心易くさへした男の數は何程あるか知れぬ。駒子が日々學校に出て居る間、駒子が言ものいひかはす男も何程あるか知れぬ。駒子が早く出勤すると、獨殘つた熊次は想像で駒子を追かけて、色々の場

苦痛は、全くの初めてであつた。駒子は斯様に人の苦しむのを見たことがなかつた。熊次は身悶えして、蒼ざめた額から脂汗が流れた。十分間もすると、彼の頬はげつそり瘠せた。おどおどする駒子に、熊次はぢれて慳貪^{けんどん}に振舞ふた。隠宅から母が来て手傳ひ、醫者が来て手當をすると、苦痛は追々収まつた。駒子は母に相談して、學校に欠勤届を出し、二日休むで夫の看護に従事した。腸加答兒は一旦の事であつた。駒子は蠅を追ふたり、團扇で扇いだり、京都の姉の逗留中に傳授したゼリイやカスタアプツデングを手奇麗に造つたりして、病床の夫にすすめた。熊次はまるまる二日を駒子と共に居て、初めて夫婦らしい味を味はうた。其機會をつくつてくれた病氣が、ありがたくさへ思はれた。學校の束縛をぬける味をしめた熊次は、是が非でも此夏限りで學校はやめさしてしまはう、と堅く心に誓つた。

然し駒子についての熊次の敵は、外にばかりは居なかつた。彼は第一に母と駒子を争はねばならなかつた。新婚の翌朝、新婦が食進まぬは當然としても、家の者、男の熊次がやはり食進まぬを、男らしくもないと云つたやうに、母はむつとして居た。それを手始めに、母には氣に喰はぬ事が多かつた。母が二十歳で嫁いで來た時は、家には舅姑の上に、舅の繼母の女隠居も居、

て居る。駒子とて女の一人だ。無邪氣な顔はして居ても、うかと信ずる事は出来ぬ。さまざまの場合を想像して、熊次は自分の頭に湧き起る不快の光景の爲に、限りもなく惱まざるのであつた。仕事も手につかず、唯一人居る家の座敷にころげ、仰あたまになつて次から次と彼は不快な想像に耽ふつた。

手放せばこそ氣を遣ふ。駒子を傍へ引きつけて置く術すべはないものか？

熊次は學校を憎んだ。一日の大部分を家から駒子を奪ひ去り、豫習の答案調べのと在宅の時間まで喰ひ込まれるのも、教員といふ職務のお蔭である。熊次は學校を憎んだ。

熊次は腸が弱かつた。青豌豆が出る頃、よく腸加答兒をやつた。ある日出社して居ると、午後になつて腸が、痛みはじめた。小使部屋の木の腰掛に横になつて居たが、中々直らない。「兄は氣が利くが弟は何處を風が吹くかといふ顔をして居る。」と曾て明らさまに熊次を罵つた星野君が、湯を呑みに來て見て、にやりと哂わらつて往つた。到頭我慢しきれなくなつた熊次は、車を呼んでもらつて、下腹を押さへ押さへ、顔をしかめて歸宅した。駒子も已に歸宅して、戸をしめてうたた寢をして居た。大抵の事が新しい經驗である駒子に、熊次が見せたやうな腸加答兒の

ければ、満足しなかつた。ある夕、熊次はまた一人、食卓に向ふた。女中のおちかが給仕に來た。駒子は？ 駒子は何か二階の簞笥から出しに往かうとする所だつた。熊次が歸つて來たので、駒子は一寸躊躇した。

「早く今の内に出して置かなけりや。」

と母の尖り聲が、駒子を二階へ追ひやつた。

いきなり熊次は餉臺を引つくりかへした。手あたりに蓋物とつて投げつけた。

「あ痛ッ」

女中が脚を押さへた。

熊次は口もきけぬ程腹を立てた。眸と一つ唸つて、突と立上ると、歸つてしまつた。

黄昏の縁に突立つて、熊次は憤々した。駒子も駒子だが、第一母がよくない。何處の世の中に媳を息子の食卓から追ひやる姑がある乎？

雪駄の音がして、庭口から父が入つて來た。後に駒子の姿も見える。夕蔭にもしるい笑止な貌を父はして居る。駒子は悄々と俯いて居る。父は熊次の癩癩の原因を知らなかつた。單に駒子

夫の弟妹、召使の男女、二十餘人の大家内、それに一々氣を配らねばならなかつた。時も移れば人も變り、今は昔のやうには往かぬを萬々承知でも、妻となり母となつてもう五十年近い十六の母は、少しは樂らくもしたかつた。義姉は力の限りを盡して居るので、母はとくに其方に求める事をやめて居たが、意氣地はなくても情愛はある熊次に妻が出来たら、老夫婦も何角と荷が輕くなる。母は駒子の來る日を待ちかねた。然るに駒子が來ると、母の期待は無慙に裏切られた。熊次は新婦を引きつけて中々放さず、日曜でも二人で二階にべたべたして、下りて手傳ひに來るではなし、遊ぶ事ばかり考へて、暇さへあれば二人で出てしまふし、借家があいたらさつさと逃げるやうに引移つて往つて、食料さへ拂へばよい事のやうに、朝夕平氣で食事に来る。新婦は馴れぬ故もあらうが、熊次が吾儘過ぎる。母は熊次に不平であつた。而して父が母にしたやうな事を、熊次が駒子にしさうなのが、母の頭を焦々させた。熊次をもつと男らしく、駒子をもつと老人孝行に、母は慙かう思ふた。

熊次の歸りが晚い夕は、駒子は父母と先に食を濟まし、熊次は一人後で餉臺ちやうだいに向ふた。京都の姉に横着を叱られたおちかがつづいて隱宅の勝手をして居たが、熊次は毎いづも駒子の給仕でな

熊次の妻になつて、駒子は一々驚く事ばかりであつた。第一、生れてはじめて斯様な烈しい癪癢を見た。

駒子の父の嘉平次は、樅もみの木が好きで、自ら樅堂山人と號した。樅の木の直きを愛したのであつた。それだけ直ちよくな人で、親類間では評判いづこの一剋で通つて居る。三人兄弟の仲だつたが、兄の岩藏が菊池から出て來ると、

「岩さん、何しに來なはつたか？ 商賣用なら、宿屋に往つちくだはり。」

とやつたものだ。夕食後に鯛など持つて親類の者が來る。

「今頃、何しに持つて來たかい？ 持つて歸れ、歸れ。」

とぶつきら棒に言ふた。嫌な客が長座を見ると、大きな聲で、「もう何時かい？」と店の者にきいた。虚飾が嫌ひで、駒子の清書を見るにも見せるにも、まづいのから一番先きに出させた。

に怒つたと思ふたらしかつた。父は熊次を宥めた。まだ年若で、馴れないから、氣に入らぬ事もあらうし、腹も立たうが、と駒子に代つて詫びた。駒子も其言について、縁に手をつけて詫びた。熊次は悄々した妻の姿が可哀想でならなかつた。父の詫も見當違ひであつた。然し何は兎もあれ肝癪を打切る外はなかつた。父が歸つた後で、駒子に熊次は諒すのであつた。阿母おつかさんが何と云はうと、着物を出すは後でも出来る、夫の食卓にはちやんと妻がついて居るものです。あくる日、熊次の留守に駒子は夫の日記を見た。

「縁に手をつけてしとやかに詫びる妻をいとしと思ひぬ。」
と書いてあつた。駒子は嬉うれしかつた。

吉野紙の美を意味したが、吉野紙は「薄い」が例である事を知らなかつた。生さぬ仲の息子二人に、母はさんざ心配した。殊に熊本で同居の二番息子の勇次に氣がねした。「阿母さん、そんなに心配しなくてもいいぢやありませんか。」と駒子は云ふた。「あなたの事を私が書いて上げます。」などとも言ふた。多くの人から異つて居る父を不思議とも思はぬ駒子は、自分自身が多くの娘と異つて居る事を知らなかつた。彼女には裏も表もなかつた。物心ついてから、殆んど涙を知らなかつた。女高師の舎監の一人は、會津武士の女であつた。ある時、會津落城の話をした。皆泣く間に、駒子一人如何しても泣けなかつた。よよと泣く隣の人にきまりが悪く、目に唾つけて泣く眞似をした。「子供らしい。可愛い。」が、師友の間に通つた評判であつた。駒子の世界は、お伽話の世界の如く、明るく、面白く、楽しかつた。愛して、愛されて、其處に何の陰翳も障礙もない自在の天地に生きて居た。生きると云ふ事は楽しいと云ふ事で、勿論結婚も幸福の一の階段から次の階段にのぼるものと思ふて居た。現實は手荒く駒子の夢を引剝いた。結婚二ヶ月、駒子は一々驚く事のみであつた。

駒子の母は昔者ながら好い頭のもち主で、一寸畫なども畫き、着物の縞柄などの工夫も上手で

駒子が受験の履歷書に誰某女とするに、職業を何としましやうと相談すると、「ま櫛はかりの女」
と書けと云ふた。郷里では造酒、熊本では酒を賣つた。然し夜ちと晩く酒買ひに來ると、

「最早も寢たばな、明日來なはり」

と言ふた。商賣そものけで、駒子の父は菊を作つた。菊づくりは名人であつた。自然が好きで、六十過ぎて青柿を嗜み、一人娘の駒子が小學時代に墨繪の山水をかいた洋傘を買つてやつたり千里横行の蟹かにの畫のカパンをつるさせたり、駒子が女高師に來て後も、珍しい縞稻しまいねの種子を送つてやつたり、白珊瑚の枝形なりの簪を送つたりした。頭髮なども、郷黨ではさんぎり髪の率先であつた。直な夫に添ふ駒子の母は、夫と世間の中に立つて随分苦勞した。父に肖て率直飾る事を知らぬ女むすめの駒子にも、母は時々手古摺つた。水前寺は熊本郊外で水晶のやうな水の涌く遊園である。幼ない駒子は初めて水前寺に連れて來られて、如何しても泊ると云ふて聽かなかつた。文字を知るやうになつては、時々自己流ものいの言ひをしては母をはらはらさせた。「野邊の送りをしたい。」と駒子が言ふた。それが葬送を意味する事を知らなかつた。女客が美しい縮緬を持つて來て見せた。傍から駒子が見て、「まあ、美しいこと、吉野紙のやう。」と云ふた。駒子は

さして苦にはしなかつた。

然し駒子は夫の身装みなりの見すばらしさを其まは措けなかつた。平河町を訪ねたついでに實母と相談して、さしより夏の物をと、學校の歸りに人形町で三圓ばかりの縞ちぢみの縮ちぢみを買つて歸つて、夫に知らさず少しの暇に縫ひはじめた。母の女で駒子も手は利いたが、小學校以來普通學業に熱中して、割烹は勿論、裁縫なども身を入れてはしなかつた。小學校の卒業には、服紗に菊水の刺繡をして、教師を煙にまいた。お茶の水の教生時代、高等女學校の裁縫を手傳つて、可なりまごついた。ある時、生徒の一人が綿入の振について教へを受けに來た。駒子は生徒の言ふままそれでいいでせう、と答へた。程なく受持女教師がほほと笑つて駒子を呼んだ。「菊池先生、一寸まあ此振を御覽遊ばせ。」それは教生先生に伺ひ濟みの振だつた。駒子は赤面したが、女生は唯にこにこして居た。斯様な次第で、駒子は男物の單衣などは初めて仕立てるのであつた。駒子は夫を驚かす日を樂み樂み、如何やら恁ようやら仕立て上げた。

隱謀は大成功であつた。新妻の初めてわが爲に仕立てくれた單衣は、縞柄色合申分なく、ふわりとして柔らかな縮緬のやうな着心地が何とも云へなかつた。それは美しいもの好き、良いも

あつた。母の丹精になる駒子の着物は、柄がよく、學校でもよくほめられた。郷國くにには駒子の爲に造らせた桐の長持などもありながら、旅先の婚禮で唯一人の愛女を前桐の簞笥一つで嫁入らすをしみじみ残念に駒子の母は思ふた。然し東京四年の在學中も、着物なり小遣ひなり郷里の心づかひを不用不要いらぬいらぬで通した駒子は、婚禮の調度に不足もなかつた。自分のには不足もなかつたが、夫の虫喰ひ簞笥の内容のあまりに貧しいのに駒子は一驚を喫した。自身の前桐には、小山家から祝はれた黒繻子の一巻位あつたが、夫の簞笥には碌な祝の物もなかつた。仕度も、祝ひも、熊次には熊次相應のものしかなかつた。上州から出て來たついでに婚禮着の世話何くれとした岩原の姉からは、新夫婦を祝ふて、神の爲人の爲働くやうにと手紙をくれた。京都の深水の姉はみやげに二圓くれた。郷國くにの姉達三人からは、共同で浴衣地一反くれた。伊倉伯母は茶器をくれた。津森叔母は美しい手跡で「お笑ひ艸」と書いて、新婦に老人物の羽織の紐をくれた。媒妁の宇土家から紺緋こんがすび一反もらつた。新聞社では祝の内議もあつたが、内輪の婚禮だからと止めになつた事を熊次は聞いた。すべてを當然に熊次は受けた。あるものは感謝を以て受けた。彼は十年前の兄の婚禮に、絹物の紋付一枚無かつた昔を知つて居る。簞笥の中の貧しさも、

は、郷里で絹織物を家業にして居るが、肥後一家が東京に越して後も、老人は兎に角、若い者の爲に絹物の注文など行く事は減多になかった。嫁して十年、三人の母親である義姉なんども、紋付一枚持たなかつた。

ある日、熊次は不圖母の蔭口を聞いた。

「好い着物ばかり作つて着するもん。」

熊次ははつとした。體が熱くなつた。

あくる日の夕、熊次夫婦は隱宅に居た。熊次は駒子が仕立て下ろしの單衣を着て居た。誰に對するでもなく少しの事が氣に障ると、熊次の怒がこみ上げて來た。縁側に突立つて居た熊次は、きりきり齒を嚙むだ。——それは父の癪其ままであつた。父が怒ると、恐ろしい眼をして、きりきり齒を嚙むだ。——而して着て居る單衣の左の肩をべりべり引き裂いた。呆氣にとられた駒子は、言葉も出なかつた。肩を裂き、袖をちぎつて、帶を解くと、熊次は單衣を投げやつた。

いきなり駒子がそれをかい抱いた。而してひいッと消え入るやうに哭き伏した。

の好きの熊次を満足させた。美しく過ぎて、少し氣がさしたが、然し彼は妻の心盡しを悦んで、早速着用に及んだ。よく似合ふ、と駒子も喜んだ。程なく千筋の夏羽織も出来て來た。時間が乏しい上に、手際を氣づかつて、駒子は邸内の仕立物など内職にする細君にそれを頼むのであつた。東京で五度夏を過して今年初めて夏羽織をもつ熊次は、俄富限にわかぶげんの空恐ろしい氣もした。隠す事でもないのです、すべては隠宅本宅に知られた。

肥後の國風は、質朴を見榮みえにした。田舎育ちの父などは、維新の初年藩の役人として東京で然る可き人々を御馳走するに、縮緬づくめの御客の御亭主役が、ごりごりした革色かわいろの木綿羽織を着たものだ。羽織をたたむだ藝者がつくづく見て、「お召は革ではありませんか？」と問ふたさうだ。其お下りさがを頂戴する時、熊次は父からそれと聞かされた。熊次が人心つく頃は、五十年の鬱懷開けてのびのびした父が縣官として羽振のよい時だったので、熊次も絹緋きぬがすりを着せられたり、金釧きんぴたんの洋服を着せられたりした。生得のしやれ者、美しいものの好きの熊次は、父が野に下つて後も、筒袖を着せらるるをいやがつた。兄の寅一は、素直に着せらるるものを着て、着物の苦情など減多に言はなかつた。熊次は袴の紐の色異かはりを氣にして顔を顰めた。大江の姉

第八章 日清戦争

一

七月に入ると、父母は女中を連れて今年も避暑に逗子に往つた。宿は田越の川尻、三崎街道に傍ふた荒布屋あらぬと云ふ家である。一昨夏借りた養神亭のはなれは、朝日のかんかんあたる暑苦しい家だつた。川向ふの往還から少し引込んだ大きな茅茸の家の障子があいて、其家を借りて居る海軍々人の家族の女の子がきちんとお行儀よく机に向ふて手習ひなどする姿が、如何にも涼しげに見られた。昨夏は停車場近くの家を借りた。今年は幸ひ荒布屋があいて居たので、八疊二室を借りたのであつた。義姉も子供三人、子守を連れて父母と同行した。そこで熊次夫婦は自家うちを閉めて、二たび父兄の家に戻つた。本宅の女中が一人臺所をしたり、主人の身のまはりを世話する爲に残された。

それは駒子にとつて初生子の肉を裂かれたやうなものである。

熊次ははつと吾に復つた。もう駄目だ。二階へ駈け上つて、押入に有り合はす古單衣を引つかけると、わが家に駈け戻つた。

駒子が泣く泣く歸つて來た。

「惡かつた。御免よ。」

熊次は詫びて、嗚咽りあぐる駒子の背を撫でた。

駒子はややに涙を収めた。彼女は宥さずに居れぬ女であつた。如何して單衣が引裂かれたか、駒子は其故を知らなかつた。唯自身の不束故と思ふた。

融け合ふた二人は、ランプもつけず、縁の黄昏に手を取り合ふて座わつた。狭い庭の空に、夏の星が三つ四つ淡く光つた。

熊次は駒子に詫びた。然し母の言葉も聞き捨てにはしなかつた。もう着物など當分つくるまいと思ふ。美しい單衣の死骸は簞笥に藏められ、凜とした夏羽織も熊次は滅多に着なかつた。

熊次は結婚の初「兄を親と思へ」と駒子に言ひ、彼自身勿論其心で居た。熊次は昔から兄を別物に思ふた。年齢が唯五つしか違はぬ事などで考へもしなかつた。結婚前年の事である。兄と姪とが大病をした。兄の病が癒え口になつて、姪の病は重かつた。兄の看護を終つた熊次は、つづいて姪の看護をした。ある夜、姪の枕頭で熊次は義姉に駒子の事を問ふた。問答の聲が中二階に聞こえたかして、あくる日兄は熊次に、疑ふわけではないがと言ひ譯をして、義姉とさし向ひの話をしないやうに、と注意した。熊次は兄が妙な事を言ふと思つた。熊次は義姉に隔意はなかつたが、兄の妻である事を一瞬も忘れた事はない。そんな事を氣にし弱身を見る兄を、熊次は笑止に思ふた。別物にして居る先輩が自分と同じ土塊つちくれである事を氣づかさるる時程後輩にとつてがつかりする事はない。その幻滅を熊次は感じた。熊次は自分の衷うちに働く不良性にはつくづく懲りて、恐れもし羞ちもして居た。意志強い兄、しつかり社會に地歩を占めた兄、妻あり三人の子女の父たる兄に、自分と同じものが動かうなどとは更に思ひがけもなかつた。「非戀愛」を書いた彼でないか。熊次が結婚翌月の家庭雜誌の社説に、「新婚者への戒」を書いて、世の中には文藻ぶんそうある者にして結婚後は何爲るともなくぶらぶらして暮らす者もある、とそれと

例年の如く、土曜から日曜にかけて兄は逗子に往つたが、餘の日は家から出社した。義姉の兄の本莊君が來て泊る事もあつたが、老人子供の居ない夏の家は靜に、庭樹の蟬の音ばかり高かつた。

南に向つた凹字形の家づくり。兄の書齋は右翼の中二階で、夜は母屋の十疊に蚊帳をつらして、一人寝た。熊次は左翼の父母の居間に、父の卓を使つた。而して以前通り、二階を夫婦の寢室にした。駒子はまだ午前だけ學校に通つた。朝は誰よりも早く出て往つた。歸ると、義姉の居間の三疊に、義姉の小机を其まま使つて、主婦の役を勤めた。其處は座敷の十疊と茶の間の六疊との中にあつて、正に主婦の座であつた。熊次は最初から、駒子が其處に納まる事を面白く思はなかつたが、留守を引受けた以上、如何ともする事が出来なかつた。夕方になると、熊次が先づ歸り、兄がついで歸つて来る。食卓は兄を主座にして、熊次は駒子と向ひ合ふ。熊次は駒子をわが傍に引きつけて置きたかつたが、如何する事も出来なかつた。果物好きの熊次は、よく社の歸りに桃、李、など買つて來た。兄も果物を好いた。駒子が剥いて出す。兄が熊次の顔を見い見いつづけさまに三つも四つも食つてしまふ。ほかんとした熊次の體が熱くなつた。

の手前、はしたなく一々角^{かど}立てるを熊次も流石に憚^{おどろ}かつた。何を云ふても、兄である。其兄は弟の氣をかねるやうな事をしなかつた。社員の一人が來て、兄の書齋が賑やかになる。「お駒さん、話に來ないか。」と兄の聲が呼ぶ。「お茶は持つてもう往きましたに」と駒子が熊次に曰ふ。それは白ばつくれるとしか熊次にとれなかつた。「卿^{おなた}に話に來いと云ふのだ。」とにくさげに熊次は曰ふた。いつものけ者にされつけて居る熊次も、夫を差措いて妻を呼ぶ兄の仕打に新な侮辱を感じないわけに行かなかつた。

熊次は次第に焦々して來た。兄が家に在る間は、熊次は始終神經を昂^{たか}らせた。兄が逗子に行く土曜、日曜に、熊次はほつと息をついた。夜など駒子が女中相手に茶の間に長居をする、熊次は二階から下りて來ていきなり茶の間のランプを吹き消した。夜だけ駒子は彼の専有である。其夜は兎角晩く來て、いつもあまり早く明けた。

「叔母さん。」

と聲をかけて、ある日の夕十三四の束髪の小娘が玄關先に立つた。それは上州の姪、岩原の長女お君であつた。彼女の父の岩原さんは同志社以來の兄の友、母は三番目姉のおみわ姉であ

なく熊次を誡めた兄でないか。熊次は兄を親と思ふた。然し親と思ふ兄に對し、彼は何時しか嫉妬しはじめて居る自分を見出した。義姉とさし向ひの弟の語聲に不快を感じる兄を兄らしくもないと笑ふ事は出来ぬ。駒子について、彼は已に兄を妬んで居る。熊次は結婚當初すでに父母の家にあつて兄に不快を感じた。父母も義姉も子供も居ない家に夫婦で兄と同居して見ると、親と思はうが、兄と思はうが、馬鹿な、濟まぬ、と如何にわれとわが心を叱つても、熊次は自分を焦々さす事の續々起るを如何ともする事は出来なかつた。

昔は先生として尊敬し、今は義兄として近しくする寅一を、駒子は熊次が親のやうにと言ふまま隔意なく振舞ふた。男を恐るる事も憚る事も知らぬ彼女であつた。兄は咽喉が悪くて、此頃は日々藥液を含ませた筆で咽喉を塗つてもらつた。義姉が留守なので、それは駒子の役になつた。熊次が父の居間に居ると、駒子が縁側傳ひに中二階に上つて行く。やがて兄の咳嗽せきが聞こえる。咽喉をやいて居るのだ、何でもない、と思ふても、やはり熊次はうれしくなかつた。出入りに兄の洋服和服の始末を女中に任せず駒子がするのも、熊次に不快の種であつた。兄の身のまはりの事は成るべく女中に女中にと熊次は心をつけたが、親のやうにと一旦言ふた言葉

出刃庖刀をよく磨いでそれで難なく兄の髻を剃つた。馬鹿姫は尋常に剃刀を使つた。おかんは駒子が熊次の髻を剃るのを見て、素人臭い手ぶりを笑つて居た。それでも駒子は一度も剃り込みをしなかつた。おかんが剃刀を片手に得々と兄の書齋に上つて往つた。少したつと、「わッ」と云ふ叫びが起つた。而してバタバタ逃げる足音、追かける足音がした。唯見れば、縁まで追かけて來た兄の頸から血が流れて居る。おかんが早速剃り込んだのである。「卿おなた、剃つてお上げ。」と熊次は駒子に云はねばならなかつた。兄が遠慮して、女中に床屋を呼ばせて、髻は無事に剃られた。「馬鹿姫、逃げたね。」と兄が笑つた。「おゝ恐こ」とおかんが頸をすぼめて、呵から々笑つた。熊次はほつと息をついた。

兄に楯つけぬ熊次は、唯駒子に焦々した。駒子が逗子に手紙を書いた。「實子様も」と姪の事を書いた。先生のお嬢さんとして言ひ馴れたのがうつかり出たのである。熊次は唄つて手紙を引裂いた。以前は以前、今は今、何處の世の中に夫の姪を實子様と書く馬鹿があるか、と熊次は怒鳴つた。結婚以來、家庭に學校に散々氣をつかつて段々神經衰弱になり、今はさながら二人の亭主もち同然の氣骨が折れる主婦の座を占めた駒子は、馬鹿姫を使つての世帯もちにもいろ

る。十五歳の熊次は、此姪の誕生祝に、饅頭の重箱提げて、熊本から六里冬枯の野道山路を往つたものである。熊次が同志社を飛び出す頃、彼女は父母と尾の道から京都に來たばかりのいたづら相な眼をした六歳の女兒であつた。多才多情の父が醫學生、同志社生、いろいろの企業家といふ道行を経て耶蘇教に落ちつき、晩學ながらに同志社の神學科を出て傳道師となつたので、彼女は父母と共に京都から秩父の大宮に、それから上州藤岡に居るのであつた。父の眼、母の頬をした十三の少女は、逗子に祖父母の許に行く途、氷川町に寄つたのであつた。姪が泊る事になつたので、熊次は座敷に兄と寝た。然し彼は夜中に窃と起きて二階に行つた。一夜も駒子を一人置くのが氣になつたのであつた、晩く來て早く去つた叔父の形跡けいせきを、然し姪は認めずに居なかつた。「叔父さんは體からだが二つある。」と彼女は曰ふた。

女中のおかんは眉の下つた、小さな眼、ちよつぱり鼻のおどけた顔をした女であつた。バロク姫と兄が呼んで居た。バロクは馬鹿ばかなのである。單衣を二枚きり持たぬ馬鹿姫は、汗みづくに日々なるので、寄ると臭いと兄が顔をしかめた。おかんは笑つて、せつせと洗濯をしては早變りをした。兄がおかんに髻を剃らした。先年の夏留守の臺所をした社の山村は、手が器用で、

と熊次は烈しく言ふた。

「其様な事を言ふち、熊次さん位の男なら幾何でも世話する。」

駒子は黙つて居た。後で熊次はまた其事を言ひ出した。俺位な男は幾何でも居るとさ。「勿體ない。」駒子は眼を伏せた。

熊次は駒子に對する兄の愛の日に日に昂こずるを感じた。薄々は結婚前にも感じ、結婚後にはまたひとと感じた事であつたが、此數日の間にそれがいよいよ露骨になつて來たのを否でも認めねばならかつた。それは義理のも入れて姉ばかり五人ももつて妹といふものを一人もたぬ兄の義理の妹に對する自然の情愛かも知れなかつたが、満たされなかつた兄のあるものが今弟の妻によつて満たされる自然の衝動かも知れなかつた。免に角それは熊次に快いものではなかつた。熊次の嫉妬の眼は、駒子を見る兄の眼の異様な輝かがやきを決して見落さなかつた。

ある夕、熊次は隱宅の縁に居た。駒子は本宅の縁に居た。兄は庭に居て、駒子の方を見て戲談を云ふて居たが、ずるずると引寄せらるるやうに寄つて往つて、熊次の眼の前で駒子の肩をたたいた。

いろまごついた。もつと順序をつけて、と熊次が小言を云ふた。「然し順序を知る事が困難だ。」と兄が駒子を庇ふた。それが尤であるだけ熊次は尙焦々した。

駒子の居ぬ時、熊次に兄は言ふた。「あまり叱ると、噓つくやうになる。」それは噓ではなかつた。現に母の兄の津森伯父は良い人だつたが、性急でよく叱るので、好人の伯母は見えすいた當座つくろひの噓を言ふた事を熊次も知つて居た。熊次は駒子を噓つきにする事を恐れた。然し彼は直ぐ焦々して駒子に當り散らした。彼は駒子の外に當り散らす者を有たなかつた。熊次が焦々する程駒子はとちり、駒子がとちる程熊次はますます焦々した。駒子は念者で、すべてが遅かつた。熊次は人一倍短氣だつた。駒子を庇ふ兄は、また熊次の焦躁を無理とも思はなかつた。兄は曰ふた。「ああくすぢや、熊次さんが癪癪起すも無理はない。」

駒子は「交際家」といふ事になつて居た。男女の遠い時代に、交際家と云ふ評判は、素行に疑問標を附すやうなものである。ある夕、茶の間で食後の雑談に兄が懺悔をするやうに云ふた。

「お駒さんは Morality の方は如何かと思ふたが。」

「それが缺けたら、直ぐ離縁して了ふ。」

た。而して新調のまま減多に着なかつた熊次の夏羽織を借着して、兄は車を飛ばして活動をはじめた。

七月二十八日には、成歡牙山の陸戰勝報が傳へられる。八月一日に對清宣戰詔勅が下つた。日本は世界の眼の前に名のりを舉げて隣邦支那と力を角^{かく}べ始めたのである。

小學校が夏休になつたので、即日熊次は駒子を逗子へやつた。而してほつと息をついた。

熊次は赧くなつた。而して息を呑むだ。然し彼は黙つて居た。

熊次は早く駒子を兄から遠ざけたかつた。一日も早く駒子を逗子に送りやりたく思つた。未だ小學校が休みにならなかつた。小學校は秋期からやめさす事にもう話について居た。ドウセやめるなら一日も早く、と熊次は思ふた。「然し義務は果さなければ。」と兄の言葉は尤であつた。休みになるまで我慢する外はなかつた。

土用に入つて、暑熱は日に日に加はつた。内に外に熊次は焦熱地獄の責苦を受けた。

熊次が斯く苦しむ間に、彼が國日本は朝鮮を中に支那いながらと唾み合ふて居た。朝鮮は日本に拗すねて清國に秋波を送つた。日本は朝鮮をいさぎよく清國にくれて一切手を引くか、でなければ清國と血みどろに闘ふても朝鮮は自由にせねばならぬ立場に立つた。負けるだけ負け、我慢し得る限り我慢した日本の闘志がぢりぢり燃え立つた。

到頭七月二十五日に、日清戦争の火蓋は先づ海上に切られた。浪速艦長東郷平八郎は、朝鮮豊嶋沖で英國旗を掲げて清國兵を輸送中の汽船高陞かうしん號を撃沈し、清艦操江號を捕獲した。

飛報の一斑を耳にすると、兄の新聞は都下新聞の先登第一に〇〇澤山で日清開戦の號外を出し

手持無沙汰になる彼であつた。

何は兎もあれ、戦争のお蔭で兄は忙しくなる、駒子を逗子へ父母の許に遣つて、熊次は氣樂な留守を喜んだ。夫婦は初めて手紙を取りかはす機會をもつた。結婚前に其機會をもたなかつた彼等には、それは楽しい機會であつた。駒子からの手紙には、今朝摘んだといふ眼がさめるやうに美しい桔梗の花など封入してあつた。

吾妹子が

送り越せにし桔梗の

薄紫の其花は、

日を経るままに色も香も

褪せにたれども、褪はぬ

色香ゆかしも、妹子が心の。

社では、七月中旬編輯會議を開いて、時局に對する部署を定めた。米畫伯の長子で俳句などよくする僊齋、貧民窟探險で名を成した杉原の諸人が、先づ特派通信員として出發し、つづいて米畫伯、山下、議會の傍聽筆記で異彩を放つた宮津なども、或は從軍記者とし、或は要所の通信員として追々出かけた。海軍には後で才人鴨志田が千代田艦に乗つた。いよいよ開戦となつて、社の中心の兄の活動は眼ざましくなつた。彼は渾身こんしんの力を打込む機會を得て、驀地まっしぐらに戰爭の渦に新聞を提げて飛び込んだ。弱虫の熊次にも流るる日本人の、士の血が熱して、異常の緊張を彼は覺えた。彼の國日本が會ては師たり常に隣である老大國支那と決闘を始めた事は、正に容易ならぬ事である。彼も無爲では濟まされなかつた。然し彼の仕事は、きまり切つた外報翻譯の外、日清戰爭夢物語などの閑文字を書くが山であつた。何かする事がありさうで、彼の機轉はそれを見出し得なかつた。彼は自分に七を授けた。以前から周圍が忙しくなれば、直ぐ

駒子の留守には、本莊さんが泊りに来て居た。兄が飲む雞のソップの出がらは味つけて食卓に上す例であつた。食卓に出ないで時々消え失せた。本莊さんが臺所に來て鹽つけて喰べておしまひなすつた、と馬鹿姫はすべてを本莊さんにかづけて、涼しい顔をして居た。

駒子の母はまだ東京に居た。駒子の兄が痔の治療をして大學病院に居たのを、夫婦で見舞に往つたのは、二人が最初借宅に移つて間もなくの事であつた。熊次が往き滯つて、その日も西に入る頃やつと病院に往つた。清人君はうち込みの三等室の寢臺に仰に寝て、母者が附添ふて居た。手術の経過は好かつた。「私が愚圖ついたものですから」と駒子が詫ぶるも、熊次の氣に喰はなかつた。然し母者が悦んで、患者用の氷をぶつかいで來て夫婦に馳走したりした。それから一度も會はなかつた。此頃は榎坂町に移つて居た。旅先で兎に角駒子を嫁がせ、其あと駒子の兄の入院などで入費も多く、駒子が持參の二十圓を借りた事を熊次も知つて居た。然し駒子の母を好かぬ熊次は、轉宅を聞いても駒子をやらず、自分も往かなかつた。

然し駒子が逗子に往つてから、熊次は一日思ひ立つて菊池の家を訪ねた。それは先に肥後一家が住んだ家——深水の借家——から程遠からぬ榎坂の崖の上に宙乗りしたやうな小さな家であ

そんな詞を熊次は逗子に書き送つた。

逗子には、例年避暑する京都の深水の一家も来て居た。熊次の姉には義理の惣領太郎君の若妻のお袖さんや妹の二葉さんは、駒子と同じ年配で、打連れて神武寺に往つたりした。楕圓形の縞の西洋水瓜を初めて見て、「何て大きな瓜でしやう。」と云ふて笑はれたりした。水瓜の薙では、子供の時から圖ぬけて水瓜好きの熊次の噂も出た。柿の葉の翠の蔭うつ窓に父の几に凭つて其様な駒子の手紙を見たり、返事を書いたりする熊次はのびのびと楽しい氣もちに浸つた。馬鹿姫がよく熊次の几の傍に来て色々の話をした。駒子が丸々と白く肥えて居るので、熊次を馬鹿姫がよく熊次の几の傍に来て色々の話をした。駒子が丸々と白く肥えて居るので、熊次を馬鹿姫はからかつた。隠宅女中のおちかが井戸側會議に、「うちの若奥さんはこれだよ。」と大きな腹をして見せて、皆を笑はした話などした。旦那が風呂で飛んでもない所まで洗はせる、あんな所まで洗はす人見た事はない、と唸やくやうに言ふた。熊次の居る所から浴室の話聲はよく聞こえた。ある時聞くともなく會話の斷片が聞こえた。

「あらッ、斯様に毛が。」とおかんの聲。

「熊次さんのを見たかい？」と兄の聲。

子にただす外はない。手紙で問ふ事でもない、直に聞いて見やう。

駒子が逗子に往つて十日餘たつと、熊次は逗子に往つた。お實を連れて停車場に出迎へた駒子は、もう大分黒くなつて居た。あらめ屋の母屋寄りの八疊二室に肥後一家は納まり、隣の縁つづきには硝子瓶の海藻を小形の顯微鏡で覗いたりして居る市川博士の家族が居た。ゆつくり話どころでない。

熊次は駒子を誘ひ出して濱に往つた。日はかんかん照つて、海の風は涼しく、さざ波寄する渚には美しい貝がらがきらめいて居る。波が寄すると頭を出し、引けば直ぐ砂にもぐる小さな貝を、駒子は拾つて熊次に見せた。

「何て可愛いのでしやう。」

三角で扁平な、滑つこい、小指の先ほどの貝。白いのもある。薄紫のも居る。波が引くと大急ぎで砂に隠れる狀が、如何にも可愛い。

「此は可愛い。何と云ふ貝だらう？」

「ナミコつて云ふさうですよ。」

つた。駒子の母が獨り居た。駒子の兄が新聞社に出勤の後は、雨戸を張板にして其子の着更きがえの洗ひ張りなどしながら淋しい日を送つて居る母者は、珍らしい熊次の入來を喜んで、茶を入れたりほとめいた。駒子が逗子に往つた事を聞くと、母者はいやな顔をした。

「好ようござりますたい。逗子に行くてち言ふのに、知らせもせずきせるに往つてしまひますけん。」

母者が手にした煙管きせるがぶるぶる震へた。而して母者は其煙管でやけに煙草盆をたたいた。自分の頭の身代りらしい煙草盆を見つめて、熊次も不快になつた。

母者はちろちろ熊次の顔を眺めて、溜息まじりに述懐をはじめるのであつた。親の心子知らずで、お駒がちつとも寄りつかぬ。(それは誰がさすのだらう？ と母者の眼は言ふた。) 稀に來ると、疲れ切つて横になり、

「泣いてばつかり居りますもん。」

熊次はいよいよ不快になつた。碌々話もせずに歸つてしまつた。

それにしても、駒子は何時榎坂に往つたらう？ 疲れ切つて横になる。泣いてばつかり居る。ちつとも寄りつかぬと云ふては、來ては泣いてばつかり居ると云ふ。母者の話は頗うしろ胡亂だ。駒

くゝの虫の音がこぼるるやうに涌いて流れた。

逗子は好い。晝は老幼一の食卓に賑はひ、夜は二張の蚊帳に分れ臥す避暑の宿は、然し若夫婦向きではない。夫婦はあくる日の午後、金澤に往つた。鎌倉まで汽車、それから車で金澤に着き、東屋に泊つた。池のやうなほの白い入海の堤つたひに夕の散歩は涼しく、波たたぬ水に近い二階の夜は静かで、それは池上の夜を思はせた。

熊次はやつと落ちついて、駒子と話す機會を得た。榎坂訪問の話をして、母者の言葉の不審をただした。已に白白した以外母を訪ふた事はない、と駒子は無造作に答へた。而して駒子は言ふた。

「母は時々嘘を言ひますもの。」

駒子の釋明は熊次を安心させた。同時に、母は嘘つくと言ふ女の卒直が熊次を駭かした。

未だ遊び足らぬ二人を、時節がゆるさなかつた。翌朝二人は金澤を立つて、鎌倉から直行で東京に歸つた。

「ナミコ——波子——波の子。美しい名ですね。女の子の名に好い。」

女の子が生れたら「ナミコ」とつけることに、二人は直ぐ一致した。

話し話し二人は波打際を歩いた。日ざかりの濱に、今日は人も少ない。夏の天地は、さながら二人の爲に開けて居る。熊次はうるさい人間、面倒な世間をはなれて、唯二人でいつまでも自然の中に斯く悠々と遊んで居たかつた。落ちて居る流木の枝を拾つて、熊次は砂の上に大きく歌を書いた。

うつせみの 身の恒つねならば 千代までも

萬代までも 斯くて經ましを

「それはあなたのお歌？」

見上ぐる駒子の横頬に、鬢の毛が五條六條風に弄なやまれ、青い海の上には、八月の日がきらきら流れた。

夜に入ると、二人はまた濱に出た。而して波打際を向ふの山の麓まで歩いた。涼しい夜風。ざぶり——ざぶり、靜に寄する波の音。うち仰ぐ空は星が降るやう。松黒い淺茅あさちの砂丘は、さま

で居る事を啣^{くは}まずに居れなかつた。彼は猶兄を信じた。然し不快は終に不快であつた、

不快が到頭爆發する日が來た。

ある朝、兄が書齋で緊要書類の置き所を忘れて搜^{さが}して居る事があつた。熊次がそれを手傳ふたが、見つからない。駒子が手傳ひに來た。熊次は險^{けん}しい貌^{かほ}をして、言葉荒く彼女を追ひやつた。熊次は猶兄の書齋に居た。其處に駒子が

「洋服のポケットにございました。」

と言ひつつ書類を手にして得々と中二階の階段を上つて來た。

熊次が押隔てた。書類を引つたくつた。突然彼は拳を振り上げて駒子の肩を毆^うつた。

背後^{うしろ}にはつと息をのむ兄の氣はひがした。

駒子は驚いた顔して下りて往つた。

熊次もつづいて下りた。而して父の居間の縁まで往つて、其處に立ちくらむだやうに突立つた。最早駄目だ。

足音がして、軟らかい手が熊次の手を撫でると思ふと、それは駒子であつた。駒子は生涯に初

三

歸つて熊次は父の居間に、駒子は舊もとの通り義姉の居間に座わると、熊次は直ぐ息苦しい壓迫を感じた。對清戰爭に全力を傾け出した兄は、早く出て晩く歸り、以前の如く駒子にかかつらう暇も無げである。然し一の家に住む限り、而して兄が主あるじである限り、熊次は自然に壓迫を感じず居れぬ。

以前の不快はまだありありと記憶に残つて居る。而して中間息くちいそつきの間の快豁かつがあつただけ、現在の重荷を耐へ難く熊次は思ふた。彼は兄の動作言葉に氣をつけた。駒子は相も變らず無邪氣に振舞ふて熊次を苦めた。「親と思へ」と言ふた口から「氣をつけろ」とは今更言へなかつた。

熊次は必しも其様な儆戒の必要があるとも思はなかつた。彼は一切思はぬ人であつた。然し彼は鋭く感ずる人であつた。彼は自分の嫉妬を恥ぢた。然し嫉妬を感じずに居れなかつた。彼は夫妻二人きりで生活出來ぬ境涯かうを咀つた。熊次の不快を知らぬ筈はない兄が平氣にそれを凌い

父母が歸るまでは、夫婦は猶隱宅の生活をつづけた。隱宅の小さな臺所で、駒子は初めて飯を炊き、汁をつくつた。而して二疊で餉臺に向ふた。勉強一途の駒子は、飯など炊いた経験も無かつた。留守居の中に、一度おかんが飯を炊きかけて火を引く事を駒子に頼み買物に走つた事があつた。おかんが歸ると、臺所中焦臭く、下ろしてあつた釜の中は、薄黄ろい飯の面おもてにほつりほつり黒つほい小さな孔あながあいて居た。熊次も御免を蒙つた臭飯を、それでも苦勞人の本莊さんは食べてくれたものである。頼まれた飯は一度は焦がしたが、自分で炊く飯は直ぐ駒子は上手になつた。

義姉が歸つて來た後の駒子は、熊次の駒子であつた。雨の休日など、朝から晩まで二階を下りて來ぬ日があつた。義姉がおかんと顔見合はせて苦笑した。家賃を拂つて戸をしめ切つてあつたわが借家に夫婦で往つて、小半日出て來ぬ事もあつた。日曜には、暑さ構はず二人で出かけた。

「あら、またお出かけ?」

女中のおかんが頓狂な聲を出すと、

めて人に打たれた。打つたは夫である。彼女は熊次が單衣を裂いた時のやうに悲みはしなかつた。唯驚いて呆氣にとられた。彼女は何故に熊次が彼女を打つたかをよくは解せなかつた。然し熊次が障子の方を向いて隱宅の縁に頭を低^たれて棒立ちに立つて居る姿に、われを忘れて熊次の悲を哀しむたのであつた。

熊次の眼からはじめて涙が流れた。駒子も泣いた。

而して涙の中に二人は幸福であつた。

*

*

*

*

明くる日の夕、義姉が乳呑子、子守を連れてひよつくり歸つて來た。熊次の顔を見ると、義姉がにやにや笑ふて居た。昨朝の出來事で、兄が直ぐ手紙を書いて義姉を呼び戻したのであつた。熊次は面目ないよりも、助かつた感が強かつた。義姉の座には、義姉が座わるべきであつた。假^{かり}にも弟の妻が兄の妻の座に座わるべきでも、座わらさるべきでもなかつた。

義姉が歸つて、熊次も駒子も樂^{らく}になつた。好成績の卒業でないかも知れぬが、兎に角暑苦しい夏の課程は終つた。此上の辛抱はもう熊次に出來なかつた。

第九章 新世帯

一

九月に入つて、逗子から父母が歸つて來ると、熊次夫婦は早速自宅に引移つた。

先の新居時代にまだ隠宅に置いてあつた夫婦の簞笥をはじめ一切の所有品を移して新に世帯をもつ熊次と駒子に、それは楽しい時期であつた。手桶、米かし桶其他臺所用具の大抵は、母が一ツ木で買ひ整へてくれた。それを熊次は勿體なく思ふた。竈へつゐは隠宅の古ふるを譲られた。其竈の古びやう、譲られた蚊帳のツギだらけ、など一々駒子を驚かすもののみであつたが、熊次はてんで氣もつかかなかつた。傳來の定紋つき吸物椀、硯蓋すりふたなどと共に、ひびだらけの珈琲碗や、「これでも女中の用になる」と義姉が縁ふちのとれた剝膳はくぜんを譲つてくれた。それがまた駒子を驚かした。引越を手傳ふ女中達が新宅、新宅とちやほやするので、義姉が匆々そそくに加勢を打切つた。

「やきもちやくなよ。」

と兄が言ひ言ひ出て行く二人を目送つた。

を襖越しに聞いて感激した事を度々の話で熊次も承知して居た。字が小さく、掛け榮のせぬ幅ながら、熊次は早速それを床に掛けた。楣が淋しいから父に額を頼むなら、「言有物行有恒」と書いてくれた。字は圓つこく、語はあまりに明らさまで、氣に喰はなかつたが、兎に角表装として居間に掛けた。熊次が十八の年伊豫に行く時、父が錢別に訓誡の辭をくれた。其中にも「恒の心を養ふ事」の一箇條があつた。氣まぐれの熊次は「恒」を嫌つた。だから何かと云ふと父は直ぐ「恒」を持ち出した。兎に角「恒」の護符の額を楣に掛け、兄弟仲よくの幅を床に掛け、其床の間の前の文卓に駒子がつくつてくれた白地に桔梗の縮緬の肱突つて納まつた熊次の氣分は清々しいものであつた。テエブルは三疊に据ゑた。五疊半は駒子の室で、簞笥や鏡臺、卓の配置に彼女は工夫を見せた。食事も駒子の室でした。我家に落ちつくと、二人は楽しかつた。駒子は日々小さな家を入念に掃除して、何かと便利や見榮を加へた。熊次は出るにも歸る樂があつた。これで第三者さへ來て撥はさなければ、新世帯の氣樂に申分はなかつた。

然し第三者は來ずには居なかつた。ある夕、思ひがけなく宇土君が來訪した。取りとめもない話を暫くして庭から歸る時、ランプを持つて枝折戸まで駒子が見送つた。一足往つて、ふりか

武士の魂、刀劍も大小二本譲られた。大は三尺にあまる肥後鍛冶同田貫どうだぬきの刀で、鐔つばに細川家定紋九曜をちらした脇差は、祖父が惣庄屋として永年勤務の御褒美に藩侯からの頂戴物であつた。懸物が二幅。肥後では名を知られたふりい畫家の墨畫の富士に三保松原。横物の一幅は、父の師沼山先生の書。「沼山先生の、あの、女房持つても兄弟仲よくせにやならんてち云ふ掛物は、熊に譲りまつしやう喃。」と兄が言ひ、「應、それがよかる」と父が賛成して熊次に譲つたのであつた。今は昔、父は丁度熊次と同じ二十七歳で母を二度目の妻に迎へた。父の弟の熊太叔も、ほぼ同時に結婚した。何か誠をと弟子の請によつて、沼山師は此幅を書いて贈つたのであつた。初に古語を書き、次に自身の語を細楷さいかいで書いてある。「肥後兄弟各娶婦、請言于余。」世間を見るに、家を成せば兎角兄弟も疎遠になる、「何恩情之重而骨肉之薄哉。」それではいけぬ、妻帯しても同胞仲よくせねばならぬ云々。沼山先生は、沼山家の二男で、少壯俊才の聞こえがあつた。兄は奉行職に居たが、弟自慢で、兄弟仲は好かつた。兄の病氣の看護なども、弟子達に任せず自分に沼山先生はした。父が十五六の昔、沼山家に泊つて、玄關に寝て居ると、座敷には丁度沼山先生がまだ三十歳で今日落學時習館の居寮長となつたと云ふて、兄弟寢物語の親しさ

りさうな。何處から實情を聞いたのかと問へば、それは肥後の子守が言ふたのであつた。肥後の子守が子供を連れてよく榎坂の會堂に行くのを見かけた駒子の母が呼び入れ、ハンカチの一枚、根かけの一つ子守にやつて、駒子の様子を問ふた。熊次が單衣を裂いたり、怒鳴つたりする事實が子守の口から傳はつて、駒子の母兄は心をいためた。前に、駒子が熊次の機嫌の變り易いをこぼした時、文學者は大抵其様なもの、と駒子の兄は宥めたが、子守の告口で母者があまりに心を傷むるので、到頭抗議を持ち出したのであつた。子守の告口で離縁なんか、と兄は駒子の兄を諭した。

宇土君の來訪も、お婆さんの來訪もそれでよめた。お婆さんは夫婦仲を宥めに來たのだ。馬鹿らしい。自分等夫婦の仲は、そんなに宥める要があるのだろうか？ 焦々する自分、單衣を裂いたり、怒鳴つたり、駒子を打つたりする自分を決してよいとは思はぬが、何もこれからと云ふ矢先き、結婚半歳たたぬに駒子を引取るなんか言ひ出す先方の氣が知れぬ。熊次は駒子の母と兄とに對し、したたか不快に思ふた。

兄はそんな話をして、熊次にちと寛にすべく勧めた。「お駒さんはお安さんとは違ふ。」と言ふ

へり、「一寸」^{ちよつと}と縁に佇む熊次に言ふを彼女は忘れなかつた。

更に思ひがけない來客は、宇土のお婆さんであつた。小柄で早口のお婆さんは、口の重い夫婦に會釋の餘裕も與へなかつた。「はい、さうござりますたい。はい、どうしてああた。」此方が一言云ふ間に、お婆さんは正眞正銘の肥後訛で十言も其上もましくし立てる。

「仕立物なんかなア、他所にやお頼まんがよか、な、自分でお仕立てた方がようござりますばい。」それだけは駒子にも熊次にも分つたが、お婆さんの話は何の事やらてんで分からなかつた。小半時も獨りで話した後、「何の、よかよか」と慰めるやうに云ふて、お婆さんはさつさと歸つて往つた。夫婦は顔見合はせてはつはと笑つた。全く好いお婆さんではある。それにしても突然に來たり、あの獨合點の話しぶりは、一體如何した事なのだらう！

間もなく、仔細はよめた。重大な抗議が駒子の兄から持ち出された事を熊次は兄に聞かされた。駒子は虐待される、と謂ふのである。一向母を訪ねもせぬ。すべてが約束に違ふ。駒子は「氣なしだから」と清人君が曰ふさうな。叱られつけぬから、叱られる程頭が動かなくなる。ますます氣が利かなくなれば、行末が思はれる。いつそ今の内に離縁した方が。其様な先方の口ぶ

は且罵り且破り、玄關の障子二枚を到頭無いものにしてしまった。駒子は斯様な激怒を見た事がなかつた。彼女は恐かつた。如何してよいか知らなかつた。唯泡吹き怒る夫の背後うしろにおろした。荒るるだけ荒れて、熊次ががつかり靜まると、駒子はやつと人心地がついた。而して「随分失敬な事を阿母おつかさんに仰しやつた。」と熊次を責めた。熊次は駒子に羞ぢた。

熊次は昔から弱虫の癩癩持だつた。兄が曰ふた、熊次は怒ると眞闇になる。全く熊次は一旦の嗔恚しんいに前後を忘れた。父も癩癩持ちで、若い時は箒箱を噛み破やつたりしたものであつたが、克己修行を積んで、七十越しては滅多に癩たを取りはづす事はなかつた。熊次も耶蘇教に入信當時は、眞面目に克己をしたものであつた。ある時年長の女中と僕をつれて講義所に往く途中、女中は卒爾そつじとして曰ふた。「耶蘇教は信仰すると、腹が立たんごつなりまつしゆうたいなア。」女中は毎々熊次の癩癩に中てられて居た。女中の一言に、熊次はむつとした。危く怒り出しさうになつた。「一寸待つとつてくれ。」二人を水車の川傍に待たせて、熊次は臺地の畑——それは今年、熊次はやはり時々烈しい怒火に自ら焚いた。彼は怒火の上昇を煙の中に感ずる事が出来た

た。父は母を「お千代お千代」と呼び捨てにした。兄は最初から「お安さん」とさんづけにした。其お安さんを以前はよく蹴たり打つたりする兄を熊次は見馴れて居るので、鞆ひんに倣たふふ弟に兄はそれ以上の口は利けなかつた。

ある夕、母が實子を連れて、格子戸口から駒子を呼んだ。母は榎坂に駒子の母を訪ふての歸りであつた。老練な母がヨリ若い駒子の母を宥むるに造作はなかつたのであらう。榎坂では近々家をたたむで熊本に歸らねばならぬし、臺所道具などもお駒に譲りたいと云ふてだから、よろしくと言ふて置いた。母は立ちながら駒子にさう話した。熊次は母が行くに話もせず、歸りに上りもせず、すべてを取切つてして了ふを不快に思ふた。木偶でくではあるまいし。あの灰吹たたき以來、熊次はますます駒子の母を嫌つた。往來もせぬ位だ。榎坂の世帯道具など貰ひたくない、と膠にべもなく熊次は言ひ切つた。母はむつとしたらしく、此邊分曉漢わからやと云ふやうな言を例の投げ出すやうに言ふた。突然烈しい怒が熊次を捉とらへた。啐ちやうと唸うなると、玄關の障子をいきなり攪つかみ破り、めちやめちやに障子の骨を攪みひしぎはじめた。「畜生、糞婆」あらん限りの罵ののし詈が汚物の瀑布たきの如く彼の口から迸ほとばしつた。「早く往いこ、往いこ」と母は實子を促して往つて了ふた。熊次

は出来る限りの驕待をした。話が食物に涉つて、熊次がきまりを悪がると、「食ひ物の話が一番親しくさせますけん。」と駒子の母はばつを合はせた。

駒子の母の歸國も近づいたので、また榎坂の家をたたむで平河町に今度は借間をする事になつて居た。駒子の兄を母は唯一人下宿に置きたくなかつた。財政の都合もあるから、何なら「合併でもしたら」と義母は夫婦の顔を見た。熊次は顔を曇らした。彼は純粹に夫婦で住みたかつた。夏は血を分けた兄と同居で散々脂あぶらをとられ、やつと二人になると今度は駒子の兄と無期限の同居して加しかも之大矢野君初め駒子の兄の友達が頻々出入するやうでは、熊次の身の置き所は何處だらう？ 面弱い熊次も、義母の申出に對し、明白に澁つた。駒子も夫を賛たげた。合併はよくない。やはり別々がよい。駒子の母も強いかねた。それは彼女の失望であつた。然し一度は二度と近くなるにつれ、熊次の人となりも飲み込めたので、いくらか駒子については、安心も出來た。物馴れた母者の眼は、熊次を見誤らなかつた。駒子の夫は、駒子の父に肖て居た。

「卿あんたも阿母かかさんのやうに苦勞するばい。」
と母者ははじやはしみじみ女の顔むすめを見て言ふのであつた。

が、抑ふる事は滅多に出来なかつた。怒ると眞闇になつた。而して人か物かに手荒をしなれば氣が濟まなかつた。荒れるは痛快であつた。然し後ではいつも悔恨の失望が燃屑もえくずのやうに残つた。子供の昔は相手を擇まなかつた。智慧づいては、一番安全な相手を自然に擇んだ。父兄には遠慮した。母が稀に熊次の怒火を浴びた。母の皮肉が何時も導火になつた。

然し姑同志の會見は其效を奏した。それから程なく駒子の母が熊次夫婦の新居に音づれた。それは彼女の初入であつた。熊次の心も大分融けて居た。先日怒に任せて微塵にした玄關の障子も、一ツ木の古道具屋から古障子二枚買つて、さり氣なく新しくなつて居た。隱宅から母も來て取持つた。駒子が素麵そうめんを茹うでた。彼女はダシをつくる事を知らなかつた。冷やし素麵に醬油を煮立てて出した。駒子の母が笑止千萬な顔をした。熊次の母は笑つて、生醬油でうまさうに素麵を嚙すつた。駒子の母は新家庭に納まつた二人を見比べて、少しは安堵したらしく、やや霽はられた顔色して歸つて往つた。

其後また一顆五錢もする大きな梨を持つて、訪ねて來、女の家にな一夜を泊つた。何處やら沼山の叔母を思はすやうな靜かな物言ひの義母は、話して見ればさう嫌ひな人でもなかつた。夫婦

次が新橋停車場に行くと、左の腕に赤い菊の徽章をつけた兄が見つけて、嚴めしい軍裝禮服の間にまごまごする熊次を、「早く號外を出すやうに」と追ひやつた。

大元帥廣島御着をさながらの合圖に、平壤の大勝が傳へられ、間もあらせず黃海の報が傳はつた。新聞社に來る同文電報が、毎も父の許に届いた。電報を讀みに行く熊次もぞくぞくした。

勝つはうれしいものである。社に出ての熊次の仕事は、相も變らぬものであつたが、駒子は例ならず忙しい筈の夫に同情し、蕎麥や饅頭で午食を濟したりすると聞くと、おかめ天麩羅の味を未だ知らぬ駒子は、お氣の毒なとひたすら同情した。何、そんなでもない、と熊次は笑に紛らした。

小學校には、月の初に神經衰弱と云ふ醫者の診斷書を添へて缺勤届を出した。駒子が受持の組の中で、あまり學課の出來ぬ有福な家の娘が、着飾つて車に乗り、立派なみやげ物を持つて訪ねて來たが、熊次は駒子にみやげを返へさせ、上げさせもしなかつた。女生が泣きさうな顔して歸つて往つた。小學校をやめて、駒子は全く初めて家の人であつた。これまで學業一途に、家事の練習など一切しなかつたので、傍に問ふ人もない新世帯もちの駒子は、飯を炊き、汁を

九月十三日の朝、東京は千門萬戸日章旗を立てて大元帥陛下親征の御門出を祝つた。日本帝國の元首陛下が文武の重臣を従へて大本營を廣島に進め給ふと云ふ事は、神功皇后の三韓征伐以來の出來事であつた。軍國の中心が廣島に移るにつれて、新聞社の主力も自然其處に移つた。K新聞からも二三の腕利が先發として廣島に往つた。社長の寅一は、御召列車の末に扈從の一人であつた。肥後家の郷里は薩摩に近く、兄弟の父も維新前は始終藩命を帶びて鹿兒島に往來したので、明治政府の當路にも知邊は少なくなかつた。それ等の緣故から兄も自然薩摩出の有力者に近く、參謀本部の魂である水本中將なども知己の一人であつた。中將の肝煎で、尋常では扈從を許されぬ御召列車に彼は陪乗の機會を與へられた。布衣無官の新聞記者は、然し文の大官の間に公然肱を張るを許されなかつた。彼は御馬の馬丁と同乗し得た事をせめてもの幸としなければならなかつた。兄の出立を見送れと云ふ父の命^も黙^だ止し難く、單衣の着流し姿で、熊

た。井は遠く、木製の大きなポンプは汲みにくかつた。熊次も少しは汲んだが、駒子を勞する事が多かつた。御用聞きに來る八百屋の若い者に、駒子は折々水を汲ませた。内氣な其若者は、後で女中が來ても、若い奥さんから親しく御用を聞かねば満足しなかつた。何も知らぬ若妻に知つたかぶりを振りまはす主人も、實は何も知らなかつた。新米の粘るを、糯米がまじつて居る、と米屋に苦情を云はせた。恐れ入つた米屋は、勝手口を出ると、「糯米は米より高いに」と唸やいた。

駒子が小學校をやめて、十二圓の俸給が入らなくなつたかはり、往復の車代も要らなかつた。熊次も以前の徒歩に復つた。社の月俸十一圓、本家から月々入る紡績株利子代の十圓を合はせて、二十一圓の月収は、四圓五十錢の家賃を拂ふて、二人生活には相應の餘裕があつた。駒子が小學校に出て居る程は、日々の小使帳も、「主人、主婦、共同」と三項目に分つて記入したが、九月の新世帯から唯賄費、雜費の二種に分つた。駒子が女高師で習つた家政簿記の用例は、收入の俸給が最低百圓以上、支出も交際費、被服費など細かな分類のよろづ大がかりで、月俸十一圓、別途收入十圓の生計では、それは雞を剖くに牛刀の類であつた。熊次は駒子に面伏せな

つくるにも全く自身の工夫に頼む外はなかつた。特質の綿密と潔癖で、食卓も臺所も奇麗にはしたが、そのかはり夥しい時間を要した。熊次は時々不思議なものを喰はされた。餛飩粉にシラスを入れて焼いた料理は、腥なまぐさくて胸が悪く、新妻の料理でも中々咽を通る代物ではなかつた。多分豌豆から思ひついて、駒子は小豆を生のまま煎いつて夫に食はせた。それも食へるものではなかつた。然し一切を乗除しても、新世帯をもつた甲斐はあつた。飯と汁とが尋常に出来た。永い間食ひ馴れた老人本位の糊のりに近い隱宅の軟飯の後に、若い齒相應の飯の味はたまつたものではなかつた。型を知らぬ料理家は、また型を破る裁縫師であつた。汗かきの熊次の爲に、駒子は麻のシャツを縫つた。喜んで熊次が着て見ると、何だか變であつた。よく見ると、正に左衽ひたりゑりに出来て居た。

「此は左智の様だが、ボタンは右につけるのでせう？」

「だつて——」

莞爾々々した左衽の裁縫師は、中々屈しなかつた。

二人住居に狭くはない家も、浴室が無いのと、井の遠いが疵だつた。風呂は錢湯で間に合はせ

ミルトン、などのスケッチを書いて見た事があつた。「寫眞帖」は其後をうけて、わが眼に見心にとめた人と物との描寫であるべき筈であつた。駒子は其様なものが夫の筆に上つたら如何様に面白いだらうと思ふた。熊次は楽しく、駒子も楽しかつた。家もちの初に、兄が來て、あまり交際せぬやうに、と氣の毒さうに駒子に曰ふた。然し駒子に其注意の要はなかつた。兄はまた駒子の兄に、駒子の家から借金などせぬやうに、と注意したさうであつた。熊次が面弱く、氣弱く、否と云ひ得ぬ性分を知つて居る兄は、其様な注意もしたのであつた。然し駒子の兄に注意の要はなかつた。妹の爲には、「人間は社交的動物ですから」と交際の自由を求めたが、自分自身は滅多に顔を見せなかつた。家居も楽しく、日曜にはまた家をして世田ヶ谷は松陰神社などに遊びに行き、茹栗ろすくりを買ふて食ひ食ひ田舎を歩くも楽しかつた。二十一の駒子は、齡よりずつと若かつた。着更へして外出すると、辻待の車夫がよく「お嬢さん、参りましやう。」と聲をかけた。外出の毎たび、何を着て今日は行きませうか、と駒子は夫に相談をかけた。届いた母の一人女だけに、彼女のもつ着物は何れも柄が好かつた。駒子の着る着物毎に、熊次の母や義姉は柄の好いのをほめた。駒子に相談をかけられて、それが好い、これが似合ふと見立てる事

思をした。結婚前は金の事など熊次は一切考へなかつた。社から出る家庭雑誌なども、勿論無報酬で書いて居た。熊次の月俸十一圓は少ないと駒子の母兄の言もあつて、結婚後は熊次も家庭雑誌に書くものは雑誌一頁五十錢の報酬を受くる事になつた。其雑誌の秋の附録に、「遠征」と云ふ小品を書いて、其稿料で熊次は社の歸途に八角時計を買つて來て、駒子の居間なり食堂なりの五疊半に掛けた。眞新しい時計の硝子や眞鍮やラツク塗の光澤は見る眼を悦ばせ、それが茶の間にチクタクと鳴る音を聞いても、新しい家庭に生命の脉が正に搏ちはじめた感があつた。最初新聞社で月俸をもらうやうになつた時、熊次は折から病中の父の爲に白毛布を一枚求めて父を悦ばした事があつた。今自己の些かの勞力の結果が、直ちにわが家の生活に一の便利と賑やかさを添へて、熊次は勞力の甲斐があると思ふた。

熊次は駒子に自分が書かうと思ふものの話をした。「美なる日本」が其一つであつた。それは熊次自身の發案ではなく、兄の發案であつた。「美なる日本と云ふやうなものを書いたら、」と兄の提案を熊次が心にとめたのであつた。「寫眞帖」といふやうなものも書きたい一つであつた。熊次はまだ熊本に居た昔、サマリヤの女と井のほとりに話す耶蘇、盲目になつたガリレオを訪ふ

になるのだ。生るるは男の子か、女であらうか。生れたら、何と名をつけやう？ 女子の名は、

夏、逗子の濱でもうきめた。あの可愛い貝の名をとつて、ナミコとつけるのだ。男の子なら、何とつけやう？ きつと奇麗な子供が生れる、と母は最初から樂にして居る。熊本の伊倉伯母

の手紙には、「お駒様、御懷胎待遠しく」と書いてよこした。子供が生れたら、自他の慶は如何

だらう。父になる身だ。今までのやうに放縱ではならぬ。經濟の事なども考へねばならぬ。社

の歸途に、銀色寶珠形の大きな土燒の貯金玉を買つて歸つた。それを駒子に見せて、「生れむ子の爲に」と墨黒に貯金玉に書いて、其日から十錢二十錢の銀貨を納る事を始めた。

ある夜、熊次は夢を見た。ヤコブの夢に現はれたやうな天にとどく階梯がある。直立した木造

の階梯。熊次と駒子がそれを登つて行く。駒子は身輕にすんすん上つて行く。熊次は身重で、

後れがちである。時々は駒子の影を見失ふ。然ししるべの駒子の聲が上から降つて来る。追つ

いてまた一緒になる。而して上る。空に階梯、無限に見えて端がある。駒子が先づ頂上に來た。

一足おくれて熊次も頂上に來た。夫婦は其處に腰うちかけて限らない展望を樂む。而して顔見

合はせて曰ふのであつた。

は、美しいもの好きの熊次に愉快な義務であつた。駒子はそれにつけても夫の身装みなりの見すばらしいのが苦になつた。連れ立つ夫の身装故に、折角有つて居る柄の好いわが着物も着るに氣がひけた。

二人きりでは淋しくもあり、小女を置く事にした。恭うやうやしくお辭義をする桂庵の婆さんに對して、旦那様らしく納まるも、熊次には新しい經驗であつた。桂庵が連れて來た十五の女中を、駒子は「可愛い」と、ころころ喜んだ。圓顔、團子鼻のにこやかな、名を「小鹿」と曰つた。小豆あづきを茹でさすと、恐ろしく小豆が滅つた。駒子が見つけて、手をお出しと云ふと、右の手を背に、罪のない左の手をのばして見せた。兵隊などが日曜に遊びに來る家の娘で、すでにある軍曹のものであつたらしく、十五といふに白粉つけてじやらじやらして居た。小鹿の後に十三娘の「まさ」が來た。熊次夫婦が夕方から買物に往つて歸ると、玄關なり女中部屋なりの二疊にころりと手枕して、まさは螟蛉あをむしのやうに小さくまるくなつて寢て居た。

夫婦は幸福であつた。結婚五ヶ月目で、夫婦は父母になる望を見た。熊次は可笑しいやうな、嬉しいやうな、羞かしいやうな、而して恐ろしいやうな氣もちになつた。いよいよ二人も父母

第十章 阿修羅の窟に

一

駒子の父から熊次に初めて手紙が來たのは、夏休前、東京に可なり大きな地震があつて程なくの事であつた。其前に熊次が阿舅しうとに挨拶の一書を出したので、その返事かたがた地震の見舞をくれたのであつた。「以愚女御縁組仕候段大慶の至に奉存候」と書いた、山縣含雪さんに似た瘦勁な筆跡は、六十八と云ふに似合はぬ元氣な若さをもつて居た。熊次は駒子の父が駒子を手放すを如何につらがつたかを知つて居るので、而して駒子が如何に父を懷おもふかを知るので、勿論嫉妬はするにしても、決して疏略には思はなかつた。彼は時々顔知らぬ舅に手紙を書いた。日清戦争が始まると、新聞社から出した戦争地圖を送つたり、同じく社から出した日清軍記を送つたり、切々の情を寄せた。

「これが人生だね。」

熊次はさめて駒子に夢を話した。然し駒子が以前幻の話をした時熊次が格別氣にもとめなかつたやうに、駒子は熊次の夢物語を聞き流してしまつた。然し熊次は此夢を忘れなかつた。それは一生の暗示であるらしかつた。兎角現を夢に見る彼は、夢に現を見る人である。其後の生涯に、時折熊次は此夢を思ひ出した。而してそれは時々眞闇になる彼の生涯に、つねにあるほのかな安心を與へた。

わが詩神！ 爾が手をどりのぼり行かむ

九天に架す金のきざはし

大正三年十一月一日

夫詠みて妻に贈る

「大矢野さん、晚いですな。」

熊次の一言に、いささかきまり悪るく大矢野君が笑ふ。

「然し、ありがたうございました。」

清人君が友を庇^{かば}ふ。それを汐に、熊次は駒子を顧みた。

「淋しくなりますから。」

寄せてくれ、と駒子の兄の笑顔が言ふた。眼は濕^{しめ}つて居た。返事を濁して、熊次は匆々^{きそそ}に駒子を促して停車場を出て了ふた。

半月あまり立つと、駒子の母から無事着のしらせが來た。それは熊本からでなく、實家^{さと}の山鹿^{やまが}からであつた。東京逗留^{とちゅう}があまり長びいたので、熊本には何事かあるらしかつた。程經て細かな母の手紙が駒子に來た。熊次はもう駒子に來るすべての手紙を見なくては納まらなくなつて居た。駒子も少しも隠し立てをしなかつた。ためらひながらも、讀終つた母の手紙を駒子は夫に手渡した。熊次は異な氣もちで其手紙を讀んだ。母の東京留守に勇次兄が計らひとして、隱宅に女を納れ、父の世話をさした。父が一人居る程は、本宅夫婦の世話が届かず、日が高くな

去る二月上旬以來、駒子の母の東京逗留も八ヶ月に涉つた。國許でも待ちわびて、最初は機嫌のわるいたよりが來、後ではそれすらなくなつた。清人の爲にはもつと居てやりたい母も、七十近い清人の父がやはり氣がかりであつた。兎に角駒子の上の安心がほゞついたので、母はいよいよ十月の初に歸國する事となつた。熊次夫婦は平河町の借間に告別に往つた。ランプのついた薄暗い一室に、母者は二人を歡び迎へて、手製の芥子漬など出して來て茶を入れた。あくる朝、夫妻は新橋に見送つた。母者はもう乗つて居た。車内に入り來る夫婦を見ると、板の腰掛から立上つて母者は慇懃いんきんに見送りの禮を述べ、駒子が手渡す少しばかりのみやげ物の禮を言ふた。上りも一人旅であつた母者は、歸りの旅も一人であつた。手荷物も預けて來た駒子の兄は焦々いらいらして、まごまご立ちふさがる駒子を「邪魔、々々」と尖り聲とがに叱つた。

「それでは、左様なら——」

窓に兩手をついた蒼白い母者の顔を段々小さくして、氣車は往つて了ふ。

三人は足を返へして改札口を出た。其處に遽あわただしく走せつけた眼鏡に八字髻の人は、大矢野君であつた。

まりはしたない。「母は時々うそ言ひます」と云ふ駒子に會て驚いた熊次は、「父は斯く斯くの非行をした。」と云ふ駒子の母に再驚を喫した。駒子の父については、彼もやはり男の一人であつた、と熊次は思ふた。

手紙は駒子に宛ててあつた。それは男に見せぬ女同志の内證の手紙であつたのだ。然し駒子の兄もすべてを知らねばならぬ、と熊次は謂ふた。彼は珍らしく兄の家から駒子の兄に電話をかけた。相談がある。駒子が待つて居る。

駒子の兄が來ると、熊次は兄妹を残して社に出た。夕方歸つて聞くと、清人君は手紙を見て默然として居たさうな。而して勇次兄の仕打を嘖つて、「人でなし」と罵つたさうな。

兎に角骨肉の弱味で、駒子は自然に小さくなつた。而して寛大に、と思ひつつ熊次は駒子が小さくなる程われ知らず大きくなつた。

るまで隠宅の雨戸を開けに來なかつたりした。父はやけ氣分になつて居た。母が歸つても、女はまだ居て、母が居る襖一重向ふの座敷で、父は女相手に平生飲みもせぬ酒を飲んだり、平生嫌ひな自墮落隠居などが出入して色情談などする。(駒子は「羞かしい」と顔を背けた。)然し鬼に角母が歸つて來たので、結局父方母方の親戚が打寄つて、女を出し、母が元の鞘に納まつたから安心せよ。云々。

熊次は急に駒子に對して優勢になつた。然し其優勢に乗ぜず寛大にしやうと思ふた。彼は駒子を慰めた。阿母^{おつか}さんがもつと早く歸るのだつた。俺^{わし}が心配をかけたのが惡かつた。熊次はさう言つた。然し彼は心に駒子の母を咎めた。熊次は自分の母から唯の一度も父の非行を聞かされた事はない。母は一切を胷三寸に藏めて、はしたなく父を子に訴へたりする事はせぬ。十五六の昔、自分の心が父に分からなかつたり、父が家族のまだ食事中に紙を手にして近くの厠^{かはや}に急いだり、或は何か癪癢を起して氣任せに血相變へて突と立つて往つたりする父に對して抑へ難い侮蔑が熊次に涌くと、「親ではないか」と母が押つかぶせたものだ。現在のわが女に、實情で假令^{よし}あらうとも、父の非を託^{おは}く五十女を熊次は敬する事が出來なかつた。無理はない。然しあ

情をもつた英國なども、同じ嶋帝國の小さな日本が小氣味よく極東の巨人をやつつけるを異として、何時の程にか日本最良になつた。丁度對清宣戰詔勅の下つた其月の末に、日英改正條約が公布されたのが、さながらのきつかけであつた。四十年來の懸案であつた條約改正が兎も角も成就して、劈頭第一に英吉利との對等條約に批准の御名を署し玉ふ時、龍顏に御喜色溢れたさうな。條約の改正が、已に日本の意志の勝であつた。戰勝がそれを裏書きした。當初英國旗を掲げた高陞號を日本軍艦が撃沈した事に對し釋然としなかつた英國の輿論も、何時しか翕然と健氣な日本に同情した。其著しい變化を、然し外報を擔任しながら氣づかずにしまう程、熊次の心は其處になかつた。

わが新聞を提げて身も魂も戰爭に打込んだ寅一は、大部分は廣嶋に居て、元安川のほとりの宿の二階六疊二室に、社員社友と「亂暴本部」を設けて、東に東京の新聞を操り、西に戰地の從軍記者を鼓吹し、居ては軍國の樞機に獻替の機會を覗ひ、劍のかはりに筆を執つては凡そ戰爭を國民の戰爭たらしむる努力にぬかりなく、而して暇さへあれば父母に手紙を書くを怠らなかつた。事あれば廣嶋に、やや間なれば東京に、往つたり來たりして心ゆく程彼は働いた。

十月の中旬、大本營所在地廣嶋では、臨時議會が召集され、議會は軍事費一億五千萬圓を即決可決した。二十六日には第一軍が九連城を落し、第二軍が花園口に上陸して金州半嶋を席卷し、十一月の二十二日に渤海灣口の北の固めの旅順が日本の手に落ちた。日本は乗地になつた。もちつと手筈があるつもりを支那は、あまりに脆かつた。陸にも海にも眞劍生命がけの日本の前に、相手は一たまりもなかつた。日本の心は一つ、氣は一つに戰爭を擁護し讃美した。「原田重吉玄武門」「花の姿は吉野艦」「定遠は未だ沈みませんか」の垂死の水兵、死ぬるまで進軍を吹きつづけた喇叭卒、とりどりに歌ひ囃された。「支那のちゃんちゃん坊主は餘程弱いもの」と書生節は歌ひ、「四百餘州に水引かけて、進上せにやならんちうて泣き出す李鴻章」と辻賣の詩人は傲つた。耶蘇教界の日本男子外山憲三さんは、“Justification of Chino-Japanese war”を書いて世界に訴へた。日本の連勝は、尨大な支那の鼎の輕重を暴露した。最初ヨリ多く支那に同

詰めた。

「今日誰か來たらう？」

「否。」

駒子は呆氣にとられて、熊次を見上げる。無邪氣な貌は假面でないか、と猶も熊次は疑ふのであつた。

從軍記者の山下君が、出發の時、女の帶揚げでズボンをしめて居た。編輯局で社會部記者の吟夢と云ふのが見つけてからかつた。山下君は少し藪脱やふにらみの眼でちらと熊次を見た。熊次はぎくりとした。その帶揚げが不安になつた。もしかしたら駒子のではあるまいか。

「帶揚げを無くしはしませんね？」

「帶揚げ？」

駒子は怪訝けげんの眼を上げる。

帶揚げは皆有つた。

「誰かにやりもしませんか？」

兄が斯く戦ひの國に働く時、弟は家を修羅場になして居た。駒子が母になる最初の望は、間もなくはづれた。それは熊次にも駒子にも失望であつた。もとより彼等は若かつた。然し最初の失望は、やはり打撃であつた。熊次は次第に焦々し出した。嫉妬がまた彼を苦しめ、駒子を苦しめ出した。熊次は自分が與かり知らぬ駒子の過去について、何と云ふ事なしに駒子を妬んだ。自分が駒子を知つたは昨今の事だが、駒子にはわが少しも知らぬ二十年の生活がある。自分が駒子を知る前に、駒子を見、而して恐らく愛した男は何程あるか知れぬ。駒子がわが懷に達するまでの間に、幾何の誘惑の中を彼女は通つて來たらう！ 而して彼女は全く無事であり得たであらう乎？ 彼女が告げた外に尙祕密がないであらう乎？ 想像は無中に色々の場面を組み立て、われとわが描いた脚色に熊次は惱んだ。駒子が學校に出て居た程は、熊次は外を妬んだ。駒子が學校に出なくなると、熊次の恐は内にあつた。熊次は留守を恐れた。此頃はもう女中も居なかつた。駒子の外に誰も居ない一日の留守に、誰が來やうと儘である。何様な男の手紙が來やうと、熊次は知らないのだ。夕方社から歸つて格子戸引きあくるのも、彼には一の心配であつた。沓脱に履物がありはせぬか、あつたのではないか、と氣味わるく彼は三尺の土間を見

熊次の嫉妬は際限を知らなかつた。夏の汗ばが大袈裟になつて、駒子は行歩になやむ程になつた。然し熊次が思ひ切つて彼女を醫者にやる迄には、煩悶の數日がつゞいた。秋になつて、駒子の虫齒に孔があいた。熊次は駒子を齒科醫にやる事を嫌つた。ある不埒な齒科醫が、若い女に無禮をする事を毎々新聞で知る熊次は、自分の駒子を其様な危険に近寄せたくなかつた。

「俺が填めてやる。」

熊次は消護謨を削つて、駒子の虫齒の孔うめにかかつたが、勿論成功する筈は無かつた。齒科醫の嫌疑故に、駒子の虫齒は痛まぬ限りまあ、まあと無際限に放擲された。

熊次は何時とはなしに駒子を打つ事を始めた。夏中初めて駒子を打つた時、世の中も眞暗になつたやうな悔恨を覺えた。然し口が切れてしまつた。一度ある事は二度あつた。而して二度が三度と打つことも平氣に段々なつた。駒子は黙つて唯打たれて居た。張合のない熊次は、一人で罪人になる慘さじれつたさに、やけになつてますます吾儘を募らせた。

「あなたは屹度那樣な辛抱でもしてくれるね。」

熊次はさう言ふて、駒子を試すかの如く暴威を振ひはじめた。

「誰かに？」

駒子はますます怪訝な^{かま}貌をする。噓らしくもない。噓なら、あまりうま過ぎる。

熊次は不安心ながら安心する外はなかつた。然し警戒の網を熊次は嚴重に張つた。旅順が落ちて、山下君が歸り、分捕の清國軍旗、偃^{えんげつ}月刀など戦利品を飾つて、山下君は兄の家で戦争談をした。邸内の女子供は一人残らず聞きに往つた。二度まで女中が呼びに來たが、熊次は到頭駒子をやらなかつた。

ある日、熊次は新聞の死亡廣告に、「海軍少尉」を見た。戦争が始まつて以來、陸海軍人の死亡廣告はさらであつたが、此一つが不思議に眼を牽いた。西村茂中——それは駒子が化粧匣二個の負債をして居る少壯軍人、炬燵に入つて駒子に手紙を書いた人である。駒子は其少し前、思ひもせぬ西村を夢に見た。それから間もなく、熊次が死亡廣告に彼の名を見たのであつた。廣告で見れば、それは戦死でなく、病死であつた。初めて駒子に化粧匣の事を打明けられて顔を曇らした熊次は、彼の死亡で顔色を直す事は出来なかつた。それは熊次が敵とし鬪はねばならぬ雲霞のやうな大勢の中から、たつた一つがしばらく引き下つたに過ぎない。

て來なさい」と熊次は直ぐ駒子を罵つたが、自分は機嫌次第に半分云ふて後を濁したり、時には呆れる程の下司口をきいた。

熊次は要するに自分の吾儘が良いとは思はなかつた。疑ふも自分がわるく、叱るも打つも自分が悪いに相違なかつた。彼は駒子を可哀想に思ふた。心平なる時、彼は日記に書いた。

「余は惡魔なり。天の使よ顧みよ、駒子の夫は惡魔なり。然も駒子は無罪の天使なるを。」

さう日記に斷つて、熊次は日に日に惡魔を募らせた。社に出て猫のやうな熊次は、歸ると虎であつた。玄關の二疊に出やうが晚いと云ふては嘖つた。謝罪が遅れると、直ぐ手が飛んだ。誰か留守に來たらうと詰つては、駒子の否定を疑ふた。夕の散歩に出ては、氣に喰はぬと芝の琴平前から駒子を捨ててさつさつと一人歸つた。神田の勸工場で買つた筆を駒子が落したと云ふては、其勸工場で買ふた大きな黒柿のステツキで撲り、無抵抗な駒子が死んだやうに長くなることさへあつた。

駒子は熊次の氣分が解からなかつた。自分に不足故と思ふた。學校の卒業成績が氣になつて居る駒子は、其弱身にすべてを歸した。最近國許のごたごたも弱身を増すばかりであつた。駒子

熊次は滅多に笑はぬ人であつた。笑はぬ熊次は、笑はるるを恐れた。駒子はよく笑つた。駒子が笑ふと、熊次は直ぐ嘲笑と思ひ做した。而して無禮を嘖つた。駒子はうつかり笑ふ事も出来なかつた。

結婚の初に駒子は曰ふた、私は初淡く、段々濃うなります。然し淋しい熊次は、最初から濃い事を妻に求めた。而して駒子があつさりして居るを物足らなく思ふて、「水臭い」と熊次は曰ふた。少し氣に入らぬ事があれば、

「下宿して了ふ。下宿の方が餘程好い。」

と曰ふた。「下宿して了ふ」が彼の口癖であつた。以前一人で父母の家に居た時も、時々氣まぐれに下宿した。自分の家をもつても、少くも口だけは直ぐ下宿に走つた。駒子は色々に苦情を見出す夫にはらはらした。白足袋を嫌ふ夫に、ある時駒子の買つて來た紺足袋が大き過ぎた。

「斯様な大きな足袋！ 足が二本も入るぢやありませんか。」

と熊次は顔をしかめた。

駒子は口が重く、時々甘えるやうな舌足らずの口を利いた。何かと云へば、「修辭學でもやつ

drum”。私は太鼓のやうに毎日うたれる、と熊次に言ふ日もあつた。其言はひしと熊次の胸を刺した。駒子が可哀想でなくなつた。罪の無い彼女を責め苛^{さい}なむ自分を咀^くつた。もう決して彼女をいぢめまいと決意した。然し其決心は直ぐ破れて、駒子が一つとちれば腹を立て、果ては阿修羅の如く暴れて、打ち打擲をはじめた。而して其果は悔恨の後腹をいためて、澁い顔してふさぎ込んだ。駒子は夫の心底が分からなかつた。夫の亂暴は唯自分を嫌ふ故と思ふ外はなかつた。家の外で熊次の身邊に那樣^{どう}な周囲があり、熊次の過去に那樣なわが知らぬ祕密があつてそれが現在に働くか、思ひ知るには駒子はあまりに初心^{しん}であつた。熊次はまた押しても押しても駒子が唯受身に引くのみで手答なく、幸福にのつぺりした彼女の心にはわれとの間に一膜の隔があるやうにもどかしく思はれてならなかつた。知識慾^{ちしきよく}に唯没頭して、情育^{じやういく}を忽諸^{こつしよ}に附された官學の四年に、耕されずに居る駒子の感情を靜に耕して、徐ろに成長を待ち足並を揃へる事を熊次は知らなかつた。性急の彼は一氣に一になるをあせつた。

熊次の矛盾は、滿ち干る波の如く駒子を渦に捲いた。今恐い顔して怒る夫は、やがて「おこちん、交趾^{こうちん}の忽必烈^{こつびれつ}」と五つ六の女兒扱ひに舐める如く可愛がる熊次であつた。火の出るやうに

は夫の氣に入ると思ふ事は遁さず努めた。熊次は一つの竹の行李を駒子に示して、これは大切なものだから見ないで、と曰ふた。夫の言葉を大切に、駒子は一度も開けては見なかつた。時には夫の日記は見たが、竹の行李の内容は見やうともしなかつた。一ツ木に晝火事があつて、火の子が宅にも飛んで來た。一人居た駒子は、萬一の用心に先づ竹の行李を風呂敷包にして、いざとなれば持ち出す覺悟をした。其夕熊次が社から歸ると、駒子は其話をした。喜ぶと思ひの外、熊次は濟まぬ顔をした。竹の行李には「春夢の記」が入つて居る。駒子はほめられる當はづれてがっかりした。

生れて二十一年、ただ可愛がられ、ほめられて來た駒子は、初めてわれに不足を云ふ人、罵る人、剩さへ打ち打擲をする人をわが夫に見出したのであつた。彼女は生涯に初めて世の中はつらいものと思ふた。如何しても泣けなかつた昔に引易へて、今は日々涙にくれぬ日は無かつた。彼女は同じ東京に居る兄にも、故郷の父母にも訴へなかつた。況して熊次の父母に言ふ事ではなかつた。駒子の相手は、飼つて居る子猫一疋の外になかつた。子猫を相手に、駒子は「一つとやあ」を作つて、自分の上を自ら歌ひ、泣いて自ら慰めた。不自由な英語で、“I am like a

もなくちれて駒子に迫ると、駒子は突然紫の帶どめを解いて手早く頸くびに巻きつけた。

「左様なら。」

熊次の眼の前で、駒子は縊くびれやうとした。熊次は手荒く其帶どめを引たくつた。

然し熊次の氣分は中々それでも直らなかつた。

學校をやめてから、時間があるので、英語の自習に熊次は *Raselas* を駒子に讀ました。字書と首つ引きで讀む駒子に、それは樂らくではなかつた。其かはり畫かを描かけられると、元氣になつた。駒子は畫が好きであつた。學校で日本畫を習つたので、而相めんさうなど云ふ畫筆と共に、薄美濃紙や、各種日本繪具を持つて居た。熊次が見た習作は、いづれも手際なものであつた。家の直ぐ下の空地に銀杏の大木があつて、霜に近い季節のある葉はまだ緑に、ある葉はもう金色に、ある葉は染め分けにとりどり美しい色彩を見せた。駒子は熊次の勧めで美しい銀杏の葉を寫生した。其朝も熊次は散々の不機嫌で出社した。夕方歸ると、銀杏の寫生は半分しか出來て居ずに、駒子は妙な顔をして居る。

「私、あの、雌黃しやうを呑みましたの」

烈しく叱つた後で、肉の愛を強いたりする夫は、妻に不可解の驚異であつた。襖一重の此方で自分に顔をしかめる夫が、座敷に出ては別人のやうに客に對する氣分と面の使ひ分けも、不思議の一つであつた。すべては駒子に新しい経験であつた。而してすべてを知りたく學びたい駒子に、経験は少なくとも多少の引力をもつて居た。然しあまりに急調な催促が、駒子の足を空にさせた。駒子は跟いて往けない失望に段々陷つた。

熊次はすべて初が大切であつた。一度やり損ずれば、すべてを咀つた。駒子を一度打擲したが最後であつた。どうせ疵がついた、どうせ駄目、と自分で高を括つてしまふた。悪いと思ひつゝ駒子をいぢめる事を禁じ得なかつた。それが癖のやうになつた。毒を喰はばの捨て鉢氣分になつた。熊次の細胞には、自分が歴て來た苦艱のすべてが印象されて居る。彼は自分が嘗めただけをことごとく駒子に嘗めさせずには措けなかつた。自分の妻が自分より幸福である事を彼は容せなかつた。熊次は自分が思ひ知つただけを、われ知らず駒子に思ひ知らせた。熊次の過去を知らぬ駒子に、それは全くの不意打であつた。駒子は動顫した。來る日も、明くる日も、熊次の不機嫌は唯募るばかりであつた。駒子はとても負ひきれなかつた。ある日、熊次が際限

ると、小猫も惨い目に遭ふた。熊次は怒に任せて小猫を引つかみ、鼻に投げつけた。腰がぬけたやうに猫がひよろひよろになつた。ちつと見て居る熊次は、今度は小猫を引捉へソップの皿に口を押つけた。而して小猫が弱つて思はしくソップを飲まぬと、また新に悶れてヨリひどい目に小猫を合はした。熊次が無意味な歌ともつかぬものを鼻聲あげて眞顔で唸る時、駒子は苦笑を禁じ得なかつた。失ふた尊敬を急に取り返へす可く熊次がヨリ馬鹿らしい仕打に出る時、「もつと腦の蛋白質を多くして上げなければ」と駒子は憂はしい顔をした。母や兄から始終聞き鑿いて居る自分の馬鹿を正しく妻の口から裏書されて、熊次はますます毒血氣分になつた。彼は自分に失望した。失望がますます彼の馬鹿を募らした。毎日毎日斯様な生活をして居て、末は如何なるであらうか？ さう思へば、恐ろしい氣がする。然し熊次は騎虎の勢踏み止まる事が出来なかつた。

母は毎も熊次を嘆いた。「自分をちやちやくちゃんにする。」全く熊次は時々自分に愛想をつかし、自分自身をめちやめちやに踏みにじつた。彼には初が何より大切であつた。最初の失敗は、直ぐ彼を捨身にした。一の幻滅は、もうすべてに面を背けさした。熊次は八九歳から日記を書

熊次は驚きつとした。雌黄と云ふ書具が毒である事を知つて居る。駒子は毒を嚙んだのだ。銀杏の寫生をして、雌黄を溶といて居ると、ついふらふらと小さな塊かたまりを嚙んでしまつたのであつた。而して恐ろしくなつて、寶丹を後で嚙んださう。

熊次は冷やりとした。彼は黙つて駒子の顔を眺めた。さう云ふ中にも、もう毒がまはつて居るかも知れなかつた。そんなに死に牽かるる駒子とも、彼は知らなかつた。結婚の初、溜池の散歩に、駒子は曰ふた、愉快でなければ生きて居る甲斐はありません。半歳で彼女は最早毒を嚙んだ。

熊次は息を呑んだ。如何なり行く事かと思ふた。醫師の手當もなくて、格別の事もなく過ぎたは、勿怪もつげの僥倖であつた。

批評的に人を見ない駒子も、熊次の正氣を疑はねばならぬ時があつた。自分が打たれるばかりか、小猫が時々犠牲になつた。熊次は昔から犬好きで、猫はそんなに好かなかつた。手ざはりの軟かで、而して何だか心の冷たい猫は、彼の氣に喰はなかつた。癩癩まぎれに、薄面倒で小猫をたたき殺した昔もあつた。世帯を持つと小猫を飼つたが、駒子が非道ひどい目に遭うやうにな

り、星野君と薄笑ひして寄席に往つたりした。外に弱い熊次は、阿容おひと馬鹿にされた。

駒子の小學校も、缺勤四ヶ月に涉るので、望の通り免職の辭令が來た。而して俸給の事に關し、當人若くは代人に來てくれと云ふて來た。熊次は其小學校に往つて、初めて校長に會つた。高等師範出と云ふ色黒八字髯の校長は、着流し姿の熊次をぢろぢろ見て、先づ「御大兄」の健康を問ふた。缺勤すると、最初一ヶ月は全給、二ヶ月目は半給、餘は三分一給になるので、駒子の手に渡る可き金が二十六圓ある事を校長は話した。勿論熊次はそれを受くる事を辭退した。それなら學校に生徒の腰掛を寄附しては如何、一脚一圓、三十脚も寄附したらと校長は曰ふた。三十脚とすれば、四圓足さねばならぬ。二十五脚寄附して、差額壹圓受取り、永久に小學校を熊次は出た。數年後に、熊次は公金費消の罪名を帶びた校長の顔と名とを新聞に見た。

二週間ばかりすると、東京府から駒子の名宛で、小學校に腰掛二十五脚を寄附した段奇特に付木杯一個賞す、と云ふ書付と共に、中型の朱塗の木杯を桐箱入りで送つて來た。思ひがけない御褒美に、熊次は駒子と苦笑の顔を見合はせた。義務年限を蹂躪くつして、木盃の賞賜は、櫟くすつた皮肉であつた。

いた。一字書き損ずると、初から破いてしまつて、悉皆書き直さねば氣が濟まなかつた。然し日記は書きも直さう。生涯其ものは、最初から生き直す事は出来ない。熊次が二十七年の生涯は、多くの失敗と汚點を印したままにもう儼然とした過去である。其過去をふりかへる毎に、熊次の勇氣は挫けた。どうせ疵のついた體だ、と彼はさう自分を見くびるのであつた。一の新しい境涯は、彼に新しい望を起させた。然し其境涯に一つ氣に喰はぬ事があれば、彼はもう厭になつた。折角新しい氣分で始めた結婚生活も、彼や此の失望と不快から、地獄に彼はしてのけた。

然し夫婦は若かつた。苦痛も、失望も、若い肉若い心は直ぐ後にした。熊次が夜深く雑誌の原稿を書いたりする時、駒子が餛飩粉で菓子を焼いて持つて來たりして、二人は樂しかつた。暗い内に二人で家を出て、瀛車と馬車で高尾山に往つて、龍膽の花を摘み、秋山の香に浸る時、二人は樂しかつた。相乗車で京橋の三橋亭に往つて、一皿十五錢のライスカレーを食ふて歸る時、二人は樂しかつた。二人で現在にさへ居れば、二人は樂しかつた。

それを面當てかのやうに、留守の編輯を承はる大矢野君が、電話で熊次を呼び寄せて當直を振

第十一章 無底洞

暫く女中が居なかつた後、十二月に入つて、熊次の家ではまた一人置く事にした。ある夕、熊次が社から歸ると、玄關に出迎へた駒子の後から若い女が辭儀をした。日間桂庵が連れて來た女中のお竹であつた。後で義姉の安子が駒子に「あの女中は、森さんのお嬢さんに肖て居ますね。」と言ふて居たが、さう云へば成程肖て居た。森のお喜代さんと云へば、新婚間もなく熊次が駒子と出かけやうとして本宅の門を出ると、向の門前に立つて居た人影がすと引込んでしまつた。それはお喜代さんであつた。其後一度も見かけなかつた。駒子の母は、女中を雇ふなら老女を雇ふやうに、と駒子に注意した。駒子も物馴れた老女が欲しかつた。然し熊次は十代の少女を擇んだ。

旅順が落ちてから、兄はしばらく東京に歸つて來て居た。歸途に神戸に寄つて見ての話に、沼山の叔母もめつきり弱つて居るといふ事であつた。母の直ぐの妹で、沼山先生の室であつたお

熊次の父は、其昔郷里の小學校基本金に地所を賣つた代金千何百圓を寄附して、三組の銀盃を下賜された。曾祖父以來、郷里の教化の爲には率先盡力したもので、父は家傳の奉仕をしたのであつた。桐の御紋章を刻した光り輝やく三組の銀盃は、子供の眼にも美しいもので、正月元旦その銀盃で屠蘇を飲むのも面白く晴れがましい事であつた。父の妹婿の眞宗の寺の住持が、義兄に倣つて、姥唄うばかの臍線へそぐりの中から若干の小學校寄附をして、小さな銀盃一個いただいて嬉しがつた事を熊次も覚えて居る。それから思へば、居ながらにして降ふつて來た駒子の木盃は、更に一段の皮肉であつた。小學校をやめさしてもらうだけでも、大變な恩惠である。それに木盃の御褒美は、全く國家にお氣の毒であつた。

酒をのまぬ家には不用の品ながら、また入用の時もあらう、と美しい朱塗の盃を熊次は駒子にしまはせた。

歴を急に書いてくれとの電報が熊次に届いた。熊次が母に問ふて略歴を書き送る間もなく、叔母安眠の電報が来た。葬式に、盲目の加壽が叔母の棺に縋りついて嘆いた事が東京にも聞こえた。熊次は更に叔母の追憶を家庭雜誌に書いた。春に本山の姉が熊本に逝き、今は一番親しい妹が神戸に眠る。それは母に重ね重ねの打撃であつた。冬になつて不元氣がちの母は、到頭病床について了ふた。

駒子が看護に出かけた。熊次も時々顔を出した。病氣は氣の弱りで大した事はなかつたが、母はあたりの賑やかなのを好んで、病氣の時は殊に我儘を云ふた。熊次が蜜柑を買つて來ない、と唸やく母を駒子は驚いた。熊次は駒子を母の爲にすら手放したくなかつた。別して、兄が歸つて居る今、駒子を隱宅にやりたくはなかつた。然し義姉は手一ぱいだし、介抱役は駒子に越すものはない。少なくとも晝の内數時間は、駒子をやらねばならぬ。熊次は女中の竹と二人居る時が折々あるやうになつた。

女中は案外世馴れて居た。世馴れた女中は、若い主人夫妻が「しもたや」といふ東京語さへ知らぬを笑つた。彼女が女中に似げなく論語を持つて居るのは、熊次に不思議であつた。座蒲團を

ちせ叔母は、嗣子の又雄さんが再度の洋行について、先妻腹の孫二人と叔母其人よりふるくから沼山に居る老女の加壽を將て、昨夏東京から神戸に行き、女婿柳川牧師の家に世話になつて居た。今治、京都と熊次は又雄さんの世話になつて居る間、此叔母に一方ならぬ心配をかけた。母も女同胞七人の中に、熊本の伊倉姉と此沼山妹とは、姉が十五、自分十一、妹が九歳と云ふ小娘時代に、姫鑑^{ひめかがみ}を讀んで女の道を踏み迷ふまいと云ふ堅い誓を立てた三人組の特別な間柄で、親みも深かつた。さまざまの苦勞をしぬいた伶俐な沼山叔母は、京都で一度發した中瘋の爲に却てのんきになつて居たが、それでも他目に氣の毒な事多い東京住居の間、叔母は母を力にして居た。神戸に移ると、加壽が盲目になつた。柳川家でも、切りつめた牧師生活に、病人子供の世話は大抵でなく、東京の親類達に加勢の相談が柳川のお美枝さんから心易い熊次まで言ふて來た事があつた。熊次が送つた新婿の寫眞を喜んで、叔母が自筆の返事をくれたのは夏の中であつた。手紙は、春に亡くなつた津森家の嫡女本山伯母の事など悼^{いた}んで、「とかく人は逢ふた時が別れに候」と心細い薄墨の手紙は、終も遠くない叔母を思はせるのであつた。叔母は段々衰へて往つた。十二月の初旬、病氣再發のしらせが來た。程なく危篤の電報と、叔母の履

女中の竹であつた。

「何だね？」

「雨戸がひとりでに倒れつちまつて——」

それで氣味が惡くなつて出て來たと云ふのであつた。

歸つて見ると、座敷の雨戸が一枚庭へ倒れて居る。女中にランプをとらして、其處此處見廻つたが、人らしいものの影もない。熊次は雨戸を立てた。

いつものやうに、茶の間に座わつて、熊次は社から持ち歸つた

The Century illustrated

magazine を開いた。ランプの下手に竹は座わつて足袋のつくろひをして居る。ランプの蔭から熊次はぢいと半俯いた竹の顔を見て居たが、突と立つて格子窓から外を見た。臍に白い廣大路に人影もない。

「竹、一寸お出。あれは何だね？」

女中はもぢもぢして居る。

「一寸お出で、一寸。」

もつて居るのも、女中には不似合に思はれた。身の上を聞いても、しれしれ笑つて云はなかつた。熊次は日に日に彼女に好奇心を募らした。社から歸るも、玄關が賑やかで、唯ならぬ昂奮を彼は覺えた。彼女が來て二日目の夕、駒子の後から出迎へた彼女が立つ拍子、白足袋の一部が燃えるやうな色に汚れて居るに不圖眼をやつた熊次は、顔をしかめて後で駒子に注意して足袋を更えさせたが、その一瞥が不思議に熊次の頭に焼きついてはなれなかつた。熊次の頭は日に日に濁つて往つた。無邪氣な駒子も、熊次が頭の向き方を感じずに居れなかつた。女中などを全く別物に思ふて居る駒子は、熊次が女中に座蒲團を敷かせたり丁寧にし過ぎるをあるまじい事に思ふた。「竹を寝かし、^{あなた}卿もおやすみ」と熊次が平氣に言ふ時、駒子は主婦を後に、女中を先にする夫の不都合を不快に思ふた。駒子は不快に思ふた。然し口に出すを憚つた。

ある夕、夫婦は母の病床近く居た。母の氣分はすぐれなかつた。母がすぐれぬので、病床近く卓の前に座わつて居る父もふさいで居た。鬱陶しい六疊の空氣に焦々して居た熊次は、終に歸るべく立上つた。駒子は居残つた。

初冬に珍らしく生溫かい薄月夜である。ポンプの井の邊まで來ると、向から人影が歩いて來る。

をしながら、伏目になつて足袋のつくろひをはじめた。

庭口から駒下駄の音がして、駒子が歸つて來た。

破れかぶれだ。縁の雨戸をあけるなり、投げ出すやうに、怨ずるやうに、熊次は言つた。

「留守にするもんだから。」

事ありと覺つた駒子は、息をはづませて、ランプの前に座を正した。而して事の次第を夫に訊いた。それはいつもの熊次に打たれてぼんやりして居る駒子でなかつた。夫をさばく審判者の威嚴が彼女にあつた。

熊次は竹を呼んだ。而して構はぬから一切を奥さんの前に話せ、と曰ふた。

女中が途切れ途切れに話すと、駒子の顔色が色々に變つた。烈しく動悸が拍つて居るらしかつた。女中が言ひにくさうに口を噤むと、熊次は後を促した。到頭もう大丈夫と思ふて留まつたところまで話させた。

駒子は長い溜息をついた。

*

*

*

*

女中が立つて來た。而して格子窓から覗いた。熊次はいきなり彼女の肩に手をかけた。格子窓の外には勿論何もなかつた。

「彼方あつちへ参りませう、彼方へ参りませう。」

おどおどして、竹は逃身に身をもぢつた。

熊次は囁ささやいた。

「――」

竹が泣き出した。

喫驚びつくりしたやうに、熊次は手をはなした。

竹は自分の道具がしまつてある押入の前に跪ひざまづくと、ケンドンの戸を開けて、新しい前掛を出してしめはじめた。

熊次ははつとした。而して涙を拭き前掛をしめて出て行かうとする竹を、熊次は押隔てた。

「御免よ。もう、大丈夫。大丈夫。大丈夫ぢやないか。」

主人の辭色に安心したらしく、竹は顔を拭いて、そこらを片づけると、まだ鳴咽をたつの後あとしやくり

やつた。

其夕、熊次は面伏せな思で歸宅した。駒子が出迎へ、竹も出迎へた。隱宅に往つて見ると、母の容體もわるくはなかつた。

今朝熊次が出た後で、駒子は三疊を出て、竹を呼んだ。昨夜は驚きに茫となつて、事の次第もよくは解せなかつた。駒子は竹を促して更に一伍一什いちぶ いっしを聞いた。竹の身の上もくはしく聞いた。竹は已に人妻であつた。夫は漢學數學の自宅教授をして居たが、豫備の歩兵で召集され、出征したので、彼女も女中奉公する事になつたのであつた。論語を持つて居たり、座蒲團をもつて居たりした仔細がよめた。此家に來る前に、ある新聞記者の家に居たが、若主人が「搆かまつた」ので暇をとつたさうな。

熊次は赤面した。人妻と聞いて、うんざりの氣もした。駒子は女中によく貞操を守つた、とほめてやつた。

「卿おなは亭主もちさうだね。何故早く云はなかつた？」

駒子の留守に、熊次は女中にさう云つた。竹は伏目ににやにや唯笑ふて居た。

夜が明けると、熊次は家を出た。面目ない、歸らぬ、と卓の上に書置きをした。

ぶらりと家を出た熊次の足は、やはり新聞社に向ふた。例にない早い出社をした熊次は、まだ掃除が済むばかり床やテエブルの濕つた編輯室に入つて、自席の椅子に身を落した。而してテエブルに兩肱ついて、窓の外を眺めた。泣き出しさうな師走の空の下に、人家の屋根瓦が黒く凍てて居る。考へねばならぬ、と思ふが、頭は空洞になつて、欠伸びばかり出る。

熊次は追々に入つて来る社員の顔を見るも面伏せであつた。ジャパンメエルやガゼットをひろげて、心が少しも其上にとまらぬ。曇つた寒空から小雨がほとほと落ちて來た。窓から見る汚ない家々の瓦が濡れて鉛色に曇如と光り出した。

駒子は如何して居るだらう？

雌黄を嚙んだり、眼の前で縊れ死なうとした當時を思ふて、熊次は不安に襲はれた。

午後少し過ぎると、小使が手紙と風呂敷包を持つて來た。手紙は駒子ので、風呂敷包は高足駄であつた。洋傘も下へ來て居た。手紙は、熊次の書置を驚き憂へて、何卒夕方は早く、と書いてある。熊次は吻と息をついた。歸る、と返事を書いて、薩摩下駄と共に使の車夫に持たして

第十二章

別離

二三日經つと、竹は給金二圓五十錢の前借を申出た。弱身がある主人は、否めなかつた。金を受取ると、用事を申立てて、竹は雨傘を借りて出て往つた。二三日歸らなかつた後、桂庵が來て暇をとつた。前借の一部は返へしたが、傘はかへらなかつた。

それから間もなく、ある日熊次は新町を通つて居た。唯有る家の前を通ると、家内にばたばたと足音がして、格子から二三人覗いた。それは暇をとつた女中に違ひなかつた。囁やく聲を後に聞き聞き、熊次は熱くなつて大勝に歩るき去つた。

熊次の家は、また夫婦に小猫一疋の生活に復へつた。

*

*

*

*

直ぐ晦日が來、大晦日が來、熊次、駒子が結婚第一年の明治二十七年は、斯くて永劫に過ぎて往つた。

た。何と云ふても日本の國の礎いしずなが固まる今年だ。熊次はぞくぞくしてただは居れなかつた。和歌、新體詩の出たためを數限りもなく作つて、此氣分を出さうとした。去春までは他人であつた駒子の父母にも、勇ましく「何を思ひ何を思はん初日の出」と云ふ俳句入りの年始狀を書いた。熊本でも、あれから無事で、駒子の父は隱宅前に築山を築いたり樂んで居るとの事で、母者の筆で小松をあしらつた其築山の畫などかいてよこしたのは、暮の内であつた。

松の内過ぎて、ある日小猫が失せた。搔き消すやうに居なくなつた。次の夜、駒子は妙な夢を見た。駒子の父が蒼い顔して寢て居る。母も寢て居る。そのみか、異母兄の勇次も寢て居る。不思議な夢、若しかしたら病氣して居るのでないでせうか、と駒子は顔を曇らす。變な氣がしながら、熊次は兎や角言ひ慰めて數日過ぎた。

突然熊本たよりが二通同時に駒子の母から届いた。はがきは新年の御祝儀で、裏に菊池貞さだ、表に熊次の名宛と「御報」と書いた手紙には、舊臘から父が發熱病臥の趣が書いてある。加之駒子が異母兄勇次もチフスで餘程重症といふのであつた。

駒子の夢が半分中つた。それにしても、何故母者ははがきと手紙を同じ日附で二様に出したの

明治二十八年が來た。

日清戦争の第二年、陸にはすでに旅順を落し、海には北洋水師も威海衛に屏息し、大勢は已に決して居る。朝鮮は日本の保護の下に、支那をはなれて獨立を宣した。去年七月英國と、十一月米國との改正條約が公布されて、日本もやつと世界的に一人前になる。國運隆々とのほる朝日の霽々はれはれした新年に、大元帥陛下は廣嶋の大本營に御出になるので云はば御留守の東京も、千門萬戶松竹立てて旭旗勇ましく、兒女がつく羽子さへ「勝ち、勝ち」と今年は殊に勇ましい音がする。肥後の家でも、母も兎や角起き出て、父母、兄夫婦、子供打揃ひ、熊次夫婦も顔を出して、めでたい元日を祝ふた。

新な年は熊次の氣を新にした。去年は散々であつた。今年は好い事がありさうでならぬ。舊臘二度目でもらつた小猫が、元日早々元氣よく庭の李の木にかけ上つたのも、好い幸先さいさきに思はれ

「お駒さんを取り返すのぢやあるまいか。」

と兄は熊次の顔を見た。熊次もそれを懸念して居る。已に一度東京でも其議が駒子の母兄から持ち出された。熊本で二度目が出たかも知れぬ。病氣は眞實でもあらう。然し病氣を汐に駒子を引取るのかも知れぬ。うつかり駒子はやられぬ。

熊次は早々に社を出た。歸る途々、色々の疑惧と不快が起る。つい數日前直筆の手紙を書いた駒子の母が急に病勢悪しといふも變。如何に血を分けた間でも、繼母を後にして弟を第一にする正太君の了簡も感心せぬ。それに駒子に來て欲しければ、駒子の夫である自分熊次に正面から打電すべきだ。それに清人君に宛てて、加之「コマタケヤレ」とは何事か。

歸宅した熊次は駒子を諭した。位置が違へば、すべてが違ふ。菊池の女駒子は、一電の下に直ぐ熊本に走らねばならぬ。肥後熊次の妻駒子は、さう何もかも差措いてとつかは走せ行くべきでない。

其處に清人君が來た。國許へは直ぐ照會の電報をうつたが、勿論まだ返電は來ない。然し父母兄の病氣が打電を要する位では、一刻を爭ふから、駒子を連れて直ぐにも立ちたい。

か。祝儀、不祝儀を分けたのでせう、と言ふ駒子の言葉は當然であつた。然し熊次は其様な事にも母者に裏表があるやうなうれしくない感がした。然し父兄の病氣は確である。早速見舞状と共に、風月堂からデセエルの罐を買つて熊本に送つた。

五六日過ぎ、突然駒子の兄が來た。一通の電報を手にして居る。それは異母長兄の正太さんから清人君に宛てた電報であつた。

「ユウジ九シ一シヨチハヨシハハヤマイアシキコマ〇タケヤレ。」

戦時の電文、不明はありがちだが、これは随分變だ。兎に角父兄の病を報じた母者自身病氣になつたと見える。勇次重體も知れて居る。チハヨシは「父は好し」か。清人君は「處置はよし」かも知れぬと云ふ。「コマ〇タケヤレ」が變だ。「駒だけやれ」としか讀めぬ。〇が分からぬが、さうしか讀めぬ。駒だけやれ——熊次は不快を感じた。

熊次は電報を持つて車を飛ばして社に往つた。新年早々思ひがけない黒雲が頭の上に押つかぶせて來た。轟く胷を押へて、熊次は社に急いだ。

兄を應接間に呼び出して、熊次は電報を見せた。兄も眉を顰めた。「コマ〇タケヤレ」が變だ。

熊次が歸るとやがて、本宅の女中が駒子を呼びに來た。大分たつて、熊次も呼ばれた。

戦争以來、兄の家には折々不時の客來があつた。ある時、茶の間で兄の高聲と酒を飲んで來たらしい客の高聲が入り亂れて、熊次は心配の聞き耳を立てた事があつた。それは兄をめぐつて遠くなり近くなる男の一人が、急に豫備兵士として出征を命ぜられ、妊娠中の妻を残して行く心配を打明けに來たのであつた。彼は素面で來得なかつたのであつた。押問答の果は、酔客は兎に角心安らに出征し、而して新聞には時折一兵卒の通信が掲げられた。

其同じ茶の間で兄の高聲がして居る。

「ああだがさう情に訴へるなら、詮方がない。」

隱宅の方では、母の聲として、

「さうだらう。事情を聞いて見ると、どうして、他の矩^{よこ}ぢや分^{かね}からぬ。無理は無か、無理は無か。」

母は鼻をつまらせて居る。

ランプをのせた八疊の食卓に眩をついて、兄は主座に、それに對して駒子の兄は滿面涙で居る。

熊次は電文の不都合を指摘した。随分此方を踏みつけにした仕方である。駒子をやる事は御断りする。段々熊次は激して來た。而して言葉荒く刎ねつけた。駒子の兄も怒を含んで、

「ぢや」

と立去つた。

清人君が去ると、熊次の心の揺り返しが直ぐ來た。彼は自分の尤らしい理屈のいかに無意味であるかを感じた。兎に角駒子の父母兄は病んで居る。死にかけて居るとも覺える。子女が父母の最後に走るに、何の理由もヘチマもあつたものではない。熊次は駒子に曰ふた。

「清人さんにああ云ふたけれども、やはり往つた方がよい。行かずに、若しもの事があつたら、生涯の寢覺に障る。」

日の暮れ暮れに本宅に往つて見ると、兄は未だ歸つて居なかつた。駒子の兄が茶の間の六疊に危座して、主人の歸宅を待つて居た。

「あ、お出でしたね。」

と云ふ熊次に、駒子の兄は唯苦笑を酬いた。

「女と云ふ者は、覺期して居ても、其期になると中々周圍に絆はだされ易いもんだから。」

兄は心元なげに期を押した。

「お駒さんは大丈夫です。」

熊次がそれを押かぶせるやうに言ふた。

朝が早いので、駒子は此處で暇を告げた。母も、駒子も、義姉の安子も涙にくれて居た。立ちさまに義姉は、

「何卒歸つて來て下さい。何卒歸つて來て下さい。」

と駒子の手を握りしめた。

*

*

*

*

*

まんぢりともせぬ一夜が過ぎた。

未明に起きて駒子が炊いた朝食の卓に向ふたが、行く駒子も残る熊次も、辛く一碗の箸をとつた。駒子は留守の不自由を氣遣ふた。「辨當でもお取りなさいますか？」と言ふのであつた。それは慘みじめなものに熊次自身を思はせた。

駒子も俯いて居る。兄に言ひまくられて辭塞ふさつた駒子の兄は、泣くより外なかつたのである。

「兄が可哀想なやうでした。」と駒子が後で夫に曰ふた。

兄は熊次を顧み、理屈は理屈、情は情、駒子に行くべき旨を述べ、

「それでよいだらうな。」

「はう。」

熊次は明白に言ひ切つた。駒子が震へた。

明朝の一番で新橋を立つ約をつがへて、駒子の兄は直ぐ座を起たつた。餘の一同は父の居間に集つた。母も起き出た。

唯の病氣見舞ではない。いろいろの意味に於て重大な危険の中に駒子に行く事が明らかであつた。これが永の別離になるまいものでもない事が一同に直覺された。父も母も懇に駒子に頼むだ。兄は曰ふた。

「若もしもの事があると、熊次さんの生涯は、ささはうさになる。」

而して懇々切々間違なく歸つて来る事を頼むだ。

「では、心残りのないやうに、十分に。」

斯く言ひ捨てて、清人君に一禮し、熊次は車室を出た。而して發車も待たず、後をも見ずに改札口を出て了ふた。電報受付に往つて、

「清人、駒、御見舞に今立つた。」

と兄妹の父宛に電報を打つた。

停車場を出て、直ぐ車を呼んだ。芝口の通りまで來ると、突然鳴咽が一つ突き上げて來た。涙が雨の如く流れた。熊次は車上に羽織をすつぽり頭から打かぶつた。

海舟邸の裏門で下りて、車賃を拂ふと、石段を上つて、外から引寄せて置いた戸をあけ、格子戸をあけ、玄關の障子をあけて内に入つた。兎も角もすつかり雨戸をあけた。人氣もなく、火の氣もない家に、がたがた震へながら一人立つて居る自分を熊次は見出した。時計ばかりが元氣よくチクタク言ふて居る。熊次は何探すともなく此室彼室を見て廻つた。遽しい出立だつたに、何處も取り亂した容さまはなく、きちんと片づいて居る。臺所を見た。今朝の炊事、食事のあとも奇麗に片づけてある。熊次は駒子の居間に立つて、消したランプを見、駒子の鏡臺を見、

ランプは消し、玄關の格子戸を引立てて、夫婦は家を出た。熊次は駒子の着更を入れた小形の柳行李を提げて居る。

邸の裏門の潜りを開けて、大路に出た。まだほの闇い。一月中旬の曉の寒さ。風は無いが、顔がひりひり切れさう。骨の髄まで慄々する。凍てた大路に下駄音を立てて、夫婦は小走りにだらだら阪を下りた。一條邸の下まで来てふりかへると、磨ぎすました鎌のやうな弦月が西の空に光つて居る。

「あの月が盈ちて、缺けて、またあの位になる頃には歸つて来るだらう。」
と熊次は曰ふた。

車宿をたたき起し、二臺の車を新橋に走らせた。清人君も来て居た。

百日前に兄妹の母者を送つた歩廊に、母者の重病に走る兄妹を熊次は送るのであつた。

「何有、私達二人が往けば。」

と駒子の兄は勇んで居る。

駒子を車内の席に就かすと、

兄の氣は西に、妹の心は東に、嵐車は冬的一天をひたもの西に東海道を走つた。尾張平野にかかる頃は暮れ、小闇くなつた冬田のあなたに、草舎くさやの燈光あかりがちらちら光りそめた。駒子はぐいと其灯ひを見つめた。

日は暮れて 灯ともしび一つ 見え隠れ

彼女は小さな手帳に鉛筆で斯く書いた。

其頃は、今朝熊次が新橋から打つた電報が熊本に届いて、兄妹の父母の病床に披露され、垂死すゐしの親達は清人と駒子が刻々走せ近づくを知つて喜んだ。然し生命の限は、如何ともし難かつた。兄妹の嵐車がまだ神戸に着かぬ中に、熊本下通町の母屋おもやに舊臘からチフスで寝て居る異母兄勇次の生命の火が吻くちと消えた。隠宅の父には祕されたが、父の次の間に寝て居る母はそれを聞いた。母の氣が弛ゆるんだ。兄妹が眞夜中に神戸に着いて、山陽鐵道に乗り換へた頃は、

座蒲團を見た。座蒲團の上に今朝まで着て居た平生ふだん着の綿入、綿入羽織がちやんと袖たたみに
なつて居る。其綿入を取り上げると、ひしとかき抱いて、熊次は男泣きに泣いた。

吾妹子^{わきもこ}よ。吾いとしき妻よ。吾生命なる妻よ。駒子よ。吾は御身^{みみ}が涙とどめむことを願はず。唯恐る、御身^{みみ}が悲のあまり身を傷^{そこな}ひ、父上を慰めずして、却て父上に慰められむことを。吾妹子よ。吾れ切に之を恐る。

願はくば、至上の力御身の上にあれ。

一月十七日朝

熊 次

吾 友 吾 妻

駒子を遣つてがつかりした駒次は、平常通り出社する氣にもなれなかつた。兄が電話を社からかけて熊次を呼んだ。「留守が無い。」と熊次は答へた。電話が取次がれて、兄がたぢたちとする容子が手にとる如く熊次に響いた。言はるるままに本宅の女中を留守に呼んで、熊次はのこのこ出社した。それから型^{かた}の如く毎日出社した。然し熊次の心は空であつた。海の従軍記者

「お駒は？」

といふ一語を最後に、母はもう亡骸なきがらであつた。

一月十五日の朝清人駒子を新橋に送つて、翌日の午後、熊次は駒子の母と異母兄死去の電報を受取つた。

社に駆けつけ、應接間で兄に電報を見せた。兄も顔色を變へた。

「嘘ばつかり言ふもんだけん。」

と兄は言ふ外はなかつた。熊次は兄の注意で、清人君宛に兄弟連名の吊電と十圓の香奠を送つた。駒子には、「ユルセ」と別に打電した。駒子に謝すは、駒子の母に謝すのであつた。

熊次は駒子が可哀想でならなかつた。追かけて、手紙を書いた。

今頃は瀛車か、船か。行先きの悲しき事も知らで、嘸船車の歩をおそしと思ひ玉ふならむ。

たらちねの 母のなきから 待つぞとも

知らでや妹子もこが いそぎ行くらむ

「叔父さん、叔父さん。」

と走りながら袂を捉へる者がある。直であつた。袂をとられながら、ずんずん歩いて行くと、直ぐ後から息せき切つて、直の母が跣足で追ふて來た。姉は臨月近い大腹を抱へて居る。

「そんな體をして。」

と熊次は顔をしかめた。何處からそんな人間らしい言が出るか不思議と云ふ顔を姉はして、「そつだけんくさい。」と熊次のまた出奔しやうといふ不心得を諭した。心機一轉して、熊次は出奔を思ひとまり、直を連れて伊倉伯母の家に往つた。熊次が伊豫へ行く前は、兄の益雄を弟の如く熊次は愛したが、今度は弟の直が叔父の伴侶であつた。其直が今十八青年として叔父の家に來たのであつた。朝夕の食事には、叔甥共に隱宅に往つた。駒子が炊いた飯の後に、隱宅の軟飯はかなりの逆戻りであつた。父母が親類に客に往つて、新顔の女中に後を言ひ忘れたりすると、熊次は直を連れて一ツ木に牛肉を喰ひに往つた。惘然した風をして居て緻密な頭の甥は、熊本時代も齡に似合はぬ細かな問をして疎鹵な叔父を時々凹ましたが、今叔母の留守に叔父のお伽を承はつて、うつかり炬燵の爐を踏みほいだりしながら、水を汲み、戸をあけ、炭をつい

が詩味饒ゆたかな通信を寄せて異彩を歌はれ、陸の従軍記者が南滿洲の氷雪の中から潑刺はつらつとした通信を寄せ、何れの機關も全力を擧げて居る中に、獨熊次の外報翻譯は時に疎漏な大間違ひをして新聞を物笑ひにさせ、兄の頭を焦々させた。其兄も、清國から講和の瀕踏みが来る報に接して、廣嶋へ急行した後は、熊次は申譯ばかりの出版社して、海外電報の翻譯だけで直ぐ歸つて了ふた。

「一寸おひかりますな。」

と甥の直なほしが言ふた。

直は熊本で絹織物をやつて居る大江の姉の次男で、八王寺の染織學校に入學の爲上京したが、熊次の家に留守がないので、入學前の隙をしばらく來て居るのであつた。大江の總領益雄が伶俐で可愛がられたに引易へ、次男の直は幼少から喘息ぜんそくもちの大まかで、無いもののやうに育つた。熊次が京都を逃げ出して熊本に居た時、直は十一であつた。鹿兒嶋から熊本へ戻つたばかりの熊次は、兎もすれば無賴ぶらいの氣に驅られた。ある日、熊次は直の父、義兄の大江さんと衝突して、憤然と飛び出した。何處を當と云ふ事はなく、十丁餘白川畔べの路を急ぎ足に行くと、

「駒事、何も夢の如く相分かり不申候へども、體のみは唯今神戸に着き、山陽鐵道に乗りうつり申候。」

とあつた。次のたよりには間があつた。到着即下の嘆きと取込を思ひながら、なほ心元ながつて、「無事着いたか、父上如何？」と電報うつた。電報の返事は直ぐ來た。「父はよい方」とある。それから熊次は毎日郵便を待つ人であつた。格子戸開けて、今にも配達が來るかと待つたが、中々來なかつた。駒子が立つて九日目にやつと來た。四錢貼^はつた厚封の手紙。熊次は一讀涙にくれた。

二三日内よりは、ひとりにて介抱にかかる事と存居候。三十一文字は歌のつもりに候はず。

御兩親様、御兄上姉上様方によろしく御傳へ下され度願上候。

御うしろすがたを窓より御見送り奉りしより、涙せきあえず、もはや宅に御かへりあそばしたるにや、いかにして入らせたまはん、こたつの火はきえつらん、ひちりんの湯もさめたらん、御やすみあそばしたるにや、駒の事をもあんじたまはん、御晝食はいかゞあそばすなら

だり、叔父がまだ讀まぬ露伴の「五重塔」の話をしたりした。「のつそり重兵衛」が甥には會心の人物であるらしかった。

熊次は亡くなつた駒子の母に濟まなく思ふた。東京に居た間も、無愛想ばかりした。國に歸つて後も、思ひやりが足らなかつた。あの電報すら疑ふた。邪推と吾儘ばかり。顛面てきめんに來た早急さっきよな姑の死。熊次は全く義母に濟まなく思ふた。熊次が着物の乏しいを氣にして、駒子の母は東京を立つ前郷里から紺織かすを一反取り寄せ、駒子に残した。熊次の出社の留守に、駒子は長い事かかつてそれを綿入羽織に仕立て上げた。男物の羽織など初めて仕立つる駒子は、下りの具合がうまく行かず、何度も何度も縫ひ直して、やつとまとめたのであつた。母子の心入を喜んで、熊次は凜りやうとした木綿羽織を、正月の常用にして居た。それも義母の形見となつた。熊次は其羽織をたたんで床の間に置き、義母の手紙を其上にのせ、其前に甥に買はせた線香をくゆらし、甥を出し遣つて一人涙ながらに慇懃の文を讀んだ。

駒子が立つた日から、無理と知りつつ熊次はたよりを待ちわびた。第一のたよりは、神戸で山陽鐵道に乗換の間際、鉛筆で書いたはがきであつた。

たつに火入れおくものあるや。ああ御出迎ひ申したし。只御一人にてさぞや。ランプはともしあるにや、石油もつがねばならず、面倒なる帳面まで、いかばかり御不自由に御座しまさんかと、かなしく存居候。實に一日千秋の思ひとは此の事かと、御なつかしさ口にいひ得ず、筆紙に盡しがたく、

今はいかに 今はいかにと 夕ぐれの

入相のかねに 君をしぞ思ふ

午前二時神戸に着き、二時十分山陽鐵道發、午前十一時四十分尾の道に着。二時二十分吉井丸に乗りこみ、出帆致し申候。午後七時七分、石炭を積みたる小船に衝突、タスケテクレーとのさけびと同時に、小さな窓より長さ半間幅八寸位の木片大響と共につきいり、難船かと大に驚き、スケツチブツクのヴォーエーヂを思ひいで申候。幸に小船の欄干の一部と舳のところを損したるのみにて、一人の死人も御座なく候ひしも、證書を書かせるなどのさわぎにて、殆んど一時間計り費し、午前五時門司に無事に着、六時發の瀛車にて熊本に向ひ申候。神戸を通るとき沼山叔母様の御事いとどのばれ申候。箱崎にて雨ふり、やがて雪と相成申

む、隠宅より御つかひ参りしや、御兩親様方は何とか話し玉ひつらん、などくりかへしくりかへしあんじられて、行く先きの事少しも氣にかかり申さず。早く歸京せん、もしひとりにて歸京する事にもならばさぞや心細かるべし、電報うちおかば吾夫はステーションまでは御出下さるべし、さりととも早く歸りて格子戸よりびつくりおさせ申さんか、それもよからじ、など、おかしき事やら、過こし方のいろいろのたのしかりし事ども思ひ出られて、御なつかしさいやまし申候。富士のけしきいとおごそかにて

白妙の 富士の高根を 東^{あづま}なる

君のところに たぐへてぞみる

關が原長濱あたりは雪いと白うつもれり。不思議と申すのほかなきまで、さきの事心にかかり申さず。何のためわれは吾夫とお別れ申してここにあるや、われはいづこにゆくなるや、ああ吾夫は今頃いかにしておはしますや、とんでゆきたき御面影、身は幾重の雲を御隔て申居候へども、心は常に。不意の出立とて、御着類の事を初め、何一つかねかね用意なき身の罪として御不自由なきやうになしおかず。此寒さに、社より御かへりあそばす頃なるが、こ

わアと泣き出し、さびしかろと抱きしめ申候。私はかなしさに次の間にかくれ申候。私等のため母の棺をしめずに待たれたれば早くお顔を拜せよのことに、兄と共にふるへながら跪き拜すれば、母は胸の上に兩掌りやうてをあはせて、すやすやと眠り居たまひ、近づいても非常に遠く居ますが如く、駒は思はず母にとりつき、御手をしつかり握り候ひしに、はや冷えたまひて一言の御言葉もかけ玉はず、目みひらきもしたまはざりしかなしさに、やがて御顔に頬おしあてんとしたる折、大きな兄「お駒、早くこつちへ」叔母君「涙おとしなはん」とひき退けられぬ。寢棺をみては今一度聲をかけまほしと、手を出さんとしてはうちひかへ、たまりかねては泣き、漸く忍びて退き、顔を洗ひ、髪を結ひつつありしに、兄は父上の枕邊に居りてよび候へば、今髪を結ひつつあるよし答へしに、父上は大きな聲で「髪なんかひつつくつてよか」と叫び給ふに、いそぎゆけば、父上は手をのぼし「お駒かい」と手をとつて接吻し、駒はかなしさに抱きつき申候。兄上おぼ君より話あれど後にとて、やがて焼香、坊様の讀經、鐘の音も消え入るばかり、一度に二つの棺をならべて葬るとは實になさけなき運命に御座候。野邊の送りを見送りて、駒は淨光院釋妙貞大姉といふ御位牌を隠宅にもちかへり、

候。午後一時三十分春日に着。直に腕車を走らせ、はやく兩親にあひ、よろこびの笑顔を拜せんと、雲みぞれふるに幌げらさへかけずにいそぎしに、思ひきや、門口に簾かかり、忌中との紙はられたり。車よりとび下りて、戸をあけ候へば、嫂あによめ出でむかへ、親戚のもの皆あつまり居候。屏風の内に蠟燭のほのみえたれば、兄は「勇次さんはいけませんでしたか」と涙と共に愁悼の意を漸くのべ、駒は言葉も出ず兄につれて一禮致したるのみにて候ひき。兄「母上は隠宅でせうね。」と問ふよりはやく、隈府わいふの兄咳せき拂ひして「實は母上かさんもまにあはなかつた、隠宅ではふてち思つとつたばつてん、彼處あそこでお駒が餘り泣きでもすると、父上ととさんも未だよくなかもん、勇次の事もまだ父上ととさんには知らせちやなか——お駒氣をしつかりしなはり、あんまりなきなはんな。非常に待つとんなはるけん、はやくはやくといはるるまでもなくいそぎ隠宅に参り候へば、寢棺をする、其御前に蠟燭ともし、線香たてて、叔母など親戚のものつき居候ひき。駒は叔母の手にすがり、一言のあいさつも致しえず啼なき嘯きよ仕候。先づ父上にと泣顔ハンカチでおしぬぐひ坐敷に入れば、父上じろりと見給ひて「オ、お駒か？ 體格のいい娘と思つたら、こみやあ（小さい）もんなあア、母かさんは死んなはつた、あア待長かつた」

様に見うけられ申候。熱は三八、七位有之候へども、元氣は誠によろしく、時としては唐詩選を吟じ、兄をよびて日清戦争の事をたづね、駒をよびては、父は花が第一好き故毛糸でもよいから藤でも櫻でも花を何かつくりくれ、など申し、困り申候。申上度事はなかなか筆紙に盡しがたく候間、御目もじの時にゆづり申候。先は右まで

あら／＼かしこ

一月十八日

駒

熊 次 様

御許に

御寒さの候御自愛專一に奉存候。私安着の電報はと着後直に隠宅にて兄に申候處、大きな兄「もはや打ちたり」と申候故、よくとどきたりと思ひ取込中よくきゝかへしもせず居候ひし處、御尋ねいただき、恐れ入申候。何卒御ゆるし下され度御願ひ申上候。

熊次は手紙を持つて隠宅に行き、母の枕頭で二たびそれを讀んだ。鼻つまらせて、母は聞き入

花蠟燭線香などそなへ、父上の御枕邊に一夜をあかし申候。父上の御枕邊には、明晩十時清人、駒兩人東京より着する筈（何日何時新橋發、何時神戸着、何時何處發、何日何時熊本着、と明細書まで書いて）と記したる紙貼られたり。これは父駒等の歸宅をよろこびて貼らせ給ひしもののよし。母はあきらめて「決して東京には知らすな、肥後様は（御尊體様の事）親切なる御方なれば、もし電報でもうたば早速御出あそばすやも計りがたし、此病中に御出ありては傳染恐ろし、一大事なれば必ず電報などうつな」と代る代るすすめても、看護のものをやりとめさせるほどにて「父上の思召ならばともかく、母は既に駒、清人の事安心して思ひのこしなし」とすこしも口にもあひたしと申さず、あたりのものたまりかね、兩親に知らせず電報し、あとにて知らせたるよし。父は「おこまはこまいからわからねど、清人は何をくづつくか」と腹立居しも、母は眠る少し前「お駒は」と一言申したるのみのよしにて候。病氣中、此年ことしは東京より夫婦にて下るゆゑ布團などこしらへおかねばならぬ、などいひ居たるよし承り、殘念に存候。今日彼木盃を父に見せ申候處、それにて冷水をのませよと申候間、少しすすめ候處「あゝありがたかつた」と大によろこび申候。父は未だ充分正氣に歸らざる

でも由緒つきとの兄の抗議が出て、母が熊次に因果を含めて取り返へしに來た。其代償として夏山驟雨が熊次の有ものになつたのである。熊次はそれを駒子の父に贈る事にした。幅の寸法が小包の定規を超えるので、熊次は猶豫なく經師屋に中身を切りぬかせ、直ぐ小包で熊本に送つた。それが駒子の父の眼前に披ひらかれると、熟々見て「米僊は上手だ喃」と駒子の父は嘆賞した。唯一の有を熊次が切りぬいてよこした事は、駒子の感激であつた。彼女の父がそれと知ると、「熊次どんの親切は知つとる」と泣いたさうな。其たよりは熊次を満足させた。

然し熊次は追々淋しくなつた。駒子を手放すまでは、熊次は駒子が自分に何程のものであるかを知らなかつた。三百里を中に隔てて見て、熊次は駒子なしに過る日から日の味氣なさつまらなさをしみじみ思ひ知つた。隱宅に母は居る。然し母は父の妻である。年も六十七、寒中は大抵寢て暮らす母に細々こまこました新家の世話は望まれぬ。而して其細々した世話が、一番熊次にはうれしい大切なものであつた。俄ふかやまを艱にされたやうな熊次は、次第に焦々しはじめた。

斯數日、熊次は胸に痛を覺えた。駒子の留守に病氣でもしたら、と云ふ心配が涌く。心細くなる。斯様な時に駒子が居たら。然し駒子は三百里西に父の病床に付き切つて居る。手紙は父の

つた。

熊次は早速返事を書いた。彼は毎日のやうに駒子に書いた。駒子も忙しい中から筆まめに答へた。東京と熊本の間を、はなれて居る夫婦の手紙が、綾手あやてに行き交かふた。駒子の父は書畫が好きで、枕頭にも逸雲の山水をかけて居るさうで、米僊の畫が見たいと父が言ふ由を駒子は夫に書き送つた。熊次は唯一幅持つて居る米畫伯の驟雨山水を送る事にした。熊次は此畫の出來た當時を知つて居る。氷川町隱宅の借家ながら新築成つて、父母が移轉の祝の小燕しょうえんが開かれた。熊本から上京中の直の父と、京都から上京中の柳川夫人お美枝さんも五歳の鎮雄坊しんをを連れて、其席に居た。招かれた社の畫伯が、「何ぞ塗りますでございませう」と如才なく持參の道具をひろげて席畫を作つた。それは熊次夫婦が最初住まつた隱宅二階の六疊であつた。畫伯は一氣呵成に數枚の畫を描いた。才氣の勝つた畫家の常で、工夫を凝らした密畫より、即興の走筆に却て面白いものが出來た。就中夏山驟雨は此日の秀逸であつた。去春資産分けの時、熊次に譲らるる筈のふるい花鳥の一幅が如何した事か見つからなかつたので、其かはりとして熊次は父に何でもよいから米僊の一幅を求めた。父が無造作に一幅出してくれた。後で、それは米僊の作

駒子の手紙も、歸を急いで居る容子は見えぬ。菊池一統、駒子の中にとりこめて、熊次を冷笑威嚇するやうに、地震見舞の電報は受取られる。

突と立つて、熊次は隠宅に往つた。父も母ももう寝て居る。然し母はさめて居た。母の枕頭の長火鉢にもたれて、熊次は忿々愚癡の百萬遍をならべて居たが、果ては猛然と眞鍮の火箸押とつて長火鉢の縁をヤケにつづけざまに打ちたたいた。

眠つて居る筈の父が岸破と起きた。

「俺は親だぞ。」

一喝すると、突然父は熊次の肩を押へた。

「そちはこれまで一度も親に對しさういふ事をした事はない。」

「熊次は今夜取り亂して居ります。」

と母が口を入れた。而して、

「父子でさうけつうけつうすれば。」

と嘆いた。

病氣も快方と報ずる。然し何時全快し、何時歸れる、ともそれは分からぬ。駒子の滯留は際限がなさうな氣もする。熊次は自分の駒子を世にも平氣に東京から引き寄せ、何の遠慮會釋もなく病床に引きつけて居る駒子の父が追々憎くなつた。

東京に一寸した地震があつた。日ならず熊本から地震見舞の電報が來た。直ぐ無事の返電を打つたが、然し來電がしたたか熊次の氣に障つた。それには駒子、清人、正太と列記して、駒子の名の上に菊池の姓を冠せてある。熊次の父が氣にして、駒子の籍は結婚早々肥後の家に入つて居た。熊次は所謂兵隊養子に郷里の同姓の家に行き、名義上の養父は亡くなつて、熊次は戸主と云ふ事になつて居たので、駒子の籍は其處に入つて、菊池駒子でなく、肥後駒子になつて居た。姓の事は、熊次も殊に嚴しかつた。返子から東京の熊次に出した手紙に、うつかり菊池駒と書いた氣がするといふて、駒子は去る夏も熊次の母に如何しませうと訴へた事があつた。それ程熊次が此點にやかましい事を知りぬいて駒子は居る筈。然るに地震見舞の電報に菊池駒と書き、兄達が列記して居る。熊次は不快になつた。以前の疑がまた起りかけた。駒子の父は、折角來た女を中々手ばなす事ではあるまい。駒子の兄等も、そんなに歸へす氣はない。肝腎の

「馬鹿な電報ばかり来るけん。」

と母が嘆息した。

熊次は其まま宅に歸つた。

駒子に罪は無い。電文は駒子を書いたものでないであらう。然し電報はやはり不快である。

熊次は指を折つて見た。駒子が東京を立つて、まだ二週間そこそこ。然しそれは永劫の如く長い。今後、駒子なしに立つ日が恐ろしい。限が無さうに思はれる。此ままになつてしまひはせぬかの恐がまた頭を擡もたげた。熊次の頭には、日清戦争も新聞社も無かつた。駒子戀しさと心配とで、彼の頭は一ぱいであつた。

駒子からまた手紙が來た。父の病氣はわるい方ではないが、氣が弱つて、一刻も彼女を手放さぬ、と謂ふのである。歸期は問題の外であつた。

熊次はうんざりした。駒子を引きつけていつかな放さぬ駒子の父が憎らしく、此方の胸の中を思ひやりやうが足らぬ駒子にも腹が立つた。熊次は母に相談した。父は耳が遠い上に、細々した事は相談が面倒だ。喧嘩しても、罵り合ふても、相談事はやはり母だ。熊次はいつそ電報を

熊次は肅じつとなつた。熊次は、子供の時から、一度も父に打たれた覺がない。二十八歳の今夜肩を押へられたのが最初である。

熊次は母とはよく諍しやうふた。がみがみ言ひ合ふた。父の前で言ひ諍ふ事があつても、少し耳の遠い父には分からずに濟む事があつた。ある時、熊次は母の皮肉を癢さに障さえて、眞劍に忿いつた。仔細を問ふ父に、「阿母おつかさんが失敬な事を仰おつしや有るから。」と熊次は曰ふた。「何？ 阿母おつかさんが失敬な？」父の顔には天が地になつたやうに驚駭たどうきと悲痛と忿怒ふんぬが現はれた。親が子に失敬などと云ふ事は、父の生れて始めて耳にした言であつた。熊次は忿々して座を立つた。「わたしが悪かつた、わたしが悪かつた。」と母の詫聲わびこゑが熊次に追ひすがつた。熊次は其一夕を忘るる事が出来ぬ。

今夜も熊次は自分の心もちが耳遠い父に知られぬ事を悶もどかしく思ふた。然し彼は父の心を傷いためたくなかつた。父に肩を押へられて、

「はう。」

と熊次は自分を立て直した。父は寢床かに復かへつた。

「あんたが輕薄だから、輕薄だから。」

熊次は一言もなかつた。早速電信局に駆けつけ、

「立つに及ばぬ。」

と打つた。歸途熊次は色々と思案した。駒子の父が危篤——いつそ自身熊本へ往かうか。隱宅に行くと、父母はもう寢て居た。

「どうせあんたが往かすばなるまいと思ふとつた。」

と母が言ふ。母が父を呼びさました。

「喃、あなた、熊次が熊本に行くてち言ひますが。」

起き出た父も異存はなかつた。熊次は直ぐ今夜の終列車で立つ事にした。夜嵐車は寒いので、父の黄八丈を母は出してくれた。婚禮に借りた仙臺平の袴も借りた。父の古手套ふるてぶくろも借りた。中型のズツクの靴かばんも借りた。此前の九州落ちですつかり熊本の信用を零ゼロにして居る熊次は、一時金の立替など頼む場合の爲に、一筆父の信用狀を書いてもらう必要を感じた。月末の拂ひをした後の熊次は金をもたなかつた。父が五圓もつて居た。不足は社から前借をすることにした。

かけて駒子を呼び返へさう、さうしたら先方も手放さうし、駒子も歸りよからう、と云ふた。まあお待ち、と母はとめた。妻なしに一刻も居れぬ熊次を苦々しく母も思ふらしかつた。熊次は歸宅した。直が色々話しかけるが、相手になれる氣分ではなかつた。頭が焦々してならぬ。此上無際限に待つはたまらぬ。むらむらと癩癩が起つた。母は待てと言ふが、母は母だ。突と立つて、熊次は近頃足繁く通ふ葵町の電信局に往つて、駒子に電報を打つた。

「思ひ切つて明日立て、後あとにて悔くやむな。」

其日は一月三十一日であつた。

其午后社から歸ると、駒子の返電が熊次の手に落ちた。

「父、死、今日にせまる。御返事によりては。」

熊次ははつとした。嫩やならかな平手でびしやりと一つ正面を打たれた感がする。性急だつた。全く今少しの忍耐が足らなかつた。自分の威嚇的一電が、駒子の父に響いたのであるまいか。空恐ろしくなつた。

隠宅に往つた。母は聞くなり身を震はした。

第十三章 西へ

一

夜氣車は寒かつた。凍てついたやうな車燈の黄ろい光の下に、板の腰かけにうつらうつらとしつつ、熊次は何思ふともなくすべてを思ふた。七年前、二十二の五月、光りかがやく新緑の中を薫風くんぷう一路熊本から東京へ上つて來た自分、今二十八の極寒の冬の最中もなかを其熊本へ下る吾、全く七年は夢のやうに過ぎた。

夜は寒く、曉はいよいよ寒かつた。三河路で夜が明けると雪になつた。紛々と硝子窓を撲つ雪を眺めて、熊次は行く先の熊本を思ふた。駒子の父の容體は如何であらう？ あの電報が着いて、駒子は何と思ふて居やう？ 父が快方になつて、駒子を父と爭ふ必要が出て來たら如何しやう？ 自分で自分が安心ならぬ。亡くなつた駒子の母の蒼白い顔が眼に浮ぶ。四ヶ月前に母

「氣をつけち行きなはり。」

と云ふ母の言葉を後に、義姉にも一寸挨拶して、鞆と着物を持つて自宅に歸ると、匆々に仕度して、甥の直に後を頼み、遽ただしく車を走らした。社の直ぐ裏手に家をもつ會計主任の加世田君はもう寢て居た。起きてもらつて、熊次は二月分の月俸十一圓を借りた。新橋に着くと、

「御見舞に今立つ。」

と熊本に電報を打つて、熊次は直ぐ終列車に乗つた。

疊に案内された。

尾の道には十年前今上州藤岡で牧師をして居る岩原の姉夫婦が宿屋業をして住んで居た。其時海一重南の伊豫の今治に熊次は居て、船で一走り訪ねやうかと思ふて果さなかつた。尾の道は初めてである。

朝飯を済ますと、熊次は電信局に往つた。

「今、尾の道に着いた。父上かはりなきや。」

と駒子に電報を打つた。疲れた熊次は、初めて見る此湊町を見物する氣にもなれなかつた。直ぐ宿に歸ると、夜のを呼んで横になつた。

漚車疲れがぐつすり彼を眠らせた。

何やら騒がしい音に眼がさめた。黄ろく日のさした障子が烈しくぐわたつて、外は何時しか大風になつて居る。午の饌を持つて上つた女中に問へば、此風では漚船が^{はい}入らぬかも知れぬと云ふ。熊次は顔を曇らした。

饌を下げた女中が再び上つて來た。電報を持つて居る。駒子の返電がもう來たのであつた。

は心を残して東京を立ち、此線路を西に下つたのだ。それが此世の人でなくなつて、もう二七日も過ぎた。昨年五月結婚以來の自分が顧みられる。吾儘と邪氣ですべてが通つて居る。駒子に對しては、殊に言語に絶えた事ばかり。自分が淺猿あさましくなつた。失望が襲ふ。熊次は泣きなくなつた。彼は何時までも何時までも唯吹雪ふぶきの窓を眺めた。

七年前まだ工事中であつた琵琶湖東も通つた。なつかしく恐ろしい京都も通つた。神戸で少し待つ間に、楠公前の牛肉屋で飯を濟まし、此處の山の手に住む柳川家にはがきを書き、日暮れ方に初めての山陽鐵道に乗つた。

須磨、明石も暮れて通つた。東海道も寒かつたが、山陽の夜汽車も中々寒い。姫路驛で「ぬくずし、ぬくずし」と賣つて来る。乗合の多くがそれを買つてあたたまる。懷中が乏しい熊次は、

唾つをのんで我慢する。外套がはりのセルの長羽織の襟を立て、古い赤革の手套てぶくろのボタンをきちんとはめて、眼をつぶつて着物の中に居縮みすくまる。ともすれば齒の根ががたがたしさうになる。

山陽線はまだ廣嶋迄しか通ふて居らぬ。九州行の客は、尾の道から汽船に乗るのであつた。熊次も尾の道で下りた。夜がやつと明けたばかりである。車で海岸の汽船宿に往つて、二階の六

ある。皆自分の吾儘、邪氣、性急、母の言ふ通り「輕薄」である。亡い父母はもとより、第一駒子に對し夥しい自分の吾儘を今更に淺猿あまなましく思はぬでは居られぬ。

烈しい障子のがたつき、その中に、哭くやうな人聲が響く。腸はらわたに泌しみみるやうな人聲ひとびとの哀調。熊次は立つて、障子の隙すきから覗いた。直ぐ下は冬の海が白つほい日光を碎いて大荒れに荒れ騒いで居る。向ふに長い嶋があるので、海は大川のやう。其大川の波がぶつかる石段に、襦袢一枚の若い男が、眞赤な手足をして、波のしぶきを浴びながら、簪さざりで大きな桶をこしこしこすりながら歌ふて居る。

「つらいものだよ、親方勤め……………」

彼はまた始めた、せつせと手を動かしながら。

「つらいつとめもせにやならぬ。」

若い男の簪がばつばと水を散らす。鉛色の日が波に碎ける。

熊次はまた横になつて眼を瞑つぶつた。噺まふたが濕しめつて來た。溫かい涙が眼から溢れた。

風は中々止まず、日の中に船の入る望は絶えた。熊次は三たび電信局に走つた。而して斯く打

「父、三十一日の夜逝く、葬式は四日。」

熊次ははつと息を呑んだ。またびしやり平手で面をたたかれた。體を吹き飛ばしさうな風の中を、彼は電信局に走つた。

「残念、直ぐ行く。」

と返電のまた返電をうつた。

船は中々來なかつた。熊次は宿の二階に横になつて、眼をつぶつて思ふともなくさまさまを思ふた。駒子の父は死んだ。自分が新橋を立つて幾程もない事であらう。三河路の雪に如何か^か焦^{あせ}うかと案じ煩つた時は、駒子の父はもう此世に居なかつたのだ。存命中に往つたら何と挨拶しやう？ 名だたるぶつきら棒の駒子の父が皮肉を言ふたら、腹を立てずに居る事が出來やうか。見舞に往つて衝突でもしたら、など云ふ不安も渦まいた。それは眼に見えぬ義父の骸に向つてであつた。何と云ふ皮肉か。

熊次は反省を強^{しひ}られた。すべてが吾儘の懲らしめである。駒子の母に反感をもつ。母が面當^{つらあて}の如く死ぬ。駒子の父を妬む。父が面當かのやうに死ぬる。「かのやう」ではない、顛面^{てきめん}にそれで

熊次は尾の道に二晝一夜を船待ちに過した。船が來て乗り移つたのは、已に三日の日も暮れて、
漕ぎのくる舳の櫓の下に碧^{へき}燐^{りん}花の如く散る初夜の頃であつた。

電した。

「海荒れ、手間とれる。間に合ふや?」

船は到頭來なかつた。夜深に女中がまた電報を持つて來た。

「門司から何番か知らせ。池田に待つ。」

池田は上熊本と聞いて居る。熊本が近くなつた。熊次は少し力づいた。

明くる日、風は大方な風いだ。然し船は中々入らなかつた。熊次は東京に手紙を書いて駒子の父の死を報じた。廣嶋の兄にも西下の次第を報じた。廣嶋は近い。汽車で行けば唯二時間。然し船が直ぐにも來るかもしれぬ。

今日はもう二月の三日。熊本の葬式は明日である。せめて義父の柩ひつぎを送りたい熊次は、ちつとして居れなかつた。しばしば手を鳴らして女中を呼び、帳場たたらに下りて問ふても、來ぬ船は來なかつた。たまたま鳴る凧笛は、上りの船に限られた。地鞠たたら踏んでも、甲斐はない。來る可きものが來るまでは、ちつとして大人しく待つ外はない。熊次は人事を支配する自然の前にびつたり頭を下ぐる外はなかつた。我を折つてすべてを委まかす外はなかつた。

時、隱宅には鯛の切身がよく焼いて澤山とつてあつた。母が正月客に用意したのであつた。父の衣類はそれぞれ分類して、一々簞笥の抽斗に紙札を貼つて一日に知られるやうにしてあつた。それは東京に上る前の母の仕置きであつた。駒子の爲に新しい桐の長持を造つてあつたり、熊次の爲に斜子の羽織が用意されてあつたりした。駒子は事毎に物毎に母の遺訓と遺愛を感じた。而して自身が妻として熊次に盡す所の足らぬをしみじみ感じたのであつた。

父の病が母の哀から駒子を引立たせた。父は駒子に最後の孝養を受くる爲ばかりに生きて居たかと思はれた。父の病床に侍する半月の間、駒子は色々の感を閲した。熊次の手紙や電報が彼女に力を添へた。冬が過ぎれば春が来る、いまに好い日が來ませう、と申上げて下さいと夫が言ひ送つた。それを父に傳へると、「應、冬の後には春が来る、さうたい。」と父が喜んだ。父の病氣は快方と見えたが、それは空頼みであつた。血が下るやうになつた。衰弱が加はつた。

父はフダン草（トコ菜）の味噌汁を欲しがつたが、醫師が許さなかつた。父の雅心は終まで止まなかつた。綠萼りよくかくの梅の鉢が彼を慰めた。「枯木こぼくの景が如何どうも」と恍惚うつろひした眼に寒林かんりんを浮べるらしかつた。皮肉も衰へなかつた。あまり信用せぬ醫師を、「髯ひげばかり御立派で」と言ふた。熊次

半月前に熊次と同じ道をとつて兄の清人と熊本に着いた駒子は、戸口に下ろした簾に「忌中」と張つたを見るまで「死」が菊池家に入つた事を知らなかつた。駒子は物心ついてから人の死に會つた事はなかつた。初めて死に會へば、それは母の死、異母兄の死であつた。

母の妹のおきな叔母や、母が女の如く可愛がつた岡野のおすやさんから、駒子は母の臨終前の容子を聞いた。一月初旬、母が東京に自筆のしらせを書いた頃は、母自身もう餘程惡かつた。

異母兄のチフスが原で、それが父に、次に母に傳染したのである。それでも母は醫者にも見せず、障子につかまつて歩きながら父の介抱をして居た。駒子は母の居間に空になつた六神丸の袋を二つ見た。内證で病に克たうとした母の努力が、駒子を更に泣かせた。六神丸は強い薬、二度重ねては體に障ると袋の注意書に書いてあつた。重ねた薬が毒になつたのではないか、と駒子は思ふた。駒子は自身妻になつて初めて母が父に盡しぶりの周到さを知つた。駒子が歸つた

駒子は其席に進み出でて曰ふた。

「皆さん御都合もおありでございますから、何卒御遠慮なくお歸り下さいませ。東京から來かかつて居る者もございますから、父の葬式は四日に致します。」

駒子の一言に、皆腰を据ゑた。

而して父の棺は、隱宅に熊次の着を待った。

父がもう昏睡状態に入つてからも、駒子が呼べば、父は眼を開いて駒子を見た。父の弟の尙平叔が曰ふた。

「阿父サンも本望たい。死水はお駒にとつてもらひたい、てち始終言ふとなはつたもン。」

から思ひがけない切羽^{せうは}つまつた威嚇の電報が來た時、父はもう昏睡状態に入つて居た。取消しの電報が來た時、父はもう絶望であつた。もの言ひかけても答もない父に駒子を取りついて居ると、清人兄が叱つて、駒子を退けた。駒子が茫然として居る處に、また熊次の電報が着いた。今新橋を立つ、と云ふのであつた。ああ夫が來る。熊次が來る。父が去り、夫が來る。駒子にそれは何と言ひやうもない一刹那^{いつせつな}であつた。

悲しさに 嬉しさ添ふる 今宵哉

駒子は斯く詠んだ。

また

君來んと 知らで眠れる ちちのみの

うつせみの姿 見ればかなしも

「熊次どんが屹度來らすばい。」と父は生前駒子に言ふて居た。駒子はせめて一目父の姿を夫に見せたかつた。親類縁者に可なり遠方から來て居る者も多いので、葬式が急がれさうになつた。

は風呂敷包から凍つた葛麵くわめんのやうなものの一片を出してくれた。火にあぶると三倍もふくれて軟らかになるさう。

熊次は門司で買った新聞を廣げて見た。清國から來た講和使の張蔭桓邵友廉は全權委任狀が不備で謝絶された。一月二十日に山東岬角に上陸した大山大將の第二軍は、いよいよ威海衛及其附近砲臺を占領したが、劉公嶋の砲臺とそれに隠れた北洋艦隊が頑強に抵抗して居るので、我水雷艇隊の港口防材破壊作業が敵彈と烈寒を冒して今まさに最中行さいちゆうはれて居る。二號活字澤山の冒險記事は、熊次を饒々みくみくさせた。向側に腰かけて居る丁髷ちやんまげの爺さんは、其子を陸の兵士で出征させて居た。熊次は其爺さんに水雷艇隊の働を読み聞かせて、爺さんより自分が昂奮してしまふた。

鳥栖とすで佐世保から來たらしい海軍士官が五六人隣の中等室に乗つた。久留米で、中等室の窓から若い海軍士官が頭を出して、歩廊の若い和服姿と話して居る。恐らく病氣で取り殘されたらしく悄々しほしほして居る和服を氣の毒さうに、海軍士官は友達の消息を傳へて居る。

「いねぎい死ぬるなア。」

眸と着船の汽笛が鳴つた。甲板に上つた熊次は、身をめぐる曉闇に點々とした燈光を此方にも彼方にも見た。何方が門司やら馬關やら、見當がつかかねた。

兎も角も門司に上つた。二月四日の未明である。時間外で受けつけぬ熊本への電報を驛夫に頼み、熊次は直ぐ瀛車に乗つた。山陽鐵道も初めてなれば、九州線も初めてである。七年前熊次が上京した時は、熊本から博多まで人力車、博多から大阪まで汽船に乗つた。熊次が東京の新聞社の隅や猫で愚圖々々して居る間に、九州も門司から鹿兒嶋への幹線が已に郷國肥後の熊本を過ぎて松橋まで通ふた。「切符拜見致します」と云ふ車掌の九州音の切口上が、熊次の耳に親しく響いた。

瀛車は戦地歸りの人夫で一ぱいであつた。熊次は筒袖の綿入で着ぶくれた若者から、色々戦地土人の風俗、南滿洲の寒さなどの話を聞いた。彼方の土民は斯様なものを食ふとります、と彼

駒子は女中を連れて居た。一同車に乗った。

阪を上つて、清正公を祀る錦山神社の石段下から、熊本本城と千葉城の間をだらだら下りに洗馬川を渡つて、監獄に傍ふて三年阪に出で、下通町を南へ走つた。西側の格子作りの大きな家の前で車はとまつた。格子に簾を垂れて、「忌中」の紙札が貼られて居る。店にも、土間にも大勢人が居る。

清人君が出て來た。

「御出なさらんやうに電報をかける所でしたが、もう間に合はぬと思ふたもんですから——さあ、何卒隠宅へ。」

駒子が先導で、熊次は母屋の土間を通つて、ずつと裏へ往つた。菊株のみ残つて居る菊花壇がある。枯芝の低い築山に對する座敷の縁側から上つた。

正面に柵が据わつて居る。清人君と駒子が白布の覆ひを除ける。清人君が蝶番になつて居る柵の蓋を翻へす。駒子の注意で張られた硝子を隔てて、義父の顔が立寄る熊次の眼の前に現はれた。頬骨の高い、きりつとしまつた顔、病み衰へたやうにも見えぬ。嘉平次と云ふ武張つた名

と、歩廊の和服はさびしく軍服の友を見上げる。

長洲^{ながす}で肥後に入ると、熊次は鞆をあげて、父の黄八丈に着更え、セルの長羽織の下に紋附羽織をかさね、身づくろひした。来る停車場も停車場も、名だけは親しいものであつた。肥後に入つてからが中々長い。

到頭池田に來た。鬱陶しい谷間の小停車場である。唯見れば、歩廊に御納戸縮緬の羽織の女が立つて居る。腫^はれぼつたい臉^{まぶた}をして、にこにこ會釋する。それは駒子であつた。

「何て子供だらう！」

と熊次は思ふた。

熊次は鞆を提げ、帽を片手に、下りた。午^{ひる}も大分過ぎて居る。

「もう葬式は済んだらうか？」

「否^{いゑ}、まだ、これから。」

「電報が着いたらうか、門司からの？」

「否^{いゑ}、未^まだ、然し多分此汽車だらうと思つて——直ぐいらつしやいますか？」

姿がいちらしい。熊次の番になつた時、香を炷きつつ念じた。

「あなたの駒子は確に受取りました。可愛がります。」

齋の饗に預かるべく、母屋の二階に上つた。二階は廣く、十疊が四室もあつた。襖を取り拂つて、會葬の男女大勢居流れた。熊次の姉婿、大江の義兄の黒い顔も見えた。向ふ側から

「肥後さんは何時お着きでした？」

と初老年配の人が聲をかける。それはおすがさんの父正木さんであつた。

饌が並ぶ。飲食となつた。

熊次は何か言はねばならぬ氣がした。駒子に言ふて、硯と紙を取り寄せた。熊次は俳句のやうなものを書いた。

情なや 柩に向ひ 初對面

何を言ひ 何を言はん 三たりの新佛

熊次が未だ生れもせぬ昔の事、父の直ぐの弟の熊太叔と、其妻と、十一になる父の季の妹と、都合三人疫痢で唯一月の中に亡くなつた事がある。菊池の家が今それである。父と母と兄と三

にもふさう。然し其眼は永久に閉ぢて、駒子を譲る熊次を見やうともせぬ。

「そんなに瘡せてもお出なさらぬですな。」

斯く言ふと、熊次は一拜して退つた。^{まが}

老人は寫眞を嫌つたので、一枚も面影は残つて居ない。駒子が描きかけた死顔も成らなかつた。熊次には柩の中の此一瞥と、昨夏老人からもらつた手紙とが、永久の記念である。

四十年配の髻の無い人が挨拶する。異母兄の正太君。重い口で、早速最初の電報の辯明をはじめる。熊次は直ぐ引取つて、

「いや、何も此方が相濟まん事ばかりで。」

義兄に二の句をつがせなかつた。

愁ひ髪とかいふ髪に結ふた若い女の人が挨拶する。それは駒子の母と同じ夜の中に亡くなつた勇次兄の細君、とつて二歳の男の子と共に寡婦になつたばかりのおすがさんであつた。挨拶済むと手持無沙汰の彼女を、昏物を更えますからと駒子が斷つた。次の間で熊次は袴をはいた。

坊さんが来る。親身の人々が来る。讀經が始まる。鉦^{かね}の音の中に焼香が始まる。額づく駒子の

下通町、上通町、廣町と歩いて、立田口の火葬場に往つた。焼釜の一つに棺が入れられ、鐵の圓い扉（まがら）が鎖（かぎ）され、眞鍮の番號札が掛けられた。

三人は歸つた。途すがら、熊次は同列になつたり、後れたりした。後れて歩くと、義兄兩人が小聲に熊次が先刻の挨拶の馬鹿らしさを話し合ふのが熊次の耳に入つた。

歸ると、駒子は熊次を迎へて直ぐ隱宅に往つた。清人君も來て、三人はしばらく共に話した。清人君は骨上げも未だ濟まぬ父の居間に、夫婦が夜を共にするを好い事には思はなかつた。店の二階にでもと言ふた。駒子は堅く隱宅を主張した。清人君も強いかねて、去つた。

父母の亡い跡に、夫婦は二人きりになつた。

熊次が下つて來る事が知れると、清人君は、病氣柄ではあり、熊次は多分親類の家に行くだらうと云ふた。「私が居ますもの」と駒子は言ひ張つた。

駒子の言は違はなかつた。熊次には病氣も遠慮もなかつた。駒子の居所が當然わが居所であつた。永劫のやうな半月を分れて居た夫婦は、また一つになつた。父母の亡き跡の隱宅は、さながら去年五月の「あけぼの」のはなれであつた。

つの新佛を半月の間に出すは、全く希有けうゆうの事であつた。駒子の母と異母兄まふと繼つぎしい中の兎角折り合はぬ事情をよく知つて居るある軍人が、戦地で菊池の一家三人の死を聞いて、變死でないかと疑ふた話が後で傳へられた。

咳一咳して、熊次は挨拶をはじめた。舅を何と呼ぼうかと思ふたが、終に「父」と曰ふた。「父」の病氣で皆様のお世話になり、此方は遠方で何も届かず、と詫び、自分不肖斯く縁につながるからには「お引き立てを」願ふと挨拶し、自分の感懷をここに認めて見ました、清人君に御披露を願ふ。斯く言ふて、件の紙片を清人君の前にさし置いた。

清人君が顔をしかめた。

熊次は據所よんどころなく自ら讀み上げた。空虚な感が内にも外にも満ち渡つた。皆黙つて居る。間がぬける。正木さんが「呟うん、うん」と、さも感じ入つたやうにばつを合はせた。

やがて出棺となつた。火葬と云ふ事で、皆戸口もとで見送り、親身の男ばかり送るのであつた。小雨が落ちて來た。駒子が店の若い者を走らして大急ぎに買つた爪革つめかわつきの足駄はを穿いて、熊次は正太清人の兩義兄と棺につづいた。

主^{あるじ}統^{しかた}して、熊次は隱宅にさまざま客を迎へた。駒子の父には弟に當る隈府の尙平叔父^{じやうへい}は、昨日柩の内に見た義父によく肖てもつと穩やかな老人であつた。家業は呉服屋で、家なども塵一つ落ちて居ないほど奇麗に住みなして居る人で、長兄を物ともせぬ義父は、此弟を愛したさうな。義父の病床のつれづれを慰むる爲、熊次が駒子に持たしてやつた物の中に、勝海舟翁の流芳遺墨があつた。兄に似て書畫好きの尙平叔の氣にそれが入つて居る事を知つた熊次は、悦んでそれを義叔に贈つた。告別に隱宅に來た親類の老女達の中には、昨日熊次が讀んだ俳句を求むる人もあつたが、熊次も流石にそれを辭退した。

山鹿からおすやさんが駒子の叔母の傳言をもつて來た。夫婦で初入に來る日を待つて居る、といふ事である。銀杏返に結つて三十左右の實體^{じつてい}なおすやさんは、お駒さんがお可愛想と云ふては潜々^{さんさん}と泣くのであつた。それが熊次の氣に障つた。同情はありがたいが、もつと駒子の氣を引き立てるやうにしたい、と熊次はぶつきら棒に言ふた。

熊次は熊本に長逗留は出來なかつた。悲しみの家から匆々に駒子を連れ去るは心外の至でも、駒子を残して獨り去るわけには往かぬ。それにつけても、駒子を連れてわが姉達伯母叔母達に

第十四章 故郷

一

八年前の春、十四の駒子が花盛りの碧桃の蔭あとに後で夫をうとに思ひ合はせた青年男子を幻に見た空地に三年前建てられた十疊、六疊、板の間つきの隠宅はまだ新しく、小松を植ゑた低い築山などは去年の秋に出来たばかりであつた。潔癖で趣味の高い老人と、手が利いて根氣のよいその連れ合ひが尙末永く住むつもりで住みはじめた其家は、母者の長留守の後間もない病氣と死に攪かんされながら、きちんとして然も靜に好い巢であつた。駒子と其處に納まる熊次は、さながら我家の心地がした。床の間から、父母の新しい位牌が、兩人を祝するやうに眺めて居る。昨日駒子について停車場に出迎へた天草生れの女中が、母屋との間を往來して、食事や色々の用を辨じた。

其縁談が然し首尾よく整ひ、不幸の際とは言ひながら、斯く夫婦揃ふて來た事は、姉にはうれしい事であつた。此前京都を飛び出して熊次が來た時は、姉は身も細る程心配させられた。

建てつぎの二階に請ぜられ、夫婦は義兄夫婦と物語つた。大江の義兄義一さんは、熊本の輕い士で、今東京に居る比志嶋の直義さんとは隣同士、同年の莫逆であつた。一尅揃ひの二人の中で、比志嶋さんは蒼白く、大江の義兄はまた黒旋風李達を欺く黒鐵の體で、若い頃は水泳に行くと「羨ましい體だな」と落中の猛者共が見惚れたものだ。比志嶋の阿母さんは熊次の母の二番目姉で、年違ひの姉妹は仲が好かつた。姉の照子が大江に嫁いだのも、比志嶋伯母の肝煎であつた。仲好の友の一人は早くから中央に出て、官途に出世し、大江の義兄はまた明治の初年御雇ひの米人ゼエンスの演説に感激して、刀劍漢書を賣り飛ばして絹織物業を創め、全く傍目もふらず今日までやり上げた。辛抱人の義兄は勿論熊次と氣が合はず、何かにつけて衝突したものであつた。「熊次さんは蒲團子だけん」と、義兄はよく義弟を晒つた。

熊次は父の信用狀を出した。それを見ると、義兄はにやりとした。而して首をかしげて沈吟しつつ、

一應挨拶には廻はらねばならぬ。清人君に斷つて、熊次夫婦は車で先づ大江の姉の家に往つた。白川を渡つて、熊本の東南郊外、清正公時代に植ゑられた老大な榎二本が「一里木」として今も道をはさんで立つ邊近く、一の井手の流れを帶びた一區の屋敷は、郷里葦北を引き出て後の肥後家の住居で、熊次は三歳から中數年を除き十八の春まで此處に人となつた。明治十年の兵燹に熊本市中の住宅を焼かれた大江の義兄は、屋敷の一部を借りて、其處に絹織機業を營むで居たが、肥後一家の東京移轉後は追々に舊巢の全部を借りて、年一年と事業は盛大になつて居た。主人の一尅で仕事の手堅さ、而して主婦の親切で世話のよく届く事は、評判ものであつた。取りちらした薄暗い茶の間で、引つめの髪も亂れたまま仕事着の襦はづして莞爾々々挨拶する四十女を、然し駒子は夫の姉者とは一寸受取れなかつた。熊次の縁談には、此姉夫婦も骨を折つた。一昨年宇土君が其爲東京から下つて來た時は、姉も共に下通町の隱宅に駒子の父を口説いたものである。十八で大江家に嫁いで以來、二十何年子女と家業とに没頭して、唯一度も熊本以外に出た事はない姉が、「東京は近うござりますもん」と云ふと、駒子の最初の上京に自身送つて往つた駒子の父が、「否、否、東京に縁づく、さう一寸は來られまつせん。」と澁つた。

る伯母さんなども出て、熊次さんのお嫁御に愛想をするのであつた。

大江の宅に程近い女學校から、伊倉伯母が甥夫婦に會ひに來た。去年の四月新橋に見送つたままで、伯母は少しも熊次の眼に變らなかつた。熊次の母が主唱で耶蘇教主義の女學校が女學會と云ふ名で熊本に生れたのは、母が上京の翌年で、それが新築の校舎に引移つたのは、熊次が上京の其年其月であつた。伯母はもう十年近く其學校の世話をして居る。其學校には、熊次も女學會時代しばらく手傳ふた事がある。駒子も小學を卒へて東京に上る前に、しばらく英語を習ひに通つた。クリスマスの一夜、伯母は駒子を可愛がつてわが傍に座わらせ菱^{ひし}の實の馳走などした事を駒子は覺えて居たが、多くの娘を送り迎へる舎監の伯母は恐らく覺えて居なかつた。正月の家庭雜誌に熊次が書いた沼山叔母の追懷を、伯母は讀んで居た。それには、母と、伊倉伯母と、沼山叔母を並べて、我に三人の母上あり、と熊次は書いた。伊倉伯母を第二の母とも書いた。伯母が熊次を見る眼は、悦喜に耀やいて居た。「沼山叔母さんの美德は、中々あれでも盡せんばい。」と言ふ伯母の眼は、この輕薄らしい薄ぼんやりの甥にそんな感謝が宿つて居るを見つけものをしたやうに耀やいて居た。

「高本先生の歌にありますね、『今は寝さめの憶ひ出して』てち。」

と義兄は熊次の古疵に一本釘をさした。

總領の益雄は東京に、次の直は現に氷川町に熊次の家を留守して居、三番目の進は熊本英學校に通ふて居るが、餘の甥姪は珍らしい東京の叔父と新しい叔母に嘻々と群れ寄るのであつた。

此前熊次が熊本に居た時、幼稚園通ひの姪のおきゑは小さな足に熊次の大きい靴をはいてきやつきやと喜んで居たが、もう十三の色は父に面立は母に肖た娘であつた。無口で腫れぼつたい眼をした其妹のおとよが、昔代よつぎ繼神社の下まで遁ぐる熊次を追ふて來た姉の腹に居た其子で、姉のおとよより氣の利いたおかつばの可愛いお仙や、まだ幼稚園前の男の子の一は、まこと叔父にも初對面であつた。船津の義姉の二番目女のお敬、三女のおいとも居た。此前熊次が船津の家に一夏過した時、お敬は十二、おいとは靴なしの襪ばかりで得々として居ると、酔つぱらつた近所の小父さんが苳吸ふとて落したマツチが靴下に燃えつき、大騒ぎした事もあつたが、姉は十九、妹ももう女學校年配になつた。大江の先代が格別の氣むづかしやであつただけ、そのつれ合ひの人の好きが一入引立つた佛性のにこにこお婆さんや、むつつりして大勢の男女生が恐が

供がなかつた。叔父は父や津森の伯父伊倉の伯父などと同じく沼山社中のやや後輩で、若い頃は才人の名とりであつたが、晩節振はず酒ばかり飲んで居た。子無しの叔母は、何角と不平のやる瀬なく、眼美人と云はれて黒い大きい其眼は、剃り痕青い眉の下にいつも嗔恚に燃えて居た。子供の熊次は此叔母を恐い者に思ふた。然し熊次の母は季の妹に眼をかけ、叔母も姉達の中では一番熊次の母に服して居た。先年一度上京して慰められて歸つて以來、叔母は餘程やはらかになつたと傳へられて居たが、それは熊次夫婦を迎ふる叔母の眼ざしにも見えた。叔母は器用で、手跡などもお勝姉を除いては何の姉よりも上手に書いた。叔母のつくる甘酒は、何處で飲んだのよりもうまかつた。叔父が昔越前の地方官で居た程は、叔母も敦賀で奉書の織方なども習つて、肥後に歸つて後も養蠶織機で専ら生計を立てて居た。久しぶりに來て見れば、昔ながらの住居に、叔父も叔母も淋しくくすぶつて居た。楣かどには、甥の眠雷みんらいと云ふ洋畫家が描いた叔父の油畫肖像が掛つて居た。話の無い熊次は、ひたものそれに見入つた。

「話し話しな、一寸描かしたつばい。ヨウ肖とるてち皆言ふとる。」

と叔母が言ふた。それは所謂油畫の手法ではないやうであつたが、細い眼をして世をあきらめ

夜が更けるので、夫婦は伯母諸共大江に泊る事にした。菊池家には、使をやつて其由斷つた。

熊次の請によつて、伯母は駒子に自身の昔話をしてくれた。十六で伊倉に嫁して、十八で身代限をして、全くの浴衣一枚になつた。それから夫妻で布田ふたの山村に掘立小屋を建て、粟の飯を食ふて身代を立て直した。それは三十八年にわたる伯母の結婚生活のほんの最初の部分に過ぎなかつたが、駒子はしんみりと其話に耳をすました。

話が終わると、熊次の胸むねせで、駒子は伯母の肩を揉みにかかつた。伯母が押しとめた。

「何の、何の、わたしがあんたを揉うぢやらうごたるばい。」

而して伯母は到頭駒子を抱き寝して了ふた。

手中の玉をとられたやうに、熊次は嬉しくまた妬ましかつた。駒子は伯母の懷で眠つた。熊次は眠られぬままに夜半に起きて、手帳を出して、日記を書いたりするのであつた。

明くる日は、大江から直ぐ車で親類廻はりをする事にした。熊次の伯母叔母達は、何れも熊本の東南から西へかけて郊外に住んで居る。道順で、熊次夫婦は先づ春竹の叔父叔母を訪ねた。

春竹叔母は母の季の妹で、津森八人同胞の末女であつた。七人姉妹の中で、此叔母ばかりは子

他の叔母達とは殊^{こと}にするのを、母が氣にして居た。霸氣満々としたおしでさんは、本山家の一粒息子の嘉兵衛さんを花々しいものに仕立てたかつたが、おつとりした嘉兵衛さんは姉の思ふままにはならなかつた。肥後一家の上京前後に嘉兵衛さんも上京して、早稲田に學籍を置き、比志嶋家にも、またある時は氷川町の肥後本宅の玄關側の長四疊にもしばらく居た事があり、熊次は嘉兵衛さんと富士登山をした事もあつたが、其後ある新聞に入り、熊次に二つ年上の三十といふ齡をしてまだ獨身で居た。

昔から見馴れた茶の間の眠虎を枕に眠る仙人の畫をかけた地袋の上の佛壇に、伯母はもう一周忌も近い位牌であつた。おしでさんと其妹のお嘉代さんが、熊次夫婦を其前に導いた。熊次の後から駒子が手をついて佛壇を拜むと、

「本當に喃、生きてござつたら」

とおしでさんはお嘉代さんと言ふのであつた。お嘉代さんは女に珍らしい色黒であつたが、夫の新庄さんは二皮目のくるつとして頬髯の總々^{ふさ}した洒落者で、しめた博多帶の貝の口を解けばひとりではらり解ける程凜^{りやう}とした着物の着様も上手で、花柳の遊も盛にやつたものだ。子供

たやうな血の氣のない老人顔が、その下で今ばかりばかり煙管の煙を立てて居る生の叔父しやうにそつくりであつた。

夫婦は次に本山家の門口に車を下りた。熊次の母の母の實家で、母の長姉のお香伯母が歸嫁して居た本山家は、親類中でも富限者で、長女の縁の高森や、二女の嫁いだ新庄の一家も同居し、親類の子供も二人三人は常に來て居た。近くに小學校もあつた關係から、熊次はよく此家に來た。此家の伯父に大學の素讀も習つた。一人息子の鶴彦さんが論語を上げる御褒美に買ひ與へられた繪本太閤記、清正記などの畫本と共に、いつも血色の好い笑顏をした小柄の物やはらかな此處の伯母が熊次を惹いた。したたか者揃ひの津森の七人姉妹の中で、總領の此伯母が一番無事であつた。自ら「へちまノ〜伯母ぢよ」と卑下して居た。伯父は西郷戰爭の翌年亡くなり、伯母も昨春亡くなつた。嗣子鶴彦君は、此家中興の祖の嘉兵衛に名をあらためて、今東京に居る。家は總領のおしでさんが切つて廻はして居る。切髪大痘痕のおしでさんは、本山家の尼將軍と稱へられ、其白い眼は熊次に恐いものであつた。したたか揃ひの叔母達を物の數ともせぬおしでさんは、熊次の母だけには頭を下げた。御馳走するにも、熊次の母の饌部は吸物椀の内容も

せぎすの丈高い父者人ててじやひとの克義かつよしさんが、何時も澁い、苦い顔をして、白い眼をして睨むのが氣障きざうであつたが、それにも懲りず遊びに來たものであつた。長い胡麻鹽髻ごましおをして居た此家の伯父は、西郷戦争の年に亡くなり、伯母も學校に詰め切つて居る今は、養子の克義さんの天下であつた。長男の音彦君は熊次が二度目の同志社時代に米國で亡くなり、熊次が仲好の地平さんは三年前に此家で亡くなり、嗣子になつた其弟の敦雄君は今札幌農學校の豫備に居る。長女のお和さんわさん三女のおかなさんは祖母さんの女學校に寄宿し、敦雄君の弟の實雄君は高等小學に、末子の吉次君は尋常小學に通ひ、養蠶製茶と地所の收入で専ら生計を立てて居る此家の二月は靜に淋しい事である。克義さんお鐵さん夫婦は、珍らしい従弟夫婦の來訪を迎へた。以前熊次が夏休に此家に居た時、英語をちつとも覚えぬ小さな妹を叱つてばかり居る地平さんに代つて、熊次が發音表をつくつたりして面倒を見てA、B、C、を教へたお秋さんは、成程本山の尼將軍の言ふ通り嫁入盛りになつて居る。

夫婦はお鐵さんと背うらの墓地に上つた。南向きの丘の上は、二月初旬もう梅が白く口を切つて居る。伯父の墓に並んで小さく、音彦さんの墓と地平さんの墓が立つて居る。子供の時から喧

も多く、松竹梅のめでたい限を名づけられた。養蠶織機を家業に、地方政界にも頭を出して、新庄さんは派手な人であつた。派手な新庄さんの大家内を同居させて、おしでさんの後見はありながら、主の嘉兵衛さんは一人ぼちの傍目わきめもあたり淋しかつた。

新夫婦の來訪は、嘉兵衛さんには母がはりのおしでさんを刺戟せず措かなかつた。大人しい嘉兵衛さんが吉原通ひの噂に、熊次の父母も心配したのは、もう餘程以前の事であつた。縁談は其頃から彼方此方にかけられた。駒子も候補の一人であつた事を、熊次は後で聞いた。媒妁口は洋行歸りと新郎候補を吹聴したさう。嘉兵衛さんの縁談は、彼此とするするに未だ決つて居なかつた。伊倉の二番目お秋さんを貰はうと思ふが、體が弱いので二の足踏んで居る、とおしでさんは熊次に言ふのであつた。

其お秋さんが祖母や姉妹の女學校に出て居る後を、病身な母を助けて家政をとつて居る熊本の西郊、獨鈷山どくこやまの伊倉家に夫婦が往つたのは、もう正午近い頃であつた。熊次は親類中で此伊倉の家に一番よく來た。此處の伯母と母とが特に仲好しであつた上に、此處の次男の地平さんが熊次の幼友達であつた。野の家に住み馴れた熊次には、丘の上の住居が殊に面白かつた。唯辯

十一で熊本に引出で、十七で東京に上るまで駒子が見馴れた肥後平野や周囲の山々も、丘の上から見れば今新に見るかのやうであつた。小さな手帳を出して、駒子は景色の寫生をはじめた。未だ腫れぼつたい眼をして、やつれた駒子の横顔が、熊次の胷を痛くした。彼は思はず駒子をかき抱いた。

山を下ると、お秋さん手料理の午餐が待つて居た。此家得意の洋禽の煮込などに、熊次は昔を偲ぶのであつた。

今日の喜を述べ、別を告げて、夫婦は伊倉家を出た。而して赤十字の徽章つけた白服の傷病兵のちらほらする市中を通つて、車で菊池家に歸つた。

嘩友達、熊次の二十歳地平さんの十九で榮さかんさんに絡からみ京都の一年を色々揉み合ふた縁も深い地平さんの墓參を今日しやうとは思はなかつた。熊次は地平さんの墓の前に額ぬかづいて、途中買つて來た榊さかきの枝を挿さし、それに歌を結びつけた。

思ひきや 年ふるさとに 歸り來て

君がおくつき 今日訪はむとは

お鐵さんは頻に涙を拭いて居た。此丘の家に來る毎に、其處に往つて黃と綠と自然に染め分けた金銀竹の一本を熊次がせびらずに措かなかつた西隣の家屋敷は、地平さんの存生中手に入れたがつて居たさうなが、今は伊倉家の有になつて居ると云ふ事である。榊に結んだ歌を窃とつて、お鐵さんは先づ下つて往つた。

熊次は駒子と小舎こや程もある紫黒の大石に上つた。石の上から、見晴らしが好かつた。南正面に青い宇土半嶋の山山。あの陽みなみに船津の義姉の家はある。而して其家の裏口まで來て居る海の南の果に、熊次が生れ故郷の水俣みなまたはある。熊次は駒子にさう告げた。宇土半嶋の西端に三角の頭みすみを立てて居る三角岳、其下の三角に駒子は父と海水浴に往つた記憶があつた。菊池に生れて、

「大隈さんに上げてから。」

と清人君が答へた。報知新聞記者の清人君は、大隈さんに近しくして居る。駒子が簞笥に美しい縮緬の裂き裂があつた。大隈さんから貰つたもの、と駒子は云ふて居た。駒子は往かぬが、駒子の母が清人君に連れられて大隈邸に往つたさうで、緋縮緬は大隈夫人から駒子へのおみやげであつた。兄は兎に角、自分は大隈さんなどに一向用はない熊次に、駒子の緋縮緬はうれしいものでもありがたいものでもなかつた。園藝好きの大隈さんは、盛に菊も作らして居る。一本擇りの肥後菊の苗は、好い贈物に違ひない。清人君が大隈さんに贈るのは聞こえて居る。然し熊次は「大隈さんに上げてから」と云ふ清人君の一言が氣に喰はなかつた。駒子の父には唯一人祕藏娘の駒子をもらつた熊次が、かたみの菊苗の分配に、大隈さんの後廻おとしまはしになるのは、うれしくない。

親に後れた兄妹三人が、記念の寫眞に往つた。駒子は熊次もと言ふたさうなが、勿論それは水入らずの血の記念であらねばならなかつた。駒子が兄達と寫眞に往つて留守の間、熊次は一人隠宅に居た。而して淋しかつた。

隱居夫婦と主人を一月の中になくした家は、魂のぬけ殻からのやうなものであつた。二歳の夏雄を抱いた若い未亡人のおすがさんと、夏雄の父の兄と異母弟との間に、後の處置は難題であつた。おすがさんの父者人ててじやびとは、清人君の人物に打込み、おすがさんの姉のおそゑさんが未だ縁づかずに居たを幸ひ一つにしたい存念であつた。家の内がごたごたして居ると、奉公人の中には、竇溜しやうりゅうをさらつて二本木遊廓に耽溺する者など出來て、清人君がそれを引立てに往つたり、色々の事が起つた。

此様な中から駒子を引きぬいて行くは、全く氣の毒であつた。然し何時まで居ても、駒子に用がない時はありさうにもなかつた。色々の事が熊次に不満を與へはじめた。土地の風習で、店の若い者等が駒子の事を「お駒さん、お駒さん」と言ふのも、熊次は氣障であつた。菊作りの名人であつた駒子の父の記念に、熊次は菊苗を所望した。

母の女學校とに教鞭を執つて居る。其學校には、柳川さんが校長時代、熊次も英語の助教をし、七年前東京へ上る時熊次の爲に開かれた煎餅の送別會で涙を流して未來の抱負を述べたも其階下の教場であつた。近藤君にも佐藤君にも京都を飛び出して以來初めて會ふ熊次は、二人が眞面目で大人しい人達だけに、きまり悪い思をした。匆々に挨拶して、熊次はまた車に乗つた。水前寺に着くまでの道すがら、熊次の心は色々に亂れた。思はぬ會面が惹起したひき起こ雜多な感の下に、折角見に來た水前寺も、さう面白くもなかつた。二人は園内を一巡して、名物の餡餅餡燒を買ふと、直ぐ車で大江の宅に往つた。

安永の姉からは、出られぬから母上の傳言は大江の姉まで言ひ置いてくれ、との返事が來て居た。出られぬとならば、此方から往かねばならぬ。熊次は直ぐ駒子と車で出かけた。手ぶらの熊次に、姉が心を添へてみやげの菓子袋など整へてくれた。

馬じやくりの凸凹した三里の野道は中々長かつた。母の實家の杉堂すぎどうへも此道に行くのであるが、長姉が安永に嫁いで以來熊次はしばしば此道を往來したものだ。姉に連れられて歩いて行く姉は土堤どての野蒜のびるを摘んで、早速夕饌にそれを酢味噌にした事もあつた。姉が嫁いだ頃、

熊次の血の集^{つと}ひもまだ十分でなかつた。大江の姉と伯母叔母達の家は訪ふたが、三里東の木山には安永の姉が居る。八里南の海邊には、船津の義姉が居る。熊次は姉達に母の傳言を帶びて來た。母の存生^{せんしやうちう}中に一度は東京に上つて來い、と云ふだけであつたが、出來る事なら面^まのあたり傳へたい。大江の姉から通知が往つて居るので、今日は何角の消息がある筈。駒子が歸ると、熊次は匆々に駒子を促して、また菊池家を出た。

血の會も大切だが、熊次は愛する自然にも無愛想は出來なかつた。熊次にも、駒子にも、熊本とし云へば水の水前寺を忘るる事は出來ない。郊外の家が半里とはなれて居なかつたので、熊次の少年時代は何かと云へば水前寺に出かけたものであつた。六歳の駒子は、初めて水前寺に來て美しい水に心をとられ、泊まると云ふて聽かなかつた。駒子の父も、其水前寺から流るる砂取川のほとりには住みたいとさへ言ふて居たさうな。久しぶりに熊本に來て、見ずに去るのも心外である。夫婦は車で水前寺に往つた。九品寺の村を出はなれると、向ふから書生體の若い男が二人來る。と見て、熊次は車を下りた。一人は同志社で一年上級の近藤君、一人は同級の佐藤君であつた。二人は尋常に同志社を卒業して、今畑の向ふに見えて居る私立英學校と伯

業して、師範學校出の誠まことといふのを婿養子に迎へ、若夫婦は今熊本に居る。姉に生れた長女は亡くなら、其後に生れた次女のおますが以前熊本に熊次が居た時はまだ母の乳を吸ふて居た。熊次が鹿兒嶋から連れ戻されて、熊本に落ちつく前は、安永の家に半月餘も厄介になつた。長い顔する安永さんの氣をかねて、姉は熊次に質札を書かせたり、夫の前を繕ふたものだ。辛抱者揃ひの大江の義兄にも、安永の義兄にも、熊次の信用は無かつた。

熊次夫婦が安永の門に車を下りた時は、二月初の日影がもう斜になつて居た。安永さんの軍人名残りの幅濶い顔の半分を埋める鬚髯ひげが餘程白くなつて居る。年の二十近くも違ふ姉が、丁度好いつり合ひに見えるやうになつた。安永さんは莞爾々々頬髯を振りながら、

「お時に言ふた事でしたたい。『往くなら往くがええ。行けとも、行くなてちも、俺おれは言はん。』」
安永さんは頭を欹かしげて低くははと笑つた。

お馴染なじみの鮎の手料理で飯が出た。安永さんの屋敷内の浅井に、いつも鮎が飼つてあつた。安永さんの晩酌の肴にもなれば、客來の馳走にもなつた。姉は手が利いた。客來があると撐網たまたを持つて出て行き、勝手で少しことやつて居ると、もう饌部が客の前にならんだ。

安永さんは木山町の藥屋の物置がはりの薄闇い二階にくすぶつて、貯蓄の小金を貸して居たが、其後抵當流れの地所に家を建てて移つた。町から大分はなれて南向きの傾斜地、木山川から田圃向ふの山々を見晴らす好い地所であつた。縁は織機を据ゑるやう一間幅にし、大戸は泥棒を凹ますべく裏に鍼力を張つた其家は、安永さんを象徴するものであつた。安永さんは金借りに來る者の持つて來る一升徳利を堅く斷つた。情實禁物、義理明白、すべてが軍隊式にきちんとして居た。維新初年陸軍大尉までやつた人で、其昔英吉利の甲比丹かびたんに世話してもらつた大形銀時計や、色の褪さめた厚毛布や、すべてのものをきちんと保存して居た。武藝も勿論よく出來た。用心の爲、枕頭には常に枕刀と裝彈した短銃を置いた。安永さんは職業柄よく裁判所に出入した。熊本に出て、歸りが夜になつても、減多に親類の家に泊らなかつた。其かはり四尺もある木劍に手ぬきの革紐をつけてついて居た。重要書類を入れた胴亂どうらんを、如何な時にも手放した事はなかつた。安永さんの最初の結婚は不幸であつた。女一人むすめもつて、不貞の故に先妻は離別となり、十年近く一人で居た後、これも女兒一人まうけて夫に去られ離別となつた熊次の長姉が嫁いで來たのであつた。お時姉が十一から引取つた先妻の女のおちまは、伊倉伯母の女學校を卒

兄は硯と筆を借り、一葉の戲畫を描いて熊次に見せた。東京と國許くにもとの眞中に、思案投げ首の女が立つて途方に暮るる圖である。船津の義兄は次男であつたが、家には老人の父がかかつて居た。明治も三十近い今日まだ丁髷を結ふて居る名とりの頑固爺さんであつた。維新當時は藩兵として京都に出たりして相應出世の望もあつた才氣の勝つた義兄も、斯父故に生涯郷里に埋うもれ鬱ふさはらしによくない女に關係したりして、隻眼ひとめ盲めくらいたも其故と云はれて居た。現在の子がそれで、媳よめのお安も散々苦勞させられ、あつさりした氣分の彼女も幾度か死なうとすでに思つたものであつた。熊次が八年前船津の家に一夏過した頃は、頑固老人はもう八十近い齡としをして、階段下の閑處かんじよにきちんと座わつて、雜貨を賣る店の賣溜を疊の上にぶちまけ、天保錢や一錢二錢銅貨や文久錢を「一つ、二つ」と勘定して居た。其老人を差置いて、船津の義姉の上京は中思ひも寄らなかつた。

船津の義兄は、田舎の隅に居て、何もかもよく分つて居た。熊次夫婦の新婚寫眞が届いた時、皆で花嫁を見て、「これは中々別嬪」と言ひ合ふたと笑つた。熊次の仕事の翻譯である事を知つて居て、新聞社の方もあなたはさう忙しい事もあるまいに、もつと逗留なさい、と勧めたりし

姉の手料理の馳走に弟夫婦がなつて、偕暇を告げて、立上つた時は、日も暮れ暮れであつた。

阿父とんさんに肖て三日月眉の小學二年のおますは、若い東京の叔母の傍を離れ得なかつた。夫婦が車に乗ると、彼女は叔母の車にとりついて、

「わたしも熊本に往くもん、明日は日曜あしただけん——」

と中々手を放さなかつた。

歸路は夜に入つた。車夫の若い一人は、安永の縁側に來て仰向けに寝ころんだり、膝かけで崖がけを引ばたいて、「酒、酒」と叫んだりしたが、歸る途中もぶつぶつ不快を示した。年長の一人がそれを宥めた。水前寺から押廻はして乗りつづけ、茶一杯で済ましたは、氣がつかなかつた。

熊次は急に氣味悪くなつた。事無かれ、と車上に念じた。夜道三里を兎に角無事に大江の門に着いた時、熊次はほつとした。駒子は車上にふらふらして、何時の間にか淺黄縮緬のお高祖頭こそづ巾きんを途中に落して居た。

船津の新造義兄が來て居た。義姉は來られぬので、義兄が代理で母の傳言を聞きに來たのであつた。肥後家の婿達の中で、船津の義兄は氣の利いた洒落者であつた。傳言の趣を聞いて、義

第十五章 旋風

一

熊次が熊本に来て、五日目になつた。駒子の父の葬式は済むし、熊次の親類廻りも大抵済んだ。此家の後始末は未だつかぬが、明日は夫妻東歸の途に上る事にした。正太さんは昨日一先づ隈府に歸つた。山鹿には今度は御無禮する、と駒子からたよりをさせた。熊本も今日一日。せめて、今日一日は、駒子をゆつくりさせやう、と熊次は思ふた。駒子をゆつくりさせて、熊次は外出する事にした。熊次は尙一軒往かねばならぬ家があつた。それは嫂あによめの實家である。本莊の母者は喘息で大分わるい、と大江の姉から聞いた。ソツプでも持つて、見舞つて來やう。駒子に相談すると、異議なく引受けたが、「兄共も疲れて居ますから」と彼女は言ふた。それは本末を違へて居る、と云ふかの如く熊次の耳を聳さした。

た。家業に忙しくて碌に新聞も見ぬ大江の義兄が、皇族の宮殿下でも梅干菜で大本營に出勤されるといふ新聞受賣の熊次の話を感に堪えて取り次ぐと、船津の義兄はふんと晒さらつて話を他に轉するのであつた。眼のあいた彼の前には、熊次も東京下りを振り廻はす事が出来なかつた。話の半に、すぐれぬ駒子の顔を大江の姉は見追みのがさなかつた。頭が痛いのは疲が出たのだらう、と姉は強いこ駒子を横にならせ、姪のおきゑやお敬が濡手拭でかはるがはる叔母の頭を冷やすのであつた。

其處に船津の長女のおちせが夫の高木君と來た。高木君は其昔兄の家塾で熊次やおちせの兄の嘉一郎の先輩であつた。熊次が上京した頃は、上州桐生で傳道師をして居た。今は熊本で傳道師に教師をかねて居る。背丈の矮ひくいかはりに眼口は大きく、塾生當時から大まかにゆつたり構へ、漢詩が得意で、小川の二枚橋から落ちては、「高木高橋から落つ」と云ふ秀句が出来たものだ。口髯の生えた三十男に、「叔母さん」と挨拶されて、駒子は喫驚びつくりしたやうに禮を返へして居た。

駒子の氣分も少し直つたので、別を一同に告げ、車で下通町に歸つた。

つた。叔父叔母、甥姪と義理が名づくる年配もひとしい若い夫婦の主と客は、顔見せの挨拶が済めば、相對して多くの話柄ももたなかつた。

客の若夫婦が辭し去ると、熊次はやがてソップの瓶を提げて出かけた。母屋の土間を通ると、清人君が出て來て、又かと云ふ貌かまをした。

「お駒は——？」

「ええ、私は居ます。」

駒子が口早に曰ふた。

追ひ出さるるかのやうに、面白くない氣もちで、熊次は出て往つた。

駒子は一兩日頭が重いので、昨日寫眞の歸りに醫者に寄つたら、熱が三十八度五分あつて、風邪かも知れぬ、兎に角大切になさい、と藥をくれたさうな。それから水前寺、木山往復などして、昨夜は大分氣分が悪さうだつた。今日は少し快いが、それでも何だか憫あはれとして居る。何れにせよ、もう熊本に長居は無用だ。是が非でも、明日は立たねばならぬ。

斯く思ひつつ、熊次は白川に架した代繼の假橋を渡つて、うど暗い藪陰をぬけて、本莊家に往

出やうとすると、安永の若夫婦が訪ねて來た。身材は矮いが、運動場で號令などかける時は、誰のよりも生徒が聴く、と昨日大江の姉が言ふて居た誠君は、落ちついた風采が何處やら養父に肖て居る。早口の義姪のおちまは、白粉などつけて、義叔母の駒子とは年配もかはらなかつた。熊次が熊本に居た頃は、受持ちの英文典の組におちまも居た。駒子はまた誠君の教生時代師範學校附屬の小學生徒として教へられた事もあつた。小倉の洋服を着て、小さい體をして、何處からあの聲が出るかと思ふ程のしつかりした聲を出す先生を、駒子も覺えて居た。最初安永に姉が縁づく、ついでに熊次も養子におちまの父に望まれた。それは斷はられた。姉には義妹安子の弟、本莊の二番目彦馬君がそれにきまつた。先に熊本に居た頃、熊次は彦馬君と安永に往つた事もあつた。安永さんは彦馬君を可愛がつたが、姉の氣にはあまり入らなかつた。おちまは熊次の上京後、「恐れ多くも砂漠の水程も御愛し下され候はば」などと叔父に手紙を書いた。姪としての親しみ以上何ものもない叔父は、氣にもとめず返事もしなかつた。其内何時か彦馬君との縁は破談になつた事を聞いた。程なくおちまは伊倉伯母の女學校の第一回卒業生として學校を出た。而して最後に擇まれた誠君と結婚したのは、熊次夫婦の結婚の少し前であ

連日の昂奮で、熊次も大分疲れた。

通町に歸ると、もうランプがついて居た。母屋の奥の長火鉢に幾箇かの人影が寄つて居る。

「唯今。」

「お歸んなさい——」と清人君の聲。

駒子が立つて來た。

「彼方へいらつしやいますか？」

「ええ。」

ぶつきら棒に熊次は言ふて、長火鉢の方へ目禮すると、さつさと裏へ隱宅に往つた。駒子が跟いて來る。

熊次は疲れて入浴したかつた。家内に風呂は立たない。熊次は焦々して、駒子が渡す手拭を引たくるやうにして直ぐ錢湯に出かけた。土間を通ると、清人君が「何處へ？ 湯に？——湯札を上げんか。」

熊次は聞き捨てにして町の風呂に往つた。今日一日駒子と別に居た。俺の駒子が菊池の駒子に

つた。

本莊さんは菊作り仲間で駒子の父を識つて居た。以前は村長をして居たが、今は閑で居る。惣領の力夫君は父と氣が合はず、はなれにいつも別居して居たが、今は上京して義弟の新聞社の事務をして居る。其はなれには次男の彦馬君が織機をして居た。母者は喘息で多くは寝て居るし、家内は淋しい事であつた。

本莊さんは熊次を直ぐわが居間に引張つた。暇はとらせんからと云ふて、四五枚綴ぢの書き物を出し、熊次に見てくれと云ふのであつた。それは午砲の響の遅速に關する研究であつた。本莊さんは緻密で明晰な頭腦のもち主である。熊次は領分以外のものに眼は通したが、言ふべき何ものも有たなかつた。東京話を少しして、直ぐ暇を告げた。

本莊さんから、熊次は大江の姉の宅に往つて、別を告げた。それから女學校の門を入つて、伊倉の伯母に別を告げた。

これで熊次の義務は終つた。菊池の隱宅に今宵一夜を過ごし、明日の一番で熊本を立てば、それでよいのである。

荷物をしめて置かねば、と到頭熊次は言ひ出した。

「荷づくりは御面倒でつしゅう。若い者にさせまつしゅう。」

と清人君が曰ふ。

「何、出奔したりして、荷作りは馴れて居ますから。」

と熊次は毒づいた。

清人君は澁々立上つた。

「ぢや明朝。」

「ええ、明朝。」

清人君は出て往つた。

駒子は先刻から唯茫然と黙りこくつて居る。

突然熊次の怒が破裂した。

「斯様に疲れて居るぢやないか。これ、見ろ。」

突立ち上りざま熊次は汚れた綿ネルのすぼん下を見せた。

逆戻りして、俺はのけ物になつた氣がする。癢に障つてならぬ。

一風呂浴びると、それでもいくらかさつぱりした氣分になつた。何も悶れる事はない。

風呂から熊次が歸ると、駒子も共に隠宅に歸つた。

清人君も來て、兄妹が母の終焉しうえんの室まの六疊に、三人は火鉢に手を翳かざした。

熊次は、家の後始末もつかぬに駒子を連れ歸る濟まなさを繰り返へした。遽にやに父母に別れ、妹にさへ置き去られ、獨り家の難局に當る清人君は全く氣の毒である。

清人君は熊次の父の香奠の禮など云ふた。尾の道から東京廣島に手紙を出して置いたので、父からも兄からも前後して懇々吊詞を寄せ、父からは大江に借りて香奠を出すやうにと云ふて來た。清人君は其禮を云ふたのであつた。

夜は追々ふけて、火鉢の炭はしばしばつがれた。清人君は夜と共に語り明かしさうに、卷蓆まきたたひこを何本となく灰にして、少しも動ぜぬ。疲れた熊次は苛々いらいらして來た。無理はない、と思ふが、熊次の根氣も追々盡きかけた。駒子が氣を利かして此場を打切つてくれさうなものだ。然し駒子も獨りぼつちの兄を残して明朝は東へ去るのだ。

んだ。」

而して慰むるやうに、辯ずるやうに、詫ぶるやうに、言葉がのべつに油の如く彼の口を漏れた。それは彼が抱いて居る駒子と、障子の外に居ると思ふ駒子の兄に聞かす言葉であつた。

しばらく時がたつた。

戸口もとに人々の足音がして、障子が開くと、大江の義兄の喫驚した黒い顔が現はれた。背後に清人君の影も居る。寢込を驚かされてまだ眼がさめきれぬやうな義兄は、つかつか立寄つて、

「熊次さん、熊次さん、まあ、何でも、彼方へ行かう、彼方へ。」

熊次を引き立てにかかつた。

熊次は顔をしかめた。義兄は只管熊次を引張る。それを振り切つて熊次は曰ふた。

「此通りもう落ちついて居るぢやありませんか。私は此處を動きません。夫婦の事は夫婦でします。無理をしなされると、私共は情死してしまひます。」

清人君が大江の義兄を引きのけて、ぐどぐど小聲に話し合ふて居たが、やがて一人の下駄の音が出て往つた。

「俺は正月からずっと穿きづめで居るぞ。」

矢庭に拳を固めて、つづけさまに駒子の背を撲つた。而して蹴倒した。

駒子が悲鳴を上げた。

「熊次さん、熊次さん。」

驚いた聲して、駒子の兄が戸口から入つて來た。清人君はまだ去りもやらずに居たのだつた。

熊次は勃然とした。

「何です？ あなたは彼方へお出でなさい。」

手荒に清人君を突き出して、熊次はびしやり障子をしめた。

駒子は轉げたまま低い鳴咽をつづけて居る。

其聲が耳に入ると、ずっと熊次の怒火が燃え下つた。頭が空洞になつた。忽ち水の如く悔恨と

失望が漲つて來た。

熊次もごろり横になつて駒子を抱いた。而して片手に駒子の背を撫でた。

「俺が悪かつた。全く俺が悪かつた。ゆるしてくれるねエ。ね、ゆるすだらう。よくなかつた

清人君は駒子を目して立上つた。

熊次は首肯うなづいた。

駒子は吐息と共に立上つた。

熊次は俯うつむいて眼を瞑つぶつた。

忽、耳もとに駒子の聲が囁ささやいた。

「私、一寸往つて來ます。心は此處に居りますよ。」

熊次は頷うなづいた。而して小聲に、

「面倒臭くなれば、此まま立つてしまはう。」

今度は駒子が頷いた。

駒子が出て往つた。駒子の下駄の音が母屋の方へ遠ざかつて行くと、熊次は隱宅に一人になった。火の氣少ない火鉢の傍はたにつくねんと座わつて、熊次は眼を瞑つた。頭はしびれて、何一つ思へない。

駒子の中々歸つて來なかつた。

清人君が障子を開けて入つて來た。

三人はまた火鉢を圍むだ。

「失禮しました。喫驚びつくりしなすつたでせう。」

熊次が眞顔で口を切つた。

「ええ、喫驚しました。」

兄妹の父も随分皮肉で吾儘も言ふたが、此様な烈しい癩癩は、菊池の家では見た事も聞いた事もなかつた。

「よくそれで文章が書けますなア。」

不思議と云ふ顔をして、清人君はまちまち熊次の顔を眺めた。

熊次は居住居を直した。

「いや、實に、何でした——それだけででも、離縁——と云ふ理由は十分にあります。然し——」

「ええ、私も、その、これぢや如何しても離縁てち思ふたのですが——まあ、一寸彼方あつちへ行かう。」

熊次は築山の方を一廻はりして、黒板塀に來た。下駄をぬいで塀外に投げた。而して塀の横木に足踏みかけると、身輕に塀に上つた。もう霜が下りて居るらしく、手がさらさら冷やりとした。塀外は鷹匠小路たかじやうこうぢの淋しい通りである。熊次はひらり飛び下りた。下駄をはき、手の霜を拂つて、少し南へ行くと、東へ折れて下通町の街路に出た。

熊次は何時しか其通りを西へぶらぶら歩いて居た。片破れ月の光ほの白い街に、下駄音ばかり高く響く。街路樹の梅が咲いて居る。伸び上つて小さな枝を折ると、月あかりにそれは紅梅と知れた。紅梅の香をかきかき熊次は歩いた。

熊本の市街を西へ出はなれて、人つ子一人通らぬ淋しい白木原を通ると、二三日前駒子と來た伊倉家の丘を上る自分を熊次は見出した。鶏が鳴いて居る。然し夜は未だ明けない。玄關口も、勝手口も締つて居る。

熊次は丘の上の墓地に上つた。月明りに梅が白く香る。熊次は駒子が景色を寫生した大きな石に上つた。而して腰を下ろした。欠伸が頻に出る。眠たくてならぬ。熊次は肱を枕に石の上に横ろんだ。丘の上の曉の寒さが慄々ぞくぞくと身にしみて、中々眠れない。熊次は到頭石の上に起座し

火鉢の火もいよいよ消えて、室内の寒さが身にしみる。

蠐、々、々。耳近い音に、熊次は眼を開いた。ランプが燃え下るのである。蠐、々、々。見る
見るすうと消えた。油が盡きたのだ。心が赤く見えて居たが、やがてそれも消ゆると、眞闇に
なつた。

熊次は固唾^{かたづ}をのむだ。

屹と眼を見張つて、左右を見廻はした。唯眞黒い闇がある。

熊次はまた息を吞むだ。

永劫のやうな時が立つ。闇に危座する熊次の體は慄々^{ぞくぞく}して、額に脂汗^{あぶらあせ}が滲^しみ出た。息が詰まり
さう。

熊次は突と立上つた。手さぐりに土間に下りると、下駄をはいて戸口を出た。片破れ月が西に
挂つて、薄明りがさして居る。

熊次はちつと聞き耳を立てた。今出て來た隱宅はひつそりして居る。母屋の方——にも何の物
音もない。

前日來頭が痛かつた駒子は、此夜隱宅で夫や兄との話に堪え得ぬ程氣分が重かつた。夫の癩癧で氣を引立てられ、心を隱宅に残して兄と母屋に往つた。家の者は皆寢靜まつてひっそりした奥の間に、兄妹は差向ひになつた。

兄は一も二もなく離縁を主張した。あんなにあらう、とは思はず最初乗り地になつて結婚を勧めたが悪かつた。だから東京でも離縁と言ひ出したのだ。それは母者の心もさうだつた。あの癩癧が生涯直るものではない。行く行くそれが昂じて、お駒が怪俄したり不具になつたりでもすると、俺おれが父上母上に濟まぬ。

「俺おれが拜む、地に手をついて拜む、どうぞ歸つてくれ。」

と駒子の兄は土間に飛び下り、地にびつたり兩手をついて妹の前に頭を下げた。

駒子も土間に飛び下り、地に手をついて兄を拜むだ。

た。

際限のないかのやうな夜が兎に角明けた。

臺所口から突然現はれた熊次の姿に、驚き怪しむ克義さん夫婦に熊次は包まず昨夜の始末を打明けた。伯母は學校に居た。お鐵さんは熊次が夜明まで戸を得た敵かなかつた遠慮をいたはしがつて、「でも、よくお出でた。」と云ふた。いつも熊次の煙たく思ふ克義さんは、苦い顔もせず、朝飯の箸を措くなり身を起して様子見に熊本に出かけて往つた。

駒子は急いで内に入ると、提灯の光で熊次のヅツクの鞆に入れかけた手まはりのものを手早く詰めた。熊次が遺した帽子もとつた。而して海老茶毛糸の肩掛をかけ、やをら鞆を提げて隠宅を出た。いつも鑰ちやうをしてある裏門が、不思議に唯引き立ててあつたので、駒子は容易に出て往つた。あたりひとつとして、誰咎むる者もなかつた。

停車場が一寸駒子の心に浮んだ。然し駒子は何時しか重い鞆をぶら下げて三年阪を上つて居た。熊次の所在も判然せぬ。追手の心配もある。重い頭はふらふらし、胸はしきりにどきつく。それでも安巳橋やすみはしを渡るまで、不思議に追つて来る者もなかつた。人にも會はなかつた。水車の音の淋しい熊本女學校下を小川に沿ふて、大江の家に着いた。

夜はほの白く明けそめた。

大江の義兄が歸つた後、心配に寝もやらずに居た熊次の姉は、驚き喜んで駒子を迎へた。

熊次は來て居なかつた。

駒子は胸を轟かした。義姉諸共彼此と臆測をめぐらして、心痛の眉を寄せた。

夜が明けて、思ひがけなく伊倉の克義さんが来るまでは、駒子の胸騒ぎは中々収まらなかつた。

「私も拜みます。何卒私を遣つて下さい。」

「お駒は情死する女かい？」

「はい。情死します。」

「何を、馬鹿な言云ふなッ！」

駒子の兄は駒子を「氣なし」と言ふて居た。やさし過ぎて、氣象が足らぬ。だから熊次にいぢめられる。さう兄は思ふた。駒子が歸らぬ決心の案外堅いと見た兄は、少し驚いたらしかつたが、何、それも一時の氣まぐれ、さう奥行があらうとは思はなかつた。今此處で諍ふても果がない。妹の體が此家にある間は、如何ともなる。今夜に限る事でない。さう兄は思ふたらしく、「では、私は隱宅に參ります。」

と立上る駒子を、兄は支へやうとしなかつた。

駒子は提灯ともして、急いで隱宅に歸つた。

隱宅は眞闇であつた。熊次は居なかつた。胸轟かしつつも、駒子は土間を見た。熊次の下駄が無い。提灯のあかりであたりを見て廻はると、黒板塀の霜に足跡がついて居る。

黒に屯^{たくろ}して居る。弱身を突かれて、熊次は縮^{すく}むだ。次の瞬間に、彼は直ぐ駒子に不満をもつた。何故伊倉の伯母にまで夫の罪を託^{あづか}くやうな事を言はうとする乎？然し彼は罪人である。駒子を咎める事は出来ぬ。熊次は伯母に一切を懺悔する勇氣がなかつた。伯母の問に對して、彼は唯お茶を濁した。

駒子は伯母に昨夜の事については唯大束な話をしただけであつた。駒子が「まだ外にも」と云ふたは、昨夜の打擲の一儀であつた事を、疵持つ足の熊次は暮の出来事に思ひひがめたのであつた。

伯母の話によれば、駒子は大江で保護して居るが、通町から引取らうとしていきり立つて居るさうな。夜が明けて、隠宅に兩人の影もなく、靴も無いので、てつきり申合はせて立つて了ふたものと見當をつけ、春日と池田の兩停車場に人をやつて物色したが、一番にも二番にも兩人は終に見えぬので、果ては大江の家へ來たのであつた。

「ああなたが馬鹿な事^{こと}ばするもんだけん。」

と窘^{たしな}めた伯母は、熊次の悄氣を見て、

克義さんが歸つて來た。駒子が大江の姉の家に居る事を聞いて、熊次は安心した。如何様な徑路でそんな事になつたか知らぬが、熊次はそれを當然の歸着のやうに思ふて少しも怪まなかつた。俺おれの駒子だ。それ位の事はする。熊次は胸すが透くやうに覺えた。

午後に伯母が歸つて來た。面目ない顔を熊次は伯母に會はした。伯母は事の起因おこりを問ふた。熊次は一切を駒子の兄と自分の感情の齟齬に歸し、それは東京以來の事で、要するに駒子の兄がよくない事にして丁ふた。

「それぢやお駒さんが、『まだ外にもある』てち言ふのは、其事だらうな？」

熊次は冷やりとした。彼は駒子の兄に非を嫁して、自分の事は一切棚に上げた。伯母が取り次ぐ駒子の半句は、熊次の急所を刺した。重々の罪人は誰でもない、外ならぬ自分であつた。駒子が伯母に言ひかけて止め、伯母が聽かうとして遠慮した其處には、熊次に大不利なものが眞

來てくれ、と謂ふのである。

熊次はまたびしやり頭をたたかれた。駒子の急病——それは昨夜の亂暴の結果でなくて何だらう？ 熊次は吐息といきと共に言ふた。

「若しもの事があつたら、私も生きて居りません。」

伯母の氣色が變つた。

「それぢやああたば遣る事は出來ん。」

熊次はまた我を折らねばならなかつた。如何様な事があつても決して氣任せにせぬ、といふ心からの熊次の一言を聞くまでは、伯母は熊次を立たせなかつた。

熊次は大泣きに泣いた。

伯母が色を和らげた。

「もう好よか々よか、ああたが病氣したりすると、お駒さんの病氣よりも心配する。ああされち、やつぱり慕ふち來るけん、阿父阿母ととさんかかさんは亡くなんなさるし、飼かひ立てて連れち戻ると樂たのしみたい。」

しんみりした伯母の言葉は、眞闇な熊次の頭にほのかな一道の光明を通した。七十を過ぎて、

「そりばつてん、男が癪癢起して奥さんば打つたりするな、人のものば奪^とつたりするよかましい。」

と言ふた。今丘の上の墓になつて居る熊次の友達、伯母の二番目孫の地平さんには、病の盜癖があつて、其爲に中學校も退校になつた。地平さんが土になつても、伯母には其苦痛がいまだに生々して居るのである。熊次はますます憎氣る外はなかつた。

「阿母^{かふ}さんからも紙面が來た。」

伯母は信玄袋の中から一通取り出して熊次に渡した。それは駒子の父が亡くなつたしらせを聞いて、母が書いた手紙である。眼がわるい母は、歌を詠んでも筆をとつて書く事は滅多になかつた。手紙を書くは、よくよくの事であつた。かさねがさねの不幸をうけたお駒の事を思へば、「身を切らるるよりもつらく」と讀んで、熊次は嗚咽して了ふた。

「お駒に見せますから、何卒此手紙は私に下さい。」

熊次は手紙を懷中した。

ランプがつくと、大江から甥の進が車で急使に來た。駒子の容體が急に悪いから、直ぐ熊次に

合ふた。夜に入るといよいよ大熱になつた。

熊次は自分の亂暴故の氣熱であらうと思ふた。焼くやうに熱い妻の額の濡手拭を、彼はしばしば取り代へた。

月の役が容赦もなく此中に始まつた。駒子は悶え泣いた。體がもう利かぬ駒子は、すべてを夫に頼む外はなかつた。あらぬさまを男に見せ、羞かしい事を頼まねばならぬ情無さを、如何する事も出来なかつた。まだ親しみ薄い義姉の家、身近には夫の外に人もない。熊次は如何慰めてよいか知らなかつた。駒子が女である事を彼は氣の毒に思ふた。ぢれつたがる駒子に教はつて、彼は不器用に紙を折つたり色々をした。

醫者が來た。はつきり分からぬが、チフスの恐れがあるといふ。

姉が五十餘の素人くさい看護婦を連れて來た。

「色々知つとるてち言ふち、看護婦さんに吾儘云ふちやならん。」

姉が熊次に嚴命した。昨夜の失策以來、とつて二十八歳の熊次は、姉の前に唯ただのイタヅラ小僧であつた。

世の中の味をさまざま噛みしめて居る伯母の言葉は、空になつた熊次の足を地につかす確實さがあつた。熊次は少し力づいた。

屋敷下から熊次は迎の車に乗つた。今曉ぶらぶら歩いて來た白木原を、車は東へ走る。夜風が熊次の熱い額を冷やした。一里半を車に揺られて、大江の門に下りる時、熊次は少し落ちついて居た。

面目ない顔を、熊次は姉に合はした。

駒子は熊次が父の書齋であつた中二階の八疊に寝て居た。

突と寄つて、熊次は駒子の背を撫でた。駒子は蒲團に顔を埋めて、^{ひひ}啼々と泣き入つた。

克義さんが來て、熊次が伊倉家に居る事が分かると、安心した駒子は一時に疲れが出たかのやうにぐつたりした。姉が駒子をいたはつて、奥の中二階に休息させた。風呂にも駒子は入つた。背を流す女が怪む程に、駒子の背には熊次の拳の痕が赤くなつて居た。姉や學校から來た伊倉の伯母と話す間も、駒子は座に堪えぬ程であつたが、午後から到頭横になつたきり起き上れなくなつた。姪達がかはるがはる叔母の頭を冷やした。濡れ手拭が「湯の如^{ごと}なる」と姪達が言ひ

四

容易ならぬは、駒子の病氣ばかりでなかつた。駒子の兄の胸の中がそれであつた。

駒子が父肖に比して寧母肖の天性溫和な駒子の兄も、唯半月の間に母と父を奪ひ去つて彼を孤兒にした運命に對し、胸に瞋恚を燃やして居た。其處に熊次の亂暴が突發した。加之夫婦は一言の斷はりもなく隱宅を逃げ出した。熊次は兎に角、父母亡き後に唯一人殘された肉身の妹が、兄を捨てて亂暴な夫に就いた。駒子の兄の怒と嫉妬は極點に達したのである。駒子も駒子だが、駒子を誘拐してしまつた熊次が不埒千萬である。見くびつて油斷した間に、玉は手を漏つた。是が非でも駒子を取り戻さねばならぬ。駒子の兄はかういきまいた。

清人君が釣臺をつらして來た、と云ふ報が駒子に付き添ふ熊次に齎らされた。素破こそ——熊次の胸が高く拍ち出した。次の報までには可なり長い時間がたつた。熊次は大江の義兄の軟化を恐れた。姉が來た。「死んでも構はぬ、連れて歸る」と駒子の兄は曰ふさうな。然し勿論渡し

濡手拭が氷嚢になり、あくる朝は朝から熱が四十度に上つた。姉の肝煎で、軍醫正の菱田さんが診察に來た。戦時の忙しい職務の中を都合して來た、四十左右の、五分刈頭の、額の濶い落ちついた軍醫は、丁寧に駒子を診察して、正に腸窒扶斯と診断した。

いよいよ腸チフスときまつた。父と母と異母兄の一人を前後半月の間に斃したチフスに駒子も罹つたのである。母が亡くなつた隠宅で、二週間父の病床に付き添ふて居た間に、駒子はすでに感染して居たのであつた。

チフスである、わが亂暴の直接結果では無かつた。それを確めて、熊次は少し荷が軽くなつた。然し病は輕くない。氷嚢を忽ち湯にしてのける熱の猛しさ。軍醫の辭色も容易でなかつた。ばたばたと三人を斃して未だ豊かぬ貌のチフスに駒子が捉つたは、全く容易ならぬ問題であつた。

Could not, with all their quantity of love,

Make up my sums.—what wilt thou do for her?”

と云ふ Hamlet の白が熊次の心であつた。

清人君も意地になつた。場所もあらうに、現在の父と母が終焉の隠宅で、妹を打ちたたき男に妹はやつて置けぬ、兄として父母に濟まぬ、と云ふ駒子の兄の言葉を、熊次の側の人々も尤と謂はぬ譯には行かなかつた。熊次の罪状はあまりに明白であつた。幾重にも唯下手から出る外はなかつた。下手に出れば、清人君は嵩にかかつた。あまりに嵩にかかれて、律義な大江の義兄が怒鳴り出したので、清人君は少し態度を更めたが、然しかうなつては理が非でも駒子を引取らねば承知が出来なかつた。清人君が一旦引上げた後に、克義さんも來て、話は面倒になつた。

「手切れになつ時ア、私が引受けます。」

と克義さんが反身になつた。養母の立女形に對して、いつも皮肉とぶつきら棒の敵役を克義さんは仕馴れて居た。

はせぬ。渡しはせぬが、兎に角妹に會ひたいと云ふ清人君の要求は無理がない。此處に清人さんを連れて来るから、一寸はづしてお居り、と云ふ姉の言葉で、熊次は縁側に躲かばした。

足音が中二階に上つて來た。

「如何したな？」

清人君の重く沈んだ聲。

「此處に寢て居つちやいくまい。」

清人君はあたり見廻はすらしかつた。

駒子は黙つて居る。姉が取り繕ふ聲がする。

「それぢやまた来る。」

清人君は立つて往つた。

現在の夫で居ながら、妻の兄の前に身を隠さねばならぬみじめさに焦々して居た熊次は、入り代つて駒子の枕邊に座わつた。

“I loved Ophelia; forty thousand brothers

克義さんが電文を書いた。

「事あり、來ておくれ。」

熊次はまた顔をしかめた。來ておくれ——か。何と云ふ醜さ。せめて電文だけなりときちんとしやう。

「事あり、御出を待つ。」

さう書いて、熊次は匆々に中二階の病人に歸つた。

思ひがけない加勢が菊池側から出て來た。駒子兄妹には從兄に當る志貴さんが肩を入れて來た。駒子の父の姉が嫁した志貴家は、郷里隈府から迫間川を隔てて遙に其白壁を眺めらるる袈^け尾の豪家であつた。伯母はもう亡くなり、當主の讓次さんは大きな身代を相場で耗^すつて今は熊本にわびしく暮らして居るが、細君のお熊さんは大阪藝者で、それ者上りに似合はぬ評判の貞女であつた。酸いも甘いも知りぬいて居る志貴さんが、見かねて仲に入つて來た。

眞夜中に熊次は駒子の枕頭から呼ばれて、二階に上つた。天井無し此二階には、曾て兄がテエブルを而して熊次と甥の船津の嘉一郎が机を据ゑた事もあつた。十四の熊次は此處で朝飯前

話が不圖安永の養子に移つた。安永さんが自身擇んだ養子だが、養母は繼母だし、やはり折合がうまく行かぬさうな。自身伊倉の養子である克義さんは、安永の養子に同情を表した。

「誠に話に來るこつ云ふち下はり。養子でなけりや養子の事あ分かりやしまつせん。私なんざ、學者の養子になつちえらい目に會ふた。」

「はふ、はふ。」

と應へる姉の顔に微笑が流れて居た。

其姉も、義兄も、克義さんも然し駒子の兄の鋭い鋒先の前にたぢたぢとなつた。

何と詫びても、駒子の兄は駒子を引き取ると云ふて聽かぬさうな。此上は熊次の兄に來てもらう外はない、と云ふ皆の議であつた。熊次は顔をしかめた。これだけの人間が寄つて、清人君一人抑へる事が出來ず、阿容阿容兄と呼ばねばならぬのか。あまりそれは腑甲斐ない。地團太踏みたいやう。然し一切の張本人は熊次であつた。張本人は他を責める事は出來ない。皆が手を引けば、否でもわが失策の後始末を兄に頼む外はなかつた。熊次は吐息と共に廣嶋の兄に打電する事を承諾した。

清人君に詫びるはいやだ、と熊次は頑張つた。

「さう云ふなら、あんたも清人さんと同じたい。」

熊次は到頭我を折らねばならなかつた。

伊倉の伯母が來て、熊次を引きのけた。

「先方ではな、ああたに誤まり證文書かするてち言ふちばつてん、怒つちやならんばい、笑ふち居んなはり。」

あやまり
過證文！ 熊次はまた勃然^{むっ}とした。然し伯母に對しても、熊次は胸をさすらねばならなかつた。」

まだランプのついて居る仕事場近い二階下で、熊次はあの夜以來初めて清人君と顔を合はせた。八字髯の清人君は、熊次より一つ年下である。

熊次は口を開いた。

「清人さん、先夜の事は、亡くなられた御兩親に對し、お駒さんにも、ああたにも、また自身に對しても、全く濟まん事でした。」

に一篇の作文を試み、十七の熊次は此處で一春蠶ひとはるを飼つた。今は日間織機の糸を繰つたりする室になつて居る。其二階で熊次は初めて志貴さんに會ふた。蒼白い顔に黒い八字髭、四十近い志貴さんは跛びっこをひいて居る。

「下等社會にはよくある事ですし、第一、夫婦の情合なんぞは他目よそめには分からぬもので。」

と志貴さんは曰ふのであつた。「下等社會」に熊次はたぢたちとなつたが、全く事實だから詮方はなかつた。「夫婦の情合」云々は、一苦勞した夫婦者でなければ言へぬ言であつた。思ふ坪を言はれて、胸が透いた。

熊次は兎も角もよろしく頼むだ。

志貴さんの車は、下通町と郊外大江の宅の間を夜を衝いて何遍となく往復した。連日連夜の疲勞で茫ぼうとなつた熊次は、しばしば駒子の病床から呼ばれて、工女達の算を亂してぐつすり寢て居る間を縫ふて、彼隅此隅に義兄や姉と頭をつどへては志貴さんの報告を聞いた。形勢は追々良くなつた。

夜明け方に、清人君も來たしらせがあつた。姉が來て、詫びを言ふやうに、と熊次に勧めた。

手打が済んで、清人君や志貴さんが歸ると、夜が明けた。而してやがて廣嶋から兄の返電が來た。

「是非來る要があるなら行く、如何？」

「済んだ。來るに及ばぬ。」

と熊次は直ぐ返電を打つた。兄が輕々しく動かなかつた事を、熊次は感謝した。

熊次は駒子が今寢て居る父の書齋であつた奥の中二階を其まま病室にしたいと思ふた。病院に入れば、通町の干涉が來易い。一旦つとめて和らいだものの、いざとなれば駒子の兄との衝突は見えすいて居る。此處に居れば、自家に居るやうなものだ。然し大江の義兄は強硬に入院を主張した。大勢の男女を使つて居る家業柄、傳染病を一刻も家内に置けぬは當然である。熊次も我を折つて、病院入を承諾した。

熊本縣立病院の隔離室が幸ひあいて居た。

通町から男衆の一人が釣臺かを昇かせて來た。清人君の代理を承はつた件くだんの男は、人夫を指圖して何角と切つて廻はした。それが熊次の癢に障つた。

清人君も唾をのんだ。清人君は少し吃つた。少年時代に他の吃りの真似をしたのが、ついくつ
ついでにはなれなかつたのであつた。

「ウ、ウ、それは全く、ソノ、ああたの御勝手だつたと思ひます。」

「其事は謝罪します。然し私がお駒さんを此家へ連れ出したといふ事は、事實ぢやありません。」
姉が熊次の足の裏を抓つたので、熊次は口を噤むだ。

めでたい、と云ふさざめきが一座に起つた。仲直りの盃が出た。大江の義兄は、頗下手な詩作
と可なり上戸な晩酌が唯二つの道樂で、酒は何時も厨にあつた。皆盃を口へもつて往つた。不
圖伊倉の伯母が正に一盃を乾すのを見て、熊次は眼から涙が溢れさうになつた。

手打が済んで、残るは駒子の病氣であつた。清人君は引取つて世話したいと云ふ。熊次は赫と
なつた。夫が居る場合、妻の看護を兄の手に渡す法が何處にあらう？ 熊次の癩癢が危くまた
破裂しさうになつた。姉や伯母が穩やかに口利いて、清人君も到頭讓歩した。然し清人君の心
は中々融けなかつた。「何様いふ事をするか分からん。」と、熊次の耳の届かぬ處で清人君は唸や
いた。

次は後で知つた。

姉は駄々つ子を吐る調子で熊次を叱つた。

「あんたが色々云ふたてち、一人で何が出来るかな？」

それは事實であつた。我を折る熊次はまた泣かされた。

「私が聲の調子が少しでも高くなつたら、如何でもなさい。」

と云ふ自發的の誓言を聞くまで、姉は熊次を放さなかつた。

顔を拭いて中二階に戻ると、貞といふ其男はもう居なかつた。

「おまへはお歸り。」

大熱に茫として居る駒子は、眼を瞑りながら、其男に斯く言ふたので、貞は遠慮し、熊次の顔が立てられたのであつた。

駒子はもう釣臺に居た。昇かれて門を出る時、人夫が足の方から出やうとすると、伊倉の伯母が聲をかけた。

「待つた、待つた。——頭からばい。」

「歸れ——歸れ。歸れと云つたら歸らんか。」

熊次は大聲に怒鳴つて、紺鯉口の男を突きつけた。

熊次の振舞は一同を動顛させた。

伊倉の伯母も呆れた顔をした。

「如何して此人にかういふ邪氣があつどうか?——やつぱり乃父に肖とるなあ。」

熊次の父が昔縣政の當局に居た時、同僚の伊倉伯父を排斥した其ふるい痛みを伯母はいまだに忘れかねて居た。

「熊次さん——」

突然に大江の義兄がおいおい泣いて熊次に取りついた。熊次の母が「愚な人だから」と嘆息した程頑固一徹、鐵そのままだに色黒男の此義兄が斯様に泣いじやくるのを、熊次は初めて見た。それが熊次の心を和らげた。

「好意で來とるとばい、好意で。」

と義兄は涙ながらに熊次を諭した。貞といふ其男衆は、通町の店でも實直な一人である事を熊

第十六章 病

一

駒子の生涯に二度目の大病であつた。最初は十五の年に重いマラリヤに罹つた。數日の間は茫として、ひたもの母の顔を見つめて居た。其後は健すこやかになつて、體格は女高師でも甲であつた。入院即下最初の診察をした臨時院長の小村醫學士も、好い體格に感心して居た。それだけ窠扶斯の熱もひどかつた。其宿を訪ふて見込を問ふた熊次に、萬一の事もあるまいとは思ふが兎に角重體である事を小村さんは告げた。すでに父母兄の三人を一月足らずの間に拉ひし去つた窠扶斯である。醫學士の言がなくとも、駒子が、従つて自分自身が一期いちごの危機に立つて居る事を熊次も辨ひしと感じた。駒子の病氣の前には、一切を我慢せねばならぬと覺期した。

庭の梅は咲いても、病院の隔離室は寒かつた。八疊の板敷の一隅に、木造寢臺と相對して疊一

其聲がうれしく駒子の耳に残つた。

姉が熊次をせき立てた。

「早^は行きなはり、また色々邪魔^はが出んぞつ。」

全くの子供扱ひにされて、熊次は腹も立て得なかつた。すべてを鵜呑みにして、直ぐ釣臺の先に立つて、大江の家を出た。

郊外につづく町から、白川に架す明午橋を渡つて、建町の通りを北へ縣立病院へ向ふた。時々釣臺の薄い桐油^あを掀^ひげて覗^{のぞ}くと、氷嚢^{ひょうなん}を額^{かぶ}に、眞紅^{まうか}な顔をして、駒子は眼を閉ぢて居る。

「如何だね？」

「ええ。」

駒子^{こし}はかすかに眼を見開いて、應^{こた}へるのであつた。熊次は桐油を下ろして、また釣臺と共に歩むだ。

不圖氣^{ふとけ}がつけば、市中^{ちゆうしゆう}の何の家も國旗^{こくき}を掲げて居る。——何だらう？

餘程考へて、今日は二月十一日、紀元節である事を熊次はやつと思ひついた。

硝子戸の外は薄くもりして春ながら淋しい午後、看護婦もはづして唯一人熊次は病床近く居る事があつた。時々溜息をつくやうな息づかひして惺々と眠に落ちて居る駒子の寝顔を見て居ると、熊次はやるせない哀感にうたれた。重ね重ねの不幸の後に此難病。自分は如何に此妻を待つた乎？ 結婚以來を思ひ回^{めぐる}らして、熊次は本當に濟まぬと思ふた。

たらちねに別れて病める吾妹子の

やつれし寝顔見れば悲しも

東京には、入院の日、「今日入院」と打電した。其前に一切のごたごたはぬきにして、唯駒子が少し病氣と云ふたよりだけして置いたのであつた。晝前に打電して、夜に入るともう父の返電が來た。「ゆるりと手をつくせ。」熊次は駒子に読み聞かせて、自身力づいた。駒子は梨を欲しがつた。時は二月中旬、熊本中を探がしてもらつて、黒くなりかけた梨が唯二つしか得られなかつた。東京に言ふてやると、父が即日烏森の果物店へ出かけて、送つてくれた。梨の小包が着いて、雪のやうな一片が渴き切つた駒子を悦ばした時、熊次は心から父に感謝した。廣嶋の兄からは、「御出を待つ」の電報に對して、何事か知らぬが、兄が居る、千人力と思へ、と云ふ

枚敷いて、熊次は其處を常座にした。火鉢一つ。三食は病院の瀬戸物入りの辨當。夜も其一疊に寝た。お律といふ三十左右のしつかり者が看護婦であつた。駒子を連れて病院入りをした時、熊次はすつかり慥れ切つて居た。お律が熊次に曰ふた。「お出でました時、ああは五十位になるかと思ひました。」

駒子の熱は醫者も驚く程高かつた。頭下に氷枕、頭上に氷囊二つ、智の上にも、足の先にも氷囊を當てて、まだ十分には冷えなかつた。柱に挂けた體溫表には、赤鉛筆で書いたヒマラヤのやうな高峰が列をなした。氷代が入院費の大部分を占めた。駒子の魂が果して其體內に居るか、疑はるる時があつた。睡眠は死の如く見えた。餘程後で、背に痛を訴へるので、唯見ると、發病當時^な覺めて居た寶丹のあきからが半分肉に埋まつて居た。熱に浮かされて駒子は色々^{ろはごと}謔言を言ふた。

「今、母が來て、私に琴を弾けと云つて、あなたに羞^{はづ}かしくて。」

と言ふのは餘程はつきりした時で、「ああん、ああん」と唯子供のやうにうめく時が多かつた。それは熊次の心臓を搔きむしるうめきであつた。

た。入院當座の男手入用に、通町から男衆の貞も來、銀吉も來た。沒義道に一度あしらつた貞に熊次は詫心で親しく振舞ふた。銀を熊次は好かなかつた。駒子の父の氣に入りで、病中もよく介抱したと云ふて、清人君は銀に感謝をもつて居た。赤黒い顔、白い眼の恐い銀は、大工の子で器用な男、隱宅の欄間に鷺を彫つたり、刺繡をするといふてさらさらになつた手の指を砥石で摩つたりしたものだ。清人君の感謝は尤ながら、熊次には愉快でなかつた。入院間もなく、銀は駒子が寢臺の枕頭にあつた紙を勝手に取つて滑をかんだ。駒子が氣づいて赤くなり、顔を背けた。熊次はいよいよ銀を嫌つた。貞の場合に懲りて、銀を追ひ拂ひはしなかつた。然し仕事の分擔をきめて、銀を外使ひにした。恐い顔の銀は齟齬とした。然し熊次は強硬に彼を遠ざけた。

熊次の忍耐を試す機會が追々來た。駒子の叔母が山鹿から見舞に出て來た。駒子の母の直ぐの妹のおきな叔母は、母に背て、母よりも快であつた。若い頃の出もどりで、西郷戦争の時などは、股引はいて西郷方であつた山鹿の相愛社（肥後民主主義者の集團）の人々と應酬したものである。兄の二木義平が中風する。火事に會ふ。嫂が男の子一人置いて逃げ歸る。それを叔母

て來たに對し、熊次は清人君との一件を抽象的に報じ、清人君に多くの非を塗りつけた。清人君も今は孤兒だ、同情せねばならぬ、と云ふ兄の返書は、當然の事だけにうれしくなかつた。が、清人君に對する反感を抑へるに効があつた。

清人君が時々容子見に來た。兩人の間にまだ隔意があるが、駒子の病氣の前には手を握る外はなかつた。熊次は我を折つて通町の加勢を受けた。通町から來た病人のかけ蒲團は、海老茶の綾綸子の美しいもので、それががらんとした病室に色彩を添へると、熊次もはれやかな氣分になつた。同じやうな蒲團が昔熊次の家にもあつた。大勢親類の泊り客があつて、子供の熊次が甲斐々々しく其美しい蒲團を抱へて來ると、本山の伯母に「おお、よく」とほめられ、うれしかつた其記憶などが蘇つて來るのであつた。池田の出迎以來顔馴染の女中のおとくも通町からよく手傳ひに來た。伊倉のお鐵さんが見舞に來ておとくを見つけ、「おお、おまへ此處に居るかい。」とびつくりした容子であつたが、歸りしなに熊次を呼び出して、あの女は手癖が悪いと注意して以來、熊次はおとくに氣が置けた。熊次が頼んだ用を忘れて、「奥さんの事ことば一生懸命思ふち來ましたけん、旦那さんの御用ばんと忘れまして。」と彼女が笑ふのも、うれしくなかつ

八字髻の清人君の眼には、運命に反抗の瞋恚しんいがあつた。異母兄の正太君は髻なく、旦那らしい風をして居る。

「品ひんが無かもんな。」

と叔母が熊次に曰ふた。それは當てつけのやうで、熊次に不快であつた。

叔母は病院に三日居た。熊次は時々叔母にこすられて、不快を忍ぶに骨を折つた。それを感じるかのやうに、駒子の熱が時々分外に上つた。「氣熱だもん、喃なな」と叔母は言ふた。熊次が隣室に寢て居ると、夜深に叔母が氷枕の水をこぼして、熊次が眼ざめぬ内にと大急ぎで看護婦と敷布や蒲團を換ゆる容子が手にとるやうで、熊次は微笑を禁じ得なかつた。病院の東隣は小學校、向ふ隣は監獄署であつた。叔母が逗留中熊次は氣を利かして近所の蕎麥を取り寄せた。「こら差入屋の蕎麥たい。」と叔母が素破ぬいたので、熊次は赤面した。つけつけ言つたあとで、「折角だけん頂戴しゆう。」と叔母は箸をとつた。駒子の母とは違ふて、何處やら自分の母を思はすきはきした叔母は、衝突しても熊次に心地よかつた。然し叔母が平氣に銀と蒲團を並べて隣の二疊に寝たりするを、熊次は不快に思はぬ譯には往かなかつた。

は身一つに引受けて、兄を介抱し、子を育て、今は女だてらに小さな活版業をやつて家計を立てて居る。来るなり駒子の寢臺に立寄つて、

「あんたが來られんてち言ふちやつたけん、叔母さんは泣いとつた。」

と片はづしの頭を掉^ふり掉り少し鼻にかかる聲で言ふた。

叔母はしばらく、病院に泊つた。隣の狭い室が空いて居たので、疊を二枚敷いて其處を休息室にし、熊次と叔母とかはるがはるの休息する事にした。

叔母は勿論熊次に好意をもたなかつた。叔母が駒子に兄妹三人撮しの寫眞を持つて來て、寢臺の上に置いた。熊次が手を出すと、叔母が急にそれを引こめた。鼻あかされて、熊次は顔色を變へた。

「それは私に下さるのでせう。」

駒子が口を利いた。

「それならお目にかけて下さう。」

叔母は餘儀なく熊次に寫眞を渡した。寫眞の駒子はもう病毒の侵した後で、少し惘として居る。

「此處ぢや不自由だらう。少し快^ようなつたら、彼方^{あつち}へ直つたら。」

それは熊次に不快を與へた。二人の異母兄の何れも駒子を可愛がつた。繼^{つぎ}しい中の母はもとより、父すらも次男の勇次に氣がねして、駒子に簪^{かんざし}送るにも窈^{よう}と送るやうにしたが、駒子は勇次兄にも心置きなくふるまつた。勇次兄に隔てぬ駒子は、正太兄にも好^よかつた。一お駒も可愛い娘になつた。」と正太の兄が言ふたさうです、と熊次に駒子がころころ喜んで吹聴したのは、つい病氣の前であつた。

亡くなつた勇次君の未亡人おすがさんも、ある日訪ねて來た。駒子と同年の嫂は、義妹を打つたりする義弟の顔を不思議な顔して見て、煙草入を出して、乏しい話の間に三四服吸ふて、やがて辭し去つた。

駒子の親類が心をつくれれば、熊次の縁者も病院を忘れなかつた。大江の姉のしらせで、安永の姉も見舞に來た。八年前にも一度不名譽に熊本を騷^{さわ}がし、今は二度目で皆に迷惑かくる弟を、姉は笑止な顔して見た。晝飯の辨當が來ると、姉は縁に出て食べた。

安永の姉が歸つた後で、熊次は大江の家に呼ばれた。傳染病についてもつと注意せねばならぬ

叔母は熊次の介抱ぶりに安心したらしく、

「餘り可愛がり過ぎんやうに。」

と言ひ残して歸つて往つた。

五六日經つと、銀が色々の物を目籠めかごに擔ふて來た。それには山鹿の贈物が品々入つて居た。酒屋の煎餅も入つて居た。酒造の蒸米を手捏てづくねにしたもので、名だたる菊池米の手捏ねは自然にほの甘く、淡泊の中に言はれぬ風味があつた。菊池の造酒屋の女に生れて、男衆が半疊敷もある大火斗おにしろに焚落たきしの火を山の如くあける母屋の爐に楓のやうな手をかざす頃から此煎餅を味はひ馴れた駒子は、一度夫にすすめたいと云ふて居た。清人君も、酒屋の煎餅は餘程自然味を解する人でなければ、と言ふて居た。それが送つて來たのであつた。下駄の一足は、叔母から銀への贈物であつた。

煎餅の出所の菊池から正太さんがある日見舞に來た。

「病氣したてちな。嚙色々——」

正太さんは重い口で斯く言ふて、あたり見廻はし、

前年義姉は十七で船津の家に嫁いだ。肥後の家の手船を仕立て、父、母、十六のお時姉、五歳の寅一兄、それから義姉の母方の祖父などが附添ひ、女中も一人つけて、賑やかな嫁入りであった。熊次が生れた翌年、船津の總領嘉一郎が生れた。嘉一郎は十三から肥後の家に來て、熊次とは兄弟のやうに育つた。老齡子としよりこの叔父は、遅いたぐま家子うけいこの甥に、喧嘩でも勝味は無かつた。兄の家塾を出てしばらく東京に居た後、鹿兒嶋で新聞記者をして居たが、戦争と共に今は東京に往つて新聞社に働いて居る。長妹おちせは高木君に嫁ぎ、お敬おいとは大江の宅に、おいと兄の修三は郷里の家に居る。季のお辰は熊次が上京後に生れたので、熊次にも初對面であつた。船津の子女は強氣揃ひの中に、お辰は脾弱の生れに見えた。駒子の病を聞いて、義姉がはるばる出て來てくれた事は、熊次に感謝であつた。丁髷の爺さんは、相變らず頑健で居るさう。

「もうそろそろかたづいてもらはんば。」

と義姉は思ふた通りをあげすけに言ふのであつた。船津の義姉も來て、これで駒子は夫の同胞を残らず識つたのである。

事を色々諭された。熊次は食事も病室でして居た。安永の養子がチフスで入院中、附添のおちまが「話」をしては快復期を後戻りさせ、院長の博士が癩癩を起して、「もう私は知らん」と怒鳴つた話など聞かされた。「話」がそんなに病氣に障るものか、と熊次は少し變に思ふた。安永の義兄が熊本に出たさうで、玉子の折が見舞に残してあつた。大江の宅からは、姉が心をつけて時々熊次の飯の菜など持たしてよこした。病室に籠り切りはよくない、ちと運動に出るやうに、と勧めたりした。

本莊さんが見舞に來た。寢臺近い椅子に請ずると、本莊さんはすうとそれを遠くに引きのけて、安全な距離から駒子の父とは菊つくり仲間であつた話などして歸つた。

ある日、ひよつくり船津のお安義姉が末女のお辰を負つて訪ねて來た。熊太叔の忘れ形見のお安義姉、色白の肉つきゆたかに愛嬌づいた細い眼をして、昔は黒光りする鐵槩かねつけて、裏も表もなくさらさらした此義理の姉を、熊次は子供の時から好きだつた。何處やらに駒子の面影を昔の姉はして居た。太り肉じしの暑がりで、何かと云ふと直ぐ肌ぬぎになつた。兩肌もうはだぬいで、蠟燭の火で蚊を焼いて居る姉の姿を、青蚊帳越しに子供の熊次も美しく見たものだ。熊次が生るる

まま運動時間に見舞に來た。誠君も去年の夏チフスで此室に居た。「丁度戦争の始まつた頃で、新聞が見うごつしてたまりまつせんだつた。」と誠君は曰ふのであつた。

期待されない見舞客の一人は、熊次に初對面の沼田君であつた。沼田君は師範出で、小學時代の駒子を教へた敎生の一人であつた。兄の家塾の末期生で、高木君と共に一時塾の二本柱であつた外山君とは親戚關係と熊次も聞いて居た。話の少ない熊次は、外山君の消息を問ふ外に話柄をもたなかつた。熊次が上京した頃、外山君は熊本で傳道師をして居た。米國宣敎師に「月給欲しいと思ひますなら。」と云はれ、外山君は憤慨して居た。其後やり手の色々實業方面にも手を出し、親類仲の沼田君にも累を及ぼしたさうな。「外山のお蔭で金穴もふさがり」と沼田君はこぼした。而して二言目には妙な目をして病床の方を見るのが、熊次に不快を與へた。駒子が十四五、六の可愛さかりに、敎師敎生として小學校に彼女を教へた若い男の數は何程あるか知れぬ。首席をかざる蕾の花は、彼等の多くに必記憶されて居る。皆熊次が駒子を見も知らぬ他人の昔だ。それ等のふるいしるべが、待ち駒の如くひよいひよいと思はぬ時に思はぬ處で出て、昔の蕾の花に咲きぶりをさながら見に來るのは、熊次にうれしい事ではなかつた。

船津の姉が來た翌日、本山の尼將軍おしでさんが白痘痕の切髪姿を病室に見せ、白眼勝ちの目で熊次の顔から病室を見廻はし、はきはきした押強い聲で話して歸つた。其翌日、看護の人々にと謂ふて澤山の重詰物を持たしてよこした。熊次に宛てた手紙には、腸窒扶斯患者看護の心得を一つ書きにして、「一つ書以下をよくよく御覽下されたく」と細かに注意してあつた。根氣の強い、やり手のおしでさんに、熊次は初めて感謝をもつた。病氣の注意と云へば、東京の宇土君からも、醫師にただして、ある一定の時日を經過すれば窒扶斯は必癒^{なほ}る、と力づけて來た。東隣の高等小學校から潮のやうな唱歌の聲や、小鳥の群を放したやうな遊戲の轉^{さへり}が響いて來た。それは熊次にも、病床の駒子にも、各自の小學時代を思はせた。駒子が十一から十六まで通つた師範學校附屬尋常、高等小學校は、もつと一丁ばかり北に寄つて居た。駒子より一時代前の熊次が通ふた小學校は郊外にあつたが、やはり其師範學校で熊本中の小學校の聯合競爭試験があつて、熊次も石盤の御褒美を縣令さんから貰つた事がある。それは西郷戰爭の翌年、熊次が十一で兄に連れられ京都に上る少し前の事で、もう十八年も昔の事であつた。昔を思はず小學校は、好い隣であつた。其學校に教鞭をとつて居る安永の養子の誠君が、袴はいて草履の

歸つて、いまだに獨身で居た。昔ながらのむつつりしたお筆は、「君さまが——錦を着て歸るをぞ待つ」といふ出征者を送る自作の歌を熊次に直してくれといふのであつた。直してやると、それが氣に入らなかつた。昔から氣むづかしい彼女であつた。上通町に住む彼女は、下通町に住んだ駒子を知つて居た。わが知らぬ夫の昔を知つた年増女の心易げに夫に話しかけたり、年齢の上から駒子を目下に見るやうなお筆の口ぶりを駒子は不快に思ふらしく、眼をつぶつて相手にもならなかつた。

熊次が駒子の昔知る男に會へば、駒子も夫の昔知る女の人々を知らされた。かかり子のやうな弟が亡くなつて、一人の甥とわびしい村住居をして居る老女のおかのは、以前隣村に往つて其處からわが村が見えぬと泣いたといふ世間狭い女で、熊次の六七歳から肥後家に入りの女であつた。熊次が耶蘇教入信の當初、牧師同道佛信者のおかの家に傳道に行き、歸るさに小戻りして、何もやるものがないので襟卷をはづしてやつた。それを何時までも覺えて居て、ある日硬い團子を一重持つて、病院に訪ねに來た。其後數日、熊次が不圖通町に行くと、彼は菊池家の店の上栞あがりかまちに腰かけて居るおかのを見出した。もとよりのしるべでもない彼女は、新しい出入先を求めて、此處に推參して居たのであつた。

駒子はある日病室に訪ね來て心得顔に夫と話す小柄の年増女に好感をもたなかつた。お筆は熊本本の町娘、髪を男折に結ふ十四五から養蠶の加勢に熊次の家に來て居た。熊次が十七になつた時、彼女は二十歳を越してやはり出入りして居た。熊次は彼女を相手に一春蠶を飼ふた。お筆は其前年熊次が厄介に一秋なつた養蠶家増田の娘おさちさんの話など頻にして、熊次の氣をひいて見たりした。熊次が上京した頃、お筆は東京に呼ばれて深水の家に女中をして居た。其後

か、「いたつきて日をふる雨の音聞けば心に悲し青柳の糸」と鉛筆で書いて居るそのあはれも、春は終に春であつた。長い高熱に舌は黒くさらさら焦れ、手脚は骨あらはに瘠せ衰へた駒子も、入院三週、三月に入つてからはめつきり快復の徴を見せて來た。氷嚢がとれる。食慾が出る。白い診察衣を着た脊矮せびくの小村醫學士は、大勢の醫學生を連れて午前の回診に來ては、一日と良好になる患者の容體に氣分をよくして談笑して往つた。熊次も病院馴れて來た。朝夕城の上から降つて來る喇叭の音は、昔ながらに身に沁しむ響であつた。朝、午、夕と眼の大きい丸髻の看護婦長が體溫を計りに來た。向ふ廊下の口まで來て、「牛乳が來ました。」と呼ぶ雑仕ざふし婦。三度の食を庭から運ぶ賭の女は、威海衛が落ちて降伏した豚尾の支那兵士等が月琴を提けたりした新聞挿畫を見せられて、「本當にな、月琴ば持つたり。」と嘆息した。午前一回、夜一回、回診に來る醫員達。すべてがもう顔馴染であつた。回診に來る醫師の中に、病室の名札に注目する羽織袴の胡麻鹽頭の人があつた。よく見れば、熊次も顔識だんしる大東さんであつた。肥後の醫術は早くから開け、今東京に名を成して居る北里、濱田、緒方諸博士の外に、其先輩の人々も郷國に少なくなかつた。大東さんも其一人であつた。大東さんも、濱田さんも、船津家

熊次が身邊の事に取り紛れて居る間に、日清戦争はずんずん歩を進めた。威海衛落ち、北洋艦隊降伏し、提督丁汝昌が自殺して敵國日本に一齊に讃美せられた。小學校とは板塀一重の隔離室の縁側に立つて耳傾くる熊次に、從軍歸りの新聞記者が教室でする戦争談が手に取る如く聞こえた。「あんまり敵の砲丸がひどうござりますけん、小舎の蔭に往つて屈かこうち居りました。」と云ふ熊本辯につづいて、どつと子供の笑聲が起つた。劉公嶋の砲臺からうつた砲彈で大寺少將がやられたと云ふ聲のあとには、森もりとした沈黙がつづいた。自家の葛藤に没頭して居る熊次が一朝眼を開けば、彼の國日本は隣國支那とまだ戦ふて居るのであつた。第二軍が海軍と協力して威海衛を落し支那の水軍を一掃すると、遼東の第一軍も牛莊を落し、營口を落し、田庄臺を落し、眼中已に北京城下の盟を望んで勇み立つて居た。

病院にも春が來て、梅は散り、柳は緑の糸を掛けた。便所の壁に、何時何の病患者が書いたの

父の信用狀で大江の立替も、さう無際限にはなりかねた。船津の姪二人がある日來て、「これから鳥目ちようもくは東京に」と義兄の意を傳へた。肥後の「鳥目」は、東京の「おあし」である。熊次は少し鼻白むだが、早速父を後方勤務の兵站部司令官へいたんぶに任命した。十日十日の拂は、父から追々爲替を送つて來た。それは可なりの額に上つた。熊次が一切の收入を前借しても、中々足る事ではなかつた。出院までに約七十圓は、「社より特別出方」と父から知らして來た。

駒子が快方に向いて、心の張りが弛ゆるむと、熊次の我儘わがままが直ぐに出て來た。彼は駒子の兄に頭を下げたのが不快でならなかつた。不快が昂じた瞬間に、彼は蜜柑を投げて硝子戸の一枚を打破つた。看護婦が仰天した。看護婦のお律は性根者で、しつかり職務を盡した。病氣の初、駒子は夫の押さへるでなければ誰がしてもよく頭に徹とほらぬと謂ふて、只管ひたすら熊次に氷嚢を押さへてもらつたが、實は時々心が留守になる熊次よりも、看護婦の仕方がよく利いた。看護婦は先院長の久我博士が、醫者は上手であつたが、氣短で困つた事を話した。安永若夫婦の「話」を吐つたも其人であつた。熊次の氣短と奥さん思ひは、病院の評判だつた。看護婦はまた第五高等中學教授の柳井博士が、入院中の細君をいたはるさまの人目についた事を話した。瀧腸に來る看護

の郷里の人であつた。今は昔、熊次が生るる前年、熊次の祖母の重病に、肥後家では早船を立てて大東さんを迎へにやつた。大東さんと共に、代診でもなさうな男が來た。大東さんが歸つて行くとやがて、船津家から肥後の惣領娘お安をもらひに來た。大東醫について來た男は、花婿の兄者、肥後家に大勢女が居ると聞いて弟の爲に妻擇みに來たのであつた。熊次の祖母は亡くなつたが、義姉のお安は其夏船津に縁づいた。それ等の緣故から、肥後家にも、船津家にも、大東さんは懇意であつた。思はぬ處でふるい人に挨拶するを、熊次は面白い事に思ふた。

「社無人、何時歸るか」と云ふ電報が東京から新聞社の名で來たのは、大分前の事であつた。眼鏡をかけた口髭の大矢野君の顔が、電文の背にまざまざあらはれた。「荆妻大病、暫時猶豫頼む、雜誌送れ。」と返電を打つて、熊次は海外雜誌を取り寄せた。然し雜誌が來ても、翻譯をするでもなく、毎日無爲の日を熊次は送つた。見舞に來た伊倉の伯母が、

「東京には書いて送んなはつたか？」

と心元なげに問ふた。然し熊次は仕事に一向氣が向かなかつた。彼の世界は今、二方壁、南北は硝子障子に劃られ、疊は唯一疊敷かつて居る駒子の病室に限られた。

に肖た遊蝶花よりは匂にほやかであつた。

遊蝶花は熊次に一の聯想を起さした。此前熊本に居た時、熊次はある士族の家のはなれに下宿した。夫婦に娘一人、女中一人の静かな家であつた。おあささんといふ十二三の無邪氣な一人女、父母の矢部さん夫婦が熊次によくするので、其頃保安條例を吃くつて東京を追拂はれ熊本に歸つて居た山下君が、「いさぎいむぞうがりますな。」と熊次に言ふた。ある時、市で遊蝶花の一鉢を買つて歸ると、母屋の縁で機を織つて居た母者が見て、うちの小僧―夫婦は娘を小僧と呼んだ―も其花を見て、出直して買ひに往つたらもう無かつたと云ふた。熊次はおあささんを呼んで直ぐ其鉢をやつた。母者が氣の毒がつたが、熊次は惜しくも思はなかつた。間もなく熊次は其家から出發して東京に上つた。しばらくは矢部さんに手紙を出したり、書を送つたりしたが、何時とはなしに打ち絶えた。遊蝶花で思ひ出した熊次は、ある日駒子に黙つて其家を訪ねた。あれから六年立つた。遊蝶花の女むすめが若し居れば十九になる。縣廳から遠からぬ裏巷路の士族屋敷、一方は西郷戦争記念の焼瓦を積んだ塀、一方は桑の生垣、一隅に格子門があつて、其家は見忘れない。熊次はときめく胷で其巷路に入つた。而して直ぐ惘然ぼうぜんとなつた。桑の

婦長は、「麝香の匂がしまつしゆう。」と熊次にいや味を云ふた。父のチフス看病に少しも用心といふ事を知らなかつた駒子は、熊次が同じ態度を自分の病床にとるを苦にし、顔をしかめて不潔を避けさせ、硝子窓越しに春光のうらかな日は出過ぎる熊次を勧めて散歩に出した。

熊次は六年ぶりで故郷の春に會ふのであつた。郊外に出れば、菜の花は黄に、雲雀鳴き、雪ながら阿蘇の山々も薄霞して居る。市中にも追々植木市が立つた。正月、二月、三四月と町を更へて熊本には市が立つ。紙撚こよりでぶら下げたおこしの鯛、両手で持ちきれぬ大きな餡形あんがた、男の子が買つて片手に飄々ひゅうひゅうと振り鳴らす風のうなり、白櫨の木太刀、それよりも山から掘つて來たばかりの花つき蕾つきの春蘭、赤土のついたままの赤い實つきの藪柑子やぶかうじ、薬で根をくるむだ色々の植木に、子供の熊次は如何に春興を熾さかれた事であらう。年は明治の二十八年になり、日本はまだ清國と戦争して居ても、昔ながらに市は熊本に季節違へず立つた。其市の一つで、遊蝶花を一鉢熊次は病室の慰に買つて來た。遊蝶花はパンジー、今の三色すみれである。快復期の駒子は、花を見て悦んだ。熊次は鉛筆で手帳に其花を寫生した。「猫の顔見たやう。」と駒子は笑ふ。今度は蒲團から眼ばかり出して居る駒子を、熊次は寫生した。よくは肖ぬそれも、猫

今後を堅く誓はせて、平生着に復へつた。

病室の外にも内にも日一日と春は進んで、人を曠るやうな陽氣を銀杏城下に齎らした。「話」をしたつて熱が上るのは可笑しいと大江の姉の注意をよくも考へず聞流した熊次も、やがて「話」の意味がよめる時が來た。駒子の熱がとれ、瘡せては居ても美しい顔に血色が匂ふて來ると、熊次も「話」に心牽かれた。隔離室は全くの建はなしで、廊下の戸をしめれば池上の「あけぼの」のはなれや、下通町隠宅も同様、全くの別世界である。隣室があいて居る程は、看護婦がはづせば、隔離室は天婦ぎりの隠れ室であつた。夜の十時過ぎに、當直の回診が廊下の戸を敲くと、遽あわてて開かれた。頭髮の周圍を短く刈り、中毛だけをぬうと立てた丈の高い坊ちやん坊ちやんした當直醫がきまりわるげに「おかはりはありませんな」と言ひ捨てて、さつさと退却した。隣の病室に若い婦人患者が來ると、熊次は更にはしやいだ。附添の若い女が駒子の病室前を小腰屈めて往來する姿を、熊次は硝子越しに眺めて、意氣な女だとほめた。

生籬も、焼瓦の塀も、家其ものもなくなつて、其處ら一面がらんとした空地になつて居る。狐に誑いづかされたやうにしばしほかんと立つた熊次は、またのこのこ病院に歸つた。

いよいよ快復期に入つた駒子は、食渴が出て、色々の物を欲しがる。此時が大切と聞かされた熊次は、嚴重に飲食を取締るのであつた。ある夜、駒子が妙な笑をするので、詰なると彼女はゆるされた重湯おもゆの底に飯粒の三つ四つあつたを食べて居た。笑は懺悔であつた。然し熊次は勃然とした。其處ににやにや座わつて居る看護婦も面憎かつた。到頭熊次はそんなに言ふ事を聽かぬなら俺はもう東京に歸る、と言ひ出した。言ひ出せば、口ばかりでは置けなくなつた。彼は別室で着物を更え、駒子が下通町隠宅から持ち出したツツクの鞆を提げた。看護婦が看護婦長と熊次を宥め駒子を宥めた。駒子がひよろひよろする體を寢臺に起き上らうとする。

「熱が出ます。」

と看護婦長が寢かさうとする。

「熱が出たつてようござんす。」

と駒子は身悶えして泣いじやくる。はずみにのつてやり過ぎた熊次は、皆がとめるを幸ひに、

「うちの人もがつかりしとらしたい、ああた、『向ふから頭ば下げち來た者ば』ツて。」

それは熊次の心で、恐らく日本人なべての心であつた。

然し小山六之助は日本人であつた。而して頭を下けた者を打つ追窮の銃丸は、小山六之助の短銃にばかりはなかつた。日本人である熊次にまさしくそれがあつた。

清人君が病院に來て、李鴻章遭難の話をした。醫師に聞いたら、彈丸の留つたハイモオル洞は眼下の空洞で、多分生命に別條はなからう、との事である。

「すくうちやればいい。」

清人君は、李鴻章狙撃の不所存者を罵つたが、眼はひとと熊次を見つめた。熊次は黙つた。

* * *

駒子は未だ一度の入浴もせぬが、足にもそろそろ力が復へつて來た。先日來、寢臺につかまりながら寢臺半周、次は一周、熊次に扶けられて部屋あるきも追々出来るやうになり、縁の柱につかまつて糸遊いとゆまもゆる病院の庭を物珍らしげに眺むる程にもなつた。二十二の良い體質は、春に競ふて日々刻々に元氣を取り返へした。今後は唯日と共に快復を進めて行くばかりである。

三

手足の水軍はもがれ、陸路は山海關も遠からぬあたりまで攻めこまれる。清國の旗色が直る見込はもう無くなつた。百里の道は九十里を半とす、まだまだこれからだ、と寅一は新聞に國民の情氣を鞭つのであつたが、然しもう戰爭の山は見えて來た。二度三度搜りさぐを入れた後で、到頭李鴻章が我を折つて馬關までやつて來た。己がやり損ねは、己が後始末をせねばならぬのであつた。李鴻章が來たので、總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光が全權大臣として馬關へ出て往つた。其號外が出ると、熊本市中にも歡聲が湧いた。

忽其李鴻章を日本人の一人が短銃で狙撃した。傷は重いが、致命ではなささう。それで無條件の三週間休戰の約が成立つた。李鴻章が來て五日目である。

號外が出た朝、熊次は床屋に髻剃に往つた。鯉口の若いかみさんが長火鉢越しに、土間の客の一人に話して居る。

第十七章 病後

一

日清戦争は李鴻章の怪俄で三週間の休戦に入つた。五十日の病院の俘虜からやつと釋放された駒子は、發病以來の垢おふを旅館の風呂に洗ひ落して、奥まつた下座敷の十疊に床を敷かせてゆつくりと横になつた。

退院と聞いて、訪ね來る人々も稀にはあつた。熊次の姪のお秋も其一人であつた。叔母と呼ぶ駒子とは同年配の彼女は、安永の姉が最初蒲池かまちに嫁して生むだ長女であつた。日本にはまだ珍らしい天鷲絨草びらうとさうやベチユニアの咲いた古城上ふるしろの病院に入院中の六歳の熊次は、蒲池の家に往つて胡粉畫具を使つた美しい繪の本を借りて歸つた記憶があつた。それはお秋が母の腹に居た頃の事である。長女に生れながら、一歳年上のお安義姉故母の乳も大びらには飲めず、初雛すら

丁度入院當初から駒子の診療を受持った臨時院長の小村醫學士も急に去る事になつたし、隔離室のアキを待つ新患者もあるので、兎も角も退院の許が出た。李鴻章遭難の三日目である。

直ぐ近くの旅館^{しせや}研屋支店に一先づ落ちついて、不日日奈久温泉に行くにきめた。大江の宅では無論異存なく、清人君も澁々ながら納得した。

三月二十六日と云ふ日に、駒子は熊次と看護婦のお律に扶けられて、病室の縁から車に乗つた。而して彼方此方から見送る人目の中を、駒子は眩しさうに眼を細めながら、約五十日前釣臺で入つた病院の門を出て、二丁とははなれぬ旅館に入つた。

車を下りて、旅館の玄關に上る時、まだ脚に力の無い駒子はべたりと式臺に座わつてしまった。

女に甘くはしなかつた。お秋は今學校の炊事すゐじを擔當して月謝を免ぜられ、且働き且學んで居るのであつた。生みの母とは近くに居ながら言ものひ交はすすべを有たぬ氣の毒な姪に、熊次は話す事もなかつた。彼は中座して、通町で筆少々買つて、姪に心ばかりの贈物をした。

宿屋住居も病院よりましであつたが、熊次の心は日奈久に急いだ。退院後人並に旅館の三食をとる駒子に障りなく、日一日と眼に見えて元氣づく彼女に、瀛車と瀛船で一日の旅は大した無理も無ささうで、夫婦は早々日奈久へ立つ事にした。

出立の前夕、夫婦は車で下通町に往つた。清人君に要あつて熊次は前にも來たが、駒子は鞆を提げて眞夜中に隱宅をぬけ出た以來であつた。日奈久行に清人君は大した不服も無かつた。暇を告げて下りる時、妹の履物はきものを直したりする熊次を、兄は苦笑して見て居た。

なく、日蔭に育つたお時姉は、わびしい娘時代を送つた。「お時どんは日蔭者だけん、ああ羨けと
らす。もつと可愛がつてやらんと」と容子を知る岩城の叔父が毎も言ふて居た。お安姉が船津
に縁づいた後で、お時姉は郷里の豪家の一つに嫁いだが、派手者で相場などする夫を嫌つて姉
は逃げ歸り、肥後一家の熊本引出と共に熊本に出て、やがて伊倉伯父伯母の媒妁で伊倉の門人
蒲池に縁づいたのであつた。蒲池さんは熊次に小學校の先生、能書であつた。姉が不縁になつ
て歸つた後も、熊次は十一まで其人の手本を習ひ、其人に日本略史を教はつたものである。額
の潤い、痘痕のある、酒豪で大男の蒲池さんを熊次は好きだつた。夫婦仲も好かつたが、姑の
氣に入らず、初婚のつもりが二度目であつたを口實に、初産の實家歸りを其まま離別になり、
お秋は七夜の中から父の手許に引取られた。母の實家では生れた赤子にすでに「小春」と名づ
けてあつたが、父はお秋と更めたのであつた。七歳の熊次が「此家で生れた子ば他處へやる事
出來ん。」と駄々を捏ねた事も、張り切つた姉の乳をお秋に代はり熊次が吸はされた事も、熊次
自身は覺えて居なかつた。生みの母には七夜の中にはなれ、次から次と二人までかはつた繼母
には子供が生れ、慘な境涯に居たお秋を伊倉の伯母が引取つて女學校に入れた。伯母は然し彼

んで、指し示した。南向きの殊に暖かい此邊の海邊の山畑に、秋は朱^さ樂^{ぼん}が黄ろく、夏は甘^{さとう}蔗^{きび}が一面青々と茂つた。船津の家でも砂糖^{しと}を搾^{しぼ}つた。肥後一家が熊本に住むだ程は、年々初冬の頃になると、二尺角もある黒砂糖の幾箇が郡浦から届いた。家の僕が薪割りでそれを破^{やぶ}る。破片を拾つて口に入れると、芬^{ふん}と甘い香がして、甘い中に一味の苦さがなつかしいものであつた。其砂糖を搾める小屋は直ぐ水際にあつて、潮が満つと石段までひたひた水が來て、以前に地平さんと一夏船津の家に居た時よく涼んだものだ。屋敷内には、氷のやうな水が涌く大きな井もあつた。船津の義兄も義姉も、そんな事を思ふ熊次が駒子と其處の前近く過ぐる小蒸氣に居るとは思はないのだ。

郡浦から嶋と陸との間を船は三角の港に來て、しばらくとまつた。宇土半嶋の突端と、天草の嶋の間に海が深く鑿^ほつた此三角の瀬戸は、西郷南洲がまだ日向豊後の山々に負け軍をつづけて居た頃、十歳の熊次が父母と高橋から三百石積の和船に乗つて、此瀬戸を通つて葦北に祖父を見舞ふて以來、色々思ひ出の多い場所であつた。まだ海水の鹹^{かん}さを知らなかつた十歳の熊次が、船の窓から柄杓で青み切つた水を汲んで一口渴を慰すとして思ひがけない鹹さに噎^むせかへつた

三月末のうらかな日、熊次と駒子は熊本の主驛春日停車場から瀛車で松橋に往き、松橋から葦北行の小蒸瀛に乗つた。

牢屋のやうな熊本から斯く二人で旅中の旅に出る事は、熊次に新婚旅行の氣もちがあつた。葦北の海邊に生れ、而して熊次の十八まで其處に祖父が住んで居たので、熊次は或は父母と、或は父と、或は一人で、此海を或は小舟で或は小蒸瀛で何遍往來したか知れぬ。其海に駒子を伴ふ事は、熊次に大抵の満足ではなかつた。干潟の泥にムツゴロといふ飛鯊トビハゼのピンピン飛び、石垣に船虫や蟹はさみの赤い小蟹の數限りもなく這ひあるく松橋の港を瀛船がはなれて、宇土の半嶋は右、八代の築堤ともしは左に追々開くと、疎朶そだ笹ささなど立てた浅い水は次第に海らしくなり、二里に一町、一里に一村、點々と人家の數へらるる宇土半嶋の陸近く沿ふて西に駛つた。麗らかな春の午後である。船津の義姉が住む郡こほの浦うらの前に来ると、熊次は上等室に横になつて居る駒子と呼

りと停まつた。先刻の船長が顔を出した。此處で下りていただきたい。鉛筆とどめて熊次は見廻はした。内海の真中どころで、日奈久の山々ははるか左手に、目測三里も其上もありさう。熊次は勃然とした。

「此様な處で下ろす法があるか。」

船長が引下つた。船がまた進行を始めた。

十分たたぬに、船がまた止つた。船長が三たび出現した。三角から曳いて來たらしい小舟が、左舷に漕ぎ寄せた。

船は先刻からいくらも駛つて居らぬ。日奈久は依然として遠い。日はもう天草の嶋山に春かうとして居る。熊次は勃然とした。少しばかり駛つて直ぐとめる——子供だましの仕打が氣に喰はぬ。熊次は語氣荒く船長をきめつけた。客に失禮だ。病人も此方は連れて居る。

船長も赤黒い顔色を變へた。だから三角でお斷りした。時間がおくれて他のお客様が御迷惑なので、わざわざ會社の費用で三角から舟を曳いて來て居る。せき込む船長の言葉は、段々ぞんざいな下司口になつた。

も、此瀬戸の入口であつた。駒子も高等小學時代父に連れられ此處に海水浴に來た記憶があつた。ある年の東京からの歸省に、九州線が洪水で不通になり、長崎廻はりの船を兄の清人と此三角に上つた夏もあつた。三角からまだ汽車はなく、車で熊本に歸つた。車代が八里六十錢、それで「行きまつしゆうたい、ああた。」と老車夫の郷音が駒子に忘れなかつた。

和服の船長が室の入口に顔を出して、日奈久上りのお客様は、時間の都合で、舁でお送りしますと云ふ挨拶をした。船着きのわるい葦北の海、港の上り下りは何處も舁を使ふ。此方の迷惑になるやうにはすまいな、と大束な期^ごを熊次が押すと、え、え、え、えと頭を下げて船長は下つた。

船は三角を出た。八年前の夏、郡浦から船津の義兄の催で、死んだ地平さんなどと小舟で此邊に魚釣りに來た記憶を呼び返へしつゝ、熊次は船室外の欄にもたれて、過ぎ行く嶋々、ゆらめく碧緑の水の美しさを眺めた。此頃しきりに繪心が動く熊次は、手帳を出して下手なスケッチをはじめた。駒子は相變らず船室に寝て居る。

嶋々を出ぬけて、一面鉛色の鏡をのべた内海に出て、天草寄りを小一時間も走ると、船がびた

汽船は直ぐ南へ進行をはじめた。小舟も帆を上げて東へ日奈久を指した。見る見る天草の嶋山に紅い日は入った。白光る海のあなたに、汽船はもう玩具おもちゃの船ほどに小さくなつて居る。唯見ると、帆索ほづなの上に三日月がぼんやり出て居る。

「あの月が悉皆缺け、盈ちてまたあの位になる頃は、卿あなたも歸つて來やう。」氷川町の阪下で、曉月を指しつつ熊次が駒子に云ふたは、一月の中句であつた。あれから何度盈ちて缺けたやら。今葦北の海の小舟に此三日月を見る。

不知火の 沖の上遠く 日は暮れて

帆づなにかかる 三日月の影

“Do you love me after all?”

船底に手枕で寝て居る駒子の耳に、熊次は囁やいた。彼は自分ながら自分に愛想がつきた。

“I cannot speak—I love you.”

不自由な英語で斯く駒子は答へた。

海の上寒くなつたので、熊次は羽織を脱いで駒子に被きせた。

春季休暇の歸省か旅行でもするらしい五高の學生が大勢甲板に陣どつて居た。海の眞中で時ならぬ議論に、其連中が眞黒にたかつて傾聴して居る。

熊次は負けて居れなくなつた。

「君の名は何と云ふ？ 會社に話す。」

屹と船長の顔を見て、熊次は手帳と鉛筆を取り直した。船長が少したぢたぢした。答が胡亂になつた。學生がどつと笑ふ。

其處に洋服の船員が出て來た。而して仲に入つた。熊次もう折れ時と思ふた。

「では君が船長に代つてあやまるね？」

「はい、お詫びします。」

「それならいい。皆さんの御迷惑もある。舩に移らう。」

船室にはらはらして居た駒子を扶けて、熊次は鞆諸共舩に乗り移つた。

「高い金を出してるんだ。」

と件の洋服船員が聲高に上から唸やいた。

三

日奈久温泉は、火の國肥後に數多い温泉の中でも、心易い海邊の温泉であつた。熊本から南十五里、水俣から北十里。其處には熊次がよくは知らぬ縁家の幾軒もあつて、入湯とし云へば父はよく日奈久に來た。肥後の名は通つて居る。熊次も京都を飛び出した翌年の年の暮に、此處の温泉のある湯宿に來て、其處の三階で京都の思ひ出を書いた。後で破いたが、兎に角一度は此處で書いて了ふた。それは七年前、二十一歳の暮であつた。七年目に熊次は妻の駒子の病後の消息に思ひがけなく此處に來た。土地者の若い主人は、懇に熊次夫婦を待つた。然し新座敷の壁の上塗りのうるささと其臭を一日は我慢せねばならなかつた。而して米の國肥後にあるまじいまづい米を、三食に食はされた。

着いた翌日、駒子の熱が出た。體溫計が無いが、確に三十八度を越して居る。熊次は悸おびえた。小舟で風をひいたのであらう。いやがる駒子に、熊次はあらん限りの蒲團をかけて、正に蒲團

海も暮れて、月が傾きながら明るくなつた。あるかないかの風を帆は受けて、舟は波の上をびたりぶたり何時までも唯座つて居るかのやう。向ふに日奈久の火は點々と見えて、もう按摩の笛が聞こゆるやうになつても、舟は中々着かなかつた。永劫に着かぬやうにも危ぶまれた。

到頭帆が櫓になつて、舟は埠頭内はとよに入つた。而して築港工事中の足場のわるい邊に着いた。カシテラ一つついて居ない薄暗い中を、熊次は駒子を負つてざらざらした盛土の崖を滑り滑り上つた。鞆を持つて跟いて来る船頭に案内さして、あらめ屋と云ふ湯宿に着いた。逗子の避暑の宿と同じ屋號が、耳に快く響いた。

主人は留守で、乳呑子を抱いた若いかみさんは、夜中の來客を驕迎しなかつた。作事中ではあり、賄などは

「出来できまつせえん。」

と長崎辯で斷るのであつた。熊次はむつとした。然し病人上りを連れた客の分際、平に頼入る外はなかつた。

兎に角新建の奥座敷に案内された。

郡の石堤長く天草の方へ出で、それを見越して宇土半嶋が一帶青い。左手に近くさし出る鳩山の嶋に、白い簇々は磯山櫻の花ざかりである。日奈久から南水俣までの十里の山々は、海に沿ふて今山櫻の盛りである。熊次は十五の昔、朝鮮人のやうにひよろ高い僕の勝次に連れられ、水俣から北へ五六里、山櫻の盛りを家の持山見に歩いた春を思ひ出した。また今京都に住む深水の姉が、父と一夏湯治に此處に来て、其處の磯近く姉が唯一人海水に浸つて居ると、「美しい女の首ばかり浮いて居る」と女子供が騒いだ話を思ひ出した。數限りもない思出を浮べてとりとした湖のやうな春の海、天草寄りには小さな嶋の幾箇か霞み、煙を曳いて南に小蒸氣が走れば、風を孕んで白帆は北へ滑る、櫓拍子響いて漁舟の幾はいか遠きは小さく近きは大きく悠々と歸り来る長閑の風情は、初心の熊次が鉛筆などに描けるものではなかつた。

東京廣嶋には、病院を出ると直ぐ退院のしらせを打電して置いた。日奈久に来て三日目に、大江の附箋で廣嶋の兄の手紙が熊次の手に落ちた。兄は遠からず大總督府に従つて遼東に渡る筈、東京の本社も無人だし、駒子は伊倉伯母にでも托して、成る可く速に上京せよ、上京する時一寸廣嶋に寄つてくれ、と謂ふのであつた。

蒸しにした。其發汗が利いたか、熱は直ぐ下つた。熊次は胸を撫で下ろした。熱がなければ、温泉は藥だ。寢てばかり居る駒子を促して、熊次は時々温泉に浸^{つか}らした。病後の駒子はまだ髪も脱けなかつた。駒子が湯に行くと、婆さんかみさんなど彼女の髪を撫でて、毛の多さ美しさをも嘆美した。「馬鹿の大頭^{おぼろし}」と駒子はいつも髪をほめらるるたびに云つた。夫婦が座敷の隣の小室には、嶋原の者といふ足の立たぬ十六七の娘が若い女中と居て、負られていつも湯に入つて居た。宿の主人から傳へ聞いたと見へ、よくは知らぬが確に熊次の親類の血色の好い三十男の里田さんが來て、日清戦争の話などして歸つた後は、仕事もないので、駒子が入院費用の勘定など熊次は始め、病中の氷代が六十圓にも上つた事を、襖のあなたに聞き耳立つる隣の足弱娘に聞こえよがしに吹聴するのであつた。

南國の海つきの温泉場の春は、恐ろしく日が永かつた。駒子が存分に眠る間、熊次は鉛筆と畫用紙を買つて、寫生に出かけた。座敷の縁からも、低い塀を見越して海は見たが、埠頭の上からは殊に眺望が好かつた。六里向ふに天草の嶋山が高低し、其北の端に三角嶽が三角の尖つた頭を見せ、それと嶋々の間から圓つこい頭を高く嶋原の温泉嶽が出て居る。右には八代一

此海を往復する汽船は二隻あつた。歸途の船は、先日氣まづい思をした其船とは違ふた。先日の春晴に引かへて、然し今日は簑笠の漁舟一葉を點景に、茫々と際涯も知らぬまで春雨霞む海面^{づら}を滞りなく船は駛つて、松橋に着いた。

熊次夫婦が熊本驛から車で下通町に下りた時は、もう店のランプがついて居た。いつもの母屋の長火鉢の傍には、清人君や正太君、未亡人のおすがさんや其姉者のおそゑさんなどが、花牌を引いて居た。

突然の歸來に驚いた清人君は、中一日置いて晩くも明後日は夫婦で熊本を立つと云ふ熊次の言に、不思議に反對もしなかつた。熊次は却て力ぬけがした。歸りが面倒だらう、と豫期したあてがはづれた。

隠宅が取り散らかつて居るといふので、夫婦は母屋の二階を與へられた。

熊次は猶豫なく歸京と決した。駒子の父の見舞に來て、思はぬ長逗留になつた。熊本も最早あき暨きだ。親が居てこそ故郷だ。

ふる里は

たちねの 在ます所と 今ぞ知る

花ふる里は 戀ふらくもなし

歸らう。歸らう。東京には父母在ます。早く東京に歸らう。勿論駒子同伴で歸るのだ。長途の旅も、ぶらぶら行けば不可能でない。駒子は日に日に元氣を取り返へして居る。唯惜しいのは、熊次が生れ故郷の水俣みなまたに此まま無沙汰で去る事だ。祖父の墓がある水俣へは唯十里、汽船で行けば三時間足らず。往つて見たく、駒子にも一度見せたい。其處の近くには、岩城の叔父が居る。然し歸東を急ぐ今日、それ等は他日の事にしなければならぬ。熊次はまた無韻詞の斷片を書いた。「家山在咫尺、不見今日又向天涯。」

あくる日の午近く熊次夫婦は埠頭から艇に乗つた。唯見れば、荒布屋の庭先から足弱娘が女中に負られて見送つて居た。

第十八章 陷阱を越えて

一

駒子を残して、熊次はあくる日告別に廻はつた。市中の國旗が春風に靡く神武天皇祭の日である。先づ大江の義兄夫婦に感謝の告別をして、次に伊倉の克義さん夫婦、次に本山のおしでさんに告別した。おしでさんは満面の痘痕をにやにやさせて、「ああたがお歸らんと、安心が出來ん」と云ふた。其言は不思議に熊次を噁おどろらせなかつた。

もう日が傾いてから、熊次は女學校の伊倉伯母を訪ねた。先に病院から一度來た時は、お鐵さんが來て居た。玄關の直ぐ突き當り、二階への階段近い伯母の居間兼應接間の障子外に立つと、「大江さんがああ云はすばつてん、如何して熊次さんから取らうかい。」

と伯母の聲が言ふた。情義は情義、事務は事務、きちんと分くる大江の義兄が、恐らく熊次の

日南久雜詩

德富淇水

虫聲昨夜報新秋

客夢清涼夙倚樓

八月海門波未撼

鏡心舟艇似浮鷗

驚き喜んだ。

「これが本當の『だらり急』たい。」

別を告げて七八歩、手を拍く音にふりかへると、

「氣をつけちな。」

と玄關から伯母が聲をかけた。

それは東京を立つ時、母が言ふた言葉と同じである事を後で熊次は思ひ當つた。

灯がついて、下通町に歸つた。おすがさんおそゑさんの影は見えなかつた。眉を落した三十餘の女の人が上り框かまちに腰かけて居て、熊次に會釋した。駒子が發病當時あの騒ぎに仲裁の骨を折つた志貴さんの細君、もとは大阪藝者のお熊さんである事を、熊次は知らなかつた。

清人君は落ちつかぬ風で、話に實が入らなかつた。不快な容子にも見えなかつた。當の清人君より正太さんが濛い顔をして居た。平生から重い口が、容易には開かれなかつた。先度の失策に懲りた熊次は、如何様な事があつても今宵一夜は我慢しやうと覺期した。後始末が未だにかぬといふ菊池家から、駒子を引きぬいて行くを、氣の毒に思はぬ譯には行かぬ。清人君兄弟

事で伯母が使つた車代などの書出しを要求したものと熊次に直覺された。お鐵さんが去つた後で、熊次は學校に關する伯母の述懐を聞いた。阿蘇の栗原さんは、熊本洋學校以來兄の同窓で、十二の熊次は同志社で栗原さんから特に一人牧場に呼ばれ西國立志篇の講義を聞かされたものだ。柳川牧師が熊本を引揚げた後、栗原さんは熊本英學校の懇請で蘇格蘭游學スコットランドから歸り、英學校、女學校の校長となつた。年經る内に色々困難な事情が出来て、栗原さんは焦々いもどもして來た。英學校を自由にするやうに、女學校も自由にしようとする、其處に創立當時からどつしりと座わつて居る舎監の伯母が邪魔になつた。栗原さんは一氣に伯母を排斥にかかつた。風に柳のやんわりとした受身の伯母は、唖たけり立つ栗原さんの言を唯はいはいと聞いて居たが、然し急所ははづさなかつた。

「あんまり失禮な言ことば云はすけん、さう言ふちやつたたい、『ああは老人としやうば何てち思ふち、そういふ失禮ば仰しやるか。』てちな。」

伯母はさう熊次に話した。伯母は女學校を出る出ぬの危機に居たのであつた。

然し心急せく熊次は、今日は上りもしなかつた。玄關で伯母と立話をした。伯母は早急の歸京を

正太さんが取り戻したのであつた。熊次は争はるる物の何かを知らなかつた。然し今宵の無事と、駒子を連れて明朝安全な出立の爲には、裸になつても少しも惜しからぬのであつた。駒子さへ貰つて行けば、筐かたみなどは何でもなかつた。

が如何な不機嫌顔を見するも、それは當然である。加之當の清人君は案外捌けた風をして、あつさり熊次を待った。熊次は清人君に濟まなく思ふた。

熊次が告別の留守に、手荷物は駒子が悉皆荷づくりして置いた。二階に上つて來た正太さんが、駒子と何か二言三言問答するかと思ふと、勃然とした容子で手荒く駒子の柳行李を解きはじめた。駒子は笑止な貌をして、然も諍ふ氣はひを見せた。熊次は駒子を押宥めた。正太さんが麻繩をほどく音が、ぱりぱりと淺ましく熊次の耳に響いた。何様な大切な物か知らぬが、ちゃんと荷づくりした妹の行李を解かいでもの事である。物の争は醜い。負けて置け、負けて措け。熊次は眼をそらした。正太さんは行李の蓋をあけて求むるものを出すと、また元の通り行李をしばった。正太さんが心にかけてそれは、駒子の母が寫した小唄の本であつた事を、餘程後で熊次は聞き知つた。駒子は小學時代から母が繼子の正太兄や分けて勇次兄に氣がねするのを氣の毒に思ふた。駒子の記憶に、障子近く針箱据ゑて裁縫しながら小唄を歌ふて居る母があつた。「ほんに、其様な時が母の一番樂しかつた時でせう。」と駒子は熊次に話した。そんな事から、駒子は隠宅で見出でた母の手跡の小唄の本を、歸る行李に入れたのであつた。それと聞いて、

「わりさんな、昨日俺が事ば悪口したな。」

車がびたり止まつた。熊次の車夫も若い。

「何、何云ふきやア？」

「何。」

「何。」

素手片手の殴り合ひが始まつた。

自分の事かと思ふたら、車夫同志の喧嘩だつた。

「早、下りなほり、コウ、何しとるかな？」

遽しく呼ぶ姉の聲に、熊次はわれに復つて、車の泥よけに片手つくつと、身輕に飛び下りた。而して後も見ずに、さつさとだらだら坂を上つた。

小半丁行くと、道の真中にお納戸の羽織の女が居る。駒子だ。車を下りて、赤い顔して立つて居る。今の喧嘩を遠目に見たのか、と熊次は思ふた。他の車も來た。喧嘩も濟んだと見えて、熊次の車も來た。瀛車の時間が迫る。

四月四日の未明に、朝食を廢して、旅裝した熊次と駒子は二階を下りた。一番で立たうと謂ふのであつた。皆池田停車場まで送るといふので、碌々挨拶もかはさず、直ぐ門口に出た。數臺の車が待つて居る。熊次が乗らうとすると、駒子が自分に宛てられた車を是非にと熊次にすすめる。争はずして熊次はそれに乗つた。乗りながら、頭巾の女をのせた車を唯見れば、大江の姉が見送りに來てくれたのであつた。

駒子の車を先登に、一縦列になつた車はまだ戸をしめた曉の街を走つて行く。駒子の車は早く、ぼいやりした春の曉に見る見る遠くなり、監獄署の破硝子を植ゑた高塀をめぐる頃は、もう影も見えなくなつた。見かへると、熊次の後から他の車も相應に急いでついて来る。

厩橋を渡る頃は、全く明^あけはなれた。橋を渡つて、千葉城下の切り通しのだらだら坂にかかる^おと、左手の道側に立つて居た車夫體の若い男が、つかつか熊次の車に寄つて來た。

先着した駒子は、正太さんと生眞面目きまじめになつて話して居る。熊次は姉を正太さんに紹介した。互に初對面の挨拶がある。

直ぐ瀛車が來た。二人は乗つた。

まぢまぢした姉の顔と、變な顔の正太さんを歩廊に残して、瀛車は池田を出た。

不圖氣づけば、清人君の顔を見なかつた。一緒に下通町を車で出た清人君の顔を、瀛車が出るまで到頭見なかつた。

「清人さんは如何したろ？」

熊次は駒子の顔を見た。駒子はまだ顔を赤くして、息をはづませて居る。

一番瀛車の下等室内は相應に乗つて居たが、二人の腰掛の近くは空いて居た。植木驛を過ぐると、熊次は空腹を感じた。不圖朝飯がはりの茹玉子うせを風呂敷にくるんだまま下通町の二階に忘れて來た事を思ひ出した。

「卵どころではありません。大變な事がありましたの。」

と駒子は吻くちと息をついた。

「早くお乗り。」

熊次は駒子をせき立てた。

「私、其車に乗ります。」

駒子は熊次の車に乗った。何を擇好おぼこみするのか。駒子が熊次の車に乗ったので、熊次は駒子の車に乗った。

車の列は坂路を上りはじめた。

駒子譲りの車夫は、三十近い、身の丈も一層ひとへすぐれて倔強な車夫だが、先きに駒子をのせて影の見えなくなる程章駄天走りをしたくせに、熊次をのせるとのろろ歩いて、一向急がうともせぬ。何か機嫌を損ねたかのやうに、不承不精に挽いて行く。熊次があせつても効目ききめがない。後の車から姉が聲をかけて、

「車屋さん、急いぢ下はり、瀟車に後るるけん。」
と拜むやうに云ふ。

兎も角も阪を上り果てた。錦山神社下からは下り阪、到頭池田驛に来てしまった。

渡る頃、駒子はふりかへつた。後の車の影も見えない。

「車屋さん。」

と聲をかけた。車は黙つて疾風の如く走る。

驀然と頭に閃めいたは、昨日笑つて聞いた志貴のお熊さんの話。

「車屋さん。車屋、車屋。」

蹴込を踏み鳴らして、駒子は叫んだ。聞こえぬ風して、車は速力を加へる。

「車屋、こら車屋、主人の言ふ事を聽かんか。」

洋傘の尖で駒子は倔強な車夫の背を突いた。同時に、蹴込からするする梶棒の間に下りて了ふた。駒子の劍幕に、倔強の車夫も後押しも手の出しやうがなかつた。其處に熊次の列が來た。

駒子は熊次の車に乗つた。池田に着いてからも、正太の兄は、「折角來は來たけどん、やつぱり熊本に留まつた方がええ。」と駒子を引きとめにかかつた。其處に熊次が姉を引張つて來たりして、到頭するするの別れになつた。

瀛車が肥後の國境を北へ筑後にぬける頃は、一切が明瞭に熊次の腹に入つた。

嵐車の響に人聞きを紛らして、駒子は最初から事の顛末を夫に話すのであつた。

昨日熊次が告別に歩いて居る留守に、駒子は隠宅で父母の記念のこまこましたものや、寫真など寄せて居た。其處に志貴のお熊さんが來た。昨夕母屋の上り框にかけて居た眉を落した女の人である。あたりに人の無いのを幸ひ、お熊さんは容易ならぬ事を駒子に告げた。それを告げにお熊さんは來たのであつた。

明朝駒子の車は特別倔強な車夫に挽かせ、中途から熊次を出しぬいて或隠れ家へ挽きつけさす手筈になつて居る、といふのであつた。

「まさか」と駒子が笑つた。お熊さんは眞顔になつて、笑談事ではない、よく氣をおつけなさい、と懇々言ふて去つた。

今朝門口で車に乗る時、倔強な車夫が美しい車を持つて駒子を乗せに來た。美しい車を譲る意で、駒子はそれに熊次を請じ、自分は別の車に乗つた。梶棒が上る時、不圖見れば、車は違つたに、車夫は先の倔強な車夫である。先登になつて走せ出した。非常に足が早い。後につづく車の響が追々おくれる。車がまた一倍早くなつた。と思ふと、後押が一人ついて居る。厩橋を

此正月、駒子が熊本へ立つ時、父の居間で、心配する一同に對し、「お駒は大丈夫です」と熊次が斷言した。熊次は駒子に亂暴して、下通町の隱宅を逃げ出した。駒子は後を^お趁ふて大江の姉の宅に來た。熊次はまんまと駒子の兄の計略に乗つた。兄の計略を、駒子が見事に破つた。熊次は「俺^{おれ}の駒子を見てくれ」と言ひたい誇りたい氣もちで一ばいになつた。

あらためて熊次は吻と息をついた。過ぎての後の危險が、今更彼を昂奮させた。幾度も、幾度も「危^{あぶな}かつた」と熊次は繰り返へし唸やいた。

それにしても、駒子の兄の何といふ卑怯な陰險な仕わざだらう！ 正太さんは問題でない。當の敵は彼清人。駒子に對する感謝を越して、駒子の兄を憎惡の一念が烈しく燃え立つた。何と云ふ不埒な男！

博多で夫婦は瀛車を下りた、疲をやすめる爲に。十八の年、從兄又雄さんに連れられ、陸路を熊本から車で來て、此處から船で伊豫に渡つた時以來來馴れた古賀文に宿をとつた。

此處まで來れば、もう安心である。安心は疲れを呼んだが、然しあまりに疲れた身心は、靜かに居ても唯昂奮を増すばかりであつた。宿は込んで、薄暗い下座敷に二人は入れられた。横に

熊次はホウと長い息をついた。

熊次の車夫の喧嘩も、それで讀めた。熊次の車を手間どらして、駒子の車を遠く逸がす爲であつた。急遽の歸東に、清人君が些のこぼれもなかつた仔細も讀めた。此駒子誘拐の策略があつたからだ。正太さんの變な顔もよめた。彼は阿弟の囑を空しくして、見す見す手中の玉を逸した。

清人君が停車場に顔を見せなかつたも當然だ。彼は隠れ家に先廻はりして、駒子の車が來るのを待つて居たのだ。要するに清人君の腹は、最初からきまつて居た。彼は否でも應でも妹を抑留するつもりであつた。陷穽は出來て居た。駒子がそれを跳り越えてしまつたのである。でも、よく志貴さんが知らしてくれた。

然し、知つて居ても、駒子でなくて其計略の裏を立派に搔き得やう乎？

何故黙つて居た？ と駒子を詰らうにも、自分の短慮がちを思へば、駒子が黙つて一切を胸にたたんで居た事を、熊次は感謝せねばならなかつた。熊次が知れば怒る。怒れば何様な破綻に終つたかも知れぬ。

第十九章 東へ

一

明くる日、博多から瀛車で熊次夫婦は門司へ行つた。大里へ來ると、關門かけて大小瀛船和船、軍艦、水雷艇などの輻輳した中に、船體を黄色に塗つた細長い快速らしい瀛船が二隻眼を牽いた。李鴻章が乗つて來た清國招商局の瀛船である。對岸馬關に著しい御殿づくりの大廈は、日清媾和談判の舞臺の春帆樓であつた。時は猶三週間の休戰中で、李鴻章は客館引接寺いんげつじに負傷を治療しつつ経過良好である事を新聞は報じて居た。戦争で味噌をつけた李鴻章は、自身七十歳の老軀を提ひきさげてわが仕損じの後始末に出て來た事でいくらか日本の好感を取り戻し、遭難當時の沈着ぶりと、日本軍醫の佐藤國手に治療を託して疑はぬ太つ腹ぶりで更に器量を上げた。日清の間は著しく近くなつた。日本船舶に圍まれて、支那船の二隻が悠々と錨を下ろして

なつたり、座わつたり、夫婦は春の半日を暮らした。横になつても、座わつても、さめてさへ居れば、心は今朝の一齣いつくをはなれなかつた。危かつた。よく逃れた。かへすがへすもよく危い所を脱だつれた。それにしても、何と云ふ不埒な駒子の兄だらう！

明日早く門司へ立つので、二人は早く寝やすむ事を望んだ。立て込む客で疲れ切つて居るらしい山出しの若い女中が、忿々しながら手荒に夜の具ものをのべた。

「姐ねえさん、靜に。」

熊次が言ふ甲斐はなかつた。枕の一つは船底を持つて來たので、坊主枕と言ふと、二間も向ふから坊主枕を撞と兩人が間に抛ほうつた。

駒子が支ふる手は間に合はなかつた。あつと氣が自分についた時は、油臭い銀杏返ねぢふを捻ねぢ伏せて、熊次はつづけさまに撲なぐつて居た。

帳場の男女が跑けて來て、一方泣きわめく女中を引立て、一方いきり立つお客を宥めた。お客様の手荒を一切穩便あんびんに穩便にと帳場の計らひで、それなりけりに熊次は床についたが、駒子の吐息を聞くと、熊次もがっかりして、荒寥とした心に唯悔恨の苦味が残つた。

一緒に來た。博多から乗船して、玄海に揺られ、駒子は船量ふねりかして、此馬關に寄港した時、甲板にも得出でなかつた。父が上陸して、大きな夏蜜柑と大きな圓いパンを買つて來てくれた。熊次は二十八字を書いて駒子に見せた。十八歳、伊豫に居て、勉強せんきやう其處そこのけに漢詩に没頭しはじめた時、郷國の父が聞いて心配し、詩作に耽つたりしてはいけぬと云ふ詩を熊次に寄せた。正直に詩作をやめたので、熊次は到頭平仄へうそくを覺えずに了ふた。然し彼は漢詩が好きで、どうかすると無韻無平仄の自由詩を並べた。

君莫嗟無双親兮 双親見今在東都

春風挈手三百里 一路看花歸帝京

熊次の心は東に急いだ。東には父母が居る。然し黙々と死んだやうに臥す駒子の心が西へ牽かるるを、熊次は奈何ともし難いのであつた。西には父母の未だ葬られない骨がある。其處には一人ぼつちの兄が居る。

居るを見ても、もう日清の平和は門口まで來て居る事は疑ふ餘地もなかつた。

門司停車場に下りると、憲兵巡查が出入口を固めて、姓名職業から行先、用務まで嚴重に訊問する。不了簡者が一人飛び出した爲に、關門は戒嚴令の下にあるのであつた。訊問の關所を通して、熊次駒子は汽船宿に往つた。

廣嶋に寄つて行く爲、熊次は宇品に寄る船を求めた。今夜出る船は木造汽船であつた。木造の險安を決しかねて、熊次は何度も何度も同じ事を問ひ返へした。臨戰地の緊張に李鴻章以來殊に昂奮し切つて居る若い店員が、分かりのわるい紳士を前にして、演説をするやうに兩手をひろげ、身振入りで説明をはじめた。駒子が顔をしかめた。鬼も角も木造でも其船で行くにきめた。

其夕夫婦は汽船に乗つた。間もなく汽笛を鳴らして、船は陸に海に點々とした光の中を縫ふて東に走りはじめた。九州を後に、夫婦は確にもう東へ歸りつつあるのだ。

客の少ない中等室に、駒子は直ぐ横になり、眼を瞑つて居る。

それは駒子が十七の春であつた。お茶の水女高師に入學の爲初めて東京に上る時、父が送つて

ある。其中を押分けるやうにして二階に上ると、兄が立ち上つて、

「來たな。」

と迎へた。直ぐ立つ、と云ふ電報を熊本から出して置いたので、不意ではなかつた。亂暴本部も一時は十數人で雜沓を極めたさうだが、今は兄の外に、思ひがけない東京の尾崎牧師と、近く従軍記者として戦地に向ふ船津の甥嘉一郎と、社員の方津君とだけが居た。

「些廣嶋の案内でもしやう。」

兄が弟夫婦を外に導いた。大手町の通りは、嚴しい番兵の銃劍を閃めかして非常を警むる大本營の城門から打通した目貫きの大通りで、馬上、車上、徒歩の往來の八分は軍裝して居る。町の其處此處に、川上陸軍中將、伊藤内閣總理大臣などの宿札が墨黒々高く立てられて居る。町家の戸口戸口に疊敷、人數割の紙札が貼られ、店先に三又五又に銃を組んだり、蹲んで靴を磨いたり、砥石にかけてせつせと劍を磨いで居る兵士も其處此處に見えた。

賑やかな通から、靜かな濠端に出ると、

「随分大變だつたな。」

夜すがら船は周防灘を走つた。明くると、朝靄の青い嶋々の間を滑るが如く縫ひもて、日が高く上る頃に宇品に着いた。衆議を排し、私費をまで注ぎ込んで、良二千石千田貞曉の築いた港、日清戦争が裏書きした「信念」の現象である。港には幾艘とも知れぬ御用船や、節色に塗られた軍艦、水雷艇、埠頭には山と積んだ食糧の大箱、薦包、露出の罐詰、端もなくつづく又銃の列、右に見左に見つつ、熊次夫婦は上陸すると直ぐ車を廣嶋へ走らした。

馬關に平和の風はそよいでも、廣嶋は軍容依然として居る。大元帥陛下も城内の大本營に御出になる。戦の魂は、馬關を見越し、遼東を見越し、直ちに北京を睨んで居る。赤帽の近衛、黄帽の大阪、兩師團七萬の兵が今廣嶋に一發の號令を待つて居る。夫婦は車の上から、左見右見して、行くのであつた。

大手町の亂暴本部は、旅宿の二階八疊二室を打ぬいての合宿であつた。此家も黄帽が一ぱいで

午餐は大一座で、賑合ふた。

次の瀛車で、山下君が着いた。山下君も近くにまた出征の筈であつた。二階に上ると、駒子を見て、

「非常に御心配してりました。」

と山下君は快活な調子で云ふた。

二階は益々賑やかになつた。

疲れた駒子は、兄の注意で、隅の方にしばらく横になつた。

口が傾くと、尾崎牧師も宮津君も夕瀛車で歸京するさうで、仕度を始めた。

兄が熊次を引きのけて、此の雑沓だから、夕瀛車で立つて、尾の道あたりで休息して往つたがよからう、と注意した。一議に及ばず、熊次は直ぐ仕度をした。

往く者、送る者、總立ちになつた。

階段を下りやうとする駒子を扶たすけに、山下君が突と進み寄つた。

「何、好いです。」

と兄が言ふた。

「ええ、中々熱が下らぬものですから。」

兄が憚^{よろこ}びない顔をして、熊次を見た。

「費用も出しといたばい。」

病院の入費は毎も父から送つて來た。熊次の受取る分もあつたが、大部分「社から特別出方」としてあつた。それが兄の助力である事も、戦時の入費多端な貧乏新聞に其「特別出方」が何程を意味するかも、熊次はてんで念頭に置かなかつた。催促されて、彼は後れ馳せに加勢の禮を述べた。

熊次は熊本出發の一齣^{いつせう}を演べた。兄が苦笑した。

濠^{ほり}の水に映つて、柳の緑の間々^{あひあひ}に櫻が白く咲いて居る。兄は一朵^{いちだ}の花を折ると、くるり向き直つて、それを駒子にやつた。駒子は悦んでそれを受けた。

宿に歸ると、間もなく社の浅井君が東京から着いた。浅井君は兄と大總督府に従ふて遼東に渡る事になつて居た。浅井君が上つて來ると、いきなり其肱^{ねぢ}を捻つて、兄は歡迎の笑を見せた。

明くる日の上り瀛車は空いて居た。中等室の軟らかい腰掛に駒子は直ぐ横になり、熊次は飽かず外を眺めた。駒子の病中、看護のつれづれに、熊本の古本屋で熊次は菅茶山の黄葉夕陽村舎詩を買った。其詩集や、讀みふるした山陽詩鈔で頭に親しいものになつて居る山陽道の春色が、今眼の前に次から次と生の畫卷物を披いて行く。瀬戸内海を船では随分幾度も往來した。陸路は初めてである。往きにも通つたが、夜であつた。尾の道を出て、福山、笠岡、鴨方と瀛車はうらかな春光の中を東へ走る。小山の間を走つては、時々海に出る。松雜木の茂る小山の裾には櫻の白い村があり、白く光る灣には粉壁の港町があつた。

玉嶋驛に來た。玉嶋！ 何と云ふ美しい名だらう、と熊次は思ふた。

中一つ置いて背の區劃に、先刻から新聞記者らしい若い二人を相手に、沿道の豪家を指して敬へたりして居た五十年配の鹿兒嶋言葉の白っぽい洋服の大男が、歩廊に何を見つけたか、卷頁

熊次は應へて、駒子を扶けて下りた。

停車場は中々遠かつた。東京までの通し切符を買つて、待合室に居ると、送りの人々も來た。着いたばかりの淺井君、山下君なども來た。山下君が駒子をしげしげと眺めて、云ふた。

「あんまりお痩せもなさらんやうですな。」

改札口が開いて、夫婦は乗つた。病後の長途で、切符は中等である。熊次も駒子も初めて汽車の中等に乗つた。尾崎牧師と宮津君も同じ車室に乗つた。

顔と聲のごちやごちやした印象を残して、汽車は廣嶋を後にした。

二時間の後、熊次夫婦は尾の道に下車し、濱吉旅館の御客であつた。濱吉は駒子兄妹が泊りつけの宿であつた。七十日前、熊次が船待して駒子の父の亡くなつた電報を受取つた宿は、もつと海づきの小さな宿であつた。

廣嶋の雜沓の後に、尾の道の旅館の夜は靜であつた。湯に入るとして、駒子が懷から紙にくるんだものを出して、床の間に置くのを見れば、今朝廣嶋の濠端で兄が折つて駒子にくれた櫻の花であつた。

三十年も経つた後、熊次は偶然其男の名を知つた。鹿兒嶋者の鎌田と云ふ名うての亂暴者であつた。廣嶋監獄の看守長をして居た時、破獄騒ぎが起り、獄内大亂れに亂れた。長劍片手に、彼は囚人の眞唯中に飛び込み、「俺は鎌田ぢや、鎌田を知らんか。」と大音聲に怒鳴りつけた。其男の事を自傳の中に書いたあみ六君は、喧嘩の場數を踏んだ筆持つ仲間での剛の者であつた。「何、まさかの時はピストル一挺で事済む奴。」とあみ六君は書いて居た。

熊次はピストルも持たなかつた。傍若無人の五十男が振舞を默つて過ぐす無念さに、景色の興も殺がれてしまつた。姫路に着くと、熊次は駒子を促して、匆々に別の車室に移つた。

熊次は淋しくなつた。播磨野はたそがれて、小雨ほとほと、松の一樹がぼんやり立つて居る。

細雨幾點播州路 孤松如夢立黄昏

明石で藝者、雛妓を大勢連れた五十男が乗つた。戦争で儲けた商人らしく、取り卷きの男も二三居る。聞き覚えある高調子が、熊次の眼をひいた。五十男とさし向ひに、横顔の八字髯が、「彼八田あのちう男は、こう首を切られてもきめた事は變へん男です。」

わが襟首を丁と手刀で切る仕形をして、熊本國權黨の名士の評判をして居る。それは十年前の

を唧へながら、突と立つて、開きにくい扉をこじあけ、出て往つた。やがて藝妓らしい若い女を引張つて來た。若い女を側に、若い男等を前に、五十紳士は女の臂を抓つたり、大びらに露骨な話をする。若い藝者はきまりを惡るがりながら相手になつて居る。新聞記者はげらげら笑ふ。熊次は顔を赧くして外を見た。

藝者は岡山で下り、和服の地方紳士が熊次の腰掛の端にかけた。相識らしく、薩摩男は直ぐ背合はせの腰掛に來て話して居たが、熊次の向ふに肩掛けて小さく横になつて居る駒子をちらちら眺め、熊次を横目に見て、

「何某さん。」

とあらためて和服紳士を呼びかけた。

「何某さん、隨分御失禮な噂を見せつけに連れて歩く者もごあんすな。」

何某さんが呵々と笑ふ。

熊次は赫となつた。一喝、凹ましてやりたい。然し其勇氣が無い。傍向いて、熊次は黙つた。薩摩男は自席に復つて、ぶつぶつ猥な獨語をして居た。

次が書いた禮を述べて「ほんに、どれだけの人の爲になるでせう。」と云ふた。其追懷記に熊次が一筆書き添へた盲目のかあやんが出て来て、書かれた禮を言ふた。牛の額のやうな出額の下に昔椎の實程に小さく窪くあいて居た兩眼はひたとつぶれ、仰向いて聞く盲人の癖も熊次の心を痛くした。かあやんは一昨年神戸に來ると間もなく盲になつた。盲になつても遊んでは居ず、手さぐりに雑巾など刺して、沼山の親類中に配つたりした。潰るる前は終夜痛み、手しほにかけて育てた先夫人のわすれ形見の慶馬坊を一日見やうと引寄せて見たが、もう茫として見えなかつたさうである。五十年の勞働で節くれ立つた太い手で、かあやんは熊次を撫で、駒子を撫でて見て、喜んだ。熊次の父が沼山先生に入門の昔から知つて居るかあやんは、熊次を子供から知つて居、今治に京都に三年の生活を共にして、熊次には深い愛をもつて居た。かあやんは駒子兄妹も識つて居た。兄妹が返子に初めて來た夏、沼山一家も返子に避暑して居た。「お兄さんがな、清人さんが私に五十錢下はりましたばい」と、其當時を思ひ出してかあやんは言ふのであつた。又雄さんの先夫人の子女二人、昔熊次が下手な守した事もあるもう十三のお節ちゃんとお數へ年九歳の慶馬さんが、同年の柳川の鎮雄さんと襖の蔭から現はれた。家の鎮雄坊のに

相識鶴城つるしろさんであつた。

十年前、伊豫の今治に熊次が居た時、又雄さんの副牧師格が二人居た。同志社出の伊豫の松山さんは瘡かさせて、靈味深い説教をし、熊本の洋學校にも居た肥後人の鶴城さんは、好い調子で政談演説めいた説教をした。鶴城さんは少し漢學が出来、眼をつぶつて天道溯源の講義に、左傳を引張つたりした。洋學校時代は耶蘇信者で、花岡山の聯盟に署名の一人であつたが、其後政黨運動などした揚句、伊豫に流れて來て、又雄さんに引揚げられたのであつた。廢校になつた中學校に、丸髻なまりに結つた四國訛なまりの大分年長の馴れ合ひの細君と住んで、子供がはりのテリアル種の犬を疊の上に飼つて居た。犬が尿をすれば、鶴城さんは新聞でごしごし拭いて済ました。犬は會堂にも跟いて往つて、勝手に説教壇を駆けづり廻はつたりした。十年ぶりに熊次は今神戸近い瀛車の中に、昔ながらの眉を蹙おめて高調子で話す其人を見た。ほろ酔加減の鶴城さんは熊次に氣もつかぬらしく、話し果てて高笑ひしては、雛妓おしやくの首を抱いたりはいで居た。

熊次夫婦は神戸で下りて、車で山手に柳川牧師を訪ねた。柳川さんは髯しんをふるつて、「盛京省しんきんしょうは如何になりますか？」など靖和の消息を問ふのであつた。お美枝さんは、亡い母者について熊

居た。姉が引取つて東京に連れて往つた。眼の大きい、きつさうな繼母を、二葉さんは恐いと
言ふて居た。熊次が東京に上つた頃は、二葉さんはもう十六の前髪剪り下げ、京都で浮名を流
したといふ若い義理の叔父の顔ばかり見て居た。其二葉さんが最早義理の叔母さんの駒子と同
年になつて、札幌出の農學士と婚約整ひ、遠からず式が擧げらるる事になつて、紅いもの美し
いもの取りひろげた下座敷に、落ちついた二葉さんは仕立物の針を動かして居た。

櫻ざかりの京都は、戦時の大博覽會で雜沓を極めて居た。熊次は駒子と博覽會に往つた。京都
は熊次に忘れぬ土地である。十一の夏から十三の夏まで、彼は創世記時代の同志社に生徒で
あつた。十九の夏から二十歳の冬まで、彼は二たび同志社の生徒であつた。失戀の痛手を負つ
て京都を飛び出してから、八年目で彼は今再び其土を踏むのであつた。二度瀕車で通つたが、
素通りした。今新妻と二人して京都を歩いて居る。蛤御門を入つて、憶出多い御苑を通ると、
向ふに青い東山の一角には、一昨年の夏二十三で死んだ榮さかえさんが葬られて居る事を、熊次は思
はずに居られなかつた。その榮さんとの昔の交渉は、「春夢の記」に書かれて、東京の自宅の竹
の行李の底に藏つてある。それは過ぎてしまつたものとして、駒子にも未だ見せてない。駒子

ここに顔に引易へて、二人のくすんで居るのが熊次の心を暗くした。二人の母者の亡くなつた後、祖母さんは病身だし、かあやんが子女の力であつた。東京に居た間も、子女が始終ぶら下るので、かあやんの袖はいつも綻びてぶらぶらになつた。

次の嵐車で熊次夫婦は京都に着いた。而して直ぐ車を走らせて上京は御所近い蛤御門前の深水の宅に着いた。碓氷先生と同郷の深水さんは、其郷里に牧師として長らく働いた柳川さんとも別懇であつた。子女四人を残して深水の先夫人が亡くなつた後、熊次の姉が後妻として嫁したも、姉とは姉妹同様に育つた従妹の柳川夫人夫妻の肝煎であつた。深水さんの弟の芳夫さんが同志社で熊次の兄と懇意であつたのも、縁をひいた。お元姉が深水に嫁いだのは熊次がまだ伊豫に居た頃の事で、其後東京で女の子、次に男の子が出来、京都に来てからまた女の子が出来、一人はまだ腹に居た。肥後一家が東京に引出てから、兄の雑誌経営にも、また新聞の創業にも、老練な深水さんは一臂の力を假した。群馬縣會議長、衆議院議員、彼から此と公私に忙しかつた深水さんは、兩三年來専ら同志社の財政を擔當し、蛤御門前に住宅を新築して當分京都に腰を据ゑて居た。姉が後妻にきまつた時、深水の長女二葉さんは十二で、碓氷先生に預けられて

次を苛々^{いらいら}させた。濟まぬ、と云ふ氣が熊次の心を亂した。京都驛の待合室で、熊次は同年輩の束髪の女と話す駒子を見出した。熊次は人目人前がやかましかつた。目立つ事を自分も恐れ、目立たぬやうにと駒子にも要^{もと}めた。行儀作法、女としての嗜^{たしな}英語の“Modesty”“Propriety”を殊にやかましく云ふた。曾て駒子が田舎の停車場で帶を直したので、熊次が唄つた事もあつた。人遠い熊次は、駒子のあまり人近い事を悦ばなかつた。女でも已^もが識らぬ人と駒子の話すを喜ばなかつた。改札口を入つて、上りの瀛車を歩廊に待つ間、熊次は駒子に問ふた。

「彼女^{おれ}は誰です？」

「知らぬ方ですわ。」

「何を話して居たんです？」

「何でもない事を——先方から話しかけなさるものですから。」

「名乗りはしますまいね？」

「先方から名を云つて、聞くものですから、名乗りました。」

「何で輕々しく名乗つたりするのです？」

は落ちつかぬ氣分の夫を怪しむだ。話しかけても、碌に返事もせず、御苑の其處此處に立ちとまつて、あたり見廻はし、追懷に耽けるかのやうにする熊次を、駒子は不快に思ふた。駒子は淋しかつた。駒子も京都は初めてではなかつた。東京から歸省の途、兄の清人と下京の宿に泊つて、夫婦扱ひされ、「兄さん」と殊更に「兄さん」を響かして兄妹を知らした事もあつた。同志社出の教師に嫁いで居る再從姉またいとこを訪ねた事もあつた。同期卒業の一人は、京都の人であつた。其京都に花の盛りに折角夫婦で來て、連れ立ちながらさながら別々に歩いて居るやうな淋しさを、駒子は何の故とも解せなかつた。駒子は唯淋しかつた。

疏水工事が出來て、鴨東の氣分はすっかり變つた。ヒーロー、サンライスの卷煙草の廣告を東山一ぱいにはだけた俗惡、朱塗の極彩色の大極殿、見るもの皆熊次の神經を焦立たせた。美術館には、雄渾な雅邦の龍虎、幽谷の菊の屏風、佛蘭西歸りの洋畫家が巴里で描いて其處の展覽會で人目を惹いたといふ裸體美人の油繪もあつた。駒子はゆつくり見たかつた。何かにせき立てらるる熊次は、駒子をせき立てて、匆々に博覽會を濟まして了ふた。

京都は二泊で、四月九日の朝夫婦は姉の家を辭した。京都には澤山の忘れ物をする心地が、熊

四

瀛車が京都を後にし、菜の花の近江路にかかると、熊次も春色の中を快く走る人であつた。山陽も春であつたが、東海道も春は最中^{もなか}である。霞と花に小一日走つて、夫婦は濱松で下り、大米屋に泊つた。

明くる日、濱松からの景色はますます好かつた。其岸の松にまじつて櫻咲く大井川、興津蒲原の三保松原を前にした海景色、雪ながら霞む富士川沼津の富士、それは熊次の畫心を^{そそ}嗾らずに置かなかつた。好い景色に來ると、熊次は駒子起した。駒子も起きて見惚れ、また横になつて長途の疲を養ふのであつた。

箱根を越すと、瀛車がまどろかしくなつた。平塚あたりで、出征兵士を滿載した軍用列車を過ごす爲、上りの客車は長いこと待たされた。舌鼓うつて、熊次が唸やくと、向側にかけた中年の商人體が、

熊次は忿然と矢庭に駒子の護謨櫛を引きぬき、ほつきと折つて、線路に投げ捨てた。

向ふの歩廊で、若い贅六が二三人笑つて見て居る。それがますます熊次の癪に障つた。

恐くもあり、恐いもの見たくも思ふて居た京都に、八年ぶりに夫婦で來て見れば、京都は一向面白い處でもなかつた。

にぐわんと額をぶちつけて、「わアン」と啼き出した。姪の實子が歡迎である。

皆哄と笑ふ。

* * *

明くる朝、熊次は父母の居間に、あらためて歸りの挨拶をして居た。

「お駒どんがうつ倒す。如何しても他手にはかけられん。卿が介抱する。傳染でもすると、これら大事おほごとち思ふとつたたい。」

と父が手巾でごしごし鼻を摩こすりながら、ほくほく勇み立つた。

四十三年前の春、祖父の愛子の熊太叔は、丁度熊次と同じ二十八歳、叔母は駒子と同年の二十二歳で、唯一月の内に夫婦諸共疫痢で斃れた。駒子が望扶斯で、熊次が附添ふ。またか、と父母は恐氣おそけをふるつて居たのであつた。

「今度の事は、卿が爲に、好い學問だつた。けつどん、費用なんか此方から送つたけん、まアだ樂らくだつたたい。」

熊次は熊本出立の出來事を細に話した。

「あんなに出かける人達もあるに、苦情言つちや濟まないや。」

と窘めるやうに言ふた。

熊次は黙つた。

大分おくれて瀟車は電燈明るい新橋に着いた。熊本を立つて、七日目である。

日奈久を花で立ち、九州、山陽、東海と一路花を見て東京に歸れば、東京も花盛りであつた。

車が溜池を過ぐる時、街燈の光は、「咲きも残らず散りもはじめぬ」といふ櫻の眞盛りを照した。電燈の光にあからさまな若木の櫻は、芝居の書割のそれを思はせて風情を缺いだが、然し夫婦の無事な歸りを祝ひ迎ふるかのやうに、熊次にうれしく眺められた。

氷川町に着いた。

義姉の安子が歡び迎へる。一同父母の居間に通る。父も母も起き出た。熊次と駒子は手をついて、歸を告げた。

「何ッ？ 叔母さん？ 本當？」

寢ぼけた子供の早口なおしやべり。小さな足音がたばたかけて來た。と思ふと、いきなり柱

打ちたたいたりしても、犬は熊次に跟いて來た。結婚以來は熊次もあまり構はなかつたが、昔を忘れぬ彼は、歡喜の席に顔を出すを忘れなかつたのである。

此日は四月十一日、母の誕生日であつた。其祝をかねて、母の仲間の婦人老人會が隱宅に開かれた。駒子も呼ばれた。母は戰場からでも無事凱旋して來た者のやうに、來る人毎に駒子を引合はせ、

「忤^{せがれ}と媳^{よめ}が無事に歸つて參りましたから。」

と今日の歡喜を頌^{たた}つのであつた。

父が顔色を變へた。

「そら寅一に話しとかんと。」

「それぢや烈女たい。」

次の間から母のしんみりした聲が聞こえた。

「相談相手に引とめやうとしたつたい。」

と母が重ねて言ふた。

やがて駒子も來た。義姉も來、幼ない姪や甥も來て、隱宅の六疊は賑やかになつた。

「くん、くん、くうん。」

突然縁先に鳴くものがある。唯見ると、虎毛鼻黒の犬の頭が縁からぬうと此方を向いて居る。

「おお、おまへも、おお。」

と父が頷く。それは一昨年來熊次が飼犬のやうにして居る犬であつた。一昨年の夏の留守居に、不圖庭へ來た風來の犬を、犬好きの熊次が手馴けて、牛肉でも食ひに行くと、残りを竹皮にくるんで持つて來てやつたりして居た。出社すると、よくついて來た。時々は癩癩を起して

第二十章 臥薪嘗膽

一

熊次と駒子は三月^{みづき}ぶりに二たび氷川町の巢に戻つて來た。留守を承はつた甥の直が八王子の染織學校へ往つた後は、夫婦の家は戸をしめて、目ぼしい諸道具は隱宅へ運んであつたので、古巢歸りは二たび新世帯をもつやうなものであつた。翌日から熊次は社に出た。皆戰地や廣嶋に出拂つて、社はまだ淋しい事であつた。編輯局で久しぶりに會つた大矢野君が、翌日は夫婦の宅に來て、駒子に弔儀と全快の喜を述べた。すべては自然で、少しも熊次に不快を與へなかつた。

夫婦の歸京から二日して、日清休戰の三週間が過ぎた。四月十三日に征清總督小松宮殿下が幕僚を帥^{ひき}ゐて威海衛丸で遼東へ向け宇品を解纜された。李鴻章の負傷も追々癒え、馬關の媾和條

夫婦の歸京を傳へ聞いて、其家居を見るべく、同じ郷國出の三人娘がある日訪ねて來た。何れも女子學院生で、駒子と同年配の娘達。窪い眼のはしつこい外村のおしんさんは、熊本で熊次に英文典の初歩を教はつた一人であつた。帝大を出て、陸奥さんの子分として官途に立身の途にある兄者を使つて、おしんさんは早くから出京して居た。八代の町家の娘で、熊次が東京歸參の少し前歸省した兄に連れられ上京した女生の一人白石のおしんさんは、すんぐりして丸々とした顔をして居る。丈高く、長い顔をして願の張つた簀田のおいさんは、父が熊次の爲に最初縁談を申込んで斷はられた其娘。おいさんは熊本女學校を卒業して、昨春伊倉の伯母に連れられ上京した。新橋に出迎へた熊次は、伯母を車にのせた後、半丁ばかり先に立つておいさんを芝口の知邊の宿に案内した。おいさんの上京を傳へ聞いた駒子の母が、伯母の底意を料つて、女の婚禮に邪魔入れるのであるまいか、と懸念したものだ。駒子が高等小學を卒へてしばらく熊本女學校に通ふて居た時、名を知らぬ寄宿の女生の一人が、駒子の着物の縞柄の好いのを羨み、縞の手本を欲しがつた。それは駒子の母が工夫した縞であつた。駒子は母に言ふて、見本を持つて往つてやつた。駒子は先方の顔を忘れて居たが、もらつた人は覚えて居た。

約は着々進行して居るが、氣を抜かぬ爲にも總督府の進轉は必要と考へられたのであつた。昨秋大元帥陛下の御召列車に扈從して廣嶋へ向つた寅一は、當然總督府の船に乗つた。船に乗る前彼は東京の弟に手紙を書いた。熊次はそれを李花のこぼるる小庭に對^{むかひ}ふ居間の几^{つくえ}で披いた。

「春雨霏々、今より船に上る。」

と書き起した兄の手紙は、切に常識の修養を勧め、靜定の工夫を説いたものであつた。去秋兄が廣嶋で、かねて懇意の海東伯と一夕會心の談に、西郷南洲や大久保甲東の修養の訣^{けつ}として、「靜定工夫試忙裏、平和氣象怒中看」の語を聞かされ、それを父への手紙に書き送つた事は、熊次も知つて居た。

歸東以來、出社の餘暇に、熊次は過ぐる七十餘日の日誌を細につけはじめた。其日其日に符徴の如く略記した斷片の文字を辿つて、記憶を新に書いて行けば、一切が掩ふ所なく眼の前に現はれた。熊次はわが描^{えが}き成す自己の姿の醜さに眼を掩ふ外はなかつた。それは愚かしい事^{よこしま}、邪な事の連續であつた。熊次は駒子に羞ぢ、而して一切を捨てて自分に跟^{ついて}いて來た彼女にあらためて感謝をもたず居られなかつた。

ら駒子の足袋は皆母の手縫であつた。東京に来て、駒子は足袋の一足も買つた事はなかつた。彼女はわが足袋の何文かを知らなかつた。着物のよぐれ、足袋のやぶれ、それ等は歸省の毎に持ち歸ると、母が知らぬ間に奇麗にしてくれた。其ハゼ一つにも、丹念に刺した底にも、母の心が籠る古足袋を、腐らして捨つる駒子は、二たび母を葬る哀をした。女ではない、駒子はお妻であつた。面倒を見てくれる父母は亡い。駒子は孤兒であつた。孤兒である事をしみじみ駒子は自覺した。熊次が慳食な口をきくと、駒子は眼に一ぱい涙を溜めて、「孤兒をたんとおいぢめなさい。」と怨じた。

駒子の父は義太夫が好きであつた。駒子が幼ない頃は、父がよくかき抱いて、とんとたたきながら、仙臺萩を唸り、「これ千松」と抱きしめたりした。好んで詩歌を吟じたり、頭が痛いとい鉢巻して孟子を読んだりした。母も我流の歌を詠み雅文を書いたり、兄達に讀ます教科書の書牘文なども、丹念に手づから寫したものだ。然し駒子の幼時は、一切繪本や草紙物を見せられなかつた。小學時代に、熊本に来て政談演説などした湘烟女史岸田俊子——其人に駒子は折手本を書いてもらつた。李白の春夜宴桃李園序が、邊筆に書かれて居る。——にかぶれて、下通

それはおいささんであつた。

駒子が茶を入りに立つた後、若い女三人を前にして主役の熊次はてれた。多くもあらぬ寫眞取り出て、興を添へた。手札形三人撮うしには、芍藥の花を持つて、前髪剪つて、七年前の外村のおしんさんが居る。田舎びた昔の少女姿を、都馴れたおしんさんは手早く懷中に押隠した。座敷の騒ぎを壁一重の臺所に聞く駒子は、淋しかつた。茶を持つて出て、駒子が團居まどろに加はると、流石に比べものにならぬ吾妻を、熊次は誇らしい氣もちになつた。皆が歸る時、襖の蔭に待伏せて、駒子が素早く外村の懷の寫眞を奪ひ返へしたのも、熊次には好い氣もちであつた。

最初のマラリヤで子供時代の記憶が茫となつた駒子は、窺扶斯の大熱で結婚前後の一切の記憶が茫となつた。すべてが霞を隔てたやうに遠くなつた。多くの苦痛や不快も、お蔭で薄らいだ。然し久しぶりにわが巢に歸つて二人きりになると、流石に血をはなれた駒子は淋しかつた。父母の危篤に走る前に、駒子は洗濯するつもりで古足袋を澤山バケツの水に漬つけて置いた。三月ぶりに歸れば、臺所の隅にそれがもとのままになつて居た。水は臭く、足袋はどろどろになつて居た。捨つるより外に途がなかつた。駒子は泣いた。其足袋は一々母の手縫であつた。昔か

ふ事は出来なかつた。怒鳴らぬ場合は、丁寧過ぎる口を彼は駒子に利いた。然し「お駒さん」が碎けて「おこちゃん」になり、振られて「交趾支那」になり、「こつくりさん」になり、「忽必烈」になり、時には「權的」も代名詞になつた。熊本の病院で、「權的」が出ると、看護婦のお律がいつも笑ひこけた。熊本では、「權的」は權妻の事で、權妻は妾なり情婦なり要するに正でない夫人を意味する。

五月五日を紀念すべく、夫妻は麴町の武林に往つて寫眞を撮らせた。熊次は去年のままで袴をとり、素通の近眼鏡をかけ、駒子は縞のお召。出来て來たのを見ると、長い髪を立てきよんとした熊次と、口を結んで屹と向ふを見据ゑた駒子は、今一喧嘩したばかりといふ面影があつた。滿一年の閱歴が、否應なしに夫妻に齡をとらして了ふた。血みどろになつたは、夫妻が生を托する故國日本ばかりではなかつた。さんざ揉まれて、以前から手負の熊次はもとより、無邪氣な花嫁も、もう昔の無邪氣な花嫁ではなかつた。新婚寫眞のそれに比べてあまり惨な二人の面影を見るに得堪へぬ熊次は、いきなり寫眞を二つにへし折つた。折りは折つたが、折るとまた惜しくなつた。而して胴中から折つた寫眞を伸ばして、大疵のまま丁寧に藏つた。

町の濶い二階で、唯一人「諸君」と呼んで、演説の眞似をしたりした頃に、千金浮世之涙とい

ふ翻譯小説を見た。露西亞の虛無黨の事を書いたものであつた。其頃駒子が英語を習ひに往つた英國人の女宣教師ブランドラム女史の塾の上級生に警部の細君が居て、其小説にかぶれ、日本も改革するのだと謂ふて、小説の中の可愛い娘の役を駒子に振り、あなたも勉強して其様に働いて下さい、と大眞面目に駒子に言ふたものだ。其後は學課にかまけて、虛無黨も小説も遠いものになつた。熊本から歸つて後、熊次が出社の留守のつれづれに、駒子は八犬傳を読みはじめた。熊次が夕方社から歸ると、駒子が眼を赤くして居る事があつた。犬士仲間を送つてかりそめに行徳を出た小文吾が、種々艱難を経て久しぶり故郷に歸れば、父の文五兵衛は留守の間に亡くなつて、故郷のすべてが變り果てた狀に悵然とする小文吾の心が思はれて、駒子は泣けて仕方が無かつたのであつた。涙がちの若妻の眼の前に、花の春は見る見る老いて往つた。若葉の間から幟のぼりの鯉が跳つて、結婚一周年の五月五日が來た。

過る一年が、熊次に雜多な感をもて今更に顧みられた。日本は日清戦争、自己夫婦も多事多難の一年であつた。駒子に濟まなかつた數々を其ままにして、熊次はやはり駒子を受する自分を掩

て唯それに兵隊帽を冠せれば、それで好かつた。加之露佛を手傳ふて、支那に恩を賣つて置く事は、何角につけて獨逸に都合が好かつた。それ故の連判であつた。然し三國は三國として、李鴻章はやはり年下の伊藤陸奥より一枚上手で人が惡かつた。媾和條約に調印する時、遼東の默契はちやんともう樂屋の内證に出來て居た。

思ひがけない三國の干涉に、勿論日本は不意をうたれて驚いた。怒つた。ぢれた。然し到頭聽かねばならなかつた。二年に渉る戦争の後、歐羅巴の強大な三國の新手を相手に合戦は全くの無謀である。英米の友邦も我慢をすすめる。到頭五月十四日に遼東還附の詔勅が出た。戦勝の凱歌が、ぐつと咽喉につかへて了ふた。氣も狂ひさうな悲憤、やがて精神的敗北の滅入り、日は輝やく日本が、其まますうと白晝の闇になつた。氷川の子海舟翁は苦勞人である。三國が何だ、「三國に踏踏ふんぱたがれよ富士の山」と滅入る日本に活を入れた。

總督府の樓船で遼東に渡つた兄は、遼東還附詔勅の十日目に東京に歸つて來た。歸りの船に虎列刺が出て、彼は眼の前に九州の本土を見つつ、五日彦嶋の檢疫所に自由になる日を待たされた。彼は色々みやげを持つて來た。父母には眞鍮の鏡かすがひうつた大きな支那茶碗外品々を齎らし

熊次夫婦が歸京して一週間目に、馬關では日清媾和條約が成り立つた。清國は朝鮮の獨立を認め、遼東半嶋と臺灣を日本に割讓し、償金二億兩を拂ふ、といふ好い事づくめの報道にわあと関の聲^{とま}をあげた日本は、直ぐ其鼻をへし折られた。露西亞が主となり、佛蘭西、偕は獨逸までが一口加入して、遼東だけは清國へ還へせ、還さねば爲になるまい、と恐い顔を見せて來た。佛蘭西は露西亞の同盟國で、連判も聞こえて居る。獨逸の差出は何事か。卽位の初、元勳ビスマルクを追拂つて内外に好事の腕をふるひ始めた獨帝維廉二世は、夙^{つと}に東洋の醒覺を感知して、ただならず恐れた。器用な彼は「黃禍」と題する漫畫を描いた。雲外から眼のつった、頬骨の高い、官人帽^{マンダリンマウ}の巨人がつかみかかりさうにやつて來る。それを鎧兜^{よろひかぶと}に身を固めた女人獨逸が、眞先に立つて指し示し、仲間の諸國を警める^{いまし}。白人よ、警戒せよ、黃禍がやつて來る、と謂ふのである。漫畫の「黃禍」は支那人の風貌をして居たが、日清戦争は官人帽と豚尾をとつ

にかけて、騎馬の警部、憲兵、歩立の巡査が押しつけ押し戻し必死となつて開く通路が、ややもすれば眞黒な人波にふさがつて了ふ。「聖駕奉迎」と白くぬいた紅地、紫色、青地の旗や、白地に黒く書いた旗が、人波の其處此處に花の如く漂ふて居る。熊次が御馬車を待つて、新橋の南詰に立つて居ると、汐止の方から何處を如何して通つて來たか、小山の如く藁を積み上げた荷車が三臺、眼の前に現はれた。巡査が遽てて飛んで來た。

「こら、通つちやならんうちに。」

荷車は兎や角して、拜觀の列の背後に押しやられた。

皆が笑ふ。

「何でえ。」

獸の低く唸るやうな聲が熊次の肝に響いた。

「何でえ。畜生奴。何が面白えんてい。何騒ぎやがるんてい。畜生。車力なんざ如何するんてい。」

驚いてふりかへる熊次の眼の前に、乞食か、立ン坊か、一人の男が立つて居る。髪も髯ものび

た。熊次は古詩類纂をもらつた。頁の間には、根ごとぬいた金州半嶋のすみれが入れてあつた。

社員のすべてには、旅順口の砂磔さざれを一握づつ贈つた。

君が賜ひし此さされ、

旅順のものと聞くからに、

渤海灣の波の音、

これにもこもる心地して。

と社の詩人虞初子君は歌ふた。身も魂も戦争に打込んだ肥後寅一に、百戦の血潮にまみれた遼東を見す見す手放す事は、耐へ難い遺恨であつた。而してそれは大小深淺さまざまに日本の誰もがもつ遺恨であつた。三國の干渉を豫防する智慮もなく、踏張る腰の力もない、とすべての憤懣げんまんは伊藤伯と其政府の頭に注ぎかけられた。

五月三十日に、大元帥陛下の東京還幸があつた。九ヶ月前戸毎旭旗を立てて御親征を御送りした國都は、また戸毎旭旗を立てて目出度い御凱旋を祝ふた。熊次が還幸の鹵簿ろぼを拜す可く新橋を渡つて芝口の通りまで行くと、往來止になつた。停車場前の凱旋門の廣場から、芝口の通り

豫定の數であつた。日清戦争の三年前、琵琶湖畔できらり鞘走つた津田三藏の白刃によつて、日本は已に露西亞に初太刀を浴せて居る。

戦勝に力を示した日本は、遼東還附で歐米の識者に日本の自制の智を示した。然し其ままだに止む日本ではもとよりなかつた。

取る棹の心長くも漕ぎ寄せむ

蘆間の小舟さはりありとも

明治天皇の御述懐は、取りも直さず日本の意志であつた。

戦勝で危く浮足になつた日本は、ぬうとさし出された露西亞の毛だらけの拳を見て一足退つて身構へねばならなかつた。づう體の大きい支那は存外脆かつた。露西亞は然し別物である。露西亞を相手に、日本はまだまだ力の不足を感じる。兵も強くせねばならぬ。富も殖ふやさねばならぬ。すべてに成長せねばならぬ。「臥薪嘗膽」の警語が何時何處からともなく現はれて、戦後の日本の合言葉となつた。

従軍記者のすべてが追々歸つて來て、社の編輯局も賑やかになつた。開戦當初から出て一度も

放題の蒼黒い顔、高い頬骨、繩の帶したぼろぼろの單衣の胸はだけで、跣足で居る。惘然した眼ざしで、見るともなく見廻はして居たが、人込の中を何處かに往つて了ふた。

「萬歲！ 萬歲！ 萬歲！」

わアと云ふ聲が凱旋門の邊に湧いて、次第近に次第大に寄せて来る。熊次の周圍が一齊にそれに和して「萬歲」と叫ぶ頃、御馬車は過ぎた。ちらと拜した龍顔に、さながら御面やつれが拜された。

熊次は彼此の印象をくりかへしつつ社に歸つた。

* * * *

熊次駒子の結婚三月目に始まつた日清戦争は、結婚一周年に一先づ局を終へた。然し一敵に克つた時は、他のヨリ強大な敵がすでに場に上つて居た。男兒の國日本は、戦ふてまた戦はねばならぬ運命に置かれた。日本は當の敵を誤らぬ。佛蘭西も獨逸も問題ではない。敵は北の巨人露西亞である。露西亞は最初から脅威であつた。日本は彼を恐れ、而して憎むだ。戦は殆んど

を以て期する社内の誰も彼も新銳の活氣溢るる中に、昔ながらの椅子テエブルに昔ながらの翻譯を受持つ熊次は少しも氣配おがらなかつた。相應に動く筆を持ち、書きたい意こころはありながら、彼は書くものを有たなかつた。あせればあせる程、彼は何事も爲し得なかつた。

家には女中もまだ居なかつた。大病あがりの駒子が一切をした。彼女は日に日に元氣づいた。病氣は其體質を一新したかのやうに、彼女は美しくなつた。髪もまだそんなに脱けなかつた。お洒落さかりの若妻が、水を汲んだり洗濯をしたり甲斐々々しく働くさまは、人目についた。海舟翁の女で、邸内に住む菱田夫人は熊次に曰ふた。

「あなたの奥さんは感心。」

感心な奥さんに對し氣ままをふるまう熊次は、われながら好い良人せうとであるとは謂はれなかつた。駒子の病氣で、定まつた収入のあるものは前借してしまつたので、月々の生活費は不足がちであつた。それに戦後は多少物價も上つた。駒子は必要につれて、經濟を引しめた。然し熊次は氣まぐれで、吾儘を通したかつた。そんな事から、彼は歸京以來第一回の重大な衝突を駒子としてのけた。

歸らず、韓山の炎暑、遼東の冰雪、つぶさに従軍の苦を嘗め、斥候に跟いての冒險記事に従軍記者中異彩を放つた杉原君は、社員の一人一人にみやげを持つて來た。海城縣卯七と署した隨園詩話を一部熊次ももらつた。熊次は濟まぬ心地がした。お禮心に細君着料にもと大きな縞の浴衣地を贈つたら、ある日杉原君がそれを社に着て來て熊次に禮を云ふたので、熊次はまた濟まぬ氣がした。戰爭中、居るも、出るも、社員のすべてが皆相當な働をした中に、私事に没頭して何の功もない熊次は肩身が狭かつた。戦後の仕事は新聞社に多かつた。日本も追々世界の日本となるについて、社から新に英文“*The Far East*”を出す事になつた。それは淺井君の擔當であつた。淺井君は同志社で熊次の二年下だつた。小柄の秀才、英語達者で、最初は歐米の新刊を讀んでは大意を小冊子に書き縮めた平民叢書を獨で擔當して、一月一冊の勉強に頭を痛めたものであつた。眞面目な人柄、手堅い仕事振りにうち込んだ社長に、戰爭以來は身近に祕書であつた。淺井君の同級宮津君は、敵を知るべく露西亞を研究して「露西亞帝國」を著しはじめた。二重瞼のきよろりした眼をもつ宮津君は、社長の言葉によれば、「同士馬を蹴る」癖があつた。熊次は度々蹴られて、一度も蹴かへす勇氣がなかつた。兎に角戦後の日本に木鐸

上ると、駒子が追ついて、洋傘を手渡した。忿々した熊次は、力任せに洋傘で大地をたたいてたたき折つた。而してそれを投げ捨てた。蒸々する小雨の黄昏を、端折りもせぬそば濡れ夫婦は、誰仲入する者もない家に歸つた。唯見れば、駒子は跣足で、自分の洋傘はたたんだままに脇ばさみ、手に泥下駄、傘の折れを提げて居た。

それは手始であつた。次の癩癩の機會に、熊次は駒子が父に買つてもらつた銀時計を庭の飛石にたたきつけて微塵にした。夫がもたぬ時計を、妻がもつ法は無い。またの癩癩に、駒子の文卓を滅茶々に踏み破り、たたき破した。駒子の文卓は熊次のより大きかつた。自分の有たぬものを、妻には有たせぬ。己が受けただけは、妻にも背負はせる。でなければ、氣は濟まなかつた。熊次はまた死んだ西村海軍少尉の筐になつた化粧匣を、切齒しながら踏み潰した。

面白くない日を重ねて、熊次は到頭病床の人になつた。それは青豌豆が出る頃、きまつて襲ふ腸加答兒であつた。去年もさうだつた。其時駒子は二日小學校を休んで介抱した。妻の家居の難有味を其時知つた熊次は、一年後の今は望の如く常住妻に冊づかれるのであつた。去年の経験があるので、駒子も狼狽はしなかつた。去年は二度目に色つほい代診が來て病人よりも駒子

五月雨の小止むで、じめじめした夕方の事である。熊次は駒子に餅菓子買いに行くべく命じた。駒子は墓口を吟味して、四錢しかないと言ふ。四錢でもよい、買つて来い。駒子が顔をしかめた。

「私、いや。」

「否。」

熊次は耳を疑ふた。否！駒子が否と云ふた。結婚以來唯の一度も「否」と云ふ言を口に出した事はない駒子が「否」と云ふた。熊次は動揺した。「卿は何程でも辛抱してくれる。」と虫のよい事を大びらに言ふて居た熊次は、破天荒の「否」に對し、足下の地盤がめり込んだ程に駭いた。

「否なら、頼まん。」

四錢入りの墓口をつかんで、熊次は忿然と家を飛び出した。小雨がまだ思ひ出し思ひ出し降つて居る。「あなた」と後から聲がする。駒子が追かけて来るのであつた。駒子が追ふて来るので、熊次の足は菓子屋を他所にずんずん歩いて、福吉町の丘をぐるりと周つた。南部坂下で駒子が追つきさうになつた。熊次の足駄の横緒がふつと切れた。蹴飛ばして、跣足になつた。阪を

「有時俗事不稱意、無限好山都上心。これ熊秀老の句なり。余何の意に稱はざる事あらんや。

山中を憶ふは、梅霖連句、病床の鬱悶を遣らんと欲するのみ。」

そんなものを書いて居れば、熊次は毎も幸福であつた。

彼は病床のつれづれに、志賀劍川の日本風景論を買つて讀んだ。それは昨秋出て評判であつたが、見るは今初めてであつた。何時かは書かうと思ふた「美なる日本」が、先鞭を他に着けられた。然し彼に日本風景論著者程の科學の素養はなくも、日本風景の眞美を味得し發揮するに於て、日本風景論は唯陳吳に過ぎぬと思ふを禁じ得なかつた。何時かは書くべき其筆ならしに、熊次は阿蘇の憶出を書いて見たのであつた。

の顔ばかり見て熊次を不快にしたが、今度は久しいかかり醫のきりつとした實弟で、卒業前の醫科大學生が來て、手當をしてくれた。腸の痛は日ならずとれたが、耳の痛、痔の痛と申分はつづいて、熊次は久しく起き上らなかつた。社にも出なかつた。兄が見舞に來た。

「ああた達のはかるがはる介抱の仕合するなア。お駒さんがよくなれば、熊次さんが病氣する。」ラムネを過して、ぶりかへした事を熊次が話すと、兄はいやな顔をして往つてしまふた。

熊次も面白くなかつた。家庭雜誌の綴込を出させて、初號から結婚の月まで無報酬で書いた自分の原稿を計算して見た。駒子の病氣に兄の出し替へた金額にそれはほぼ同じかつた。彼はまた結婚後の兄の仕打について思ひめぐらして見た。その多くは不快な思ひ出であつた。

熊次は久しく出社しなかつた。降りみ降らずみ鬱陶しい梅雨の天がつづいた。庭の李や、手水鉢近くの金剛纂や、狭い庭に緑小暗くかぶさつて、うつちやつて置く小庭の面は、飛石も隠る程草が茂つた。母が來て見て、晒つて居たが、あくる日草とり女が來て、半日たたぬに忽拭つたやうに庭をしてくれた。それは籠り居の髻蓬々を剃つたやうに、熊次の氣分を新にした。熊次は卓に凭つて、新聞には縁遠い阿蘇山の憶出などを樂書きに書いた。彼は其小序に書いた。

出入した。一夏氷川町の留守に田崎さんも來て居た事もあつて、熊次も識つて居た。情熱の詩人肌、色黒で眼の可愛い、もの言ひの和らかな田崎さんを熊次は好きであつた。ある時は宇宙主義を唱へ、ある時は氣が少し可笑しくなつて、「些ちと薰陶を受けに來い。」と兄に手紙をよこしたりした。田崎さんが「心の亂れ」と云ふ短篇を書く時、「應、田崎さんが『心の亂れ』——これはよく出來よう。」と滅多に戲談を云はぬ父が笑つた。號を「志賀の舍」といふのを聞きひがめて、幼ない甥の貞雄が「肴屋さん、肴屋さん」と言ふたものだ。タラスの譯が新聞に出はじめる時、田崎さんはこんな畫があるといふて一葉の版畫を熊次に貸してくれた。哥カザツク索克帽をかぶり、大きなパイプを口に、銃を負ひ、長い鎗を左腕にかけた馬上の老タラスが、倔強な息子二騎連れて、意氣颯爽と大野を走らす畫であつた。熊次は持つて歸つて、駒子に模寫を頼むだ。駒子が臨模して、草の一葉も原畫に違はぬ複製を作つた。彼女の眼も手も熊次に驚かる程よく利いた。後で熊次はよく戯れに曰ふた。「賀筆、賀畫、紙幣の賀造でもやつたら、藏が建つ。」夏の中に一度小戻りした母が、病後の駒子に海水浴の必要を言ひ立てて、歸りに駒子を逗子に連れて往つた。

梅霖霽れて、まさしく夏になると、肥後の隠宅、本宅では、例の如く逗子の荒布屋あらふやに避暑した。去年の夏に懲々した熊次は、豫め母に向ふてきつぱり留守を斷つた。そこで本宅の留守居には、以前通り社の山村が來た。熊次の荷が一つ下りた。

留守を御免蒙るかはりに、熊次はまた出社を始めた。二葉亭の翻譯でツルゲーネフを知り、トルストイの二三小説からゴゴリの「死せる農奴等」を英譯で讀むでややに露西亞文學に近づいた熊次の手許に、誰やらゴゴリの Taras Bulba を亞米利加から送つた。熊次はそれを「老武者むしや」と題して新聞に譯載しはじめた。お話にならぬ生硬な譯であつたが、兎に角彼はそれを完了した。日清戰後、露西亞は日本の解決しなければならぬ問題であつた。偶然の事ながら、ゴゴリの翻譯も、スラヴ氣質の一斑を知るよすがであつた。二葉亭と雁行して露西亞文學の先覺であつた田崎さんは、最初から新聞の社員で、小説など書かなくなつた今も時々編輯局に

た後の事であつた。妻の友を遑て座敷に請するはづみに、ランプが吻と消え、薄暗がりで熊次は駒子の西下の次第をぼんやり白いさい子さんに話したものだ。それから半歳の餘も過ぎた。駒子は未だに家居して居る。義務年限を蹂躪する者を其ま措く事は、學校の威信に關する。そこで學校では二たび同郷の先輩を説諭に遣つたのである。義務年限を果さぬと、四年間の官費を辨償させられるかも知れぬ、と使者は駒子を脅した。「仕方がないから、笑つて居ました。」と駒子は熊次に曰ふた。駒子は官費の女子最高學府故に女高師を擇んだ。入學の時、誓書を書かされた。「御規則ヲ守リ、卒業ノ上ハ相違ナク義務年限ヲ果シ可申候」と書いた。妙な事を書かさると思ふたが、それが如何な束縛であるかを、數へ年十七には餘程幼ない駒子は思ひ設けなかつた。彼女は卒業した。教師になつた。然し教師の仕事は好きな仕事でもなかつた。熊次の意志で小學校をやめて了ふ事も、寧ろ駒子の喜であつた。駒子はやめた。然し自由にはなれなかつた。當初無心に書いた誓書がもの言ふ時が來た。

熊次は顔を曇らした。駒子がお茶の水在學四年間に受けた官費の補助は、千圓に上る。奇麗さつぱり返済するに越した事はないが、月俸十一圓の彼が如何して千圓の大金を作り得やう？

十日餘駒子は返子に居た。留守の臺所は、少し前に來た女中のお米がした。玉川在の農家の女で、少しもつくろはぬお米は、夫婦の氣に入つて居た。「どうも今日は暑いねえ」と云ふぞんざいな言葉も、耳障りにならなかつた。返子から駒子がよこす手紙には、いつもお米に宛てた一通の假名書きがあつた。お米が喜んで長いことかかつて返事を書いた。封筒の裏に、頂邊てっぽんから大きく「よね」と書いたりするのが、熊次を興がらせた。十日ばかり立つと、熊次は新橋に駒子を迎へた。兄と同行で歸つて來た駒子は、健康さうな色に染まつて居た。

ある日、熊次が社から歸ると、駒子は留守に來た女客の話をした。熊本出の地理學者勝と云ふ名は熊次も聞いて居た。社の大矢野君が懇意であつた。其勝さんが熊本では評判娘の駒子をもらひに來て斷はられ、駒子の小學仲間の一人を娶つた事を、其時までは熊次は知らなかつた。留守の來客は其勝さんの妹で、お茶の水の小學師範を早く出て教授上手の評判をとつた人であつた。勝のお徳さんは女高師の内意を帯びて、駒子に義務年限を果すべく勸告に來たのであつた。駒子が四ヶ月奉職出勤したきりで小學校もやめて了ふた事は、母校に知れて居た。其前、駒子の同期卒業の一人志村さい子が容子見に來たのは、丁度駒子が此正月父母の危篤に西下し

られたが、それは子供つほい人で、夜の粗相そさうの癖などある事も噂に聞いた。榎坂には深水の借家が數軒あつて、それは太郎君の支配になつて居た。損所の修繕など申込んでも、家主の太郎君が中々おいそれと埒うちをあけてくれぬ、と云ふ蔭口も聞いた。昨年駒子は逗子で深水の若い女達と神武寺に往つたりした。秋、氷川町の自宅に落ちつくと、ある夜熊次は不快な夢を見た。夫婦が水際みぎはに居る。水の中から半身を出して駒子にまつはる人がある。その顔を見れば、思ひがけぬ深水の太郎君であつた。熊次はさめていやな氣もちになつた。深水のお婆さんは、總領の孫の事を「太郎は馬鹿で」と言ふて居る。鈍重で、色黒で、時に薄笑をして、またちいと蛇の如く見つむる太郎君の眼は、熊次に不氣味であつた。太郎君は自分に近い。わが影の氣もする。其太郎君が何で自分の夢に現はれたのであらう？ 忌いまはしい夢は、當分熊次の頭に引かつた。全く思ひがけない、然し緣由よしありげな其夢は、熊次の警戒を促さずには措かなかつた。其内、ある日熊次の留守に、お袖さんが榎坂から南部坂を上つて、雪駄ちやらちやら遊びに來た。遊びにいらつしやい、と言ふたさうな。熊次は駒子を遣らなかつた。妊娠とやら聞いて居たが、お袖さんは亡くなつたのである。

身の^{しろ}金の千圓の才覺が所詮急には出来ぬを知る駒子は、成程笑つてでも居る外はあるまい。熊次も眼をつぶる外はなかつた。駒子は笑ひ、熊次は眼をつぶつた。然し今拂へなくとも、負債は正に負債である。駒子が四年間國費を以て教養された事を、熊次は決して忘れなかつた。「四年間人民の膏血^{かうけつ}を食ふた。」が駒子をからかう熊次の口癖であつた。

深水一家が京都に越した後、榎坂の其家には總領の太郎君夫婦が住んで居た。其若い細君のお袖さんが亡くなつた知らせが、熊次の家にも來た。姉の縁で義理の叔父、甥に當る熊次と太郎君は同年で、同志社では太郎君の方が一年上だつた。熊次は太郎君から教科書を借りて返へさなかつた記憶の負債をもつて居る。深水の家には藝術の血が流れて居る。深水さんが漢詩を作つたり建築や築庭に趣味を見すれば、實弟の芳夫さんは聞こえた和歌の上手、而して總領の太郎君は洋畫を専門にやつて居る。熊次が熊本から上京した時、去年同志社を卒業した太郎君は洋畫の門に入りつつ餘暇に英譯のゾラを耽讀して居た。深水の家では舶來の石鹼をダースで銀座からとつたりするのを見て居る腹黒の女中に太郎君が引かかり、其女中が丸髻に結ふたりして、手切れに姉が手古摺つた事を熊次も聞いた。其後太郎君は中國のある豪家の女を妻に與へ

第二十一章 繪の國へ

一

九月の末に、本家に女の子が生れた。中々の難産であつた。産褥に附いて居た母が、後で熊次に手で搔き出す眞似をして見せた。母が産婆の役をしたのであつた。女の子は肥立つたが、其母はひどい産褥熱に罹つた。非常の高熱に患者は茫となり、主治醫も已に匙を投げ、婦人科専門の鎌田博士を招く事を要求した。其報を社に齎らすと、兄は原稿紙をのべた卓上に眼を落して、「詮方がない」と唸やいた。船津の義姉が縁付いて居る同じ郡浦出身の畑達ひの先輩を、肥後俱樂部などで時々顔を合はせながら、兄は好かなかつた。熊次は大學病院に往つて、婦人科の臨床講義をして居る博士に來診を請ふた。無表情の四十顔をした博士は、卷蓆を一吸吸つて、承諾を與へた。其夜博士の診斷は、さながらすべてを一新し、義姉の病はそれをきつかけ

熊次は葬式に往つた。暑い頃で、駒子が香水を注^かけてくれた。手の狂ひで、香水半瓶頭上にあけられ、拭いても拭いても消えぬ夥しい香に、きまり悪い思をしつつ熊次は榎坂に往つた。お袖さんの親戚さうで、同志社で熊次より二年下、浅井君宮津君などと同級の蒼白い川上君の丈高い羽織袴の姿など見えた。お元姉も来て、沈んだ顔で一切の世話をして居た。流産された子と母と大小二つの柩が並んで、魔除^{まよけ}の太刀など飾られた側に、夫らしく父らしく神妙に挨拶して居る太郎君の姿が、流石に氣の毒に熊次の目に映^{うつ}つた。

に物足らぬ母が、病氣を機會に孫達の世話を駒子にさすのも、熊次に嬉しい事ではなかつた。ある夜、熊次が當直から夜半に歸ると、駒子が甥の貞雄に添寢して居た。熊次は勃然と怒つて、呂律も分からぬ怒罵を浴びせると、いきなり駒子を撲つた。熊本以來の謹慎破れて、熊次はまた駒子を撲つた。それ程熊次は腹を立てた。駒子は夫が何で其様に怒るかを解せなかつた。餘りひどいと彼女は思ふた。然し子供時代の記憶にわれをおもちやにした年上の女をもつ熊次は、耐へ難い不快を感じた。男猫でも、抱寢はさせぬ。熊次はもう猶豫が出来なかつた。義姉の快方を機會に、するするに子供を本宅に歸へして了ふた。

日清戦後の事多い中に、戦の獲物の臺灣と、それから朝鮮が一番世話を焼かせた。條約面で正に引渡された臺灣には、劉永福が頑張つて、それを追ひのける爲に、近衛師團の多くの花が砲銃彈に病疫に散らされ、之を率ゐらるる金枝玉葉の御一方も臺灣熱で御重態と傳へられた。一方、恰も朝鮮に騒動があつて、閔妃が殺された。美少年の昔、慮外をしたと云ふて年長の士を斬つた、中將仲間でも不敵者の三浦梧樓が朝鮮公使になつて百日とたたぬに、日本には久しい邪魔者の閔妃が忽に除かれた。外國の手前、三浦は召還され、二十餘名の政客は退韓を命ぜら

のやうに快方に轉じた。女の子はお芳よしと名づけられた。

主婦の大患でごたく本宅から、熊次は姪のお實と甥の貞雄を自宅に引取つた。それは駒子を遣つて置くより樂らくであつた。熊次は姪を愛した。とつて六歳の甥も、可愛い素直な子であつた。子供が居る家庭は、珍らしく賑やかであつた。休日には、夫婦で子供を連れて大森から蒲田まで歩るき、梅屋敷で種々の漬物くそぐさと焼海苔で晝飯を食べた。あまりに歩いて、水兵服に靴の貞雄がへとへとなつて地びたに座わつてしまつた。出あるく留守は、お種たねがした。夏の間居た氣に入りのお米は、家の都合ぐちで一時歸村した。後には自身肝煎つて、谷町からお種を當座のかはりに入れた。九月になると、お米は歸つて來たが、お種の親達むすめが好い女の巢くさを讓る事を肯きかなかつた。お米と母親が夫婦の前で諍かふた。「表おもてに父親おやぢも來て居ます。」と母親は居直つた。十五と云ふ年にはふけてしんねりしたお種は、時々夢の中で泣いたりする外、別にこれといふ落度もなかつた。氣の弱い主人は、氣に入りのお米に因果を含めねばならなかつた。駒子について居たお米は泣く泣く去り、お種は居残つた。

義姉は追々快方向ふた。熊次はそろそろ多人數の家内がうるさくなり出した。平生惣領の媳

俛焉不顧 興讓春風生

右乙未晚秋 賦家庭樂

紫水迂叟

と詩箋に書いてくれた。

子供は歸へしたが、姪は毎日復習に來た。母の老人會仲間の孫女達も二三人、駒子に復習をし
てもらひに來た。淋しい駒子に、それもまぎれる仕事の一つで、果さぬ義務の心やりにもなり
且は些細ながら収入の足にもなつた。熊次も怠らず家庭雜誌に書いた。熊本歸省を縁にして、
彼は沼山先生の逸話を書き、また「恐ろしき一夜」と題して神風連の思出を書いた。母が聞いて、「よく覺えとらしたもんな」と駒子に曰ふた。駒子も夫の筆を嘆美した。然し同じ雜誌に書
いた「訪はぬ墓」は、駒子に不快であつた。熊次は歸京して後、不圖遊蝶花の娘おあさんの
消息を聞いた。おあさんはある少壯軍人に嫁いだが、夫の出征留守に病を得て十九を一期と
して病死し、一粒種をなくした矢部さん夫妻は、今熊本の西の郊外に住んで、がっかり弱わつ
て居る。熊次は感の動くままに、「訪はぬ墓」を書いた。

れ、歸ると拘引されて未決に打込まれた。中には社友もあつた。然しそれ等の騒も熊次にはさしより縁遠いものであつた。

十月二十五日は、熊次が二十八回の誕辰である。兄は四年前病後の手すさびに、西洋の Birth day Book に倣ふて、「誕生日」と云ふ小冊を造つた。一方に金言妙句や米書伯の小書を入れ、一方に誕生の姓名年月日を記入する趣向であつた。熊次が有つ一冊には、肥後全家の者の誕生日が記入してあつた。然し誕生日の祝と云ふては、父の誕辰が九月二十四日に當るので、大抵秋季皇靈祭の其日に先祖祭をかねて行はるる位であつた。熊次が家をもつと、早速自家の天長節を創めた。去年は戦時と云ひ、新家もち早々、加之熊次の不機嫌がちの時であつたが、それでもゴマメと昆布で赤の飯を祝ふた。戦争も済み、義姉の大病も癒えたので、今年はめでたく父母と兄夫婦を招く事にした。茄子を刳つて挽肉をつめた駒子が新案の料理もあつて、食卓は賑合つた。父がほくほく喜んで、

が羊羹や朝鮮飴をつくつて、花見の御客に振舞ふたものであつた。駒子が初めて東京に出た十七の秋、帝國議會の開かるる祝ひに、學校の一室に生徒手作の造花の菊花壇が出来た。年々見馴れた父が手作の故園の菊、其菊なつかしの一心に駒子が造り上げた肥後菊の一株は、八重千重東京菊のこちたい中に、黒紅の一重大輪のすつきりとして眼ざましいものであつた。舎監の一人が、後で皇后陛下に献上したといふ事であつた。それも昔。父が亡くなつては、あの菊花壇も以前のやうにはあるまいが、株だにあらば瘠せても花は咲いて居やう。

植置きし 人は夢路に 入りにしを

知らでや 菊の 香ににほふらん

駒子

駒子はいれから熊本の消息を聞かぬ。熊次に言ふ事でもなかつた。熊次も駒子の兄の事は、思ひ浮ぶる事さへ避けた。ある時、編輯局で大矢野君が誰かと話して居た。聞くとはなしに、熊次は「妻を打つたりする」と云ふ大矢野君の一語を聞いた。清人君が上京したな、と熊次は直覺した。然し彼は勿論それを確めやうとしなかつた。駒子には噫おんげにも出さなかつた。

「十字架なくば榮冠なし。征清大勝利の裏面には、憶ふに無數の悲劇あらむ。余は其尤も簡單なる一を知れり。」

と書き起した熊次の小品を読んだ駒子は、初めて熊本の病院に入院中熊次が黙つておあささんの生家を訪ひに往つた事を知り、「悵然としてイみぬ。」とある一句に、掩ひ難い不快の色を見せた。

駒子も書く事は好きであつた。女高師の四年生時代に、「袈裟御前」の一文に百點をとつた事があつた。結婚前の彼女に、貞操の感激は尋常ではなかつたのであつた。熊次は駒子に勧めてそろそろ家庭雜誌に書かす事をはじめた。熊次が筆を入れるので、駒子の文章は男の書いたものになつて了ふた。雅號を熊次がつけてやつた。蘭芳女史は「亂暴」を意味し、黃花女史は菊を愛して菊作りの名人であつた彼女の父の紀念であつた。熊次は駒子に黙つて、稀には團十菊五の歌舞伎座や、左團次九藏、偕は近い演伎座に新藏八百藏も見に往つた。減多に外出せぬ駒子を母が誘ひ出して、山の手の菊花壇を見て廻つた。菊は駒子に父を懷おもはせ、涙にくれて歸つては、またの日に其記を文に綴つた。菊作りに、父は跣足で一生懸命だつた。花の季節には、母

天草生れの手癖のわるいといふあの女中かも知れぬ、と氣づいたのは、それが三昔にもなつた遙の後であつた。

駒子は此春亡い父母の記念のものを二三熊本から持ち歸つた。母の筆で成年七月十八日晝前四ツ半比生と書いた臍の緒、うぶ毛、父が手蹟の團扇、母の東上日記や筆まめに書き集めた藥法食餌の口傳、外に數々の寫眞があつた。少年の清人兄が所有主として姓名を背に書いた肥後名所や維新名士の寫眞などもあつた。駒子の父は寫眞を嫌つたが、母のは數あつた。母の季の妹で、裁縫上手に、誰に習ふともなく算用數字なども習得して評判の伶俐者、長い眼病で氣が變になり、若くして亡くなつたといふおりも叔母は、秀麗な眉目をして居た。駒子はおりも叔母に肖て居ると云はれたものだ。母の寫眞には大抵駒子が居た。おりも叔母のは、三人うつしを叔母だけ複寫したので、「此處の處には、私が一番小さい時の寫眞がありました。」と駒子は切斷の痕著しい寫眞の一邊を指した。銀杏返に花簪、ボタンどめのシャツを着て母とうつつたのも、縞の單衣に胸高に袴をつけて同級女生の眞中に居るのも、高等小學時代の駒子の面影で、それは東京に來て間もなく撮つた制服の洋装のや、物好きに友達と銀杏返で撮つたのや、ふとつた

ある日、裁判所から菊池駒の名宛で召喚狀が來た。志貴讓次の件に付、出頭を命ず。熊次は不快であつた。肥後駒なら居ます、菊池駒と申す者は當方に無之、と書いて召喚狀を突返へした。折返へして、肥後駒が出頭を命ぜられた。志貴の件とは何だらう？ 兎に角裁判所は呼ばれてうれしい所ではない。心元なかつた駒子が、兄に召喚の由を話すと、大した事でもあるまい、と兄が晒ふた。駒子は車で出頭した。尋問の次第は、今年一月熊本下通町菊池隠宅に於て金百圓紛失した、それは菊池の親戚志貴讓次が押領したと云ふ事であるが、證人は承知して居るか、といふのであつた。駒子は勿論知らぬので、知らぬと申立てた。其れで御用済み、退出する際に、法衣法冠の威儀つくろふた若い判事は聲あらため、「證人は菊池駒宛の召喚狀で出頭しなかつたが、日本の風習では、妻は生家の姓を以て呼ばるるものである。注意の爲申聞け置く。」と云ふた。

熊本で世話になつた志貴さんに其様な嫌疑が落ちたは、熊次も氣の毒であつた。然し實否を彼は知らなかつた。或は志貴さんの密告で駒子誘拐の裏を搔かれた腹癪せに、清人君が書いた一齣かも知れなかつた。然し裁判所の召喚は一回切りで、事件の落着を夫婦は終に知らなかつた。

外名士、藝妓の寫眞が澤山竝んで居る。不圖若い娘の寫眞が熊次の眼を牽いた。彼は昨年 of 春の頃しばらく熱中した義太夫の小娘を見たと思ふた。よく見れば、それらしくもあり、或は肖た半玉かも知れなかつた。兎に角買ふた。一枚ではうしろめたい心地して、若い美しさうな藝者のを數枚求めた。不圖店内で同じく女の寫眞を求めて居る若い洋服の男と顔を合はせた。双方ではつとした。それは母の兄の末子、津森末人君であつた。津森のお勝叔母が引取つて子供から育て、其十五歳の夏には、京都から夏休に東上した二十歳の熊次が、彼と大江の甥の益雄を連れて房州の海水浴に往つた事もあつた。今は二十歳を越して、瀟洒とした洋服姿の會社員であつた。熊次に顔を見られておどおどしながら、西洋人に頼まれて寫眞を集めて居る、と言譯のやうに云ふのを聞く熊次も疵持つ足であつた。二人は硬くなつて、匂々に別れた。熊次が買つて歸つた藝者半玉の寫眞に、駒子は顔を曇らした。

「此様なものを買つていらつして、今にまた如何様な事があるかも知れません。」と憂はしさうに彼女は夫を諫むるのであつた。

さかりの二十歳前後の寫眞と共に、無邪氣で然もきりつとして居た。唯一枚母とうつしたカビネ形のは、いつもの駒子に肖ても肖つかぬふけた貌かほをして居た。熊次は其寫眞を嫌つた。それは熊本である年歸省中撮つたのであつた。寫眞屋が下手でした、と駒子は曰ふた。それは熊本でも名ある寫眞屋でなかつた。父に黙つて母と内證で撮つたからでせう、とも駒子は曰ふた。兎に角熊次の好きな駒子ではなかつた。熊次が嫌ひな寫眞は、何時の間にか無くなつた。それは駒子が裂いて捨てたのであつた。

熊次が氣をとむるので、駒子もはじめて自他の寫眞に眼をとめた。結婚式の朝、嶋田で撮つたのが唇がふくれ過ぎてると謂ふて、駒子は爪で傷をつけた。熊次が腹を立て「何故其様な事をする？」と駒子を撲つた。「寫眞だのに」と駒子が顔をしかめた。熊次も少しは寫眞を持つて居た。お元姉と兄と京都は智恩院の寫眞屋で撮つたのは十一の夏ので、今治で撮つた十八のや、二度目の京都で二十歳のにやけたのや、二十二で東京に歸つた當時の殊勝なのや、色々あつた。夫婦の昔を、何時までバラにして置くのでもあるまい、と謂ふので、それをまとめて挿すべく熊次はある日神田の通りで金茶天鵝絨を張つた小型の寫眞帖を買つた。店には西洋石版畫や、内

くれた。丹念に習つて清書を持つて行くと、書伯は留守で、子息の一人が梅の一枝を手本に書いてくれた。それも習つたが、習ふ方でも氣が入らなくなつて、法帖は竹と梅きり、あとは餘白のままになつて居た。

兄の勧告は、慰みの日本畫より、實用の洋畫であつた。挿畫は矢張洋畫に限る。洋畫をやるに、師は必要であつた。同じ海舟邸内に、洋畫の大家澤村氏が住んで居る。熊次夫婦が自宅から隱宅本宅への往來に、いつも其側を通る粗造な、高い屋根の板屋は、其人の畫室であつた。生血の滴るる皮剥いだ馬の頭おたまをモデルに龍の畫を描いたりする天才肌の畫家で、ある年の展覽會に、黒漆の額板に行く春の菜の花を描いたブラツシの牙さえは、其前に立つ熊次夫婦を恍惚たらしめたものだ。然し駒子にはもつと心易い師が欲しかつた。男の師はうれしくない。社の飾磨君しやまの細君は洋畫家で、家庭雜誌や新聞にもよく挿畫をかいた。家庭雜誌に飾磨君が己おのれが嬰兒の事を書き、挿畫は細君が描いて、双絶と云はれたものだ。飾磨君は苦勞した獨學の人で、今は新聞の校正主任をして居る。枯れ切つた筆と皮肉な眼光のもち主で、會へば口數の少ない寒僧のやうな人であつた。校正室で節をつけて讀む聲が、讀經のやうにも聞こえた。希臘正教

兄が駒子に畫を習はす事を熊次に勧めた。新聞雜誌の挿畫を描いても、相應の收入がある。

畫はもとより駒子も好きで、お茶の水でも日本畫、鉛筆畫、圖案などにはいつも最高點をとつた。氣霽らしに畫を習ひたいと駒子も云ふので、芝新櫻田の堀端に米畫伯を熊次が訪ふたは、熊本から歸つて間もなくの事であつた。夫妻で郷里に往つて居た事を熊次が話しかけると、皆まで聞かず、「それはお樂みで」と氣早の畫伯は言ふた。父母を亡くした次第を話して、弟子入りの事を頼み、承諾を得て歸つた。其後夫妻で往つて、座敷に請ぜられ、弟子達が彩色して居る黃海海戰の屏風を見た。蒙古襲來畫卷物の昔に倣ひ、日清戰爭の繪卷物を作る志を抱いて、新聞特派從軍畫家として赤痢上りの體で平壤の戦も目撃した畫伯は、廣嶋の大本營に召されて特に御前揮毫の名譽を擔ひ、歸つても戰畫の註文に忙殺されて居た。夫婦は書法帖を置いて歸つた。次に駒子が往つたら、畫伯は顔を見て奥に引込み、墨未だ乾かぬ一枝の竹を持つて來て

なかつた。ヨリ明らかな眼と、ヨリ確な手を駒子が有つ事は、最初から明らかであつた。唯一の模寫にも、著しい相違が出た。駒子が模寫したチヨオクの犬の頭は、手本より寧ろ締つて少し皮肉な顔をして居たが、熊次の犬は何處となくぬけて鷹揚な犬であつた。

一のものを引き出せば、馬車馬の如く一途に駛る駒次の癖が働きはじめた。昔少年時代に、朝飯前に文章一つ作る程熱心した同じ熱心さで、熊次は驚く可き速力を以て畫用紙を塗りはじめた。線の正確は、所詮駒子に及ばぬ。鉛筆チヨオクの臨摹は駒子に譲つて、熊次は直ぐ色彩に走つた。熊次は母に肖て眼が弱く、しつかり物を見つむるのは苦痛で、大概一瞥で埒を明けた。然し色彩の感は正しく、美しい色は悦喜であつた。駒子が持つて居る日本畫の畫具を溶いてもらつて、配合の智識を借りて、廉畫用紙に熊次はぶちつけに頭の中の畫を移さうと企てた。川は青龍の如く紙の上に逆立ちし、それに綠青の松と櫻を意味する淡紅を點して、それは歸東の途に見た大井川の春であつた。黄と紅の木の葉の穹窿を描いて、下に一條の代赭を通せば、此程駒子と瀧野川から巢鴨へ往つて穴戸別邸の紅葉の洞道をくぐつた其印象の再現であつた。横長の紙に、墨も使つて、ごちやごちやと畸形の人形を並べて、それは九段招魂社前の雜沓であつた。

會の信者といふ細君は、戀女房で、捌けた評判があつた。飾磨君がまだ新聞社に入らぬ昔、獨力で出した「情」と云ふ三號雜誌は、戀の記念であつた。熊次夫婦は、ある日芝佐久間町に飾磨君の住居を訪ねた。初歩の手引ならば、と飾磨君夫妻が快く引受けてくれた。「ちつとして居てくれませんかですから」と細君が見せた飾磨君の油繪肖像は、流石によく肖て居た。チヨオク、鉛筆の畫手本など借りて、夫婦は歸つた。而して駒子は早速それを習ひはじめた。

熊次が顔知らぬ熊太叔父は、畫をよく描いた。叔父が描いた墨畫の山水や鍾馗しやうきなどが、熊本の家には襖や壁に貼つてあつた。次の樋口叔父も器用で、山水花卉くわいの淡彩物など上手に描いた。父は無器用で其方に遠かつた。熊次も昔は子供並なみに繪本を見たり武者繪をかいいたりしたものだ。が、其頃の小學には毛筆も鉛筆も畫といふものは學科になかつたので、眞面目に畫を習つた事はなかつた。然し畫は好きで、頭の中には畫があつた。社の友山君が、「すべてが繪畫になつて頭に現はるる」と熊次を評したが、それは知言であつた。畫好きの駒子と棲めば、熊次の繪心は嫉られずに居なかつた。駒子があらためて畫をやり出した。それが熊次を誘はずには濟まなかつた。駒子の借りた手本は、即ち熊次の手本であつた。駒子が書く程のものは、熊次も迷さ

子がそれを寫生した。それは素晴らしい出来であつた。それを手はじめに、晴れて寒い十二月の日曜に、夫婦は最初の寫生に、東京から四里、市川へ出かけた。赤坂から新橋まで歩いて、新橋から浅草迄は鐵道馬車。本所からまた歩いて小松川に出た。青い流れをはさむ蘆花の雪、櫓聲軋きと響いて小舟の下つて来るも趣があつた。中川を舟で渡り、冬枯田圃を歩き行いて、夫婦は江戸川の堤に出た。枯草を藉しいて、晚い午食の握飯を喰べた。向ふの人家は市川の町、小文吾親兵衛の故郷は今年初めて八犬傳を讀んだ駒子に興が多かつた。そろそろ西日に明るくなつた川の面、向ふに小高い鴻の臺、過ぐる白帆の金色に光るをこめて、夫婦は大膽に寫生をはじめた。唯一つ買つた水彩の畫具箱、水入がないので川水を掬すくんでは蓋の方に注ぎ入れ、兩方から筆さし入れて、兎も角も怪しいものを作つた。而して夕烏にせき立てられて堤を下り、一步毎に暮れて行く富士を眺め眺め、三里が程は寒月の光を踏んで夫婦は歸つた。小松川の記憶が新しい内にと、熊次は畫にかいて父に見せた。父がお世辭のつもりで、畫面の眞中青々とした流れの上に持つて往つて、墨黒々と七言絶句を題してくれた。中に「一片驚舟載雪來」といふ句があつた。畫家がかいた一幹の蘆花が撓たんで丁度小舟にさしかかつて居るので、そそかしや

「何處からお書きになつて？」

と駒子が問ふた。

「諸處方方から見たのさ。」

平然として熊次は答へた。それは嘘ではなかつた。彼は一定の立場から、書を描かなかつた。

彼には未だ中心がなかつた。

熊次が着色の自由畫に没頭する時、駒子は忠實に手本を習つた。飾磨の細君は、駒子の模寫を見て驚き、餘程お習ひになつたのでせう、と云ふた。駒子は更に多くの墨畫の手本と共に、師の水彩寫生を借りて來た。飾磨君の郷里播州に往つた記念の、ばら色に斑まだら禿はけした山を配した池の景色や、自身の故郷の伊豆で畫いた貝類の寫生などが、綿密で手堅い婦人らしい手際で現はされて居た。シケルラツクで木炭やチヨオクを紙上にとめる仕方や、木炭紙の使ひ方、水彩畫具の使ひ方なども、度々に傳授して來た。日本畫具より、水彩は簡便であつた。熊次は銀座裏の小さな洋畫用品店から水彩畫具、水彩筆、畫用紙を買つた。「あなたの奥さんは感心」と熊次に言ふた菱田夫人が、紫に熟した郁うづ子の實を蔓つる毎持たしてよこした。水彩の使ひ初めに、駒

彩畫具を懷中して、畫料を求めつつ隅田川邊を小臺の渡までぶらついた。數へ年で二十八年自然の中に生きて來て、初めて熊次が眞劍に面を合はす時、自然は初冬の容すがたであつた。霜枯時の初冬の風物、からんとした空、がらんとした野ら、小皺寄る川の水、淋しさうな鳥の影、年の暮近い人の姿、何處を見ても唯澁い色と寒い感ばかり、初心の畫家の心を跳らす何ものも其處にはなかつた。然し休暇一日の畫行脚に獲物もなく瘦れて歸る熊次は、不幸ではなかつた。兎に角彼は一つの道を歩きはじめた。何處へ通ふ道か、何處へ其道が彼を連れて行くか、彼は知らぬ。兎もあれ彼は一つの道を歩るきはじめた。行く處までは往つて見ねばならぬ。彼を自然に導く繪畫の一路が、彼の活路でないと如何どうして斷言が出来やう？

の父が老眼に、それは蘆荇舟と映つたのであつた。熊次は更に其一日の紀行を新聞に書いた。飾磨さんが細君に、「御寫生を拜見したらよからう。」と云ふた、と駒子が後で聞いて來た。臆面もなく寫生の吹聴などするでなかつた、と熊次は思ふた。全くそれは拜見が出来るやうな代物ではなかつた。熊次は勿論、駒子も水彩の使ひ方を知らなかつた。然しそれは兎に角手始であつた。盲づかみに自然にぶつかつて行く最初であつた。

駒子は時々佐久間町に往つた。飾磨夫人が氷川町に來る事もあつた。飾磨さんへは、熊次もこだはりなく駒子をやつた。上野に洋畫展覽會の一つが開かれて、此春京都の博覽會に西洋の裸體美人を出した畫伯が、京都みやげの力作小督の「昔語り」を出した。駒子は飾磨夫人と見に往つた。上野の入り口で、新參の子供の拘摸に駒子がつきまとはれ、飾磨の細君が驚いて洋傘で拘摸を打つたりした珍事もあつた。二度目に夫婦で往つた時は、駒子は藤色の着物で、人目に立つた。畫から畫と、若い洋服の一人が、駒子にくつついて歩いて、中々はなれなかつた。市川の寫生を手はじめに、駒子はおぬ日も、熊次は一人で繪行脚に出た。未だ三脚も水入も持たぬ熊次は、水を入れたインクのあき瓶をぶら下げ、廉畫用紙を綴ぢさせた大形の寫生帖と水

第二十二章

ぞん底へ

其一

老人子供が避寒に返子に往く事になつて、熊次が宰領さいりやうを承はつた。熊次は近年時々ひどい耳痛を病んだ。「誰某は耳の病で死んだ。」と社説記者の新潟さんに脅おどされて、氣味を悪がりながら持前の不精から醫者にかかるでもなかつた。正月早々寒の爲か熊次はまた左の耳に烈しい痛を感じた。顔をしかめて、熊次は老人子供の伴をした。

避寒の宿は、いつもの荒布屋であつた。舊冬から其處に新婚生活をして居る鴨志田君が、日あたりの好い南向きの八疊を老人の爲にあげてくれた。

海軍從軍記者として、愛弟に宛てた趣味饒おほい通信に、才名新に響いた鴨志田君が歸來幾程もなく、戀人が出來た噂が編輯局を賑はした。基督教婦人矯風會でも働き役者の才はじた鈴木夫人が、かねて懇意にする兄と其新聞の從軍記者一同を招いて慰勞の會を自宅に開いた。お取持に出て獨唱したりした家嬢しん子と鴨志田君の戀仲が其結果であつた。鈴木夫人に熊次は遠かつたが、鈴木さんは知つて居た。熊本から上京した其夏脚氣に罹り、兄の紹介で鈴木さんに見てもらつた。出しやばる夫人に反比例して、鈴木さんは物やはらかなお醫者であつた。兄が望扶斯に罹つた時、鈴木夫人の注意で鈴木さんは診察かたがた見舞に來た。玄關番が尋常の見舞

明治二十九年が來た。熊次は數へ年の二十九歳、駒子は二十三歳である。去年の正月は、戰勝で街頭の國旗も勇ましく誇らしく翻つた。臥薪嘗膽の今年は、一味沈痛な氣もちが帝都を支配した。

年の新になる毎に、自ら新にしようと意氣込むのが熊次の癖であつた。昨年の新春も然だつた。今年こそは、と思ふた一年に、駒子の父母は逝き、駒子は死ぬばかり病み、而して自分は飛むでもない失策をつゞけ、其後はぶらぶらして無爲の一年を過して了ふた。今年こそは去年のやうであつてはならぬ。舊臘は初刷はつすりの新聞に「去年今年」といふ小品を書いた。戦時と戦後の兵士の夢を書いたのであつた。三國干涉に引かけて、「ラシヤが何だ、フランネルでも、ドイツも來い。」と夢の兵士に痰呵たんかを切らせた。元日早々の勉強初めに、熊次は諸新聞の年賀廣告の面白いのを集めて短評を加へたりした。元日から御勉強、と駒子が喜んだ。

仕事を弟の忠治君に譲つて北海道に行く由が聞こえた。やがて鹽原にしん子さんと同宿して居、連れ戻しに往つた鈴木さんが却て若い兩人に説破されて歸つたので、夫人が切齒して噉つたといふ話も聞いた。「もう疵がついたらうに」と寝ながらすべてに氣を配る母がもどかしがつた。

「こひしいしもつもれば山よ、崩れぬさきには逢はせたい。」と母は曾て都々逸をつくつた。それは國會開設を待ちわぶる人心を戀に寄せて歌つたものであつたが、苦勞人だけに母は捌けて居た。北海道に行つた鴨志田君は、直ぐ舞ひ戻つた。而して熊次の兄と、鈴木夫人とは矯風會の二幅對と云はれた海上女史の肝煎で、戀の二人は結婚する事になつた。「手を引合ふて出て行きなはつた」と義姉の安子が珍らしさうに言ふて居た。熊次は鴨志田君の爲に喜んだ。新婚の夫妻は、逗子の荒布屋に新生活をはじめ、鴨志田君は社から出す少年文學叢書編輯などして生活の資を得た。達者な女筆で名宛を書いた大封が、弟の雜誌編輯几案にのつて居るを、時折熊次も見かけた。兄は朝早くから勉強する、と弟は兄を人前に庇ふた。

荒布屋の北表、西の角の無縁琉球八疊の隅の障子際に小さな机を据ゑて、板壁に銀時計をつり下げ、秀でた眉を颯けて、鴨志田君は談笑するのであつた。鴨志田君は富士の朝景色の美を稱

客と心得、素氣なく追ひ歸へしたので、鈴木さんが憤つて、夫人から苦情が來た事もあつた。しん子さんにも半面の識はあつた。ある年の神田日本橋の大火に、火事見舞を仰付かつた熊次は、日本橋は釘店くぎだなに取込中の鈴木家を訪ふて見舞を述べた。玄關に立現はれたしん子さんの、手拭冠り、襷かけ、甲斐々々しく箒を手にした娘ぶりに見惚れたものだ。鴨志田君とは好い一對、と熊次には思はれた。同じ社に居て、趣味を文藝に同じくしながら、熊次は鴨志田君にも遠かつた。熊次が編輯局の隅に猫の如くして居る時、鴨志田君は眉を動かして暖爐會議に談笑の火花を散らした。熊次が翻譯は生硬で、書くものに無意味が多かつたが、鴨志田君の書くものはきびきびして要領を得て居た。熊次は竊に鴨志田君の才華を妬み、鴨志田君は熊次を「のんき」だと云ふて居た。鴨志田君の戀が、然し熊次の心の隔を除いた。鴨志田君より二歳も年上で、二十歳の昔すでに京都の經驗をもち、更に二年近い結婚生活の經驗をもつ熊次は、兄の家でたまたま會ふた鴨志田君の肩をたたいて力をつける程の餘裕をもつた。鴨志田君としん子さんの戀愛は造作なく成立したが、結婚は行き悩んだ。貧しい秀才は、鈴木夫人に望ましい婿ではなかつた。社長の卓に接して、新聞の編輯主任と相對して雑誌の編輯をして居た鴨志田君は、

氣の弱い父は、相手次第で時々沒義道な口をきいた。

熊次は勃然とした。

逗子行の樂は寫生であつた。耳が痛いに、老人子供のお伴も、其樂があればこそ。寫生道具もちゃんと持つて來て居る。それに、送つてもらへばもう用はない、「社も忙しからう、もう歸れ」とは、隨分だ。

忿々して、熊次は荒布屋を出た。父に對する反感が、烈しくこみ上げる。

父の拘泥を破るべく、わざと父の前に足を投げ出したりする事もある兄の仕方を快く思はぬ熊次も、十五六の昔はあまりに父が見當違ひを言ふので、「制馭論」と云ふものを書いて、人は斯うこそ馭すべきものとあべこべに父たる道を教へやうとさへ思ふたこともあつた。大家の家嫡に生れて、封建時代に人となり、役人生活をして來た父は、人使ひなど何とも思はぬ癖があつた。然しそんな事を思ひやるには、熊次はあまりに向きであつた。唯無暗に腹が立つた。

熊次は停車場に往つた。

此まま素直に歸つてしまふも業腹である。金澤から山越えして杉田へ出やう。杉田に一泊して、

へた。日光が富士の一角に初めて觸るる刹那の美を語つた。

「チヨ、チヨツトかかる時です。」

と鴨志田君は恍惚とした眼さしをした。鴨志田君の話は、いつも活き活きして居た。主客が話す傍に、新夫人のしん子さんはきちんと座わつて、恐ろしい速力で編棒を動かして居た。

肥後の一同が午の食卓に就く頃、鴨志田君の室からは、夫唱婦和の讚美歌が流れて來た。夫妻は共に信者であつた。

熊次の耳がまた烈しく痛み出した。食後縁に蹲うつくまつて顔をしかめて居ると、幼ない甥等が黙りこくつて居る叔父を好いおもちやかかのやうに調戲てうげかかる。其處にステツキをふりながら、庭から鴨志田君がやつて來た。すぐれぬ顔の仔細を聞いて、

「叔父さんは耳が痛いぢやないか。」

と鴨志田君が穩に幼ない者等をたしなめた。

父が熊次を呼んだ。

「社も忙しからう。もう歸れ。」

と云はれて、其家に入つた。梅見客を當ての新建ての小さな休み茶屋であつた。一室しかない、それでも琉球が敷かつた室に足投げ出して居ると、婆さんが相客を一人連れて來た。草鞋をぬいで上る客をランプの光に見れば、木綿^{ふすま}緋の羽織の二十二三の書生體の男であつた。

豆腐のつゆで^{もつ}綴澤山の夕飯を二人は食ふた。客は日本畫をやる男で、寫生旅行の途中梅に名高い杉田の里に來たのであつた。熊次の間に對して、彼は裸體を墨で描き朱で着物を被せた習作の數々を見せた。寫生帖を出して一筆求めたら、卷簾をぼして畫筆取り出し、忽ち達磨を描いてくれた。鼻の穴を仰向けて斜に睨んだ如何にも人の好い達磨さん。達磨の畫家は、やがて横になつて卷蓆をふかし初めた。熊次は初心を斷りつつ、ランプの光で、今日山路に折つて來た葉は黄ろに反^そりかへつた赤椿を寫生した。

あくる朝、形ばかりの朝食を濟ますと、三十錢のはたごを拂ふて、畫をかく二人の若者は名も名乗らず東西に別れた。眞物の畫家は、これから金澤へ出るさう。熊次は梅の蕾は未だかない杉田の里を一覽して、海沿ひの路をぶらぶら本牧の方へ歩いた。今日も冬には珍しいうらかな日であつた。道の邊^{はた}から青々と^の熨したやうな東京灣は、煙吐く船、帆を張る舟を此處其處に

横濱から歸らう。杉田は初めてである。無論梅にはまだ早い。然し途中でスケッチの一二枚出来ぬ事もあるまい。杉田へ行かう。

停車場を出ると、金澤への山路を熊次はさつさと歩き出した。瘠せて身輕な熊次は、父に肖て内鰐であつたが、父に肖て足が早かつた。加之怒が速力を加へた。耳痛と不快で岑々と痛む熱い頭を掉り掉り、大膽にあるいて金澤に來た。もう日の入り近く、已が影がわが前に恐ろしく長くなつた。一昨年の夏逗子から駒子と來て泊つた東屋の前を素通りした。

金澤からは生路である。稱名寺の此方から山路にかかつて、路を聞き聞き熊次は杉田に向ふた。見下ろす海は明るく、山はもう一步毎にたそがれて來る。熊次は路を急いだ。然し眼にとまる山椿の一兩枝を、立ちとまつて折らずには過ぎなかつた。淋しい山路に心やや靜まり、耳の痛も少し和らいだ。

杉田に下りた頃は、人家に灯、空には星が晃々して居た。不知案内の里にまごまごして居ると、婆さんに呼びとめられ、

「泊りなら、自家でも都合してあげるだに。」

「フン、異人の畜生め。金は儲けやがる、——ばかりしくさつて、フン、異人の畜生、フン犬見たいなやつだ。フン、背^{うしろ}から——しくさるんだぜ。」

熊次は十錢銀貨を置いて茶店を出た。

鶴見の停車場に來ると、暗くなつた。新橋行が出たばかりで、二時間も次の瀛車は待たねばならぬ。

熊次はまだぶらつき足りなかつた。寫生帖がまだ眞白である。遊びついでに、六郷川から池上かけての冬景色を、今一日遊んで歸らう。

耳の痛は去つたが、昨日からの歩きつづけで疲れて茫となつた頭で、熊次は器械的に街道を川崎の方へ歩きはじめた。

瀛車で五分そこの道も、歩けば中々間があつた。田甫の夜風、寒風に吹かれて、下駄音をかりことり引きずるやうに立てつつ熊次は川崎の宿^{しゆく}に入つた。左手には小さな女郎屋がひっそり竝んで居る。ある年の酉の市に、熊次はステツキをふつて大鷲神社の賑合を見に往つて、其時初めて夜の吉原を見た。仲の町の入口を飾る石柱に刻した對の半分は忘れたが、他の半聯の

浮べ、背斜^{うしろ}に低く青い陸の線を上總は水天の際に延^ひいて居る。雲雀も鳴きさうな長閑さ。耳の痛も、今日は殆んど忘れた。熊次はしばしば立とまつては眺めた。寫生帖が度々懷を出かけては、また藏^{をさ}められた。それは眺むるに好く、描くにはあまりに平凡な好景であつた。

磯子でもう午鶏が鳴いた。根岸を通つて、横濱に來ると、場末の蕎麥屋で、熊次は天麩羅蕎麥で晚い午食を濟した。

熊次は横濱停車場に往つて、出札口の前に立つた。此まま歸るも物足らぬ。昨日以來寫生帖にまだ少しも塗つて居ない。熊次は神奈川までの切符を買つて、乗るとやがて神奈川に下りた。瀛車の上から見る京濱間の景色には、畫になりさうな箇所が少くない。鶴見神奈川の間にかねて眼をつけて置いた熊次は、神奈川からぶらぶら鶴見の方へ歩いた。昔の東海道を其まの松並木、薩摩武士の白刃に英人の血を塗つた生麥あたり、街道の茶屋を見たり、海の見ゆる方へきれ込んで見たり、寫生帖を富ますべきものを求めて歩いたが、多く得る所がなかつた。熊次は道側の茶店に腰かけて、澁茶^{すず}を啜つた。茶店の薄暗がりに、ほろ酔ふた辯護士體の四十男が、婆さんを相手に管をまいて居る。

るりに騒いで居た。泊りと聞くと、騒ぎをやめて顔見合はせて居たが、一人が「お氣の毒さまですが。」と斷りを熊次に吃^くはした。

街道の眞中に立つて少し考へて居た熊次は、身を翻^{ひるが}へして戸をしめた川崎の町をまた南へ鶴見の方へ戻りはじめた。

宿はづれの女郎屋の前に來て、熊次は立ち止まつた。此處を過ぎれば、鶴見までは宿は無い。彼方此方夜目に見廻はして居た熊次は、突と女郎屋の一つの戸口を入つた。

二分の後、彼は小さな床の間に綠色した麥藁細工の凄^{すさま}じい男根を飾つた二階の一室の薄い座蒲團に座わつて居た。若い者が大福帳式の名簿を持つて來た。熊次はそれに出任せの名を書いた。明治法律學校生徒と肩書をした。彼は二十歳の冬、京都を飛び出した其夜、大阪は松嶋の遊廓で今夜のやうにやはり偽名を書いた事を思ひ出した。それは最初、今夜は生涯に二度目の登樓である。

色の蒼い、眼口の大きい、二十五六のむつとりした大柄の女が來て、小さな火鉢の傍に座わつた。定規の臺の物が來た。熊次は夕食もまだであつた。然し飲み食ひする氣になれなかつた。

「秋信先通、兩行燈影」と櫻痴居士の筆跡も見た。見上ぐる何階の高樓、鏡を張つた店に居並ぶ立兵庫に赤いしかけの女達、懷中鏡を出して顔を直したり、格子越しに吸付煙草の取りやりをするのもあつた。小さな店の口には、客引の男が居て「ステツキの先生いらつしやい」と熊次を呼んだ。あの吉原の明るい全盛に比ぶれば、田舎宿場の何と云ふ淋しい女郎屋であらう！

宿の中程迄來て、右手の宿の灯あかりさす戸口をがらり引開けて入つた。五十年配の番頭は、胡亂といふやうにぢろぢろ見て居たが、

「お泊りですか。」

「ええ、泊りたいのだが。」

「お氣の毒ですが、今夜は座敷が皆塞つてますから。」

熊次はむつとした。見えすいた嘘を云ふ。

「彼方にも宿はあります、いくらも。」

番頭が顫かみで上の方をしゃくつた。

熊次は北へ少し歩いて、今度は左手の宿に入つた。若い男が三四人、きやつきやつと火鉢のぐ

不思議さうに女はしばらく客子を見て居たが、到頭出て往つて了ふた。

免れた、と云ふ感に直ぐ追かけて不満が涌いた。

しばらく時が立つた。

夢現の間に障子が開いて、また女が入つて來た。此處は宿屋ではなかつた。拂はれた金相當の義務を、女は果さなければならなかつた。

女が二たび出て往つた後に、硬い蒲團に足を縮めて、熊次は石の如く横はつた。

*

*

*

*

熊次は起き上つて帶をしめた。拂ふものは、偽名を書いた時に拂つてある。片手に帽子、片手に寫生道具の風呂敷包をとると、二階を下りた。出て來た女の顔も、「もうお歸りで？」と店の若者の寢呆聲も後にして、女郎屋を出た。

外はまだほの闇い。氷の槽に飛び込んだやうに顔がひりひりして、痛い寒さが骨の髓まで滲みる。がたがた震へながら、熊次は鶴見の方へ歩き出した。

赤い明るい火が左手の道側に燃えて居る。寄つて見れば、赤く顔を火照らして、大工が二人鉋

障子が荒らかに開いた。喫驚した熊次の眼の前に、漁師か、農か、遅ましい二十五六の男が赤黒い横顔をちらと見せて、直ぐ往つて了ふた。

「何でもないんですよ。」

と女が長い煙管を火鉢にはたきながら云ふた。女は顫顫に頭痛膏を貼つて居る。

「如何したんだね？」

「寸白ですよ。」

もう夜がふけて、小さな火鉢一つの室は恐ろしく寒い。熊次は薄汚い室内を見廻はした。何で此處に自分が居るか、熊次は不思議な心地がした。さつさと此一夜を後にしたくなつた。

十分の後、熊次は別室の硬い蒲團の上に寝て居た。

寸白の女が入つて來た。

女は石の如硬くなつて居る客を見出した。しびれたやうに、氷つたやうに、客は鯢子張つて居る。

「あなた、——は好きでせう？」

あけて居れぬ程の眩くらしい朝である。

熊次は眼を細くして、器械的にぶらぶら歩いた。何時しか六郷川の堤に出た。矢口の渡を渡つた。而して田甫の彼方に、こんもりとまがう方もない池上の丘を指して歩いた。

熊次は池上に來た。石段を上つて、本門寺の境内を歩いた。新婚の翌日、駒子と此境内を歩いた。それは一昨年おととしの五月。まだ二年にも満たぬ。其時は春蟬が鳴いて居た。今は冬の風がさびしく松の梢を鳴らして居る。熊次は經藏の邊を過ぎて、駒子と田甫を見晴らした松の絶え間に來た。其處から今朝ぶらついた田甫が鶴見臺まで見渡され、群山むれやまにつけたやうな雪の富士がくつきりと白く巖いわに立つて居る。

熊次は泣きたいやうな、誰かに喰つてかかりたいやうな、恨めしい氣分になつた。昨日一日忘れて居た左の耳が、また岑々しんしん痛み出した。

熊次は本門寺の石段を下りはじめた。不圖躓いた拍子に、ぶら下げた水入の瓶が落ちて、がちんと微塵になつた。

「呀あつ、しまつた。」

屑や木端を盛に焚いて居る。

「えらいお早いですね。」

「え、書を描くんだが。」

「そりやお寒いでせう。まあ、おあんなさい。」

熊次は寄つて焚火に手を翳した。手から顔からほうつとした暖かさが、やがて全身に行きわたると、氷つた身心が融けて行くやう。熊次は涙ぐましい心地になつた。

鶴見臺地の向ふ西の空に紅の光が棚引いて、夜が漸くに明けた。焚火の場所だけを残して、あたりは一面雪のやうな霜である。

熊次は身繕ひした。

「ありがたう。」

「最早お出かけですか。」

焚火をはなれて熊次は歩き出した。街道から西へ田甫路にきれ込んだ。日が出て、きらきら霜が光る。刈田の面、榛の木の畹路、枯草の上、何處へ向ふても白光はきらきりと、それは眼を

熊次は段々畫に凝つた。駒子に師があれば、熊次も師が欲しかつた。去年の京都の博覽會に鎌倉の春の油畫を出品して二等賞をとつた若手の垂水君たみづは、家庭雜誌の表紙畫を描いたり稀に挿畫を描いたりして、時々顔を社に出した。熊次は垂水君に手ほどきをしてもらはうと思ふた。熊本以來の社員で、近頃は出版部を擔當して居た關係から、熊次に割り宛てられた十二文豪のトルストイの脱稿を幾度となく催促して居た氣丈者の植木君が亡くなつて、青山墓地に葬られた。其葬式に、長い鉛筆を耳にはさんだ羽織袴の垂水君を見かけた熊次は、うちつけにそれと頼むだ。而して其翌日の夜は、麻布に垂水君の家を訪ねて、其二階に色々の作品を見せられて居た。阿父の旅行先に送つてほめられたといふ愛宕塔の水彩寫生は子供らしく、氷川祠の檜は力強く、初めて描いた油畫肖像には友人の眼鏡が巧に光つて居、九州の女學校へ出立のわかれに三十分で描いたと云ふ妹の肖像もしつかりして居た。畫をもつて立つ人の畫は、やはり最初

「は、は、はッ。」

笑い聲が近くに響いた。此處の學林の生徒であらう、毬栗頭に僧服した十七八が三四人、石段を上りながら此方を見て笑つて居る。

熊次は赫^{かつ}となつた。

「う、う、うッー」

拳を握つて、熊次は其方を睨んだ。眼に一ぱいの涙が、危く溢れさうになつた。

「何ッー Bad boy!」

眼鏡をかけた一人が逆襲すると、一同は口早に罵詈を熊次に浴せかけた。

熊次は黙つて、悄悄^{すくすく}石段を下りた。

其夕、熊次は三日ぶりに歸宅した。熊次が何も云はぬので、駒子は逗子と思ふて居る。耳の痛を氣遣ふて居た。

もない確實さがあつた。熊次が家庭雜誌にする翻譯物などには、そろそろ駒子の摸寫した挿畫を入れる事をはじめた。面相で薄葉に畫かれたそれ等の挿畫を、鴨志田君の弟の忠次君が見て、熊次の筆と思ひ入り、只管敬服の舌を捲いた。

畫好きの夫婦は、結婚當初からよく繪畫の展覽會に往つた。日本畫にも洋畫にも無知の大膽に勝手な批評を加へて、あたりの耳目を聳立てたものであつた。少し其道に入りかけては、端なく口は利けなくなつたが、見る事はやや親切になつた。洋畫がヨリ多く二人を牽いた。洋畫も色々に變つた。ペンキ畫風の平板だつたり、ヤニ色に燻んだり、筆力を主に淡彩であつさりしたのから、近頃佛蘭西から入つて來た明るい輕快な畫風と、色々に遷つた。ふるい澁味も捨てられぬが、明るい畫はヨリ多く二人を牽きつけた。垂水君は其明るい畫を描く若手の錚々であつた。

熊次は段々畫が面白くなつた。然し彼は正直に謙遜に物の形を見てそれを再現するのがまどろかしく、直ぐ色彩で自然にぶつかる性急な捷徑を擇んだ。彼は色彩で物を見た。色彩を使つての寫生は面白かつた。駒子の父譲りの黄八丈の丹前を引かけ、駒子の居間なり食堂なりの五疊

から違つて居る、と熊次は思ふた。垂水君は熊次にやはり順序を踏んで初から始める事を勧め、鉛筆畫やセピアの畫手本を貸してくれた。熊次の熱心に絆^{はだ}され、垂水君もしばらく晩學を手引の面倒を見た。熊次の家に來て、眼の前で空^{そら}を塗^ぬつて富士を浮き出させたり、Chinese white の Tube を寫生して見せては、一寸したのものにも宿る線の面白さ光と蔭の微妙^{いみじ}さを大東な熊次に味はせた。自然の色に黒はない、畫具に黒があつても黒を使ふな、と云ふ注意もしてくれた。Prussian blue の褪色し易^みいけな事を話し、熊次の畫具に Cobalt の無^なのを見て、自身の使ひかけを割つてくれたり、水彩専門の御池^{みいけ}といふ人の芝浦曉霽の畫を貸してくれた。熊次は成る可く忠實に始から始めやうと努^{つと}めた。然し彼の線は弱く、彼の陰影は薄く、すべてに確實味を缺いで、漫然と手本通りにうつ一つの點にも無意味があつた。時には勝手な寫生の結果を齎^{もたら}して往つた。駒子が寫生した靜物なども、それとは言はず持つて往つた。垂水君の阿父は牧師で、息子故に畫を見る眼が肥えて居た。熊次の持つて往つた寫生は、時に父子の眼にさらされたが、たまにほめられるはいつも駒子の畫であつた。全く駒子の描いた人參や筍は所謂水彩畫よりも水彩畫具で書いた日本畫であつたが、親切に物を觀て如實に表現する點には、疑

第二十三章　　ごん底へ　　其二

一

兄が病氣をした。十二分に自身を使ふ彼は、時々無理をしては大病をした。日清戦争の疲れが出たのである。兄の健康保管委員をまだ辭職せぬ熊次は、以前程にはなくも相應忠實に看護した。病氣は順調に軽くなつた。病の間に、兄は初めて洋行の計畫を告げた。それは大分前からの目論見であるらしかつた。熊次が十六の昔、父母一座の夜話に、兄は熊次を^{もつ}目して曰ふた。「熊は大事を破る奴です。」そこで凡そ兄の大事に熊次は今以て門外漢であつた。もうよい頃と兄は熊次に洋行の事を告げた。兄は言ふた。「九」は俺に^{おれ}目出度い數だ。明治九年に十四で初めて東京に出た。明治十九年に二十四で「未來之日本」を出版し、東京に引出た。明治二十九年に三十四で世界を旅行する。「九」はめでたい數だ。戦後の今が外遊の一番好機會。長くはかか

半の炬燵に入りながら、格子窓越しに向隣の九條邸をかけての雪景色を寫生したりすれば、一日は造作もなく過ぎた。稚子^{ちこ}留^わに結ふた姪の實子をモデルに据ゑて、よくも肖ぬ畫をかき續くれば、實子は度々小さな欠伸をして、果ては糸のやうな眼をした。畫家は肖ぬ畫を描き上げて、可愛いと謂ふて彼が描いた其畫に接吻した。

正月の返子歸りに白勝であつた寫生帖は、追々に塗られて、第一、第二と帖の數は進んで往つた。冬の入りに始められて、寒い色がちであつた寫生帖には、段々紅や黄や緑の色が點ぜられた。初めてワットマン紙を買つたうれしさに、ほんのり芽ぐみ初めた溜池の柳を寫生しては、足駄ばきで小半日柳の前に蹲^{しゃが}むで足の痛さを覺えなかつた。

兄の病氣が癒^{なほ}るをきつかけに、肥後の家が動き出した。一旦避寒から歸つて來た父母が、そろそろ引越しの仕度にかかった。養老の地には至極な逗子櫻山に、約二反の地所が已に購はれてあつた。それに手輕な別莊を建つる議も、父兄の間にとくに定まつて居た。兎に角老幼一同一先づ荒布屋に納まつて、新築落成次第引移ると云ふ事であつた。隱宅の大道具や、父が愛宕の縁日で鉢で買つて、靈南坂から榎坂、氷川町と持ち廻はり、今は一棚に蔓^{はび}る藤などは、すべて築地から和船便で逗子へ廻はす事にした。兄の介抱疲れから、それ等の奔走に、熊次も忙しい日を送つた。父が荷送りに懸念の上にも懸念して、熊次に築地まで再應の無駄足を踏むべく要求すると——東京の重な交通機關としては、新橋から上野淺草の間に鐵道馬車があつて、暑いさかりは馬が日よけの編笠をかぶつて一區二錢の鐵道馬車を挽いた時代である——澁い顔する熊次をちらと兄が見て、「熊も疲れて居りますから」と取り倣すと、父は笑止千萬な顔をして黙つた。送るものを送つて、父母は先づ逗子へ立つた。からんとなつた隱宅に往つて見ると、逗子の別莊圖案をかいた畫用紙を裏返へして壁に貼^はつた狀挿^{じやうさし}に、

うきはなく　うれしきままの　五年を

らぬ、約一年。社は宇土にやらせる。秘書には淺井を連れる。家は疊ふしむで逗たふ子に、お實は卿けいが家に預ける。献立は悉皆出來て居た。

醫者がまだ患者の面會を許さぬ中に、面會を求むる來客があつた。熊次が玄關に出ると、それは田原さんであつた。同縣出の田原さんは、兄の懇意な舊相愛社政客の錚々たる一人であつた。熊次が上京當時、瀧山町の宇土君の下宿に、熊次もしばらく田原さんと居た事がある。眼の窪い、瘡かさせぎすの四十男が眞裸で同じ二階にごろごろ寝たり起きたりするのを、熊次は顔をしかめて嫌つたものだ。田原さんは未だ病人に會へぬと聞いて辭し去つた。頼まれた旅費の口の不調を報ずる來訪であつた事を、熊次は後で知つた。然しそれは友誼に課せらるる奉加の一に過ぎなかつた。肥後の南の行きどまり、「袋」といふ村から炭馬引いて町へ三里の往復を懷から論語を出して素讀の復習を怠らぬ九郎平の昔から兄弟の父に引立てられた二代の熱懇、今は大阪で膽を資本の生活をして居、東京に出る毎芝口の宿の奉公人一同に一圓宛の總花もくを撒いて旦那と立てらるる太つ腹はらの宗そうさんなどは、「冥加めうがな事」と喜んで寄進についた。そんな小口の外に、大口の出所は熊次の揣摩する限りでなかつた。

ラで、狭い家がいよいよ一ぱいになった。座敷の壁つきも、三疊も、書棚でぎつしりになった。昨秋妹のお芳が生れて以來、叔父叔母の家をわが家のやうにして居た實子は、格別淋しがるでもなく、毎日氷川下の小學校に通ふた。

結婚二周年の五月五日が來た。鯉幟がまた若緑の間から青空眼がけて跳り上り、跳り上らうとする。すべてに取り残さるる感の熊次は、唯一の力綱として新しい道樂の寫生に熱中した。出版社の雜囊には、常に寫生道具があつた。時々は途中に引つかかつて、晩くなつて出社した。到頭寫生ばかりで歸る日もあつた。逗子では別莊の地形、手斧始めと着々進行し、社では洋行前の兄が體の十も二十も欲しく走せ廻はつて居る時、熊次は高足駄をはいで澁谷田甫の田川の樋の口に二日もつづけて蹲みつつ、空と雲と穗麥と青草と、紫雲英と、蒲公英と、小さな瀑をなして落つる田川の水のまづいスケッチを作るに腐心した。

住みこし宿は　いかに忘れむ

と父の筆で書いてあつた。六十五の暮に父は熊本から東京に来て、赤坂は靈南坂榎坂に五年住み、七十歳の春氷川町に越してここに五年住み、足かけ十年目にまた東京を後にしたのであつた。駒子が状差を剝がして、記念にそれを藏めた。

本宅の諸道具を持ち込むべく、熊次の家はあまりに狭かつた。兄の注意で、深水の太郎さんに預ける事にし、痔の手術をして順天堂に入院中の太郎君を訪ねた。去年の夏若妻を亡くした太郎君は、疊を敷いた病室に、折から附添もなく、一人淋しく寢て居た。兄の家の家具を預かる事は直ぐ承知してくれた。而して蒲團の下から一葉の爲替券を出して、受取方を熊次に頼むだ。熊次は顔を曇らした。迷惑なら他に頼むと太郎君の言を幸ひ、急ぐに托して熊次は逃ぐるやうに病室を出て了ふた。

大道具は預け、がらくたは賣り、物の始末がつくと、義姉は三人の子女と子守を連れて逗子へ往つた。兄は社の近くに下宿し、下宿と逗子の間を往つたり來たりした。海舟邸の裏門際に取り残された熊次の家は、預かつた和漢洋書籍と、貴重書類入り簞笥と、姪のお實と、老猫のク

「お駒は？」

「今日は留守して居ます。」

銀が進み出て目禮する。相變らずの赤黒い面に白い眼の恐い顔をして居る。

「晝の稽古をさしうてち連れち來ました。」

と清人君が口を添へた。

話が途切れる。

「それぢや、又。」

清人君は銀を連れて往つて了ふた。

「あ、此處にお出なすつた。」

四十近い婦人が、若い大學生を連れて熊次の前に立つた。それは沼山のお濱さん。沼山先生の甥で慶應年間の米國留學生嘉平太さんの未亡人お濱さんは、肥後侍さむらいながら江戸定府ぢやうふの女むすめで、幼ない熊次には美しい而して意氣なものものの權化と思はれて居たものだ。今は津森叔母の女子學院に居て、矯風會禁酒會の手傳ひなどして居る。連れた青年は醫大の學生で、俳句には已に一家

大川端近くの日本橋俱樂部で、兄の洋行送別會が催された。熊次は駒子を留守させ、實子を連れて俱樂部に往つた。社員社友で潤い俱樂部の下座敷は一ぱいであつた。青芝の築山、泉水の此處其處には、彈痕の幾箇をとどむる従軍記者の魚毛布あらまうふの外套など戦争記念を説明の立札と飾り、助六もどきの紫の鉢巻、股引腹がけといふいなせな姿で、此頃家庭雜誌の編輯主任になつた眼鏡をかけた吟夢君などが走せ廻つて居た。

熊次が實子を連れて南京花火のパチパチと爆はぜるを避け避け築山のあたりを歩いて居ると、人影がさして來た。眼を擧げると、八字髭の清人君を見た。背後うしろに銀公も居る。推測通り、清人君はとくに上京して居た。

「おおれ貴さんの御招きで上りました。」

「然でしたか。」

洋服の大男が座わつて居るのは、鹿兒嶋出では新しいと云はるる政客の神崎さんである。誰やら突と立つて其前に座わると、満場の視線をあつめて平氣に話して居る。熊次の心が動悸をうつた。それは清人君であつた。

いよいよ送別の式辭がはじまる。兄が正座に座わる。辭退する淺井君を、皆が無理に其傍に押進める。來賓の祝辭がある。でつぷりした神崎さんの後に、「器械の如く幾年を學ばん爲の旅ならす」と眼鏡をかけた羽織袴の丈高い紳^{さみきうし}大人が、濁音重く送別の詞^しを誦する。「心の駒を放つ君かな」と洋服小柄の社の虞初子君が聲朗らかに吟ずる。此送別會は曖昧だ、主客が分からぬ、と主人公が皆を笑はせる。日本をはなれて日本を見る、と皆を頷かせる。淺井君も「The Far East について一言する。」

次に日清戦争の論功行賞がある。日本國家のは、昨夏大騒ぎして濟み、總花をまいたと云ふ惡口もあつたが、新聞のは正しく銓衡されて、此機會に行はるのであつた。従軍記者の一人一人が呼び出されて、大型の銅牌を受ける。杉原君の時、社長が起つて、

「杉原君のは金鵄勳章です。」

を成した小野霞竹君、お濱さんには甥であつた。「水村の月薄き夕梅の散る」と云ふ霞竹君の句は、熊次が好きな句であつた。然し紹介された熊次は、霞竹君にも其叔母さんにも話の接穂^{つぎほ}をもたなかつた。お濱さんの顔に、笑止な表情が浮んだ。而して二人は往つて了ふた。

熊次は實子を連れて座敷の方へ往つた。廣縁に足投げ出して居る人々の中には、衆議院書記官の蒼白い森田さんの羽織袴の姿も見えた。熊次の小學時代、森田さんの弟の隆二さんは、女生に騒がるる美少年で、最上級に居た。頬に凹みのある、ブルドックのやうにしゃくんだ顔の嫌はれ者の助教員水田さんが、隆二君をいぢめた。と聞いて、兄の森田さんが教場に押かけて來た。恐る恐る事の成行を五間許もはなれて見て居る子供の中に熊次も居た。色白の森田さんと、敵役の水田さんと、二言三言諍ふと見ると、水田さんは駭いたやうな顔を仰向けて、もう腰掛の間に押倒されて居た。痛快を熊次も感じたものである。熊次は森田さんと挨拶を交はした。然しお辭義をしてしまへば、もう後に言ふ言がなかつた。お濱さんに見たやうな笑止な表情が、森田さんの顔にも現はれた。

熊次は座敷に上つた。向側の壁つきに居並ぶ來賓の中に、髯の短い關羽のやうなでつぶりした

を——」

一同わアと立ちかかつて胴揚げするのを見れば、それは山下君大矢野君小森君であつた。わアわツと三人の洋服姿が宙に跳る。

大矢野君の結婚は、熊次も承知して居た。編輯局で山下君と柄原君が大矢野君をからかつた。

『大矢野さア、面白いものを見た、教へち上げやうか——』彼女の短處も知り、長處も知り』は、は、は。』

大矢野君が顔を赧くして、不快な容子をした。それは大矢野君が友人——恐らく清人君——に妻擇みの結果を打明けた手紙の文句に違ひなかつた。今日の胴揚げは、熊次にも意外ではなかつた。

小森君はある新聞から入つて來た政治記者で、相當仲間に顔が賣れて居た。地のすいた稊栗頭に赭ら顔、團栗眼、何時もふうふう云ひながら編輯局に出入りした。酒好き、遊好き、社員が多くに借金があり、已に戦争中も一度廣嶋から歸へされた。仕事にかけては向ふ見ずの無遠慮に、參謀本部に往つてはつかつかと上官室の煖爐に臂あぶりながら、「おい、水本」と參謀次長

と言を添へる。一々拍手が迎へて送る。編輯局に留つた人々も、事務も、殊勳と目さるる人々は皆受ける。編輯局の久野^{ひさの}さんが八字髯の莞爾々々顔を赧くして、「自分迄も」と謙遜に唸やいて居る。俺^{おれ}にも呉れるつもりか、と熊次は一寸思ふたが、其心配は無用であつた。彼は彼相當の「無」を受けた。それは熊次が十七の昔であつた。兄の家塾で一度熊本の西にそり立つ金峰山^{きんぷさん}の夜間登山競争をやつた。麓の鳥居を發足點に、懸命に皆躰^かけ上り、薩摩の青年が一着を占めて、後で木劍の褒美をもらつた。熊次も最初は正直に走つたが、追々面倒くさくなり、果ては悠々と上つて、立派に總塾生の殿^{しんがり}をつとめた。山頂の祠前に篝火を焚いて、皆が着到順に列んだ。ぼんやり隅に立つて居る熊次を、兄が笑ひながら引張つて末尾^{びり}につかせた。今日の日本俱樂部が、まさに當年の金峰山であつた。

社の小森君が子供連を指揮して唱歌を歌はす。友山君が小森君の後に一寸腰かけて、小森君の眞似をする。吉例の胴揚げが始まつて、兄の洋服姿が嘻々と空に跳る。つづいて淺井君の小さい體が跳る。一騒ぎ濟むと、紫鉢巻の吟夢君が立現はれ、

「今度人生に於て尤も愉快なおめでたをせられた方々があります。これからお祝ひに胴揚げ

日ならず熊次の家の格子戸開けて、土間に銀の顔が現はれた。熊次は立ちながら數語を交はした。

「通町の方は如何なつたね？」

「通町の方は、頓斗とんとさはうさになつてしまひました。」

「ああは、さうすると、油繪をやるのかね？」

「はい、清人さんのお世話で、櫻井さんのお世話になつとります。」

洋畫家で古株の一人櫻井さんは、高等商業時代清人君の圖畫の師であつた。

上れと云はぬので、銀は詮方なく歸つて往つた。

其後一度熊次の留守に訪ねて來たが、含められた駒子が斷つたので、もう顔を見せなかつた。

清人君も來なかつた。

熊次の頭は矢繼早やつきはやの刺戟に疲れて、日々焦々して來た。焦々はすべて駒子に漏らされた。小學校に通ふ姪の實子は、朝夕烈しい言葉と恐い顔して若い叔母を叱る叔父を見た。先頃逗子から

を呼捨てにして、一同の眼を丸くさせたものだ。其參謀本部の森田中尉は、即ち衆議院の森田さんの實弟、當年の美少年隆二さんで、小森君の懇意であつたが、小森君の爲始終迷惑をした。同じ氷川町に住む森田中尉は、毎々出勤の出がけに、小森君に關する苦情の一封を兄の家の郵便函に入れて置いたものだ。小森君は品川の遊廓に馴染があつた。すばらな小森君に打込んで、遊びに來た歸りには、小使錢の二圓三圓、われから男の暮口に入れたものだ。小森君の新婚は、其結果であつた。

それは薄々知つて居たが、然し山下君の結婚は全くの寢耳に水だつた。兄には二つも年上の山下君が結婚するに不思議は無い。然し熊次より先きに駒子を識つて居る大矢野君や山下君が、社長の洋行前にばたばたと結婚させらるるのが、熊次には氣になつた。

人ごみの中に、熊次は兄と顔を合はせた。兄は悦喜に昂奮して居た。逗子から出て來なさればよかつた、と兄弟は言ひ合ふた。

熊次は亂れた頭で、實子連れて歸宅した。今日の出來事については、駒子に多くを語らなかつた。

したが、熊次は顧みなかつた。肺病になつて、大森あたりに鶏を飼ふたりして居たが、終に肺で死んだ事を熊次は餘程後で聞いた。浦田君はそれでも兎や角もう十年近く知つて居た。同志社では熊次より二年上の浦田君は、苦學力行、ひどい近眼で、それで剽輕せうきんな人であつた。京都を逃げ出して熊本に熊次が居ると、同じ英學校の教授に浦田君が招かれて來た。浦田君は其時もう高帽をかぶり、エマアソンを読み、熊次の七圓に對し二十圓の月給をとつて居た。熊次の上京後、浦田君はルーテル傳を書いた。熊次は其原稿を博文館に紹介し、出版校正の勞をとつた。其後浦田君は京都の某教會の牧師となつて結婚し、近頃「親鸞真傳」の稿を携へて東京に出たのであつた。熊次も其原稿を見た。基督者の見地から可なり手ひどい批評を「所謂親鸞」に加へた浦田君の新著について、熊次は云々する準備がなかつた。浦田君は兄の意見と紹介を求むるのであつた。浦田君は熊次の家に來るなり、満室の書架を見て「好い預り物ですな」と濃い眉の下に眼鏡の眼を瞬しはたきながら見廻はした。

兄がやつて來た。氣の毒な程、疲れ切つて居る。浦田君の著を云々して、「日蓮」「日蓮」と悉皆親鸞を日蓮にして了ふた。

來た若い女中の藤も、日に日に機嫌の悪い主人の尖り聲と光る眼玉を見聞きした。谷町から來た十五女中のお種が半歳無事に勤め上げ、嬢さんには「油や、お染、久松、十よ。」と羽子をつく事を教へ、自身は奥様から褒美の緋縮緬の切れ——それは大隈さんからの頂戴物で、熊次の好かなかつた——などいただいて正月きりで歸つた後は、しばらく女中無しで居たが、つい此頃逗子の女中の世話で、其従妹と云ふ煮賣屋の娘が來たのであつた。十九になる藤は、口少なの重くろしい娘で、最初から浮かぬ顔をして居た。

プログラムに順ひ着々出發前の仕事をかたづける兄が、明日は卿が家に行く、と社で云ふた。「結婚式は今日、髷でも剃つて」と一昨春云ふたと少しも變らぬ口調で云ふた。熊次の家では簡単な午餐の用意をした。

其處に熊次が懇意な浦田君が來た。新著「親鸞眞傳」の序を兄に請ふ爲であつた。吾儘な熊次に、友といふ友はなかつた。ある期間近くしても、氣障があると直ぐ遠くなつた。同志社時代に女房の様にした片貝と云ふのも、東京に前後して出て彼の名が少し出ると、「後の雁が先になり申候」と彼が一言癪に障つて熊次は彼に疎くなつた。熊次の結婚を聞いて、歌など詠んでよこ

やがて一同どやどやと埠頭から大型のランチに乗つて、沖合に居るA——號に往つた。それは傭入の英船で、美しくない荷物船であつた。

其船房を見る暇も、何する暇もなかつた。天候怪しくなりかけたので、往く二人と、送る多勢の間に、告別が匆匆にかはされた。

「阿母、もう歸るのですか」と、おろした淺井君の聲が熊次の耳に残つた。末子の淺井君はまだ獨身で、母者がすべての世話をして居た。

舷梯の上から見下ろす海は黝く物凄く、ランチは大きいうねりに揺り上げ揺り下げして居る、

「わアしが負ふもん。」

と、いつも夏の留守をする社の山村が母に背をさしよせた。母は手を掉つて、突と熊次に身を寄せた。熊次は確と母を扶けて、舷梯を無事にランチに下りた。

ランチは瀛船をはなれて、埠頭に向ふた。大きなうねりが弄ぶランチの上に、蒼い顔を駒子は俯向けて居る。

「何だ、これ位の波に！」

三

兄が出立の日に、熊次は駒子と横濱に往つた。父は見えなかつたが、兄と共に母や義姉、子供一同、先日から往つて居た實子も來た。熊次を見る兄の顔には微晒うつわらひがあつた。漁船宿の二階は、社員社友で一ぱいであつた。わざわざ熊本から見送りに來た人々もあつた。宇土君の從弟で、熊次の上京當時、宇土君の下宿に同宿した事もある海野君うんのの眉の濃い顔もあつた。脚氣を醫師に見せるといふて白い胴着ちよつきの派手な洋服を着たりして居た海野君は、其頃女を圍ふて居たが、あの女は旦那が三人もあるに、と下宿の娘が氣にして居た。七年ぶりで熊次は海野君と挨拶を交はした。海野君の顔に浮ぶ笑止な表情を、熊次は見道さなかつた。兄と共に今日見送らるる淺井君の少年少年した姿がちらりとする。

「淺井君には驚いて了ふた。」

と海野君は熊次の顔を見るのであつた。

も、今日兄の顔にちらと見た皮肉な笑の意味も讀めた。熊次は黙つて姉の言を聽いた。而して起つて父の方へ往つた。

父は一葉の圖面を前に、沈んだ顔して宿の亭主と話して居た。いたづらさかりの貞雄が、出入り入つたりふざけ廻はつて居たが、突然祖父の前にあつた圖面を引たくつた。

父の氣色が變つた。飛びかかつて孫を押伏せると、つづけさまに貞雄の臀を撲つた。わつと聲を立てた貞雄は、起き直つて祖父を睨んだ。

「何だッ、其眼は？ 俺を殺す眼だぞッ！」

父が叫んだ。其處に熊彦を負つて子守が縁を通りかかつた。

「此奴もか？」

父が立ちかかつて攫みひしぎさうな勢をした。

熊彦がわアツと泣き出した。

臺所から義姉が跑けて來た。

「私の躰が悪ふござりますけん。」

熊次は窘めた。

一同無事に上つて、停車場に往つた。熊次は駒子と實子をつれて直ぐ歸るつもりで居た。

「逗子に來つどう？」

と母が熊次を目した。逗子には父が居る。熊次は逗子一行と横須賀行の瀛車に乗つた。

別荘が未だ工事中で、父は荒布屋に居た。鴨志田君夫妻はとくに東京に去つて、荒布屋の全部は肥後家族に占められて居た。其處には思ひがけない熊本の大江の姉が來て居た。廢校になつた英學校の敷地を姉妹校の女學校を助くる爲買つてくれぬかと伊倉の伯母に口説かれ、其相談を口實に、別れて十年ぶりの父母の見舞、且は洋行する弟の送別に、十八で嫁して以來四十三の今日まで肥後の國境はおろか減多に家をあけた事もない瀛車も瀛船も初めて姉は、一人はるばる上つて來たのであつた。姉は熊次を人無い室に引きのけて、涙を流して熊次の短氣を誠むるのであつた。去年も熊本で短氣を起してあんな事になつた。如何してまだ其様に直らぬか。姉は潜々と泣いた。熊次は怪訝に思ふた。何故姉が突然斯様な事を言ふのか？ 不圖熊次の頭に實子が浮んだ。彼女だ。彼女だ。彼のこまつちやくれ、彼小目附奴がしやべつたに違ひない。姉の涙

第二十四章　　ごん底に　　其一

一

神戸京都から門司から兄が書き送る外遊たよりは、新聞を賑はした。遊ぶばかりも居れぬ熊次は、續きものを載せはじめた。「捨つる命」は、露西亞の虚無黨員ステプニアクが書いた英文小説「A Career of a Nihilist」——「虚無主義者の經歷」を幕末の事に翻案したものであった。其序文を社の處初子君が激賞したのに氣を得て、熊次は日日翻案の筆をとつたが、露西亞を幕末に翻案はやはり無理で、直ぐいや氣がさして了ふた。

若葉の五月が青葉の六月になつて、照る日は水戀しく、曇る日は押かぶさる綠陰の重苦しく鬱陶しい頃になつた。熊次は社に、實子は小學校に通ふ外、事少ない家に、女中の藤が日一日と變な容子になつた。最初から無口の彼女は、此頃目立つてふさいで來た。しくしく泣いたりす

義姉が泣いて父の前に詫びる。母や大江の姉が来る。

熊次は泣いじやくる貞雄を、此正月鴨志田夫妻が居た室に連れて往つた。少しして、もうよからうと連れて出たが、まだ早かつた。貞雄は詫が言へなかつた。また連れ戻つて、全く静まつた後、あらためて祖父の前に手をつけて詫をさせた。

「おお、吾儘が過ぎると、驕兒と云ふものになる。」

と祖父は眞面目に孫に言ふのであつた。而して呆氣にとられたやうにして居る宿の主人に、
「太兵衛さんにはお氣の毒だつたが。」

ときまり惡るげに言ふた。

「否、どう致しまして。」

と云ふ太兵衛さんの赤黒い顔は、恐ろしく深い印象を受けた人の顔であつた。

玄關の石段を下りると、大木の銀杏や小さな祠やしろの立つ空地がある。其處の片隅に下便所がある。唯一つしか便所の無い熊次の家では、女中は其處へ行く例になつて居た。其便所に倒れたまま、顔は紫色になつて、藤は眼をあいて居る。腰帶が頸に絡かかんで、兩手はしかとその兩端を握つて居る。

「寢て居るんぢやない？」

と實子が覗き込んだ。

全くそれは眠つて居るやうであつた。腰帶をやつともぎ離すと、熊次は藤を抱き上げた。中々重い。駒子と玄關に昇かき入れた。體にはまだ少し溫味があるやう。口を割つて水を入れた。入るる端から、だらだら水がこぼれ出る。駒子が寶丹を含ませた。何の反應もない。

「藤や、藤や。」

「藤、藤やア。」

夫婦の呼ぶ聲も、少しも通ぜぬ。

熊次は近くの病院に走つた。それはもと米人經營の病院で、十年前京都から夏休に上京した時

る。駒子が仔細を問ふても、何も言はぬ。臺所も買物使も格別不都合はないので、如何したのだらう。變だ。」と言ひ言ひ一日と渉^{わた}る内に、全く藤は變になつた。

大江の姉が逗子から駒子に逢ひに來た。二人は手を取りかはしてうれし涙にむせんだ。姉は一夜弟の狭い家に泊つた。女中の容子が直ぐ姉の眼にもついた。「警察が——」と藤は前掛を顔に當てておいおい泣くのであつた。何か心に咎める事でもあるらしかつたが、若い主人夫婦は察しも突とめもせなかつた。姉は女中を慰めた。少しも心配する事はない。警察が何爲^{どうす}るものか。而して熊次夫婦には、早く歸へすやうにしたら、と姉は内々注意して、明くる日逗子に歸つて往つた。熊次夫婦は藤を慰め、初奉公で骨も折れやう、少し家^{うち}に歸つたらよからう、今に歸るやうにするから、と諭し宥めるのであつた。

姉が逗子へ歸つた日の午後、熊次は早めに社から歸つた。藤が居ないに駒子が氣づいたのは、夕食の仕度にかかる時だつた。大分待つて見、此處其處^{そこ}搜した後で、下便所を見に往つた。駒子が遽^{いそ}だしく熊次を呼んだ。

「あなた、あなた、死んで居ます！」

「何時だつたらう？」

「死んだりしてくれなくつても！」

「本當ね、死んぢやつて。」

熊次の世界が暗くなつた。もう何もかも駄目と云ふ氣がする。

藤が縊^{くび}れ死んだ。熊次は藤を叱つた事もなかつた。然し藤が來てから毎日のやうに駒子に慳食であつた自分が、藤の氣を變にはしなかつたらうか。

熊次の世界が暗くなつた。

*

*

*

*

*

巡査が來て、検屍が濟む。昂奮の内に夜が明ける。兎も角も實子を小學校に出す。社の小森君が逸早く警視廳から聞きつけて來たのに頼んで、逗子の親許に電報を打つた。

一時間たたぬに、逗子から隱宅女中のお春が來た。藤を世話した従姉である。あまりに早いと思ふたら、大江の姉が氣にかけて、今朝の一番で藤を迎へによこしたのであつた。一日違ひで、藤は最早死骸であつた。

熊次が初めて近眼の度を見てもらつたのも、其後隱宅女中の不全室扶斯を入院さしたのも、其處であつた。白髭の醫者の西嶋さんは、落ちついて熊次の言を聞き、今行くから、人工呼吸をやつて置きなさい、と云ふのであつた。熊次は人工呼吸の方法を知らなかつた。人工呼吸法も知らぬかとあざみつつ、西嶋さんは教へてくれた。

急いで歸ると、熊次は直ぐ教へられた通り人工呼吸にかかつた。ランプの光で、藤の兩手を舉げては元へ戻すと、駒子が調子を合はして腹部を壓した。やや久しくつづけた。二人は汗になつた。然し藤は息吹き返へしさうもなかつた。

中々醫者は來なかつた。熊次はまた催促に走つた。駒子が何度も門外に出て見た。西嶋さんは來たが、聽診器を胸に當てるなりもう駄目と宣告した。診斷書を取りに來るやう、而して警察に届けるやう言ひ置いて歸つてしまつた。

到頭藤は死んだのである。大江の姉が心配して、歸へすやうに云ふたが、今日直ぐ斯様な事にならうとは思はなかつた。

ランプの下に、夫婦は顔を見合はせた。實子も叔母の傍にすり寄つて、不安な眼を上げた。

藤の父も來、從姉のお春も居て、今夜は熊次夫婦も少し力づいた。まだ寝もやらぬ一家の耳に、
「熊次君、熊次君。」

と誰やら往來から呼ぶ。格子から覗くと、夜目にも小森君と知れた。兩腳踏みはだけで、確にぐでんぐでんに酔ふて居る。藤の後の始末を心元ながつて、本性違はず容子見に來たのであつた。呂律の亂れた舌で二三問答すると、安心したらしく、蹠跟と小森君は歸つて往つた。

夜深に、熊次の一家はまた門を敲く音にさまされた。それは横須賀の海兵團に居る藤の姉婿が、人を連れて藤の死體を引取りに來たのであつた。瀧車が無いので、大船までは歩いて來たと云ふ。阿父には明朝を約してあり、邸の門は鎖されて居るし、明日にしてくれとお春に言はすと、二三押問答の後、^{ふっせん}然と去つて了ふた。

あくる朝早く阿父が迎へに來た。當月分の月給と早桶だけを贈物に、藤の主人夫婦は藤の死體と阿父に別れた。瀧車にはのせず、逗子まで昇いて歸るさう。藤の義兄は唄つて、何と云ふても到頭内には入らなかつた。

兎も角も葬儀屋を呼んだ。一晝夜たたぬにもう硬張つた藤の死骸を、葬儀屋の男は變死と知つて、熊次の顔を見てはしばしば^{うなづ}頷きながら、早桶に納めた。膝を折ると、ほきほき音がする。夫婦は顔を背けた。

藤の父が來たのは、日も暮れ方であつた。人の子を預りながら氣もつかずに死なせた主人夫妻は、藤の父の前に面伏せであつた。如何様な難題を言ひ出すか、と不氣味でもあつた。一わたり事情を聞いて、丁髷の良い顔をした爺さんは、早桶の蓋をとつて顔を見ると、娘の額髪を撫で上げながら、

「何ちうこんだ、はあ、かういふさまになつて。」

それは罵らるるより夫婦につらかつた。

死體は瀛車送りにする外あるまいが、熊次は其手續をよく知らなかつた。兎に角夜分の事ではあり、明朝其計らひにしやう、と熊次は云ふた。「君の御威光によつて」そんな事にしていただきたいと挨拶して、阿父^{ちち}は一先づ引取つた。「君」の一語が熊次の耳に障つた。それは「君」「僕」の「君」でなく、主君の君と駒子が後で夫を宥めた。

陸前、陸中、陸奥の三陸に浅く深く喰ひ入る灣又灣を、恐ろしい海嘯つなみが襲ふた。新聞社から杉原君が急行して、酸鼻の情報が續々送られた。鮪かなんぞ轉がしたやうに腫むくんだ水死體の砂に横はる寫眞や、死んだ母の乳房に生残つた赤子がすぎる記事などが、梅雨天の蒸暑い空氣に壓しつけられた都人士の頭を痛くした。

ぼんやりした熊次が社内に變調を感じたのは、それから間もなくの事であつた。會計主任の加世田君が其位置を田部君に譲つた。丈矮の鍾馗しやうき様と云つたやうな鬚髯しやうぜん嚴しい田部君は、宇土君と同じ熊本の師範出で、社内の若手には留守を預かる宇土君が私を引く専横と速斷して躍起となる者もあつたが、事實は違つた。薩摩男のむつとりした加世田君は、熊本以來兄の門生で、雜誌發行以來事務を擔當し、今は物馴れた會計主任であつた。牛鍋で結婚し、社裏の準社宅に住み、丸鬚の細君は手内職に手ばしこく駒を動かして簾あを編あんだりした。兄の出發後、用あつ

藤の變死は、短い新聞種になつた。或新聞は熊次の姓名を變へて出したが、多くは其まゝ出た。社に出ても、熊次はきまりが悪かつた。多くは知らぬふりをしたが、杉原君は熊次のテエブルに来て、懇に氣の毒の挨拶をした。藤の事があつて後は、熊次の家はますます陰氣であつた。海舟邸の女中達は、幽霊が出ると氣味わるがつて、夕暮には跑けるやうにして裏門内を通つた。新聞賣が熊次の家の前の通りに來て、

「お高うは申されませんが、此御近所で、お藤さんといふ頗の別嬪が——」
と聲高らかに新聞の賞を促した。熊次は耳をふさいで居た。

父が驚いて母諸共逗子から出て來た。宇土君以下社の幹部が、ある日熊次の家に集められた。宇土君以外は、何れも初めて熊次の家に來る人々であつた。相談事には何時も除け物の熊次も、吾家に開かるる會議に座をはづす事も出來なかつた。

「熊は何も知らんもん。」

父が會て斯く嘆じた。全く兄の仕事については、熊次は何も知らなかつた。知らされもせず、知らうともしなかつた。社員といふ條、内輪の人々を前にして、父は先づ腑甲斐ない熊次についての述懐から始めた。

「これが居ながら。」

と口惜くちをしさうに父は顯あこで熊次をしやくつた。

宇土君の胸算は出來て居た。加世田が流用した三千圓は社の負債とし、年七歩の利子を月々差上げる事にします、と明言した。それは父を満足させた。さしより隠宅の生活費が、一部安定されたのである。

おくれて來た栃原君が、此時長谷部さんの話と云ふのを取り次いだ。それは有望有利な臺灣鐵

て加世田君を訪ふた父がそれを見て喜び、自分用の簾を注文などしたものだ。無口でしんねりの加世田君は、何時しか吉原に耽溺して、社の財政を攪かきました。さう云へば、いつも月末には待ちかねた顔を二階の編輯局に見せて加世田君が配つてあるく鼠色の封筒に、先々月は半額しか入つて居ず、次の十五日に残半額を持つて來たりした。先月は月の中には到頭持つて來なかつた。家庭雜誌の編輯で社會記者の吟夢君は、加世田君が糸織の筒袖を着たりして居る贅澤に驚いて居た。宇土君の詰問で、加世田君はほつりほつりと罪狀を自白した。行く行く三池紡績の若干株を興ふると云ふ社長の口約束などを加世田君は提起して、辯疏の一端に代へたが、然し加世田君の使ひ込みは明白であつた。加世田君は罷やめられ、丸鬚の細君はまた加世田君の氣づかぬ内に逸早く貯金の通帳や印形を差押へて、「これ欲しいでせう」と加世田君の眼の前に通帳を振つて見せた。加世田君の處分はそれで濟んだが、面倒がまだ残つた。肥後の家では、熊本に地所家屋と故郷葦北に田畑を有ち、其収入が専ら父母の生活費に宛てられて居た。兄が出發前に、葦北の地所だけ賣却され、三千餘圓は一先づ社に保管を托してあつた。熊次に譲られた地所代の三百圓未滿も其中にあつた。それは悉く加世田君に流用されてしまつた事が分つた。

何は知らずとも、翻譯係で毎日ジヤパンメエルを見る熊次は、郵船の發着だけは誰よりも知つて居らねばならなかつた。

座が白けた。白けたままに皆そこそこ匆々に罷まかつた。

「臺灣鐵道は出アたり。」

と父が柝原君の不快を漏らした。肌はだざはりの滑つくく掴つかへどころのないやうな柝原君を、父は好かなかつた。熊次の口にも柝原君は合はなかつた。「輕けい々けい乎いこたる小丈夫しょうじやうふ」と柝原君もそれとなく熊次に當てつけた。

翌日父は母と逗子へ歸つて往つた。歸る前に、父が熊次に注意した。此際だから、本宅からの月々を半減にしたら如何か。資産分與に譲られた三池紡績株一千圓は、明治三十一年一月に株券を渡さるるまで、利子代として月々十圓本宅から受取つて居た。

「卿ぬしが其さう様いふ心づきが顔色に見えたけん。」

と父がちろり熊次の顔を見た。

其昔、珍しく社の窮狀を兄に明かされた時、何の足たしにはならなくも無月給を申出た事もある

道の事についてであつた。長谷部さんは父と同じ沼山門下で、父が地方に居た間に、長谷部さんは中央に出て、其處此處の縣に令となり、男爵になつて居た。先祖は大石内藏之助を介錯したと云ふ歴史をもつ細川家でも相當士分の長谷部さんは、同じ沼山門下でも氣位高く、身分は郷士で頭の低い小心な父を昔の名の「定助さん、定助さん」と心易く扱ふた。其長谷部さんの勸告で、父は曾て九州の金邊鐵道の株を買つたが、拂ひ込んでも拂ひ込んでも鐵道は出來ず、到頭捨てて、了ふた。其埋合はせが臺灣鐵道と謂ふのであつた。十五年前長谷部さんが中央から熊本に下つて紫溟會と云ふ政黨を組織した時、舊友の言に聽いて一も二もなく賛成し、直ぐ後でそれが御用政黨と分つて、「竹馬の友に賣られた」と憤り、同志と筑後まで後追かけて脱會の告別をした父は、金邊鐵道で又候長谷部さんに擔がれたやうなものであつた。

臺灣鐵道に父は生返事して、いづれ悴に手紙を出したいが、外國郵便は何時出るかと誰を指すでもなく問ひはじめた。

最初から不快な顔をして居た山下君が、此時口を出した。

「それは熊次さんが一番知つとんなはります。」

三

曇れば蒸し、照れば烘る梅雨天は、矢つぎ早の刺戟に弱り切つた熊次の神経を日一日と興奮させ、揉みくちやにして往つた。青葉の蔭暗い座敷に、彼は「すつる命」の續稿を口々書いたが、わが生み出さぬ翻案などは、何の樂にもならなかつた。直ぐ三十と云ふ年齢をして、新聞にはぎごちない翻案、齡の十歳も下の鴨志田君の弟が編輯する雑誌には、相も變らぬ六號活字の翻譯か譯述ものの雜錄ばかり。熊次は段々社に出るも臆劫になり、晩く出て早く歸り、新聞にのせる海外時事の報道も次第に疎略になつて了ふた。

日は一日と暑くなり、熊次の頭は亂れて暗くなつた。面白くなくて、面白くなくて、詮方が無い。此ままではならぬ。如何にかせねばならぬ。然し如何すればよいか。それは分らぬ。日に荒む夫の氣分に、駒子は唯はらはらして、慰めるすべを知らなかつた。臆病者の熊次は、用心に刀を寄せて寢た。枕刀は不覺をとると聞いて、刀はいつも蒲團の左下に入れて寢た。祖

熊次である。父の注意に、異議は言はなかつた。然し何となく面白くなかつた。

山下君の注意通り、日ならず兄に宛てた父の手紙が、上封をして仕出すべく熊次に届いた。

中には父が書かせた本莊あらため都築^{つづき}さんの手紙もあつた。社長の妻の兄の力夫さんは、後入だけに加世田君の下に事務をとつて居た。主任の仕方には不審も不満もあつたが、「徳義を守つて」黙つて居た、と都築君の覺書には書いてあつた。

父が逗子へ歸つて程なく、海舟家の家扶で差配の江戸さんが、海舟翁の書一幅を持つて來た。

それは近頃結婚までさせられた禮心から特に社長の留守に心を致す小森君が、杖柱のかかり子を洋行させて淋しい老人を慰むるよすがに、例の無遠慮に海舟翁に押かけて書いてもらつた一幅であつた。熊次は第一の便でそれを逗子に届けた。それは父に宛てた五言律で「膝下有此兒、卓爾一紫峰」と云ふ句があつた。旅費が何程出來たかと訊^きき、よくそれだけ出來たと喜び、船中でボォイにやれと手づから銀貨を二十圓兄にくれた此翁が、父への五言律の贈物は不思議でなかつた。同時に熊次は外國郵便の封筒を書いたり、慰問の贈詩の取次をしたりする外に何の能もない自分を慙^{もはれ}ますには居られなかつた。

笑ふた。誰彼の差別なく手を取つて引寄せたい。引握^{ひん}りたい。抱きたい。それは好い氣もちである。くよくよ思ふ事などは一つもなかつた。「醉裏乾坤大、壺中日月長」と水滸傳の名句は噓でなかつた。斯様に天地が潤いものとは知らなかつた。水瓜の皮を投げ捨てると、熊次は舌舐めすりながら、力足踏みしめ踏みしめ、人込みの夜の銀座を歩いて、土橋から車で歸つた。何時になく陽氣な熊次の歸りを、駒子は喜び迎へた。斯様な機嫌の熊次を見た事はない。

「今夜は少し酒を飲んで來たんです。女の手でも引握りたくなつてね。」

駒子は呆氣にとられた。

去年まで借りて居た一人寢の小蚊帳を、逗子引越について義姉が取り返へしたので、熊次の家には蚊帳が一張しかなかつた。熊次が脇差で切り破り、駒子が繕ふて、緑色のみみず腫れに處々膨^{ふく}れ上つて居る蚊帳である。一張しかない蚊帳に、女中も其隅に寢た。實子が居た程は四人、今は三人、床前から主人、主婦、女中と云ふ順序に寢る。

ある夜、熊次は岸破^{がは}と起きた。

「おい、俺^{おれ}が真中に寢る。卓を持つて來い。」

父が細川侯から拜領の鐔つばに九曜の紋を散らした脇差である。實子がもう寢靜まつた後、熊次は寢ても寢つかれなく、寢がへりばかりうつて居たが、眸まゆと唸る瞬間に、寢ながら脇差を抜いて、すつと縦たてに蚊帳を切つた。手筈がないので、二刀三刀つづけさまに切つた。

「あぶない！」

驚いて駒子をとめる。熊次は黙つて刀を鞘さやに納をさめた。駒子はランプをつけて、夜深くるまで蚊帳を繕つくろふた。

實子が小學校に出た後は、駒子と二人である。熊次は虚無黨小説翻案の筆を投げて、立上るなり脇差を抜いて無暗に振り廻まわはした。颯さつ、颯さつと風を截つて白刃が唸る。

「がちり。」

楓つばきの文卓の角に當ると、切先が少し曲つた。折れずに曲るなまくら刀。事々しく譲られた大小二本の一本は、立派ななまくら物であつた。無限に與へねばならぬ大名の刀劍藏には、こんななまくらなまくらの要もあつた。熊次はぐさと脇差を疊に突き立てた。向ふさまに兩手で押すと、八大傳の墓六が質物の村雨丸を其ままだに、脇差は鍋の蔓になつた。引ぬいて、熊次は庭に投げた。

大工が大勢入つて居る。六歳の男の子が、普請場に來て遊ぶ。大工が鋸の齒の下に幾箇所もこる栗色に塗つた四角い木屑を、一つ又一つ拾つては嬉しがる。六歳の男の子は、名を熊次と云ふた。脾弱いので、まだ乳母が居た。日ならず普請が出来上る。これまでの茅葺の外に、瓦葺の中二階が一棟、天井無しだが二階建の瓦葺が更に一棟建て増されて、熊次は誇らしい氣もちになつた。中二階は立派であつた。地袋の金地に花鳥が極彩色に畫かれ、押入の襖には熊太叔の筆と後で知つた墨畫の山水が貼られ、障子は中硝子にして、ワシントンの版畫肖像と楠公父子櫻井訣別の石版畫が挂つて居る中二階は、父の居間になつた。それは其夏御巡幸になつた明治天皇の御爲に建てられた御廁を、縣官の父が拂ひ下げたものとは、三十年の後熊本に二度目の御巡幸があつた其時に初めて知つた。茅葺の方の座敷には、熊次を愛する白髪の祖父が居た。見馴れぬ若い女が、其座敷に來てお辭儀をする。「龜つち名をくるるで」と祖父が曰ふ。父——五十二である事を後で知つた——が酒に酔ふて歸つて來る。くたびれたといふて、晝日中中二階に床をとらせる。母が入つて行く。やがて龜が入つて行く。好奇心が六歳の童を中二階に牽きつける。締切つた襖の外に、六歳の童はちいと耳を澄ます。乳母が來て、遽て熊次を

父が縣官時代、洋學校教師の米人と交際があつたので、六七歳の熊次が牛肉饅頭を食ふて金釦の洋服を着たりすれば、父はよく簾よしの寢臺に晝寢をした。熊次が十二の夏休に、同志社の教場にテエブルを並べて、幼友達と寢た事がある。夜中に床ゆかの上に眠りこけては、また夢中にござこそ這ひ上つたものだ。其記憶から、十八の夏は伊豫の今治で、廢校になつた中學校の二階に大卓を寢臺にした。夏は疊の上より寢臺だ。

熊次の權幕に、駒子は竦すくんだ。

熊次はせき立てて、文卓と蒲團で蚊帳の眞中に寢臺を作つた。文卓が短いので、足の方に餉臺ちやふたいを繼ぎ足した。疊の上より高上りだが、寢工合がよくない。舌鼓うつて、熊次は急造寢臺を廢やした。

寢臺を廢せば、眞中に寢る理由は無い。例の通り、床の間寄りの端に熊次は寢た。

駒子は安心したらしく、やがて寢息が聞こえた。

* * * * *

* * * * *

「え、そりや利くです。」

「少しもらへませんか？」

「さあ、犬に如何するのです？」

「え、犬に療治をしてやらうと思ふのですが。」

「さあ、素人ぢや危険ですね。」

藥局員が今一人のと顔見合はせて、怪訝な容子をした。

「それぢや獸醫にかけませう。」

「ええ、それがいいですね。」

熊次は眼を瞑つて醫院を出た。

其夕駒子は何時ものやうに沈んだ顔の熊次を迎へた。熊次は先夜のやうに酒を飲んで陽氣ではなかつた。彼は言葉少なに、而して眼を見据ゑて居た。

夕食も済むと、例より早く蚊帳を釣らせて寢た。而して駒子に自分を扇がせた。昨夜のやうに眞中に寢るとも、寢臺にとも言はなかつた。

引き立てる。

* * * * *

熊次は身を斜にして轉ころげるやうに漸次に蚊帳の裾へ下つた。徐々駒子の足下に廻つた。駒子を過ぎて、龜に近づいた。熊次は其處に長くなつて、やや久しく二人の寢息を聞いた。

熊次はまた徐々に自分の位置に復へる自分を見出した。

一寢入すると、もう夏の夜は明けた。

熊次は日記に書いた。

「龜を見舞ふ。」

其日の午後、熊次はぶらりと社を出る自分を見出した。彼は敷寄屋橋近い小さな醫院に入つて往つた。午後の醫院は森閑として居た。眠むさうな若い男が、藥局から熊次を見下ろした。

「何か御用ですか？」

「え、犬にクロロフォルムが利きますか？」

かつた。

龜は臺所に居るのか、何をして居るか、物音もさせない。家内は森として、蟬の音が煎^いつくやう。

午後も大分過ぐる頃、格子戸ががらり開いた。

「御免。」

其聲は熊次の肝に響いた。紛^{まが}ふ方もない宇土君の聲である。

熊次は度胸を据ゑた。

宇土君と相對して座敷に座わつた熊次は、宇土君が口を切るまで口を開かなかつた。

壁一重隣の三疊には、駒子が居る。

「此頃健康は如何です？」

宇土君は始めた。而して電報外報は都合により新山君にやらせてよいから、健康次第では毎日
出社しなくも、續き物などは自宅から書き送つてもよい、と云ふ話をした。而して
「寅一さんも留守の事ですから。」

扇ぐ手もだるくなる頃、熊次はいびき甦を立てた。

駒子はほつと息をついて、寢衣に更えた。龜も呼んで寢させた。

夜が深けた。

不圖あたりの騒ぎに、駒子は眼をさました。龜が争ふけはひを感じた。胸が騒ぐ。急いで蠟燭をつけた。

熊次はもう自分の床に彼方向きになつて居た。

駒子はひしと龜を抱いた。夜の明くるまで、抱きすくめた。

* * *

駒子はその日隣の三疊を出なかつた。三疊のテーブルの下に頭を突込んで横になつたまま搔き掻かつた。澤山の髪毛をわがねて、彼女は手すさびに人形を造つた。子供の昔は、草をつかねてそんな人形を造つた事もあつた。

熊次も出社しなかつた。彼は座敷に一人居て、何見るとも何思ふともなく唯眼を据ゑて、度々欠伸をした。もう今明に書かねばならぬ家庭雑誌の附録が頭にちらと浮んだが、それ所ではな

嘘でなく、彼は駒子に謝罪した。龜を呼んで詫びた。今後は妹と看做す事を約した。

「可哀さうぢやありませんか。」

息をはづませながら駒子が云ふた。熊次は眼をそらした。

＊

＊

＊

＊

＊

其日限り熊次は出版社をやめた。厄介な家庭雑誌の附録を、吟夢君へ手紙一本でやめにした。而して暢々した。意を決めれば、自由は直ぐ手近にあつた。

ごたごたのかたづくかかたづかぬに、駒子に女客があつた。竹下のお秋さんは、駒子の従姉の女で、駒子より二つも上であつた。駒子の父の姉お友伯母が、志貴家に嫁して一子二女を生むだ。一子は昨春熊本で熊次と清人の衝突に仲入りをした志貴の讓次さん、二女は相ついで笹井家に縁づいた。お秋さんは亡くなつた姉の方の女であつた。八方が獄から流れ出る清らかな川を庭に引いて大きな泉水など湛へた笹井家は、界限切つての豪家で、早くから耶蘇信者であつた。美しいお秋さんと、昨春亡くなつた駒子の異母兄勇次兄の間に、早くから婚約が出来て居た。豪家の愛女、邸内の大桐を伐つて素晴らしい竈箒などが出来上つた。駒子の父が往つて見て、そ

と言ふた。

熊次は肩透しを吃つたやうに、すかと張り合ひがぬけた。昂奮した彼の頭には、駒子が内報で宇土君が飛んで來たかとはかり受取れた。偶然に來合はしたものは、決して思はれなかつた。でなくも、今に隣の三疊から駒子が顔を出すだらう。而してトドのつまりは、此前清人君が持出した離縁話が、今度は媒妁の宇土君の口から出るのがなあらう、と思ふて居た。

話の容子を見れば、宇土君は何も知つて居ない。

熊次は三疊を隔ての壁を見つめた。隣室はひっそりして、人のけはひも聞こえぬ。

「お駒さんは？」

「少し不鹽梅で寢て居ます。」

「お駒さんによろしく。」

玄關の格子戸がしまるまで、三疊には物音もしなかつた。

熊次は長い息をついた。

最悪を覺期した彼は、尋常に復へる機會を與へられて、羞恥と感謝で胸が一ぱいになつた。

竹下さんも丁度東京に居合はせ、駒子の母から五圓借りてお祝に包まうとして止められた事を熊次も聞いて居た。今度は竹下さんの上京に、お秋さんも同伴したのであつた。

駒子の室では、若い女の聲がきれぎれに聞こゆると思ふと、程なく女客は辭し去つた。駒子が忙しいと云ふて斷つたのであつた。

熊次は駒子にお秋さん答訪を勧めた。駒子は氣味が惡かつた。熊次が外出を駒子に許すは、全く珍らしい事であつた。勧めて出すは、尙更であつた。昨日の今日でもある。駒子は氣が進まなかつた。然し熊次が懇に勧めるので其氣になり、あくる日の午後、車を急がせて竹下夫婦が宿の芝濱館に往つた。お秋さんは竹下さんを前にして、如何しても耶蘇信者でなければ、と熊次に連れ添ふ駒子を羨ましさうな口ぶりを見せた。竹下さんはにやにやして居た。駒子は何と答へやうもなかつた。彼女自身が慰めて欲しい負傷者であつた。駒子はゆつくり話す氣になれなかつた。家も氣がかりであつた。匆々に暇乞して 待たせた車に乗つた。

車が家路へ走り出すと、駒子は急に心細くなつた。歸る家がなくなつたやうな氣がする。一度ならず二度までも夫の心は自分をはなれた。他の女に向ふた。自分は愛せられては居ない。自

んな贅澤娘は媳にはもらはん、もらはん、とぶつきら棒に言ひ放つた。姪に當るお秋さんの繼母もむつとした。「叔父さんもあんまりな。」向つ腹の立て合ひで、折角の縁は破れて了ふた。

お秋さんもがっかりしたが、勇次兄には詮められぬ遺憾であつた。勇次兄の不機嫌はそれから始まつた。父に對する不快を、子はなさぬ仲の駒子が母に漏らした。母も心配して、勇次の媳擇みには一方ならぬ骨を折つた。自身妻を見立てに近郷近在を歩いた勇次兄は、何の娘も何の娘も氣に入らなかつた。其揚句到頭おすがさんに落ちついて、一子夏雄を残して勇次兄は逝いた。一方大叔父に刎ねられた花嫁は、近郷の川端かははたと云ふ人に嫁いだ。同志社での上級生として、川端さんは熊次も識つて居た。一度五年生のストライキで同志社を飛び出し、熊次が二度目の同志社時代には、復歸組の一人と指目されて、頬髯の生えた顔に冴えない色を見せて居た。後お秋さんと結婚し、京都に住んで居たが、其内川端さんは肺病で亡くなり、お秋さんは子なくて若い寡婦になつた。駒子の母が氣の毒がつて、竹下と云ふ陸軍中尉にお秋さんを媒妁した。熊本では、菊池家も酒屋のかたはら、小金の融通などする處から、駒子の母は若い軍人に知合が多く、世話好きの彼女が媒妁した軍人夫婦は、竹下夫婦のみではなかつた。駒子の結婚の時、

第二十六章　　ごん底から　　其一

一

午後の瀛車は暑かった。

暮れて沼津で下り、川口から伊豆行の小蒸瀛に乗った。やがて瀛笛と共に、沼津の火光を後に、小蒸瀛は南を指して走りはじめた。熊次は甲板の筵むしろに座わつて、涼しい海の夜風に吹かれた。追々船が揺れ出した。熊次は氣もちが悪くなつた。仕立下ろしの羽織のまなごり仰になつた。而して船に身を任せて、船と上つたり下つたりした。眼を開くと、空は星の夜であつた。熊次は眼を閉ぢた。

少しうとうとしたと思ふと、ぼうと瀛笛が吠え、船はもう戸田灣内に入つて居た。右手に長く延ひいた黒龍のやうな陸の影、其眼玉でもあるかのやうに灯ひが一つ向ふの端に光つて居る。船が

分を愛せぬ男の家が、わが家であらうか？

忽駒子は胸騒ぎがしはじめた。氣が氣でなくなつた。走る車がもどかしくさへなつた。車が海舟邸の裏門に入るまでは、駒子は息もつかなくつた。

龜が出迎へた。熊次は座敷にむつとりして居た。駒子は長い息をついた。

※ ※ ※

家内が氣まづくなつた。出社をやめたはいが、駒子や龜にきまりの悪い主人顔を見せて終日つくねんと居られたものでもない。出て來やう。旅して頭を洗つて來やう。熊次はさう思ふた。駒子も直ぐ同意し、早速一ツ木に往つて、横縞の夏羽織地を買つて來て、仕立はじめた。

何處へ往かう？ 無論逗子でない。新聞は此頃伊豆は戸田^{へた}の海水浴を取り立てて吹聴して居る。戸田へ往かう。

羽織が仕立上ると、熊次は直ぐヅツクの鞆一つ蹴込にのせて、車を新橋に急がせた。

は、これも見道せぬ撫子や赤百合の可憐さ。嫌な蛇の氣遣も忘れて、熊次はモデルに濟まぬまづいスケッチの數枚を造つた。右の耳には松風、左の耳には波の音、潮の香を吸ひ、松の香を吐き、半日の寫生に熊次はすべてを忘れ果てた。

景色が好い。魚の味が好い。泳ぐに灣の水は淨く深く靜かである。宿は靜かで、はなれは殊に靜に、呼ばねば人も來ぬ。戸田は好い處、全く氣に入つた。斯く熊次は駒子に書いた。而して買物に行く宿の小舟で、灣の向ふの戸田に渡り、阪を上つて其處の小さな郵便局で手紙を出した。また歸りの舟で灣を横ぎり、宿の男と話し話し歸るも興があつた。

好い處に來た、と重ねて熊次は思ふた。

夜が來た。夕食を終へて戸を立ててしまへば、全く世界は此れきりの四疊半であつた。松風がかすかに溜息をつく。間^まを正しく波の音が時を拍つ。耳に入るは、そればかり。人聲一つせぬ。ランプの光を眺めて、獨りつくねんとした熊次は、段々淋しくなつた。ややに恐ろしくなつた。此様な時には、寝る事だ。床^{とこ}は饌を下げる時女中がのべて置いた。此處では蚊帳もつらぬ。

熊次は吻とランプを吹き消して、床に就いた。

とまると、其灯の方から櫓聲が軋々と近寄つて、舳が來た。戸田上りは、熊次一人であつた。棧橋につく。

「お客様だよう。

と舳から呼ぶと、提灯つけて海水浴の女中が迎へに來た。熊次は後について松林の中の旅館に往つた。静かな室を、といふ註文で、彼は全く建てはなしの四疊半に導かれた。

好い處へ來た、と熊次は思ふた。

確にそれは好い處であつた。北風をよくる大瀬岬を右の腕とすれば、左の腕をのべてゆたかに戸田灣をかき抱いたやうな御濱の半嶋。其處には此旅館の外一軒の人家もない全くの別天地。

明くる朝、朝飯もそこそこ寫生道具片手に半嶋をぶらぶらする熊次は、歩々に好景を見出した。

紫黒の大石小石の磊々する半嶋は、年經る松の林であつた。松の半嶋を中にして、東は青く深

く靜に戸田一灣の水が湛え、西は御前崎までうちわたす濶々した駿河灣を押し上る太平洋のうねりが白く撞、撞と磯に碎ける。欵いだ松の下枝越し北を見れば、緑の海に深く根ざす岬三重、

一番向ふの大瀬岬を見越して碧一色の夏の富士、畫いて見よ貌に此方を見て居る。石々の間に

ふて居る。今にも吹き飛ばされさうに、粗造なはなれが悲鳴を上げる。みしみしと潰れさうな音を立てる。

昨夜は静かで恐かつた。今夜の怒號は尙手烈い。一息ついてまた吹き出す風毎に、熊次はびちりとした。ランプの照らす狭い室内を見廻した。此處には吾が外に確に誰も居ぬ。熊次は三尺の戸口を見た。何時戸口が開いて、何かが其處から現はれまいものでもない。熊次は到頭蝙蝠傘で、入口の戸を心張つた。

熊次は息を屏めた。

寢やうたつて、寢られる事でない。

不圖人聲が呼ぶ。ぶるぶると總毛立つて、熊次は聞耳を立てた。それは唯風の怒號であつた。

熊次は恐怖で氣も狂ひさうな自分を見た。

此苛責の函の中に、夜一夜責めさいなまるる事は、所詮堪えられぬ。

熊次は猶我慢した。馬鹿らしい。臆病にも程がある。物笑ひだ。

突然撞と夥しい物音がして、一陣の猛風がはなれを襲ふた。

昨夜は永い間の疲れで、前後も知らずぐすり寝た。今夜はちつとも寝つかれぬ。眼を開けても、閉ぢても、眞暗い中に、何かが歌々かうかうとわれを眠らせぬ。思ふと恐い。思はぬに限る。思ふまいと思ふ。思ふまい、思ふまいの獨相撲に疲れ果てて、熊次は明方近く不安な眠に落ちた。

二日目の夜が明けた。明ければ當り前の夏の一日であつた。熊次はまた寫生道具持つて、半嶋をぶらついた。それは昨日のままの松風と海と石と花と富士とであつた。然し昨日の興はさめて了ふた。すべてがつまらぬ。面白くない。此日の末には夜がある。夜が來て、また唯一人の淋しいはなれに寝るのだ。何も思はぬ熊次は、そればかり思ふた。朝からもう夜を恐れた。あの淋しいはなれに、唯つた一人夜に面むかふのかと思へば、殆んど堪えられぬ。

熊次は味氣ない一日を暮らした。

夕方から風が出た。夕饌を女中が引いて去つた後は、外の騒々しさも一倍ひどくなつた中に、熊次は一人殘された。

熊次はランプの下に、昨日今日の寫生をひろげた。然し彼が眼も心も、畫の上にはなかつた。外があまりに荒れて居る。彼の四疊半を取りこめて、風から大風になつた夜嵐が、凄まじく狂

一碧樓に宿をとると、直ぐ三保へ遠征に出かけた。江尻から三保へ渡り、三保松原を少しあるいて、小舟を雇ふて興津に歸つた。風騒ぐ清見潟の景色はつまらなく、畫帖は少しも肥えなかつた。隣座敷の酒宴を聞きつつ、一碧樓の二階の小座敷に、熊次は寢られぬ夜を過した。

明くる日の夕、熊次は上りの駕車に乗つた。

新橋に着いたのは、夜の十二時近かつた。

海舟邸の裏門で車を歸へして、門の前に立つた。勿論門はしまつて居る。星明りにわが家の格子窓を仰いだ。寢靜まつて居るらしく、何の光も見えぬ。戸田からたよりしたきりなので、駒子は無論まだ戸田と思ふて居る。

熊次は鞆を門内に投げ込んだ。次に下駄をぬいで投げ込んだ。板塀に飛びついて、やをら塀を跨げて、内側の横木に足踏みかけてひらりと飛び下りるのは、身輕な熊次に二分とたたぬ仕事であつた。彼は下駄をはき、鞆を提げて、臺所口に廻つた。

いきなり熊次は臺所の戸をはづしにかかつた。締がしつかりして、中々はづれない。少しやつては止め、また力を入れて揺つた。やつと戸の一枚がはづれた。熊次は土間に入り、下駄をぬ

突と立つて、心張をはづすと、熊次は下駄突かけて、眞黒い風の中を母屋に急いだ。

「はなれは騒々しくて寢られぬ。何處か此方に置いてもらはう。」

人近い二階の一室に、熊次は初めて息をついた。

最早御濱も澤山だ。

あくる日の午後、熊次は戸田に渡つた。八月に入つたばかりなのに、其處の山寺にはもうつくつくばうしが忙しく秋を鳴いて居る。熊次は戸田から舂で小蒸氣に乗つて、戸田灣を後にした。三時間の後、熊次は沼津に上つて、牛臥の海水浴旅館の一室に居た。

麓に松原つづきをあしらつた鷹巢おしず一帶の山を斜に、眞城山から大瀬岬を向ふに見る牛臥の景色も悪くはなかつた。海中の岩に葭簣よしずの屋根の腰かけ臺があつて、それを中心に泳いだり眞裸で舟を漕いだりする都の青年少年で海は賑やかであつた。室内で下手なスケッチをして居ると、隣から眞黒にやけた若い顔がいくつもさし覗いては話しかける。此處に御濱の恐い寂寥は無。其かはり人間のうるささがある。

熊次は匆々に沼津を立つて興津に移つた。

臺所に賊を邀^{むか}へ撃^うつたのである。賊は夫であつた。一目にそれと見てとつても、向けた刀が中々下ろせなかつた。

健氣^{けんけ}な妻の留守が、熊次を悦ばせた。思ひがけない夫の歸りも、駒子を喜ばせた。

あくる日、女中を使に出した後で、駒子は色々留守の心もちを語つた。龜はその事については、國を出る時、祖母から耳のほぐる程言はれて居たさう。駒子はまた龜から色々世間咄^{はなし}を聞いた。子守して芝公園に往つたりして居ると、眞晝中でも龜は色々の事を見た。龜は曾て主人が幼い姪の腹を接吻するのを變だ、と云ふたさうな。

「龜の話で、死にたくなりました。」

と駒子は曰ふのであつた。

* * *

夏は未だ盛りであつた。氷川町の一日はたまらなく暑く永かつた。未だ遊び足らぬ熊次は、伊豆駿河から歸つて三日目の朝、靈岸嶋から木更津行の汽船に乗つた。鹿野山から房州を彼は志した。

いで、手さぐりに板の間に上つた。

向ふの障子がばつと明るくなつた。

と思ふと、其障子が開く同時に、

「お、お、お、お——」

脅すやうな、悸えたやうな、せつばつまつた、情無さが一ぱいの女の聲の中から、光る長いものがづうと熊次に向つて來た。白刃！ 驚として、熊次は逃身になつた。唯見れば、切先の三尺向ふに、其柄を兩手に握り持つは駒子である。

熊次は猶逃身に立竦む。刀を捨てて、駒子は夫の胸に顔を埋めた。

駒子は寢ては居なかつた。熊次が預かつた書籍の目録を作つて置けと言ひ置いたので、今宵もまだ起きてそれを書いて居た。がたがたと云ふ音に、屹と耳を立てた。止むではまたがたと響く。確に外から戸をはづす音。てつきり賊である。駒子は寢て居る女中を揺り起した。音はいよいよ高く、もう入つて來る足音がする。脇差は熊次がめちやめちやにしたが、長さ三尺同田貫の大刀があつた。駒子はそれを引抜いて、がたがた震へる女中に強てランプを持たし、

原稿を書いて社に送つた。然し熊次の仕事は、當分文より畫であつた。清爽な空氣と、快活な眺望は、熊次を山頂の高原の此處其處に引張り廻はした。

八十戸の宿が共に有つ唯一の井、三十人の生徒をもつ無住の古寺を宛てた小學校、杉木立森々とした中に古びた鹿野神社、それ等を見て打開いた山頂の高原に出ると、日は眞向から照りつけながら、八月の秋が身にしてみた。東の方はなだれ下る山の裾が幾縷にも岐れて、九十九谷をなして居る。原上は一面の青草、それを刺繍して桔梗は紫に、山百合花は白く、撫子は淡紅に、女郎花は黄に、草の上に足投げ出してスケッチをして居れば、涼しい風の吹くなべに草の香野花の香が吻々と顔に吹かけて来る。空の青さ、雲の白さ、向ふからほくほく歩み来る草負馬と草刈人の面白さ。熊次は氣も心も舞々として輕くなつた。寫生し果てて、百合や桔梗、撫子、女郎花など一抱も折つて歸ると、宿の主が大きな手桶に活けて廣縁に据ゑてくれた。熊次はまた其花桶を前景にして、富津の洲かけて東京灣口の遠景の覺えないスケッチを試みた。熊次は鹿野山が好きになつた。

然し好きな處にも彼は落ちつけなかつた。何か彼を次ぎから次ぎへと驅りやつた。

遠淺の沖に小蒸氣がとまると、少し舳にのり、やがてさぶさぶ海の中まで引込んで来る車に乗つて、木更津に上つた。木更津から山へ向ふた。八月の日はかんかん照りつけ、眞青な空に眞白な雲がむくむくと、耳に煎りつく油蟬、車夫の背から汗が流れた。草牛さうぎうから山路にかかり、ひたもの上つて到頭鹿野山の頂上に來た。驛門を入ると、八十戸の山宿さんしゆくがある。宿の中程から折れて、呦々館いいうくわんといふ大きな洋館の玄關に車夫は梶棒を下ろした。東京で鹿鳴館が盛つた明治二十年に、工費三萬圓もかけて造られた總二階建の木造洋館である。熊次は下階の西角、二十疊の廣間に案内された。一間幅の廣縁から富士をかけて東京灣、更に相模灣の夏の夕風ゆふなまが一目に見晴らされた。

海拔一千餘尺の鹿野山頂は、朗ほろらかに涼しかった。山よりも海が盛る頃で、山の上の此大きな宿に、内人も外人も避暑の客は何程もなく、自分を迎ふる爲かの如く靜かなのもうれしかった。隣の室に四十前後の婦人と十四五の娘と十歳位の男の子の一連れは、日清戦争に夫と父とを献げた家族らしく、言葉靜に子女を諭す婦人の聲が、しんみりと熊次の耳に響いた。

熊次もなまけて居ては濟まなかつた。「すつる命」の原書を持つて來たので、努めて二回ばかり

うな氣がした。

熊次が二度目の留守中、無遠慮な龜は、駒子の顔が鬼のやうになる時がある、と駒子に言ふた。それは駒子に堪えられぬ侮辱であつた。色々を思ひ慮はかつて、駒子は斷然龜を出して了ふたのであつた。

後で龜が世話先の辻さんに往つて、あまり小さいからお暇が出ました、と言ふた事を聞いた。然しわが不仕だらが母の老人會仲間の辻のお婆さんに知られた事を、熊次は疑ふ事が出来なかつた。

鹿野山に来て四日目に、熊次は草鞋を穿いて朝早く宿を立つた。淋しい山路をほくほく歩いて、鬼^き泪^{なだめ}山から枇杷の葉茂る海岸の湊村に下りた。それから車に乗つて、海沿ひを金谷、鋸山裾の切り通しを通つて保田に來た。

保田は二十歳の夏に京都から東京に上つて、それから海水浴に來た處。ますやと云ふ宿であつた。二十三の初夏にも、一週間共ますやに來て「石美人」を書いた。六年後に熊次は三たび其宿に泊つた。然し清涼な天上の鹿野山の後に、保田は無^む下に殺風景であつた。

保田には唯一夜寢て、熊次は汽船で北條館山に向ふた。保田から向ふは初めてであつた。途中の綠あざやかな磯山、岩礁^{がんしょう}つづきも面白く、鷹嶋、沖の嶋の二つ並んだ間から紫の富士が覗く鏡が浦の夕景色は殊に好かつた。然し水にも陸にも溢るるやうな海水浴客の雑沓が、熊次を落ちつかせなかつた。北條の場末、汚ない二階に一夜を明かすと、明くる日は直ぐ東京行の汽船に乗つた。而して其日のまだ日が高い内に、熊次は海舟邸の裏門で車を下りて居た。

駒子が喜び迎へた。留守に彼女は預つた書籍の土用干をして、押入にしまつて居た。

龜が見えぬ、と思ふたら、駒子が暇を出したのであつた。熊次は安心なやうな、また濟まぬや

と斷つた。

伊藤さんの聲が笑つた。

「御旅行だつたさうですが、もうお歸りになつたんぢやありませんか。」

駒子是否と言ひ張る外はなかつた。

伊藤さんの用向きは、熊次の甥、大江の進が赤痢に罹つたから日本橋の明治病院に入れる事にした、さし當つての費用は此方で都合をしようか、と謂ふのであつた。留守と云つた手前、駒子は襖一重の座敷に居る熊次に相談に来る事もならなかつた。伊藤さんによろしく頼む外はなかつた。

大江の三男の進は、此春上京して錦城中學に入つて居た。兄の洋行によつて、進の學資なども熊次の手に預けられた。金不足の熊次は、これ幸ひに時々それを流用した。大江の兄弟の中、總領の益雄は、高等工業の學生で、稀に熊次の家に来るにも、直ぐ近所の蕎麥屋で午食を濟して來た。次男の直は、何處の親類にも平氣に長逗留した。三番目の進は莞爾々々して遠慮した。熊次は此甥が十歳位の昔、叔父から *Bad girl* と云ふ英語を教はつて、其頃同じ屋敷の母屋を

鹿野山で續けはじめた新聞の續き物も、直ぐやめた。暑くて何も爲る氣に熊次はなれなかつた。寫生も當分は駄目だつた。朝から晩まで座敷にごろごろして居る熊次は、閑つぶしに講談本を讀む事をはじめた。頭をつかはぬ讀みものとして、これに越したものはなかつた。

何かはじめると一氣に熱中する癖で、熊次は朝から晩まで講談物に讀み耽つた。三四百頁のものは直ぐ見てしまうので、駒子は日に二度も一ツ木の貸本屋に通ふた。軍記、實錄、仇討、俠客物、圓朝物とあらん限りを熊次は見た。大同小異の話し振り、きまつた惡ふざけ、講談の世界も熊次に珍らしくないものになつた。

熊次が講談本に讀み耽つて居る内、ある日聞馴れぬ聲が玄關に音のふた。阿蘇の人、伊藤さんは伊倉の伯母の知り人で、苦學生として伯母から紹介されて居た。然し一度も會つた事はなかつた。今日も面倒くさいので、熊次は手を振つた。駒子は玄關に出て、きまり惡げに旅行留守

年たたぬに逸早く肺病で亡くなつた人の最後の病床に書いたぶるぶるに震へた文字の手紙は、駒子に言ふて手許に残させてもらうた。まだ瀟車もない甲州入りに、御殿場から石をのせた牛車に便乗して富士の裾野に行く自身を面白可笑しく描いた佐々木さんの手紙は、殊に氣が利いて居た。其佐々木さんが夏休に東京に歸省して、しばらくぶりで訪ねて來たのであつた。熊次が座敷にごろごろして居るので、駒子は友を五疊半に延ひいた。駒子の友は、同窓の一番年少で一番早く人の妻になり、而して義務年限も半歳足らずでやめてしまつて家にばかり居る駒子のそわそわして落ちつかぬあるじ振りを不思議に思ふらしかつた。珍らしい友の來訪に、菓子一つなく、砂糖水一杯のもてなししか出來ぬを、駒子ははづかしい事に思ふた。熊次は到頭顔を出さなかつた。

借りて居た米國宣教師の十一になる腕白娘のケティにいきなり「Bad girl」と浴びせて、大急ぎで逃げて行く姿を忘るる事が出来ぬ。前月の半頃、進は夏休に友達と信州甲州を徒歩旅行し而して富士に上るといふ企を叔父に告げ、預金の中から旅費をとつて往つた。其旅行の結果が赤痢であつたのである。

熊次は駒子を病院に甥の見舞にやつた。而して入院費は學資の中から出す事にした。甥の病床には、旅行に同伴した友人の一二が附添ふて居た。「大江、Coke は？」と一人が言ふた。お客に菓子を出さうかといふのであつた。費用は此方で出す事を直接伊藤さんに斷はらなかつたので、散々金の工面に面倒を見た上鼻明かされた伊藤さんは腹を立て、後年政友會の幹事長として世を殞^{おほ}るまで熊次を無いものに扱ふた。

人嫌ひの熊次に人は來なかつた。人好きの駒子には、駒子の客が來た。佐々木おいつさんは駒子の同窓、同年の東京つ子で、卒業後は甲府の高等女學校に奉職して居た。駒子の同級生は(卒業後も互の消息を通はすために「雁のたより」といふ回章をはじめて居た。薄葉に毛筆でさまざまに書かれたそれが駒子の手に届くと、熊次も見せてもらつて面白いものに讀んだ。卒業後三

第二十七章　　どん底から　　其二

一

果もないやうな八月が夜になつた。

九月の聲を聞くと、流石に朝夕は冷々して、暑い日間も法師蟬は争はれぬ秋を鳴いた。不圖釣の興を起した熊次は、寫生道具と共に、品川で繼竿二本求めて、ぶらりと漚車で鶴見に出かけた。人家の裏で蚯蚓を掘つて、鶴見川に綸いとを垂れたが、小鮒一匹からぬので、足を返へして其處らの村の小さな流れを漁あさつた。もう此處らは此正月川崎の明けの朝ぶらついた處である。あの不快な記憶も、大分遠くなつた。熊次は其方へは頭を閉ぢて、成る可く思はぬ事にして居た。鶴見から川崎へさまよふたあの夜、大工の焚火にあたつた霜の曉、それ等は遠い昔の事のやうになつた。あの朝の寒かつたこと！　霜を射る朝日の昁めきで、眼が開けられなかつた。

熊次の胸にくすぶつて居る不快の煙が、何時となく口を漏れはじめた。彼は新聞社の不快を陳べた。仕事もつまらぬ。周囲も面白くない。新聞社にはもう出ぬ事にした。熊次は斯う言ふた。熊次は社の不平を未だ曾て他^{ひと}に言ふた事はなかつた。駒子も滅多に夫の口から外の不平を聞かされた事はなかつた。龜の事があつた後で、熊次は初めて少しばかり社の不快を言ふた。新山君の事など語つた。駒子は新山と云ふ人が唾を吐いたのだと思ふた。何て失禮な人だらうと思ふた。然しそれだけの事であつた。今夜のやうに熊次が打明けての述懐を、駒子も初めて聞くのであつた。

それは岩原さんにも初耳であつた。

十一の昔、同志社では岩原さんに抱かれて寝た事もあつた。二十歳の暮の同志社飛び出しには、散々岩原さんを手古摺らしたものであつた。氣の弱い、心の定まらぬ同士の岩原さんと熊次の間には、自然の脉が通ふた。昔はわれに一目置いた年下の友が、自分を追ひぬいてずんずん出世して行くに對抗するとはなしに、力強い兄より芽の出ぬ弟に岩原さんの同情はあつた。熊次のグラッドストーン傳に感心して以來は、殊に熊次を高く買つて居た。思ひがけない熊次の鬱

今は田の畔の榛の木は緑に、田川の端に嫁菜の花の紫は薄く、犬蓼の紅は淡く、出穂近い田の面は一面さはさはと青海波をうたして居る。

蚯蚓が盡きて其處らを搜^{さが}して居ると、四十近い農家の男が、背戸から澤山空罎に掘つてくれた。「釣つて上げませう。」と云ひ云ひ、小さい方の釣竿を取ると、里川の少し上手に往つて釣りはじめる。下流で釣る熊次は、遠目に件の男がしきりに竿を上げるのを見た。然し最後に男がくれたのは小鮒の五疋に過ぎなかつた。熊次の獲物は鮓^{そでう}が一疋。竿に羞かしの獲物と、鉛筆のスケッチ一つせぬ寫生帖を携へて、瀛車と徒歩とで熊次はくたびれ切つて歸宅した。

格子戸開けると、茶の間に大勢の聲がして、土間は履物で一ぱいである。駒子が出迎へて、逗子から先刻見えて今夕食中と云ふ。主人の留守に我家貌の賑合を、熊次は不快に思ふた。お客は、小學校も始まるので母が孫の實子連れ、岩原の義兄夫婦、お君諸共來たのであつた。岩原一家は此夏逗子に避暑して上州へ歸りがけであるが、岩原さんは明日順天堂に入院して痔の手術を受ける、といふ事であつた。

冴えぬ熊次を中心に、座敷の話はやはり熊次其人の上に落ちて往つた。

板張りの中二階に陣どつた熊次は、寫生道具と外に居る時が多かつた。森戸の濱でぼろぼろした磯岩の色を出すに苦しんだり、新宿濱の窪い砂路に残る人の足跡を前景に、砂の崖の絶え間から覗く緑の海に白波の立つを寫すに骨を折つた。歸つては晝寢のかはりに星巖詩集を寫したりした。いたづらざかりの甥等が、邪魔をしては其紙を引つたくつた。甥の貞雄は、彼が父の言を其まま「熊次さん、熊次さん」と叔父に言ふた。それを眞似して、弟の熊彦が引つたくつた寫本の紙を振りかざし、「熊次さんにも——らつてねえ」と踊つた。熊次は顔をしかめたが、叱りも得爲なかつた。あらめ屋での父の如く撲る事も得爲なかつた。義姉が苦笑して、皺になつた紙を取り戻してくれたが、子の爲に詫ぶるでもなく、「叔父」とも云はせぬ義姉を、熊次は心の中に怒つた。うるさい子供を避けて、あらめ屋の一室に几を据ゑると、直ぐ隣の室の文學青年が刺を通じて、「すつる命」を云々する。熊次は狐鼠々々とまたあらめ屋を逃げ出した。やはり我家の事だ。十日たたぬに熊次は返子を後にした。

熊次の留守に、駒子はつくづく心細くなつた。前途は如何なることであらう？　一ツ木に狐憑きつねつきの女でよく豫言が中る女が居るといふ事を、駒子はある女中から聞いて居た。熊次の留守に、

憤談を、岩原さんは身を入れて聞いた。義兄の相繼で、熊次の不平談は調子づいた。

母が遽でそれを打消すやうに傍から口を出した。斯様に暑く、鬱陶しい處では、頭も變になる。少しは轉地靜養をしなければ。

岩原一統は翌日去つた。母は尙一夜泊つて、歸りに到頭熊次を逗子に連れ出した。逗子もう靜かだ。新築も出來た。魚釣りも出来る。

熊本を出て十年ぶりに己が家に納まつて、父は上機嫌で居た。賣主の農が註文で特に伐らぬを約束で買つた地境の二百年は經たらしい老松や、其子松孫松を庭樹にして、座敷八疊、茶の間八疊、父の書齋の四疊半、兄に宛てられた中二階八疊、女中部屋二疊、臺所、浴室、これだけの安普請も、瀟洒とした住居であつた。松外三崎往還を見越して田越川の水が流れ、川向ふの養神亭一帯を見越して縁も深い右に小坪の岬、左に鳴鶴ヶ崎、其間にうち開けた初秋の海山に主貌の富士が此方を向いて居る。岩城の叔父に送ると謂ふて、父が熊次に家の畫を描かせた。家其ものと庭から富士を見た景を一枚に、と云ふ父の註文は、随分無茶をし馴れた大膽な素人畫家にもむづかしい註文であつた。

熊次の氣分は追々快くなつた。然し彼はもう社には出なかつた。續物も打切つた。彼の仕事はやはり道樂の寫生であつた。熊次も駒子も何時とはなしに畫の師に足を遠くした。然し自然を師とすれば、師は到る處にあつた。實子が辨當提げて近くの小學校に通ふ時、熊次は寫生道具を提げて郊外をぶらついた。彼も自然の小學一年生であつた。野萩の盛りを分けて代々木野を目黒の方へ歩いたり、柿の落合村に寫生しては枝柿を買ふて歸つたり、日黒の農家の家鴨おひるを飼つた背戸を面白がつては、足駄はきながら三時間も臭い下水溜の傍に蹲んだりした。而して幸福であつた。彼は品川あたりから遙に深川以東何ともつかぬ茫々とした色の浮ぶを見て、ある日洲崎から矢鱈に堤を東に歩いて、茫々としたそれは蘆花の雪である事を知つた。彼は赤坂から二日もつづけて其蘆花叢裡を歩き廻はつて、其趣に浸つた。然し畫料は遠く外にばかりはなかつた。五分心のランプの光黄ろい臺所に、櫛がけして鏝の缺けた釜を洗ふ二十三の若妻も、

駒子は其女を訪ねて、前途の吉凶を占ふてもらふた。蒼い顔、頬のこけて眼色の尋常ならぬ三十餘の女であつた。つくづく考へて、中年は苦勞なさいます、晩年には大勢子供が出来て幸福におなりです、といふた。それは心細い駒子に力をつけた。見てもらひに往つて好かつた、と駒子は思ふた。然し逗子から歸つて來た熊次には、何も云はなかつた。

の間に、「骨肉は恩情より重く、兄弟は先、夫婦は後」と沼山先生の書いた幅はない。それは自分
が引裂いて捨てた。あつたものが無くなつて、やや淋しい。然し惜しいとは思はぬ。

熊次は几を淨め、墨を磨し、斯く雪白の紙に書いた。

嗚呼吾は久しき奴隸にてありしよ。

家兄の奴隸なりき。

情慾の奴隸なりき。

あらふるものの吾は奴隸なりき。

今より後、吾また決して奴隸たらじ。

何人にもあれ、何ものにまれ、わが自由を礙ぐる

ものあらば、即我敵也。

而して熊次は頭がすうと軽くなるやうに覺えた。

板の間に座わつて茶碗を拭く十歳の實子も、赤々と火照^ほる七輪に身を寄せて眼をつぶる毫碌しかけた猫のクラも、眼をとめて見れば即活きた畫であつた。晝は何の曲もない門外の皇后阪も、月夜は夢の美しい世界であつた。寫生は熊次を落ちつかせた。落ちつけば、眼に見るもの皆面白かつた。美しいものが身邊にザラにあつた。石ももの言ひ、木の葉も語つた。それを思はしく再現する手腕は、もとより未だ熊次にはなかつた。然しそれは眼に頭に心の奥に印象されずに居なかつた。眼が開くといふ事は、寶庫の鍵を渡されるやうなものであつた。熊次は身をめぐる無盡藏の富に今更の如く驚いた。

秋と共に、熊次の頭が追々澄んで來た。元氣がぢりぢり湧いて來た。惡夢の如き過去から熊次はさめて、次第に吾に反^{かへ}つた。吾に反へれば、何と云ふわが醜態であつたらう！ 何時の間に、斯様な奴隸になつて居たらう？

十月二十五日が來た。

熊次の二十九誕辰である。昨年は父兄を請じて誕辰の小燕を開いた。今年は父母は返子に、兄は歐羅巴に居る。楣に父の「言有物行有恒」の額は無い。それは自分が踏み破つて棄てた。床

子の外國狀は、いつも一括ひとくちにして熊次の許へ送つて來た。熊次は封筒にアドレスを書く前に、一々内容に目を通した。義姉の手紙に妻らしくない卑下の文句があると、熊次はそれを塗り消した。熊次夫婦も稀に書いた。駒子は兄の通信にある、紅海の夕日が嚙美しかつたでせう、と書いた。熊次は返子から歸つての手紙に、頭がよくないので新聞の方も外報は斷つた、然し此頃は頭も大分よくなつた、と書いた。

それは十三年前、熊次が十六の夏であつた。父母の湯治留守に、熊次は兄と喧嘩した。それは熊次に理があつたが、大江の姉と岩原の姉が弟だからと謂ふて兄に謝罪をさせた。一日悶々した後、熊次は父の書齋の父の卓で、己が決心を書いた。十一から十三までの同志社で知らされた「神」を此時眞劍に顛^よんで、「人」となる事を誓ふた。而して左の小指を傷^{きづ}けて、名の下に血判した。それは誰も知らなかつたが、熊次はそれで好い氣もちになつた。十三年を経て、熊次は二たび第二の誓をわれと吾身に立つる人であつた。

*

*

*

*

熊次か土鼠^{もぐら}の如く暗中をもぐりもぐつてやつと此處まで到達した間に、兄の所謂鈍牛丸は香港、新嘉坡、ペナン、コロムボ、坡西土と英吉利の勢力範圍の南亞細亞の港々を歴て地中海に入り、やがてビスケイ灣の風波に揺られて八月初旬倫敦に着き、直ぐ大陸に渡り、佛蘭西から白耳義和蘭を経て獨逸に入り、露西亞を歴^へめぐつてトルストイの村莊に一日を過し、土耳其に出で、バルカン諸邦をまさ^に歩いて居た。新聞を賑はす通信の外に、兄は怠りなく父母に書き送つた。それには義姉の名も、熊次夫婦の名も必列記された。逗子の手紙も、よく歐羅巴へ往つた。逗

熊次は水明樓に三日泊つて太平洋に親むだ。曉に起きて、居ながら太平洋の日の出を心ゆくばかり彼は見た。風をよけて石壁に圍ふた漁家の趣、鰯を生命の漁村の生活も見た。波の様々に加工した巖の面白さも見た。覺束ないスケッチをすると、漁村の子供が寄つて見て、「此人は上手でねえや」と云ふた。あの岬を廻れば九十九里、と云ふ飯岡の岬近くまでも往つて見た。思ひもかけぬ海の末、陸のはづれに、掌にのる程の小さな富士を見出して、熊次は心にときめきを覺えた。今しも海に入る夕日に、波の音淋しい鳩山の海岸、霜枯れた草路に長い長い影曳いて籠負ふた人の後姿も、あはれになつかしいものであつた。

四日目に熊次は銚子に歸つて、其處の宿に駒子の手紙と爲替を受取つた。母はもう返子へ歸り、留守は無事であつた。

あくる日の午後、熊次は利根を溯る汽船で、水中に大鳥居立つ息栖いきすに下りた。水際の宿の鯉の羹あつものはうまく、一里向ふの小見川からほのかに鶏の聲の水を渡つて聞こゆる利根の曉は好かつた。小舟を雇ふて白く碧みどりに秋の水光る川面を柔櫓あつちう々潮來うしなごへのぼる熊次は、一日詩と畫の中に居た。潮來から小蒸氣で霞浦に出て麻生に宿り、麻生からはまた小舟で浮嶋に渡つた。筑波と蘆花と

十一月の初、逗子から老人會に母が出て來た。それを汐に、熊次はかねて見たいと思ふ利根の下流を見に行く事にした。珍らしく唯一着持つ詰襟のスコッチ、草鞋ばき、外套が無いので後で碓氷先生譲りと知つた預り物の兄の外套を借りた。駒子が一ツ木に跑けて往つて買つて來た柿を夕食がはりにポケットに入れて、銚子行の川蒸氣が出る蠣殻町の河岸に急いだ。

去年の暮、駒子と初めて水彩のスケッチを試みに來た市川、鴻の臺も暗中に過ぎて、取手で利根の本流に出る頃夜は明け、鯉網張る舟から朝炊かきの煙が美しく立上つた。佐原から下は、秋の天をうつして洋々と川は潤く、熊次の心ものびのびとなつた。ほぼ一晝夜で牡蠣殻屋根の白々した銚子に上つた熊次は、飯沼觀音前の鄙びた宿に一夜寢て、あくる日は水死を葬る川口の千人塚に太平洋を見はらし、眞黒い海の男が鱸釣すずきる女夫が鼻めをと、犬吠の白燈臺を向ふに見て一帯の松に風默す夕淋しい君が濱を過ぎて、秋は寂しい海水浴の水明樓に往つた。

逗子に送つた。

然しまづい書ばかりで、此遊の興は出せなかつた。熊次は筆に復へつて、「刀禰河上の一晝夜」を書いた。夏以來全く打絶えた社から珍らしく杉原君が訪ね來て、「もう大分お書き溜めなさつたでせう」と言ふたをきつかけに、熊次はそれを新聞に出す事にした。追つかけて彼は其續稿「水國の秋」を書いて新聞に送つた。「すつる命」は打切つたし、仕事はせずに月給ばかり取つて居る彼に、それはせめてもの心やりであつた。

*

*

*

*

母は月々、父も稀に様子見がてら出京した。父の爲に駒子が蕎麥をとつて、卵をかけたりして出すと、そそつかしやの父は、蕎麥屋の氣の利き加減に驚いた。結婚以來頻に志を致す小森君は、父の出京をのがさなかつた。祭禮見物の招待を斷はると、細君に五目飯を一重持たしてよこした。品川の泥水から足をぬいた銀杏返の細君は、お白粉やけのした然し堅氣な顔をして居たが、堅氣は手製の五目飯に及んで、それはとても老人の齒に合ふものではなかつた。硬飯の馳走を、父は悴の社員からばかりは受けなかつた。夏末に伊藤内閣辭職して、秋初に松方内閣

小春日和をあしらつた水國の秋の趣は、熊次の肺腑にまでも泌しみみこむだ。

爽さいせい々した心地になつて、熊次は十二日ぶりにわが家に歸つた。

熊次は霞ヶ浦から眞鴨を二羽持ち歸つた。駒子の勧めで、其一羽を小包で逗子の父に送つた。

銚子から買つて歸つた甘味噲まげものの曲物の半も添へた。

果して父が喜んで詩をよこした。

刀根風色耳久熟 知爾優遊入畫圖

霞浦翠鳧銚港醬 併將趣味到蝸廬

繪も見せろ、と父は謂ふのであつた。父は實學を信じて、藝術を重く見なかつた。熊次が畫に凝り出してから、ある日父は憚はたびない顔をして熊次に曰ふた。「水彩畫ち云ふもんな、あら、西洋の婦人共が遊び事にするち云ふぢやなつか。」熊次は父の言に耳をふさいで、ますます水彩を描いた。然し父には見せぬ事にきめた。それで鴨は送つたが、水國の秋の寫生は一枚も送らなかつた。駒子の入智慧で、父がころり參つた。而して畫もお出なすつた。それでも否、とは熊次も云へなかつた。彼は頭にあるものの影にも足らぬまづいスケツチの三四枚を、追かけて

「ワインをおやりですか？」

と曰ふて去つた。此夏京橋で眞赤に酔つて水瓜の立喰ひをした時誰かに見られたのだ、と熊次は直覺した。

*

*

*

*

秋は深くなつた。熊次の魂はますます自然に吸ひこまれた。曉月の茫とした木立ほの暗い霜の曉、夕日に栗の葉のはらりと落つる井の邊、或は暮雨瀟々と落葉散る石だたみをたたいて氷川の社の小闇い神殿に今ともされた灯の脚ちらちらと足もとまで流るる夕まぐれ、熊次は到底晝にし得ぬものを眼から吸ふた。それは景色に限らなかつた。美しいもの、可愛いものには、たはいもなく熊次は參つた。實子の遊び仲間の姉妹二人が、近所からよくやつて來た。家族にコレがあつて生水の恐ろしさをしみじみ教へられた妹は、遊び疲れて渴くと「小母さん、お湯を頂戴。」と駒子に曰ふた。著しく口の凹んだ其子と反對に、内の實子は直ぐ口を失らした。駒子が「く」の字を書き、右に實子と書き、左に桃子と書いた。姉のさよ子は、實子と同年の人形のやうな容色よし、稚子髷の前髪を房々させて、可愛い乳齒を見せて、少し甘へた鼻聲で「小父^{をち}

が出来ると、新に外務大臣となつた早稲田伯からある日父母は案内を受けた。數多い待合はせの座敷の一つに請ぜられた老人夫妻は、長い間待たされた。時分になつて、午餐の饌が出た。若い者にふさはしい硬い飯、老人夫妻は辛ふじて形ばかりの箸をとつた。饌が引かれる頃、庭先から杖と介添に扶けられた主人の伯が来て、縁に腰かけてしばらく話をした。「寅一さんは、始終たよりの往復をして居ます。今日は忙しく失禮する。庭でも御覽下さい。」伯が往つてしまうと、後で老人夫妻へ三尺餘の松の一鉢が贈られた。其松は今鉢のまま逗子にあるのであつた。

硬い五目飯は熊次にも來た。親鸞眞傳の序を兄に頼んだ浦田君が、嗣子東洋雄の誕生日に熊次夫妻を招いた。斷はつたら五目飯をよこした。硬い五目飯であつた。それは秋まだ浅い程の事であつた。浦田君はまた海舟翁の書を熊次に頼んだ。「爲善最樂」の額と幅に「行く先もまた山路なりけり」と云ふ道歌の一首。熊次は顔をしかめた。無遠慮な男ではある。然し差配の江戸さんに頼んで、額だけを書いてもらつた。歌はやめにした。親鸞眞傳が出来ると、浦田君は書肆の都合を理つて、兄弟のところに唯一本を齎らした。歸りしなに、

ですか？」と英語で怪んだ熊次の家の玄関前の黄金に染めた大銀杏が追々裸になり、手水鉢に氷が張つて、氷川町に三度目の冬が來た。

夏以來女中無しで來たが、冬に入つて到頭桂庵の手から一人呼んだ。先居た家の主婦は、日清戦争が作つた未亡人の一人で、生活も切りつめ、胃に好いと謂ふてよく酢蓮を食ふた話などした。炬燵の櫓を、ある癩癩の場合熊次が臺無しにしたので、炬燵欲しい此頃、女中を一ツ木へ買ひにやつた。氣に入らぬので、買ひ直しにやつた。三度目には女中が辭退した。もうきまりが悪くて往けません。勃然と熊次は忿つて、女中を撲つた。女中は泣いて到頭暇をとつた。嫌ひな女でもなかつたに、つまらぬ事をした、と熊次は悔いたが、最早後の祭であつた。

氣分を直すは、外出に限る。熊次は寫生道具とまた家を飛び出した。澁谷の界隈を、落葉を踏み、霜枯れの草を踏んでは、彼雜木山、此破れ水車小屋と獲物を狙つて歩いた。何時の間にかが入つて、村に青白い夕靄がかかる。雜木山を越ゆれば、臙脂色した東の空に大きな月がぬろと出て居る。瀛車で新橋に廻はれば、師走の市中は灯の色人聲もざわざわして、明治二十九年も暮るるに間はなかつた。

さん」と其子に云はれると、熊次は消え入りさうになつた。「小父さんの初戀」と駒子が傍から晒わらつた。

實子が生るる前、大きな腹をかかへて英語を習ひに昔義姉の安子が通ふた此邸の佐治夫人は、海舟翁の庶子の妻で、子女數人あつた。駒子は此頃頼まれて其子女達に尋常小學の課程を授けた。米國婦人を母とする子女達は、何時も洋装して、話も和英をちゃんほんにつかつた。熊次が時間をやかましく云ふので、子女達はよく食後の蜜柑など手に持ちながら走つて來た。靴をぬいで上るので、「Legs が寒」とこぼした。「向ふの Hau を ごらん な さい。田にはれんげ San の はなが 咲いて 居ります。」と抑揚面白く、緩急をつけて、彼等は會話調に讀本を讀んだ。實子がおさらへするのを聞いて、「彼女おのめがたは Lesson をお歌ひなされる。」と年長の男の子が言ふた。其 Boy ぶりに十歳の實子が參つて、顔を見ると含羞はにかんだり嬌態しなを作つたりした。半洋人の子供珍らしく可愛がつた熊次も、そろそろうるさくなり出し、駒子の教授に干渉しては、言ふ事を聽かぬ男の子を無理に従はせやうとしたりして、駒子の顔を曇らした。其男の子が、あらぬ方に寫生の眼を向ける熊次に向ひ、「何故あの美しい木をお書きにならんの

屋にも拂が溜つた。駒子は生れて初めて、「此次に」と云つたり、「お氣の毒だけでも」と氣の毒がつたり、きまりのわるい心地を味はう經驗を強いられた。

甥の貞雄名義の三菱の通帳が、印形諸共熊次の手に預けてあつた。銚子行には、父に無斷でそれから引出して往つた。駒子が追送の爲替も、それからだつた。父が知ると、加世用騒ぎの時程に驚いた。而して月々の十圓を半減したのは俺の誤、あれは元通り十圓でなければならぬ、六月以來元通りとし、無斷使用の分はそれで埋める、と謂ふて通帳印形の一切を早々母の便から回収して了ふた。半減を否と云はなかつた熊次は、元通りに感謝もしなかつた。然し通帳一切の返却を拒みもしなかつた。熊次も平生は几帳面が好きである。

熊次の生計は困難になり、周圍は陳腐になつた。夫婦が世帶を持つてここに三年、裏門際の此家がもう暨き飽きて來た。浴室一つあるでなし、下便所は外だし、女中など置ける家でもない。先住の家族が格子窓に羽織をかけて置いたら、何時の間にか外の人通り少ない往來から竿の先につつかけて人が盗んだといふ話も聞いて居る。自分住んでは盜難もなかつたが、ある夜夫婦は深夜に不安な氣もちで寤め、ランプをつけて見廻はると、昨夜確にしめた筈の水口の戸

熊次駒子の家の大晦日も近づいた。夏以來加世田君が費消のお蔭で、父の注意により、三池紡績利子代として月月本家から受取る十圓は半減して五圓になり、十一圓の月俸は受取つても、家庭雜誌の収入もないので、十六圓の生活は樂ではなかつた。捨鉢氣分になつて居た熊次は、其爲に少しも節約をしなかつた。伊豆行、鹿野山行、と旅行の費用も小額ではなかつた。すべては遣繰で過した。何の金でも手許にあればずんずん使つた。然し甥の進が赤痢が治つて歸國した後は、其學費流用の途も絶えた。駒子が持參の二十圓は勿論、一昨年の秋、此家に新世帯もちの初、子供が生るる時の爲にと買つて十錢二十錢と銀貨を入れた大型の貯金玉も、其後不時の用に附木を挿し入れては取り出したり、果ては打破つて皆使つたり、また思ひ立つては貯金玉を買ひ、また破し、破しては買ひ、買ふては破し、足かけ三年の子無し夫婦は、今は空しい貯金玉さへもたなかつた。

時々は一錢も無くなつた。紙屑代の二錢に息をつく時もあつた。姪の實子が欲しがる五厘の水玉を、叔母は中々買つてやれなかつた。古着屋に物賣る事を知らぬ駒子は、熊次に黙つて自分の羽二重の紋付羽織を金一圓で屑屋に賣つて、日々の足にしたりした。追々米屋、炭屋、八百

丁度師走の老人會に出て來た母に相談すると、母は一も二もなく同意した。

「而して一つ、基礎きだいから据ゑ直しなはり。」

と母が言ふた。

義姉安子の兄者人力夫さんは、苦勞人である。熊本に居る時から父と氣が合はず、はなれに別居の生活をして居た。もう其頃から力夫さんは約束事でもあれば指に紙撚こよりを結はえて忘れじとする人であつた。淋しさが早くから力夫さんを耶穌に驅つた。同じ頃に熊次も信仰の道に入つて、初心の熱心に力夫さんに決心を勧め、洗禮も共に受けたものであつた。其熊次が三年後には京都から熊本へ來て、力夫さんから三圓借りて更に鹿兒島へ逃げた。其後力夫さんも熊次と前後に上京して、榎坂の父母の二階に同居した事もあつた。義弟の社に働いて居た力夫さんは、失戀の痛手を負ふて歸國したが、其後再び上京して社の事務を執る内、縁あつて富士山下は大宮の都築家つづきの婿養子になり、相も變らず朝夕冷水で體を拭き、齒に鐵をうつた下駄をはいて日々社に通ふて居る。父に疎まるる本莊家の嫡子は、自ら廢嫡して他姓を冒し、家は弟の亥熊いぐまさんに譲つたのであつた。力夫さんの結婚の心ばかりのお祝に、熊次が手桶を贈つたは、もう去

が大びらに開いて、其處から眞黒い夜が覗いて居た。近火の患はなかつたが、夫婦はまたある夜火事の夢見てさめ、襖をあけると臺所口の障子が眞赤に照つて居た。火消壺の蓋が破れて、火勢が傍の戸棚に燃え移り、戸棚がぼうぼうと燃えて居るのであつた。其様な薄氣味悪い経験もある家である。邸の内とて安心出来るものでなかつた。夏の程熊次が喧嘩した裸男は居なくなつたが、後にはやはり獨身者の若い男が住み込み、よく臺所から顔を出して新聞借りに來た。掃くのが面倒と云つたやうに、美しさかりの銀杏の葉を箒でたたき落す男であつた。新聞は他に送るのだと云つて斷つたが、要するに一人者の若い男は良い隣ではなかつた。無慘な死をした藤の記憶、一度ならぬ己が不仕だら^の記憶、それ等の不快が籠る此家は、久戀の住家ではない。もつと明るい、生活の樂な所へ移らう。新聞社にはもう出ない事にして居る。筆さへあれば、何處でも書ける。東京に居なければならぬ要はない。

「逗子へ引越さうぢやないか。」

夫婦は何時となく斯く言ひ合ふた。

然だ。逗子が好い。さしより逗子のあらめ屋の一室を借りれば澤山だ。

言ふ事を聴かぬ、とおきな叔母はこぼした。おすやさんは裁縫教員の資格を取りに上京したのであつた。此方も動かうとして頼もしい人欲しい矢先き、駒子の母が女の如く可愛がつたおすやさんの來訪は、切つて嵌めたやうな好い都合であつた。

餅もつけぬ窮士の師走、米屋を初め一切のお拂の猶豫の挨拶をおすやさんに頼んで、大晦日の午後、熊次駒子は實子連れて逗子に往つた。

十年ぶりに我家の歳をとる父は、上々の機嫌で居た。夫婦の逗子生活も勿論同意であつた。實子は津森叔母の女子學院に預くる事になつた。あらめ屋も、通りに向いた中の八疊がゐて居た。

歐羅巴大陸の漫遊を終へてもう倫敦に歸つて居る筈の兄の噂を口々に、父母、義姉安子、熊次夫婦、實子、貞雄、熊彦、芳子の老壯幼が集つて、明治二十九年除夜の食卓は靜に賑合ふた。

年の事であつた。而して夫妻で麻布に其家を訪ふて、蒼白い力夫さんには著しい對照のがつしりした細君と駿州辯の其阿母さんに會ふたも、其後間もない程の事であつた。熊次夫婦が返子へ引越すについて、本宅の預り物を其まま空巢に後住の人を求むれば、力夫さんに越す者はなかつた。事情を明して頼むと、力夫さんが異議なく引受けてくれた。年が明けたら、熊次夫婦と入れかはりに引移る相談が出来た。

折もよく郷國から岡野のおすやさんが出て來た。おすやさんは長崎生れで、父の顔を知らぬ人であつた。不幸な母子は長崎から肥後に流れて來て、おすやさんは山鹿の町で人となつた。母者は髮結ひの名人で、其道に手利の彼女はしばらくの間に可なりの貯蓄も出來た。然し男に捨てられた昔に心が歸る毎、おすやさんの母者は氣が變になり、ふらふらとして折角の貯蓄も忽ち使ひ果した。駒子の母とおきな叔母とが母子の世話をした。おすやさんは殊に駒子の母を力にして居た。おすやさんは一度熊本町の家に嫁いだが、肝腎の花婿が婚禮の其夜から馴染の女の方へ往つてしまひ、おすやさんは阿母とひとしく男といふものに失望する女になつた。それ等から自然耶蘇教に入つた。おすやさんも昔は殊勝であつたが、耶蘇信者になつてから頑固で

第二十八章

自然へ

明治三十年の元日は、新築の家も吹き飛ばしさうな大風の中に明けた。老幼ひとしく朝寝して、熊次は蒲團の中に斯く吟じた。

新玉の 年の始に 大風の

手筈とりて 神掃ひ玉ひ 清め玉ふ

雑煮が濟むと、父をはじめ一同、座敷で吉書を書いた。熊次も數へ年の今年は三十歳である。熊次は斯く書いた。

と父はほくほく喜んだ。孔門の弟子なる父に、孔子の言を子が活かす事は、^に二ない悦喜であつた。

※

※

※

※

翌朝早く熊次夫婦は、おすやさんに申譯の餅少々もたらして、東京に歸つた。おすやさんは猫とさし向ひで、昨日は餛飩粉でスイトンの元日をしたのであつた。「餅のない正月、餛飩粉の元日は初めて」とおすやさんは笑ふた。

簞笥など嵩^{かさ}ばるものは、舟便で送る可く荷づくりさせて、昨年以来懇意の靈岸嶋の運送店に送つた。當座の書籍、蒲團、卓は、手荷物にして持つて行く事にした。あとは座敷の書棚や押入に一ぱいの兄の和漢洋書籍も、三年前花で來て今緒い實^{もと}で後にする庭の柳葉山梔^{くろなじ}の一叢^{ひとむら}も、これも親譲りの臺所の破竈^{こわれへつつひ}も、其名の半分を彼女ももらつた佐治夫人の家に生れて、肥後本宅から新宅、それから都築さんと、主は更^{かは}つてもさり氣なく、唯老體をだるさうに炬燵に寄する猫のクラも、皆そつくり置いて行くものばかり。

熊次は江戸さん佐川さんに、駒子も佐治夫人に告別し果てた。佐治夫人は其前熊次の少し脇を

子曰三十而立

三十路にて

立つと言ひけむ

いにしへの

聖の言を

身にしめて、

年立ちかへる

今日よりは、

年立ちかへる

今日よりは。

「おお、これは——兄に書いてやれ。」

わがふることは

「自由の棲む處」

わが双親たうしんの在ます處。

歸らむ、行かむ、いざやふるさに。

*

*

*

*

*

*

*

*

明治三十年正月三日の午後、都築君等が来るまでとおすやさんに残つてもらつて、熊次駒子は裏門口から車に乗つて、始めて持つた三年の住家を後にした。

車が葵町の海軍省横手にかかる時、向から濠端を帽子も冠らず歩いて来る蒼白い眉黒の人は、都築さんが早めに社から歸るのであつた。熊次は車をとめた。

都築さんはさし寄つて、癖の伏目で、聲を潜めて、

「あの、米屋の方は？」

わるくして居た頃、オオトミイルを持たしてよこしたりした。暮には子供の禮に、佐治夫人から金二圓と、駒子にクリスマスに美しいピンクツシヨンが來た。移轉に金が中々足りなかつた。父から融通してもらつた金で、拂のあるものは濟し、濟ませぬものは後を約した。

此家に最後の夜は明けた。型ばかりの朝食も濟むと、駒子が茶の間でおすやさんと話す聲を聞き聞き、熊次は正月の日のうららに射す庭を眺めて、荷造り前の卓に凭つて、斯く書いた。

都をば後に見なして

我は今自然に歸る、

我は自然に歸り行く。

花の都と人皆の

いとしま都、

都をば惜しと思はず、後あとにして

ふるさとに我われ歸るなり。

大正十四年五月五日印刷
大正十四年五月十日發行

小富士第一卷 並製

定價 貳圓

版權所有

著作
者

東京府北多摩郡千歲村粕谷

德富健次郎
徳富あい

發行
者

東京市京橋區南金六町九番地

福永一良

印刷
者

東京市京橋區瀧山町五番地

渡邊吉郎

版元

東京・銀座・新橋

福永書店

漢口店 東京四〇四六番
電話 銀座六九番

「あれは待つてもらおう事にしましたから。」

「ああ、さうですか。それぢや。」

「ぢや、よろしく。」

互に目禮を交はすと、都落ちの夫婦の車は、手荷物^{てなぐ}の他の一臺と共に、松竹立てて賑やかな正月の街^{まち}を新橋へ向ふた。

小説 富士 第一卷 終

第二卷 近刊

新

春

第六十五版 近刊

徳富健次郎 著

卷頭の「春信」は、小説「富士」の鍵である。大震
火で久しく品切になつたが、小説「富士」の誕
生と共に、新春も近く復活して第六十五版を
發行する。

*

*

*

*

*

*

振替 東京
四〇四六六

福永書店

東京 銀座

大正十四年五月十月初版 大正十四年五月十六日十三版 大正十四年五月廿五日廿五版

大正十四年五月十日再版 大正十四年五月十六日十四版 大正十四年五月廿六日廿六版

大正十四年五月十一日三版 大正十四年五月十七日十五版 大正十四年五月廿七日廿七版

大正十四年五月十一日四版 大正十四年五月十七日十六版 大正十四年五月廿八日廿八版

大正十四年五月十二日五版 大正十四年五月十八日十七版 大正十四年五月廿九日廿九版

大正十四年五月十二日六版 大正十四年五月十八日十八版 大正十四年五月三十日三十版

大正十四年五月十三日七版 大正十四年五月十九日十九版 大正十四年五月卅一日卅一版

大正十四年五月十三日八版 大正十四年五月十九日二十版 大正十四年六月一日卅二版

大正十四年五月十四日九版 大正十四年五月廿一日廿一版 大正十四年六月二日卅三版

大正十四年五月十四日十版 大正十四年五月廿二日廿二版 大正十四年六月三日卅四版

大正十四年五月十五日十一版 大正十四年五月廿三日廿三版 大正十四年六月四日卅五版

大正十四年五月十五日十二版 大正十四年五月廿四日廿四版

徳富健次郎 著

みみずのたはこと

「みみずのたはこと」は、著者が齡四十にして初めてしかと大地に脚を立てた最初の生活記録です。大正二年の出版で、年を経る十二、版を重ねる百〇八、十萬餘部を出して、いまだに凜々と生きて居ます。それは土に注がれた愛のしたゝりで、土は所謂地久、而して「愛は何時までも墮つる事がない」からでありますやう。前版は縮刷六號でしたが、復活版は最初に復へつて四六型五號とし、挿畫を新にし、卷末に著者の最近消息を報ずる一長文を添えました。「みみずのたはこと」に著者のつく奥印です。

四六判七百〇六頁箱入
濃茶綿號珀裝天金
挿畫寫眞八葉入
定價三圓五十五錢
送料書留二十四錢
第百〇八版

東京 永福書店 振替 〇四六六 東銀 京座

小説 黒い眼と茶色の目

第三十版

三六判洋布装天金箱入
定價二圓三十錢
送料書留二十錢

徳富健次郎 著

小説富士第一巻にしばしば出て来る「春夢の記」の後身は此れ。
著者が十九、二十歳の戀愛記録は、二十一——二十二の昔一度書
いて破られ、二十四——二十五の際に二たび「春夢の記」に書か
れ、筐底に藏する十四年にして三十八歳の暮に燒き棄てられ、四
十七歳の冬に三たび「黒い眼と茶色の目」となつて世に公にせら
れた。妻にも秘せられた「春夢の記」が、著者夫妻の結婚生活に
如何なる崇りをなしたかは、小説「富士」が之を語る。小説「富
士」の讀者は、溯つて「黒い眼と茶色の目」を見てもらひたい。

東銀 京座 永福書店 振替 〇四 東京 六六

小説

黒

潮

四六判三百九十頁
 佛蘭西式紙十釘
 定價一圓五十錢
 送料書留十五錢
 第三十四版

徳富健次郎 著

日露戦争前に著者は此小説を書いた。日露戦争終るやがて一度、大正二年の夏に尙一度、著者は其續稿、若くは准續稿を書きかけて止めた。中心がよくつかめなかつたからだ。中心がつかめて、小説「富士」が初めて書かれた。富士に登る者は、寶永山に傍目をくれる。小説「富士」を読む人、「黒潮」も讀め。

*

*

*

振替 五五 東京 三

警 醒 社 書 店

東 銀 京 座

竹崎順子

四六判・折革式天金製箱・九百頁
 三枚短冊石版七度刷・日記拔萃二色刷
 肥後略圖石版壹葉・特撮寫眞十三葉
 定價四圓五十錢
 送料書留二十七錢

德 富 健 次 郎 述

小説「富士」第一卷に、「伊倉伯母」として出現するのが、此竹崎順子である。日本の典型的婦人として、八十年の生涯が咀嚼に値ひするばかりではない。實傳「竹崎順子」には、著者の母方の親族關係から、前代の郷土生活が直寫側寫されて、小説「富士」が生れ出る地盤が其處に現はれる。

*

*

*

*

*

*

東 銀 座 福 永 書 店 振 替 〇 四 六 京 東 六

小説 寄生木

四六判一千百餘頁
 總洋布裝美本
 定價三圓五十七錢
 送料書留廿七錢
 第六十三版

徳富健次郎 著

乃木神社が建ち、人として愛し苦しんだ乃木さん夫妻は、神にまで祀られる。献げらるゝ供物は多い。然し乃木さんに愛され、乃木の寄生木となつた青年士官小笠原善平の『寄生木』程貴重なものは少ない。日露戦争に戦死した乃木二令息に後るゝ四年、乃木大將夫妻の自刃に先立つ四年、彼は情義の八重がらみに身一つを扱ひかね、故郷岩手で短銃自殺を遂げた。彼は死んだ。然し死ぬ前に『寄生木』を書き遺した。多情多恨の彼が二十八年の生命を打込んだ留魂録『寄生木』、それを遺囑によつて著者が永久に活かしたものが『小説寄生木』である。大震の火に紙型も灰になつたが、新に凸版に附して第六十三版を發賣する。

東銀 京座 警 醒 社 書 店

振替 五五 京三

順禮紀行

菊半裁判四百八十頁
定價一圓八十錢
送料書留十八錢
第二十一版

著 郎 次 健 富 德

露西亞に闘ひ勝つて然も衷心勝利の悲哀を感じた純眞な日本の靈魂は、身を順禮に寢しつつ、遠くパレスチナに耶蘇の足跡を尋ね、喧嘩相手の露西亞其ものにすらトルストイを訪ねた。ヨリ大なる日本を生まんが爲である。其意味に於て、一卷袖珍の順禮紀行は、新日本文學に於て永劫に輝やく寶玉の一である。

* * *

* * *

店 書 社 醒 警

東 銀
京 座

東 五
京 五
替 三

太平洋を中にして

第四六判 三百三十八頁
定價 一圓五十八錢
送料 書留 十八錢

第 六 版

徳 富 健 次 郎 編

太平洋を中にして、日米の在らん限り、日米問題は根本的に解決を要する。それについて提出された答案は無數。然し編者の所論のやうに徹底的なものは斷じてない。それは人情自然の立場から下された永久性の斷案である。詩人は果して時務に迂なる乎。小説「富士」の讀者は、また「太平洋を中にして」を讀め。

* * *

* * *

東 銀
京 座

文 化 生 活 研 究 會

振 替 五 五 圓
東 京 五 圓 五 角

GTU LIBRARY



3 2400 00559 9885

神家

[illegible]

PRINTED IN U.S.A.

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500
All items are subject to recall.



東京

福永書店